



岳 山

第三十七年
第一號

山

岳

第三十七年第一號

山岳第三十七年第一號目次

再び冠帽峰へ……………	早稻田大學	一頁
雪崩の描寫……………	體育會山岳部	四
登山再編成論……………	勝見勝	七
ラウンド・カンチェンジュンガ抄譯……………	袋一平	七
飯豊山賴母木川遡行記……………	D・Wフレッシュフィールド著 吉阪隆正譯	五
船形山横川遡行記……………	第二高等學校山岳部	一八
遠笠山……………	同	一五
寶川の源流を降る……………	中村謙	一〇一
	吉澤一郎	二四
追悼記		
丸山晚霞氏の追憶……………	茨木猪之吉	三九
佐野和男君のこと……………	關根吉郎	二三
定款及細則……………		三八

圖 版

第四キャンブ……………	早大山岳部	對頁六
ベレスキャンブに於ける全員……………	同	七
根據地建設……………	同	三
行 動 表……………	同	三
別第一圖リュディシュリイの雪崩……………		四
別第二圖ホドラーの雪崩……………		四
別第三圖ホドラーの墜落圖……………		三
別第四圖アルペール・ゴオの雪崩……………		三
カンチエンジュンガの絶壁……………		四
ゼム水河のキャンブ……………		七
カンチエンジュンガ山塊水河概念圖……………		七
矢ビツ瀧……………	二高山岳部	一五
故丸山晚霞氏……………		一三
故佐野和男氏……………		一三

挿 圖

冠帽峰登路附近圖……………	三頁
雪崩の描寫第一—十三圖……………	四 五
飯豐山賴母木川概念圖……………	一八
船形山横川概念圖……………	一四
横川説明圖……………	一七
遠笠山附近の略圖……………	二〇
寶川流域概念圖……………	二六
寶川源流地附近概念圖……………	二二
表紙繪(レンゲより針ノ木岳)……………	茨木猪之吉

『再び冠帽峰へ』

早稻田大學體育會山岳部

明神岳の計畫を無事に終つた時には、暗く長かつたトンネルを漸く抜け出たやうな氣がした。それであるから、世界の狀勢は薄暗くなる一方であつたに拘らず、山への望みは明るく、處理すべき問題も細部に涉つて見極めがつくやうになり、部の落着きも見えて來たのである。ところが、次の計畫に就いて考へると、周章て過ぎる位に事を運ばないと、實現の可能性もない世の中だつた。現在の私共には、數年前の人々が嘯いたやうな行きづまりなど、到底考へられず、幾多の問題を残したまゝ部員は次ぎ次ぎに卒業していつた。出來得る限り早くそれらの解決をつけるには、どうしても場所の選擇が必要となり、何處へ行つてもよいといふわけにもいかなかつた。この時局も考慮せねばならず、近いしその上未知の土地であり、未踏の山があり、長い尾根がある、ペデカリ岳を中心とした日高山脈であつたら、實現の可能性も濃厚であり、山は低いには異ひないが、恰好な對象と思はれ、部の意向も大體一致を見たのであつたが、他の事情の下に斷念せねばならなくなつた。勢ひ、それに相當する山として舞臺を再び北朝鮮に求めたのであるが、何處を舞臺としても、やるべきことに變りはなく、夏休にかゝる前から中堅の部員を集めて、目的の山を決め、その登路を探させ、上級の部員はそれを監督し乍ら、次には如何なる登山を試みるべきかを、各方面に涉り、いろいろに検討してみた。我が國の登山界を展望してみると、個人

の登山は數多く行はれ、その技術も或る程度の發達をみたことは言ふ迄もないことであるが、個人の力だけではどうすることも出来ないやうな山岳に對する計畫は、その例極めて少く、ために技術として無きに等しい有様と云へるであらう。

私共の部は「山岳三十六年二號」に見る如く、暗にヒマラヤの第一流の山へ對する計畫を土臺として、極地法を採用した登山を行ひ、此に至つたのであつて、一つ一つの計畫を振返つて見れば、一年々々明らかに進歩の跡を辿ることが出来る。然し明神岳の計畫迄では、やつと極地法登山の土臺を作り、その見通しをつけたに過ぎず、今後の計畫こそ、結論を見出す使命を帯びたものと、見做されるのであつた。行けるかどうかは、第二の問題とし、次には如何なる登山方法を採用するか、それから出發迄直接に六ヶ月をこの問題に要したのである。

登山方法は目的の山、登山技術及び登山の考へ方によつて決定されるものであり、亦技術は目的の山と登山の考へ方により、この進歩は促され、登山觀は技術に大きな影響を受けるものと考へられる。私共の部内だけを見ても數年間の足跡には相當明瞭にその事實を伺ふことが出来る。今は跡方もなく消え去つたが、四五年程前迄は部はマンメリー主義なるものを遵奉し、アルプスの間將マンメリーが唱へた如く、常に新しい山を目指すのが眞の登山だと解してゐた。當然その思想の擴張としてヒマラヤ遠征が考へられ、極地法を採用した登山が行はれるやうになつた。不完全なものとは云ひ乍ら、試みてみると、今迄の個人的の登山を行つてゐただけの技術ではまったく用をなさず、その上體力に氣力に大いに缺くところあるのが自覺され、技術も體力も更に一段の向上が要求された。この段階に於て部員は新しい登山觀を持つに至つたと解釋されるのである。説明し難いことであるが

その要點だけを記してみる。

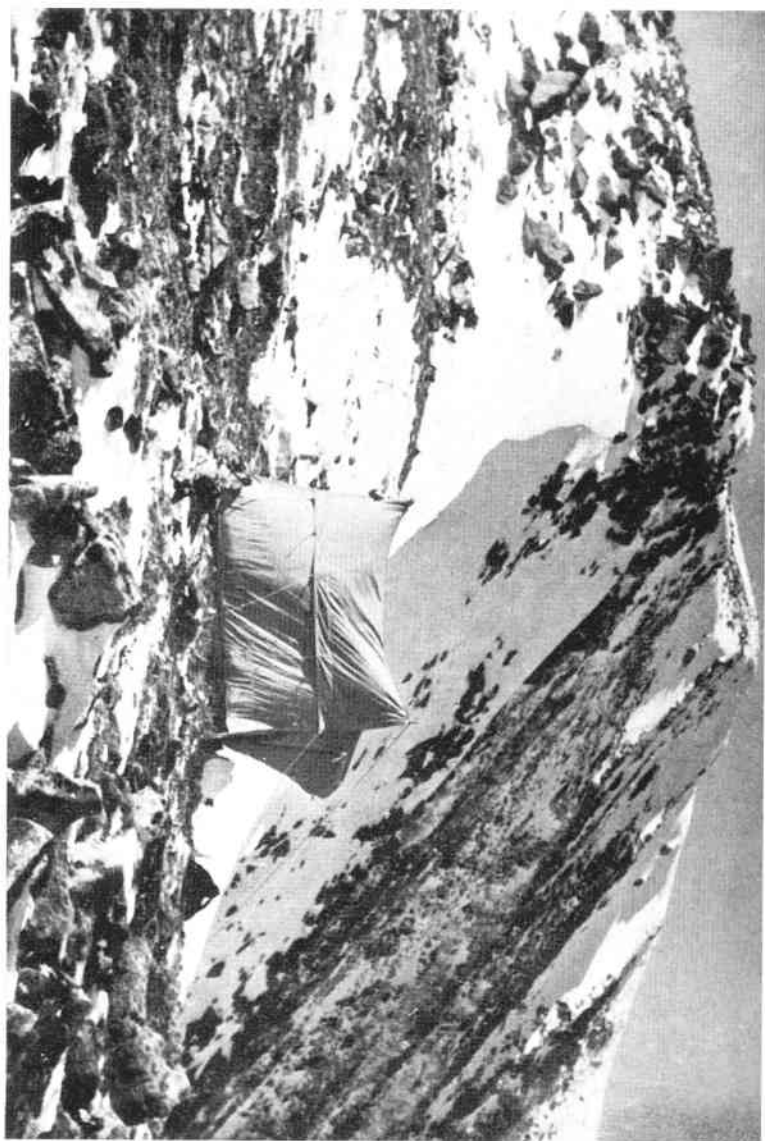
頂上を抹殺して登山は有り得ない。登山とは第一に頂上に立つことである。然しその登頂が僥倖であつてはならない。然し實際に近頃のやうに登山が進み、山が高くなり、深くなり、又雪の深い季節に長い期間行ふやうになつて來ると、それだけ危険に遭遇する場合も多くなつて、確實に頂上に立つことは根本的に矛盾するわけである。この矛盾を克服することこそ、我々の進むべき登山の途ではないかと考へられて來たのである。だから、必ず頂上に立ち、その登頂を安全にするといふ意味に於て、我々の求め進んでゐる登山は確實な登山と云へるかも知れない。言葉では簡單だが、いざ山でこのやうな登山を行つてみると、想像外にむづかしく、この困難を突破するには今迄通りにやつてゐては堪が聞かず、日常生活迄變へてかゝらねばと思はれる程であつた。力を付け、氣力を養ひ、山を正しく見、技術を練りその多くの力を合してこそ成功の出來ることであり、これこそヒマラヤの八〇〇〇米の山を登る最も手近な態度だとも思へて來た。合宿の計畫等も今迄の面白いといつた感情を主としたものでなく、どこ迄も理詰めに検討されるやうになり、又日常のトレーニングや生活が山の計畫と切り離して考へることが出來なくなつて、大變重要視されるに至つたこと等も、登山の考へ方と根本的なつながりを持つものであらう。

目的地も、仲々決定し難かつた。始めは北水白山を中心として探したり、冠帽峰を目標としても、渡正山からの尾根を考へてみたりしたが結局、前回西冠帽峰の頂から北に向つて白い尾根を瞥見した、その尾根——西冠帽峰より虹臺峰北雪嶺と延びてゐる尾根を目標に選んだ。此處に一言付け加へねばならぬ事は、近年の我々の計畫

は、唯目的としてのみ考へることは出来ず、手段としての意味も大半あることである。特に長い尾根を選んだのもまつたうそのためであつて、今度は、ベースキャンプ以外に必然的に四ヶ所のキャンプを設けねばならぬ尾根を對象にしたかつたのである。この冠帽峰から北雪嶺を経て延面水に落ち込んでゐる尾根は極めて長いものであつて、これを熟知してゐる槍穂高の附近と比べてみると、焼ヶ岳より奥穂を経て槍ヶ岳に至る距離に大體相當してゐる。然しその容貌は全然異り、手を用ひなければ通れないやうなところは先づ無いといつてよい。地圖（大日本帝國陸地測量部、朝鮮總督府臨時土地調査局發行、假製版 冠帽峰）に依ると、目標である冠帽峰（二五四〇・九米）の北面より流れ出てゐる川が延面水であり、尾根は始め少し西南に走り一・五軒程の小突起（我々はこれを前冠帽峰と呼び、城大の人は南冠帽と呼んでゐる）より次第に北西に二四三二米の西冠帽峰（地圖では無名）を経て二四七一・二米の虹臺峰（これも地圖上には無名峰）に至り、尾根は眞北に向ひ、二四四二米の北雪嶺（地圖上には雪嶺）より次第に低く途中一八六四・二米といふ小三角點を経て、約一一〇〇米の延面水に達してゐる。その中約半分は前回の計畫中西冠帽峰より眺めたところであつたが、この尾根をどう處理すべきか。先づ考へねばならぬのは隊の構成と、露營地に對する問題とであつた。

隊の構成

團體による登山を理想的に行ふには、隊の構成、隊長と隊員との關係、隊の編成に大きく支配され、就中隊の構成は、これの如何により、登山の色彩迄變化を受けるものと考へることが出来る。而して、この隊構成の基準となるものは隊の背景であり、我々の如き體育會山岳部に於ては、探檢的旅行とか、科學的調査、資料蒐集とか



第四キャンピング

早大山岳部



早大山岳部

ベースキャンプに於ける全員

は第一の目的とはなり得ず、どこ迄も完全なる登攀といふことを目標とした。これには強い登攀隊とそれを支援する援隊とより成る隊が必要にして且十分なる要素であり、これらの隊員を全部員中より抜擢することにした。

選抜方法

多くの部員から、その何分の一かに當る隊員を選び出すことは困難な問題である。登山者の選抜といふことは今後我が國の登山界に残された大きな問題の一つであらう。我が部でも未だ定説が決定したわけではない。既に知られてゐる例としては、

一、隊員外の一つの機關が選ぶ方法

二、一つの機關が先づ隊長を定め、その隊長が隊員を選ぶ方法

等はその代表的ものであるが、何れも多くの缺點を有しその優劣は決し難く、他に方法を求めたいところである。私共の部としては代表委員が選ぶのが本來の形であらうが、特殊な事情あつて、前年度代表委員大井忠一を中心として、翌春卒業する部員が選抜の任に當つた。その時の考慮した條件といふものを並べてみると、現在に於て強い者、將來の部を背負ふ者が根本の條件であり、日頃怠らず精進を續けてゐる者は特に好意を以つて選ばれたやうであり、團體の行動を幾らかでも害する恐れある者は除かれた様である。出發三ヶ月前九月十八日、次の十三名が選ばれた。

關根吉郎・宮川重雄・鈴木正俊・磯邊俊明・川原章・眞鍋隆・加計朋吉・松田一郎・佐野和男・山崎安治・大庭明・平井全・安達浩六（代表委員百瀬孝は穂高に於ける合宿のリーダーとして豫定してゐた）

以上の者は行けるか行けないか等は全然問題とせず選ばれたのであつて、この點今迄行はれてゐた登山例とはまったく趣を異にしてゐた。早速體を鍛え始めると共に隊員の決定、隊の編成にとりかゝつた。前年度代表委員關根を隊長に選び、先づ人員の決定から始めた。不足の隊員は先に選ばれた隊員の責任に於て選ぶことにした。人員の決定も大切な問題であるが未だ定説がない。人夫はベースキャンプ迄しか用ひないとすると、あと四ヶ所のキャンプを構成するには十二人では不足することは豫想出來、十五人としたのであるが、これも根本は三人を一つの隊とするが適當だといふ考へ方に依つたためである。この十五人と決めた隊員を始めから三人で組む五つの隊に區別してをくか、それとも十五人を何等區別せず、唯その中から何人かを登攀隊員としてのみ定めベースキャンプ迄行つてから適當に別れて行動するがよいか、これも現在我々が直面してゐる問題の一つであるが、山岳部といふやうな相當團體精神の鞏固な隊であつたら、始めから小さな隊に組んでをく方が、行動が簡便にいき、その上各自の位置を適格に知るに便であり、隊の強さは他の方法に比し極度に發揮されるのではないかと考へられてゐる。我が部の計畫を見ても瘤尾根の計畫（山岳三六年二號）、新高山の計畫（三四年一號）等に於ては隊は始めから組まれてはゐなかつた。基隊を三人とするか二人とするかも、いろいろ考へられるが、朝鮮の山のやうに綱で結び合つて行動するところのない山では三人を一隊とするのが確實であり、又天幕の出來方が三人を基準としてゐるので合理的でもあつた。以上の如く隊員は三人を基準とする五つの隊で計十五名と決めた。

始めの十三名の中には軍の委託學生のため参加不可能の者もあり、體を害した者も出て來た。平井・安達といった體力の勝れた者が、明らかにトレーニングの結果から體を害し、参加出來なくなつたのは大いに考へさせられた問題だつた。その補充は出來得る限り若い部員ですることに決め、十一月下旬、新雪の富士山から歸つて來

て聞もなく、十五名の決定をみた。

番號	姓	名	數へ年	出身地
1	關根	吉郎	二六	高師附中 東京
2	鈴木	正俊	二四	高師附中 東京
3	百瀨	孝	二四	松本中 長野
4	磯邊	俊明	二五	傳習館 福岡
5	川原	章	二四	傳習館 福岡
6	伊藤	久行	二三	岐阜中 岐阜
7	加計	朋吉	二二	修道中 廣島
8	松田	一郎	二一	市岡中 大阪
9	山崎	安治	二二	横濱一中 神奈川
10	佐野	和男	二二	高師附中 東京
11	大庭	明	二一	仙臺二中 宮城
12	加藤	博	二一	京北中 東京
13	近藤	等	二〇	曉星中 東京
14	輕部	隆夫	一九	福島中 秋田
15	安達	春雄	一九	高師附中 東京

以上十五名の平均年齢は數へ年にしても二十三才弱であり、身長・體重の平均は五尺四寸七分・十五貫九百匁である。大體これ位の年齢・體格が登山者として恰好なのではないかと想像される。十五名中七名が關東の出身

者であるのは學校所在地の關係からであらう。

露營地及び露營の構成に對する考察

前回、西冠帽峰の頂から望み見たのを土臺にして考へてみると、北雪嶺から先は二つの露營地で十分だといふ結論になつた。故に露營地に就いて考へることは最後の部落である登煙洞トウエンリョウと連絡の出来る延面水中エニメンシユウにB・Cを設け、それから先、尾根にとり付いて北雪嶺に到達する迄に二つのキャンプでこの行動が可能かどうかの検討であつた。B・Cは二つの場合が考へられるが朝鮮等であつたなら勿論最終の部落と簡單に連絡のとれる位置に置くのが定石であらう。半日行動以内の地點に設けるつもりでゐた。尾根に取付いてからは、この尾根は始めが急で、北雪嶺から先は單なる登り降りのある山脈であるので、始めの中に距離を短くきざんだ方が形として理想に近いやうな氣がした。それでキャンプの構成は、以上の如く、露營地はB・C以外に四ヶ所、隊員は十五名を三名一つの隊として運用することを基準として對策した。B・Cに就いては今更云ふこともない。今度の計畫でキャンプの構成に就いて特に注目したのは前進ベースキャンプの検討とその運用とであつた。勿論、單に、A・B・Cといつても各山岳に就いて、その特殊な地形、自然現象等を考察しないで決せられるものではないが、この北雪嶺の尾根のやうに、相當勝手なことの出来る尾根に於てこそ、最も自由な氣持でその要點が検討され得るものであらうと考へたからである。

検討の對象は次のやうな問題であつた。

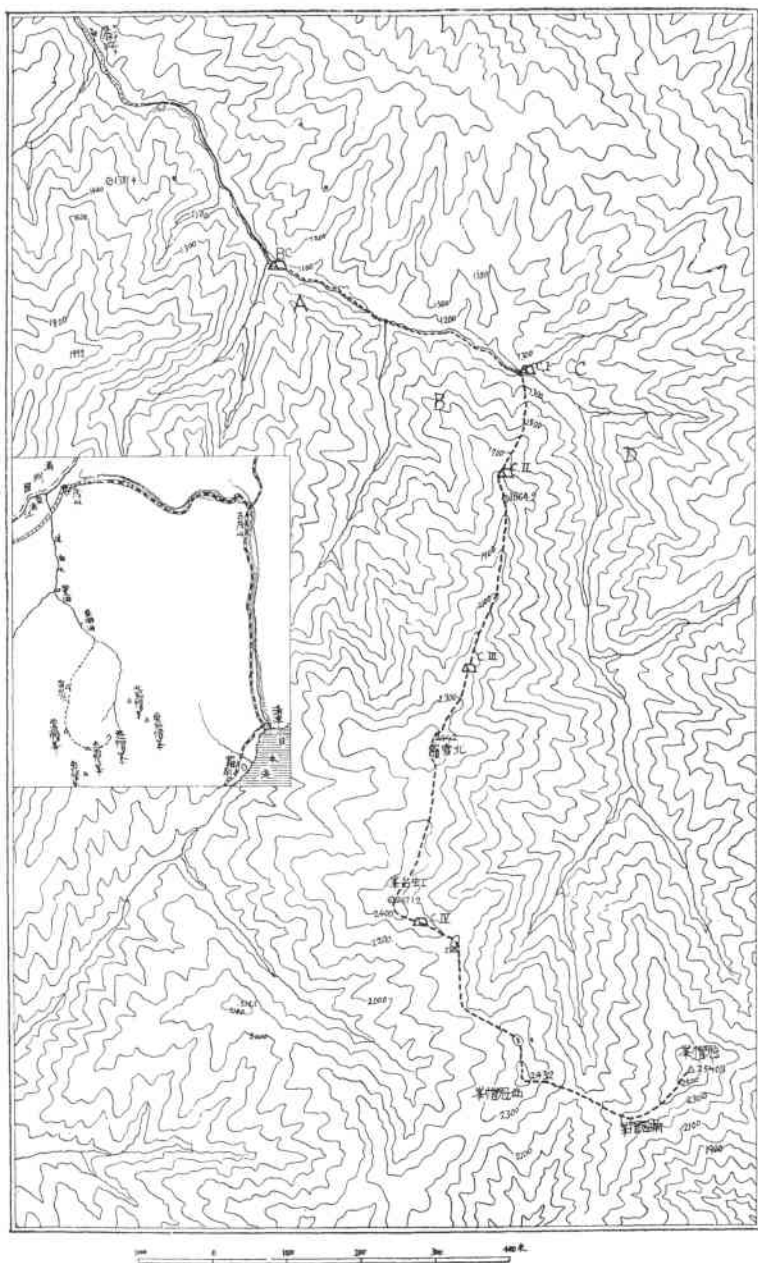
一、ベースキャンプとの間隔

二、前進ベースキャンプより先に何ヶ處のキャンプ建設が可能であるか

三、前進ベースキャンプの構成

而して前進ベースキャンプの利點として考へられることは、それから先のキャンプを安定させることと、B・C—A・B・C間のキャンプを簡略にし得る點であらう。それであるから、その位置の決定はB・Cを基準とするのではなく、頂上を基準として設けるのが定石ではないかと思はれるのである。目標の尾根に於ては、傾斜の強い斜面を登りつめ、眺望の利く尾根に出た附近にこれを設け、その先に二つのキャンプを建てて頂上を往復するのが理想であり、其處に完全に三隊を收容出来るキャンプを設けることにした。このキャンプの大きさに就いては種々考へられるのであるが、無駄が無いこと、即ち、確實さを失はぬ範圍に於て最小限度の裝備で行ふこと。次にこの尾根に於ては更に擴大することも可能であらうが、好條件につけ込むことは手段として客觀性を缺く恐れを感じたこと。等の考へ方に刺戟されて三隊のキャンプで試みることにした。キャンプ構成の豫想は次の如くであつた。

位置	天幕(宿泊可能の人員)	宿泊可能の隊數
B・C	7・7・6	5
C・I	7	2
C・II (A・B・C)	7・4	3
C・III	6	2
C・IV	4	1



天幕は六人用アークチックテント一張、他は凡てウィムパーテントで、大（六―七人用）五張、四人用四張を用意した。

行動に關して二三の策戦

極地法登山の要點は速かに根據地を前進させ、最適の登攀隊を最終根據地から送り出すことであり、判斷は凡て、これを基準として行はなければならない。今度の計畫に於てはその第一歩が尾根の發見であつた。參考にすべき先人の記録を持たぬ計畫は今回が始めてであつた。然し冠帽峰以南の状態から察すると延水面の森林も大したことはなく尾根の見通しをつけることは出来なくても、地圖の上から判斷がつくと思つてゐた。地圖で見ると我々が目指すBの尾根の外に似たものとしてA・C・Dの三つがあり、この區別に困難を感じるかも知れないがBの尾根に達するところには約二軒程のガレが對岸（北岸）にあるのでこれさへわかれば、このガレが終つてゐる地點から對岸に始まる尾根はわかる筈だと考へた。そして、若しこのガレが地圖上で想像するものと異つてゐて氣付き難いものであつたなら、その附近の斜面を適度に登ることにより對岸の尾根はある程度偵察出来る筈であつた。

尾根を見付けたら、出來得る限り早く森林の限界を抜け、廣い眺望の利く地點迄根據地を前進させること。これがこの計畫の最も大切な點だと關根以下一様に考へてゐた。前回西冠帽峰以北を眺めた時、虹臺峰から北は眞白に深々と雪を被り、寒さと風の上に困難なラッセルを強ひられたら、容易ならぬ羽目に陥るものと、想像されたからである。尾根の上は内地では經驗出来ないやうな風が吹きまくつてゐたので雪も堅く締つてゐたところが

多かつた。然し尾根の上に出る迄の森林帯の斜面を考へると或は相當の日數を必要とするのではないかと考へられた。このやうな場合、單なる縦走的な前進方法をとることは明らかに不利である。先の長い計畫に於て、その途中で全隊員を一樣に疲労させる様なことは考へられない。支援隊の用ひ方如何が、この問題に解決を與へる鍵であらう。キャンプ建設に行く援隊こそ最も辛い役目であり、荷を持つて深い雪の中を進み豫定の位置迄進めずに止むを得ずテントを張り、登路を拓いて歸つて來ると、翌日は僅か一時間半か二時間で、其處迄輕々と達することが出来るやうな經驗も今迄に幾回となくあつた。目標の尾根はまだ誰も知らない。この未知の尾根に眞先に入り、始めから適當な位置にキャンプが設けられるといふことは先づあるまい、若し出來れば、この尾根は餘程樂な尾根であつたためか、單なる僥倖であらう。地圖の上では大體理想と思はれる露營地を決定したのであるが、その理想だけを追ふことは却つて混亂を招くおそれも多分にあるわけであつた。この徴が少しでも現はれたら即座にC・Iを設けて、あと足らぬところは、C・i・aとかC・i・bと云ふ簡單なキャンプを設けることによつて補ふのが最もわかり易い方法だといふことを過去の經驗は教へてゐる。一旦登路が拓けてしまへばC・I↓C・I迄は標高差にして八〇〇米足らずなのであるから、朝鮮の山などに於ける八〇〇米位は如何に荷を持つた者でも容易な行程であるといふ確信は十分にあつた。

前進ベースキャンプと豫定したC・Iが設けられれば、登攀の態勢は此處で調ふものと考えた。登攀の態勢といふことは今迄あまり考へなかつた問題だつたし、又計畫の最中にかういふことを意識することも變則だとも思へるかも知れない。然し、現在の我々は、援隊の助けによりあまり力を用ひずして前進した登攀隊がある地點より先は、リーダーの命に依らず、獨自の見解と判斷の下に、蓄へた力を存分に發揮することこそ、登頂の可能性

も極度に増されるものだといふ見解を持するのであつて、この登攀隊が獨目の行動をとる時期に登攀の態勢の調つた時であると見做すのである。故にC・Ⅱから先のC・Ⅲ、C・Ⅳは登攀隊を中心として建設することになった。以上で大體の計畫は出來たわけである。この案を頭に置き、隊員の推薦者である大井・二宮等の意見を参考にし、隊長關根は隊の編成にとりかゝつた。選ばれた十五名の中から誰を登攀隊員として豫定するかといふことは、隊員の選抜以上に困難な問題である。少くとも十名は、強さの點で云へば日本を代表しても決して恥しくない程の部員であつたので誰が受持つても結果が變るとは考へられない。如何なる理由で選んだかは、あまりに私事に涉るので、此處では述べないが、このやうな問題は廣く我が登山界でもつと眞鍮に考へられてよいのではないかと思はれる。

關根は次の如く隊を編成し、それを色彩を以つて區別することにした。これはティルマン一行のエヴェレスト隊よりヒントを得たものであつて、單なる抽象的な呼稱でなく隊員の凡ての所持品にそれぞれの色彩を施すことにより、最小限度の裝備で、雪中露營の混亂を切り抜ける良い方法だと考へられたからであつた。即ち、

黃隊 關根・山崎・近藤、青隊 鈴木・佐野・加藤、綠隊 百瀬・松田・安達、赤隊 磯邊・川原・大庭、紫隊 伊藤・加計・輕部とし登攀隊として赤・綠の順に豫定した。C・Ⅱに於て、その調子を見た上で決定を見るわけである。

次に隊長（リーダー）の位置、連絡の方法等に就き現在迄の變遷の跡を簡單に述べる。

過去の我が山岳部の記録を見るとリーダー自身、眞先に登攀を試みてゐたやうである。然し計畫が大きくなるとリーダーが常に先頭にゐることは論ずる餘地が見出されて來た。臺灣新高山の計畫（昭和十三年—十四年）に

於て時の隊長尾關正二氏は隊の中心に位置することを主張し、常に全隊員の行動を監督、激勵出来る獨自の行動を採つた。これが始まりでその後の計畫のリーダーは、この氣持を受繼ぎ、その上いろいろの工夫をし、現在では登攀の態勢の調ふ迄は先頭に在り、その後は連絡の中心となるべき前進ベースキャンプに位置するのがよくはないかとしてゐる。最前進キャンプ迄出掛けて登攀隊の面倒をみるのはリーダーの負擔が重過ぎるやうである。

連絡の方法としては、隊員が傳言を手渡しする方法。音を聞き判斷する方法。光・煙・旗等の色により判斷する方法。有線電話・無線電話・無線電信等による方法等が代表的なものとして思ひ浮ぶ。我が部でも第一次冠帽峰計畫には無線電信を用ひたが、これには特別の技術者を必要とし、その上平素練習が出来ないので許可を受けなくても、確實さを缺く憾みがあつた。その上、いくら成功したとしても火急の場合等は役に立たず、無電だけではその價值も大したものとは思はれなかつた。それに代つて有線電話ならといふ案もあり、現にエヴェレストの隊は用ひてゐるが、未だ實驗の機會がない。その後は最も單純であるが隊員が確實に傳言を手渡しする方法をずつと採用してをり、隊員の粒が揃つて來れば最も確實的な方法であると言へるであらう。今度も連絡は隊員自身が主として行ふことにし、これを補ふ意味で、防空演習用として市販してゐる擬砲彈及び照明彈を使用してみることにした。しかし吹雪の日などは全然使用出来るものではなく、使用範圍は極く限られることはわかりきつてゐた。

想起される危険に就いて

雪のある山に於て、先づ頭に浮ぶ危険は雪崩であり、雪崩に對する検討と共に登路を決めていくのが我々平素の計畫であるが、北朝鮮の冬は乾燥期に相當し、雪の量の極めて少いのは前回の經驗から判斷しても、他のこの

附近の文獻等を見ても疑ふ餘地もなく、生命に係はるやうな雪崩は先づ無いと見て間違ひのないところであつた。雪崩の無い山であつたら自ら好んで危地に赴かない限り、危険に襲はれる率も極めて少いであらう。それで北朝鮮の山は一般的に言つても、内地の北アルプスに比して危険は少い。唯今迄よく知つてゐる狭い山だけで登つてゐる部員にとつては、朝鮮の廣く大きな山は、晴れてゐる時は問題はないが、一見吹雪出したりすると、仲思ふやうにならぬと思はれる。前の計畫の時も、二度程霧にまかれて困つたことがあつた。尾根筋は廣いとは云へ見當は付く、問題なのは頂上である。机山峰も西冠嶺峰も、これが頂上かと呆れる程の大きな平原のやうな所で、四方の眺望が利かなくなるゝと位置を點で示せなくなるので地圖と磁石があつても見當を付けるのに大變不便なわけで、この點は氣を付けなければならなかつた。危険とは云へ東側には常に延面水があるのであるから、これを下ればB・Cに歸ることは如何なる状態の時と雖も容易であつたが、原則として延面水へ下ることは禁じ又吹雪の日は行動しないことにした。吹雪の日に休んでも、全期間中多くて二三日位のものであり、その點内地の冬と比較するとまつたく樂である。その他、強風による凍傷も問題であるが裝備さへ十分であれば、防げる筈の問題であらう。厳しい寒さのために活動が鈍ることも種々の危険を藏してゐるかも知れないが、我々としてはこの対策は考へねばならないと思ひ乍らどうすることも出来なかつた。

以上述べて來たやうなことを特にこの度の計畫に當つて注意したつもりである。

十一月下旬には文部省の許可も下り、氣づかつてゐた必需品も一つ一つ、各方面の御好意により入手出來、實現の可能性も日に日に増していつた。ところが驚いたことには、この瑣細な計畫が帝都の各新聞紙上に「壯舉」

として報道され、特に朝日新聞社は多大の援助を與へられた。當時我々一行は朝日紙上に何回かに涉り、計畫・印象・感想等を述べたのであるが、何れも一般讀者のために試みたものであつて、山岳會員諸氏の前で述べるべき性質のものではなかつた。更めて稿を起した所以であつて、この點を諒察して戴きたい。

第二次冬季冠帽峰遠征紀行文

一 北鮮への旅

昭和十五年十二月二十七日 長途の旅の疲勞を癒す暇とてなかつた我々は、強行のスケジュールを重ねて九時十分古茂山驛に着いた。茂山線の發車迄小一時間驛長室にお邪魔させて貰ふ。滿目荒涼たる曠野の低い起伏を越え來つた朔風は眞新しい驛長室の硝子窓をがたびし云はせながら過ぎ去つた。茂山行の汽車に乗り込む。ストーヴの附いた快適な客車で、小さい賣子が幾度となく往復してゐた。十三時新站に着く。バスに九名、後の二名は荷物と共にトラックに乗つた。鮎詰のバスは山間の起伏の激しい道を喘ぎながら進んで行く。延社に着いた頃は既に暗闇が附近を包んでゐた。先發隊の伊藤、輕部が出迎へて呉れた。荷物の一部を何かの手違から新站到置き忘れて大分焦慮したが、警察及び驛の人々の盡力で翌朝入手の見込が附いた。鈴木・關根の話で名前丈知つてゐた朝鮮獨特のキムチ（香の物）の味も亦格別で、溫突の暖かさを楽しみながら寢に就いた。

十二月二十八日 後から來る荷物の整理の爲に磯邊・近藤を残し、十一名はトラックに乗つて延社を出發した。

猛烈なスピードで進むトラック、それに朔風が横擲りに小雪を叩き附ける。荷物の上に全身を曝してゐる内に顔や手が痛くなつて來た。朝の太陽は疎らな冬枯の並木を通して遙か彼方に鈍い光を放つてゐる。三十分程して水站に到着し、駐在所のストローウに蘇生の思ひをする。我々は駐在所の前庭に祀られてある小宮に敬虔なる祈を捧げ、再びトラックに乗り込む。坦々たる耕地は白雪に被はれ、その間に低い民家が點綴してゐる。道は次第に悪くなり、登烟洞から四軒程手前の坂道で遂に積雪の爲登り切れない破目に落ち入つた。我々は力の限り後押しを試みたけれども車輪は只空廻りして一層深い雪の中に喰ひ込む許であつた。同乗されてゐた警察部長が八方奔走して牛櫓を借りて來られた。トラックを牛が引張る光景はなんとなく異様であつた。約五〇〇米許進んだと思ふと、今度は道を外れた窪地に落ち込み、積んであつた荷が放り出されん許に傾き、最早如何ともなし得なくなつた。致し方なく牛櫓に荷物を積み代へて我々は歩いて行く事とした。登烟洞の木材會社事務所に着くと、鈴木・加計が本隊の便宜を計つて待機してゐた。十七時牛櫓と共に磯邊・近藤も到着し、全員茲に打ち揃つた。

二 延水面水廻行。B・C建設

十二月二十九日 昨夜、鈴木・加計の偵察の結果を種々協議してB・Cの位置は登烟洞の部落より約四軒先の太雲谷と決定した。此のB・Cの位置撰定が極地法に依る登攀に於て重要な問題である事は言を俟たない。天候は幸ひ上乘である。此處で一寸觸れて置きたい事は、我々にとつて言語の不便な人夫操縦も今次遠征の一課題であつたが、曾田警察部長に相談した所が部長直接の指揮の下に、登烟洞、兩水坪一圓の部落民を以て組織されてゐる自衛團が奉仕的に荷物の運搬に出動すると云ふ我々にとつて洵に有難い援助を得る事となつた。太雲谷迄牛

櫓が入ると云ふので、今日は四臺の櫓に荷を積み、部長、騎兵銃を擔つた安岡巡查及び朝日の特派員二名と共に、十一時二十分全員登烟洞^{トウエンドウ}を出發した。割合暖く防寒帽も手袋も要らない。登烟洞^{トウエンドウ}から暫くの間は木材搬出の櫓道が附いてゐるので進行も大分捗つた。陽光は燦々として梢から漏れて来る光が堅く凍て着いた櫓道に反射して眼を射る。幾度か櫓は横滑りして、粗惡なその作りは横に傾き縦に軋んだ。約一時間程進んで櫓道から離れて愈々廻面水^{モウメンスイ}の川沿ひに進む。我々は右岸傳ひに深雪をラッセルして櫓道を固め、雜木を切り拂ひ、薄氷の張つた川の上に木の枝を並べて櫓を渡し、遅々として行程は捗取らなかつた。太雲谷の手前にある廢橋は遂に牛櫓の進行を阻んだ。半分程の荷を隊員が背負ひ、牛櫓は下方を迂回して漸く通過する。殺風景な岩肌を露出した斷崖が兩側に迫つてゐる。その附近に大きな虎の足跡が一間飛び位に點々として續いてゐるので大騒ぎをする。積雪愈々深く、二三名宛牛櫓を押して十四時三十分太雲谷に出た。

此處は落葉松の林に圍まれた稍々開けた平地で、火田民の住み古したと思はれる一棟の小さい廢屋が屋根も壁も崩れて寂しく残つてゐる。炊事場として之を利用する事とした。小舎の横を流れる延面水^{エンメンスイ}の水を割つて清澄な水を汲む事が出来る。平地で最も長く陽の當りさうな場所を擇んで、アークチック、七人用及び六人用ウィンパ―天幕を各一張り建設する。標高約一〇五〇米の谷底なので、陽は十五時半で陰つて終ふ。新聞社の人、部長、牛櫓に附いて來た自衛團の人々は歸りを急がれる。今夜B・Cに一泊される事となつた安岡巡查を中心に、青白い焔を揃へて調子好く燃える混爐を圍んで匪賊の話、虎の話など、東京を出てから五日目に初めて山らしい感覺を味つた。天幕の布一枚を距てゝ無氣味な暗闇が重苦しく包んでゐる。

三 C・I 建設

十二月三十日 朝飯の出来たのは既に九時近くで、今日は珍らしく非常に暖い。早速荷物の整理に取りかかる。十時四十五分、打合せの爲登烟洞^{トウエンドウ}に下る伊藤を除いた全隊員はC・Iを建設すべくB・Cを後にする。鈴木・磯邊は道を作る爲に輕装して一足先に出發した。久し振りで背負つた七・八貫もあるであらうリュックは肩に喰ひ込んで些か重い。太雲谷から先の川幅は大分狭くなり、三〇米となからう。危険な薄氷は注意して歩かないと冷い水に靴を濡らして終ふ。道は延面水^{エンメンスイ}を右に、或は左に見て細々と續く。乾燥し切つてゐる雪は相當深いにも拘らずさらさらと足下に崩れ落ちる。黙々として歩いてゐる内に先發の二名に追ひ着いて終つた。深雪をラッセルしつゝ來た二名はクンジキの氷瀑を右横に捲いて通過すべく、全身雪まみれになつて奮闘してゐる。この瀧から五〇米程進むと又も三米餘の氷結した瀧に遭遇する。之も左岸を二〇米程高く迂廻して切り抜ける。薄氷を踏む思ひと云ふが仲々スリルに富んでゐる。我々は北雪嶺^{セツレイ}から北方に延びて延面水^{エンメンスイ}に落ちてゐる尾根を見出さうと努めたのであるが、兩岸は急斜面の密林が續いてゐて、時々尾根らしいものが散見するのであるが、地圖面の位置に於ける大きな尾根が仲々見當らない。太雲谷から約五軒程廻行した右岸の恰好な臺地にC・Iを建設した。時既に十五時、天幕は青色の八人用ウィンパーテントである。こゝから延面水^{エンメンスイ}が右岸に支流を出してゐる。目指す北雪嶺^{セツレイ}から冠帽^{カシボウ}の連山は密林に遮ぎられて見出すべくもないので、百瀬・磯邊は北雪嶺^{セツレイ}の尾根から偵察すべく登つて行つた。十六時十分我々は先の二名を残して一足先にB・Cへと夕間に追はれながら歸路を急いだ。天候は非常に良好なのであるが、兩側の切り立つた殺風景な岩壁に陽光が遮ぎられて、十五時頃迄に

谷は陰つて終ふ。十七時二十分B・Cに着く。冷氣と空腹と疲勞が全身を虜にする。我々より小一時間遅れて歸つた百瀬・磯邊の報告に基いて北雪嶺^{セツレイ}への登路を論議したが、明日更に徹底的な偵察を行ふ事とした。安達のリュックの石油罐が凍結して破れ、罐を漏れた石油がリュックから背中一帯に染み渡り、相當非道い炎症を起した。夜に入りて物凄く冷氣が増進する。安岡巡査は登烟洞に歸る。

十二月三十一日 昨夜から今朝にかけて我々内地の山で經驗し得ない三寒が襲來し、四肢が冷たく眠入る事が殆んど出来ない程であつた。今迄比較的長く四溫が続いたので、突然の變化が殊更我々の身に響いたのであらう。寢袋の入口も、天幕の内側も白く凍り付いて、誰も昨夜の不眠を取り戻さうとして、シェラフザックに體を海老のやうに曲げて入つてゐる。八時、寒暖計の赤い線は氷點下三十五度を示してゐた。今日は休養と決つて、天幕の附近に亂雑に積まれてある前進キャンプ用の荷物を整理する事とした。天幕の傍らでばりくくと焚火をしたが効果がなく、火にかざしてゐる四肢は漸く人心地が附いたが、背中は氷に凭れてゐるやうにぞくぞくして來る。十一時頃になつて漸く天幕地の一部に陽が當り出し、寒暖計が零下二十度の附近を上下するやうになつて初めて平常の状態を取り戻した。毎日こんなであつたらとふと一抹の不安が湧いて來る。安達は磯邊と登烟洞^{トウシヤウ}に下つて一日のんびりと治療する事となつた。近藤・輕部・加藤は昨日本達途中に残して置いた石油罐をC・I迄上げ、十六時半歸幕した。B・Cに残つた者は前進キャンプの用意、食糧の分配、薪割など何かと仕事が多い。明るい内に磯邊が戻つて來た。今晩は大晦日である事を思ひ出したが、周圍にはそれらしい氣分を醸成する物とて見當らない。穂高に行つてゐる連中の姿を思ひ浮べる。都の門松、雑煮など頭の中を走馬燈のやうに去來する。之も部に入らない以前の、何時の間にか月日を経た淡い正月の幻想に過ぎない。

四 C・II 建設

昭和十六年一月一日 明くれば正月元旦、昨日の大寒の餘波は未だ消えず愈々三寒に入つたらしい。七時起床、昨日の失敗に鑑みて今朝はパン食とし、各個の天幕はパンを焼く煙で満たされる。朝食の終る頃、突然嚙喰たる喇叭の響に驚かされた。曾田部長が自衛團約二十名を伴つて輸送の應援に來られたのである。加ふるにお年玉と云つて蜜柑二箱と酒一升を持參して來られたのには、我々一同恐縮する許りであつた。戴いた酒は壘の中で堅く結晶してゐた。本日は高所募營用の荷を全部運搬する事とする。出發に際し、宮城遙拜、默禱、聖壽萬歳を高らかに奉唱して各々心中に成功を誓つた。十時出發、昨日のラッセルで道は固く凍つてゐる。澄み切つた空は何處迄も碧く、樺や柾の梢を漏れて點々と積雪の上に陽光が注いでゐる。兩側の茜色に切り立つた岩壁は朝日に照り映えて美しい。一時間程でC・Iに到着し、直ちに延水面^{エクスプレ}水を遡行する一隊と、一昨日百瀬達の登つた尾根へ一隊の二偵察隊を派遣した。偵察の結果、C・Iより一〇〇米程延水面を遡行した地點から一八六四・二米の瘤に突き上げてゐる尾根に取り着く事とした。一二〇〇米のC・Iから一八六四・二米の小三角點迄は、水平距離にすれば、二軒足らずであるが、高度差は約六〇〇米もあつて、この千古の密林の登行は多分に困難なるものであつた。青隊をC・Iの整備の爲に残して、他の四隊は自衛團を伴ひ、十二時半此の尾根の登攀を開始した。千古斧鉞を入れざる原始林は倒木多く、灌木亦密生し、隊員交々入れ替つてラッセルし、或は鉈を片手に道を切り開き、我々の體力及び腕力は極度に要求せられ、全身雪達磨となつて奮闘する。一六〇〇米附近から苔蒸した岩塔が堡壘の如く突出してゐる。併しながら眼界は一向開けさうもない。何時の間に十四時半を少し廻つて暗雲

さへ垂れ込めて來てゐる。少々狼狽した我々は一先づ自衛團の人々に休んで貰ひ、偵察に行つて見る。一七〇〇米程の山火事の跡らしい所に着き、左側を俯瞰すると山腹の思ひがけぬ所に火田民の小屋を發見する。十五時自衛團の人々に此處迄來て貰ひ、今日は之で切り上げる事として、十五時半直ちに歸途に着く。立木に衝突しながらも滑るやうに降りて行く。十六時C・Iに着き、今日からC・Iの生活を始める黄隊・青隊と別れて直ちにB・Cに下る。十八時B・Cに着く。安達が登烟洞トモツツから歸つて來てゐた。登攀も愈々本格的となつて來た。

一月二日 (爾後の記述は各隊に依りてその日の行動が異なる故に、各隊別に各々の日誌を引用する)

赤隊・紫隊日誌 「昨日の疲労の爲B・Cに於てぐつすり寝込んで終ひ、早朝七時の起床が七時半に、炊事が意外に手間取り、九時の出發が十時半となつた。之はC・Iの連中に申譯がないと昨日の疲労未だ癒えぬ體に鞭打つて飛び出す。C・Iに着いたのが十二時半、恐る／＼C・Iの天幕を覗いたが別段恐ろしい顔もしてゐなかつた。昨夜は暖く快適な睡眠が取れた」など話し合ひ、十三時、黄隊・青隊のサポートの下にC・I建設の爲昨日の荷物置場へと急ぐ。紫隊の加計は痔を悪くしてC・Iに残つた。踏み荒された急傾斜の尾根道は、地表面の苔が露出して滑る事夥しい。兩側の灌木に掴まりながら登り、昨日の荷物置場に十四時過ぎに着いた。紫隊と赤隊は一日分の食糧と個人裝備を少々持ち、C・Iの建設用器具は黄隊・青隊の五人に持つて貰ふ。同出發十四時四十分、又しても昨日と同様なアルバイトを續ける事約一時間半にして、一八六四米と推定される地點に恰好な天幕地を見出して體諸共肩の荷を投げ出す、時既に十六時、早速七人用の青色ウィンバートWintertentを張つてC・I建設を終る。赤隊と紫隊はC・Iに宿り、黄隊・青隊はC・Iに歸る。C・Iは朝鮮落葉松や樺の巨木が鬱蒼と繁つてゐる森林帯で、尾根筋なるにも拘らず風も當らない快適な幕营地である。」

黄隊・青隊日誌

「八時前にシュラフザックから出て、炊事をしながらB・Cから来る連中を待つてゐたが仲間やつて来ない。昨夜は暖く皆ぐつすり眠れた。十二時半、B・Cから赤隊と紫隊が登つて来る。紫隊の加計は黄隊の山崎と入れ代る事となつた。——C・Iの建設を手傳ひ終つて、歸途に就く頃小雪がちらついて来た。一日のアルバイトに満ち足りた氣持で一步々慎重に下つて行く。昨日連絡員として登烟洞（ようかんどう）から登つて来た利川は體の調子を害して今朝歸つて行つた。夜はモリスの話からヒマラヤの話に移る。」

綠隊日誌

「今日はC・I迄食糧補給の意味と、若干の器具を持つて往復する事になつてゐる。C・I迄は赤隊・紫隊と行動を共にする。朝の内曇り勝ちであつた天候は、晝過ぎから西風が猛烈になり、雲足が早く何時しか暗雲が空一杯に漂つてゐた。十三時四十分我々の任務を終つて歸路に着く。谷底の道迄は風は来ないが、搖さぶられた梢から雪がちらちらと舞ひ落ちる。十四時五十分、B・Cに着く。十六時頃郵便配達が二通の手紙を持つて来た。安達は「荷が背負へないで申譯がない。早く癒つて呉れないかなあ」と幾度も嘆聲を漏らし、懸命に背中の炎症の手當をしてゐる。今夜はB・Cに残つたのは我々三人丈なので流石に淋しい。二十四時、天幕の外に出て見ると空は何時の間にか晴れ渡り、清澄な大氣に星が輝いてゐる。」

五 冠帽連山。C・III建設

一月三日

赤隊・紫隊日誌

「密林の中なので唯でさへ暗い青色の天幕内は尙更暗く、起きたのは十時近い。からりと晴れた好い天氣であるのに天幕の内では蠟燭を點さねばならない。焜爐でパンを焼くと物凄い煙が天幕内に充満

し、垢に汚れ、煙に燻された顔、手、眞黒な鼻腔、皆一角の逞ましい大陸人になり切つてゐる。零下十四度を示してゐる寒暖計は木の葉で埋つてゐる。十一時半、川原・伊藤は前方の偵察に、磯邊・大庭・山崎・輕部は荷物置場へ残部の荷を取りに夫々出發する。偵察隊は張り切つてC・Iの一八六四米の地點から約二時間、ラッセルし、倒木を越え、繁茂する雜木を切り拂ひつゝ進む。この尾根は意外に瘦せてゐて、奇岩が露出し並列して峙ち、トウヒやモミの森林地帯には虎の足跡が縦横に亂れてゐる。二〇〇〇米附近から尾根は稍々廣くなり、樹林越しに北雪嶺は雪煙を捲き上げてゐた。北雪嶺迄あと大きな瘤二つ丈である。B・C建設以來の前途に對する不安は全く解消、欣喜雀躍して早速報告せんものと飛んで歸る。一方磯邊・大庭・山崎・輕部は苔上のグリセードを楽しみながら荷物置場に到着すれば、既に青隊が一服してゐる。一昨日三十名の大部隊で上げた荷を、昨日の八人と今日の七人で運搬するのであるから大ごとである。幕營器具や乾パンの箱を頭より高く積み上げて、一步ふらつきながら登り始めた。下りに十分、登りに二時間の所要時間を比較しても分る通り、優に各々十貫を越えてゐたであらう。隣に四人用グレンフェル天幕が増設されて幾分賑かになつたが焔爐やラヂウスの調子が悪く、一同腐り切つた。突然一人が人の呼ぶ聲がすると云つて聴耳を立てる。成程名狀し難い氣味の悪い聲が斷續的に聞える。よく注意してみるとそれは自然木の擦れ合つて軋る音であつた。」

青隊日誌 「前二隊と殆んど行動を共にす。」

黄隊日誌 「休養。青隊は十時C・Iを出發、綠隊がB・Cより登つて來る。連絡員二名を部長が心配して我我的手傳ひに寄こされる。急に賑かとなる。」

綠隊日誌 「十二時、以外にも零度を指してゐる。暖い筈だ。C・I迄の道は最早立派に踏み固められてゐる

が、ちよつと道を外れると柔い雪の中に潜つて終ふ。十六時C・Iに入る。」

一月四日

赤隊・紫隊・青隊日誌 「昨夜は深更に至る迄磯邊の奮闘に依つて、焔爐、ラヂウスの調子が快復した。起床八時、直ちに炊事に取りかゝる。豫定では今日C・Ⅲを設けると共にそれを確保する事となつてゐたが、C・Ⅲを設けるべき地點が未だ判然としないので、本日はC・Ⅲ建設にとどめる事にした。附近の積雪は樺の葉が混つてゐるので、折角炊いた飯が變な香がして不味い。山崎・佐野が連絡旁々食糧及びマットの荷上げする爲にC・I迄往復する事とし、他の全力を舉げてC・Ⅲ建設に十時四十分出發した。昨日の偵察隊の跡を追ふて行く事十五分にして、尾根漸く瘦せ、巨岩、奇岩突兀として行手を阻んでゐる。昨日偵察隊の來た地點迄約五十分を要し、以後仲々森林地帯を抜け切る事が出來ず、流石に肩の荷の重さに喘ぐ。樺の林が稍々疎らになり、岳樺が混つて來ると、既に左側に板狀の雪庇が見られた。尾根の右側は吹き溜りが物凄く、交る交るラッセルに突進するのであるが、表層丈堅くクラストした積雪は案外深く、腰までのラッセルは甚だ苦しい。この附近より眺望稍々開け、快適な天候は自然の美を惜しげなく眼前に展開させる、岳樺の樹間を漏れて來るオーロラの如き陽光が白雪に點綴し、コバルトの空、白い雪肌、岳樺の緑の小枝、自然色の配合は到底筆舌に盡せない。東面には、渡正山^{トシヤマ}の山群が白雪皚々として連なり、北冠帽峰のドムに續いてゐる。西方は奇怪な程平坦な大平山の彼方に、鋸齒狀の白頭山が紫紺に霞んでゐる。前方に眼を轉すれば、雪嶺のなだらかな威容が雪煙を上げてゐるのが樹間を通して見られる。十五時森林限界に出た。岳樺の小樹が灌木に混り、尾根は豁然とした雪原となつて北雪嶺の肩に續いてゐる。C・Ⅰから三杆、雪嶺の北方約二杆、標高二二六〇米の地點に我々は達したのである。此處に七人用

の青天幕を張り、荷を投入れてC・Ⅱに戻つた。山崎・佐野は既に歸つて來てゐた。今日は雪嶺に遮ぎられて遂に主峰を拜む事が出来なかつたが、今日迄の暗中摸索は豁然として一大光明を求め得た氣持で、天幕の中は馬鹿に陽氣である。」

黄隊・綠隊日誌 「今日の豫定はC・Ⅱにゐる三隊の奮闘に依つてC・Ⅲが張れ、一パーテイでもそれに入る事が出来たならば綠隊はC・Ⅱに登る事になつてゐたのであるが、十時と決めてある合圖の花火は遂に聞えなかつた。十一時頃、佐野と山崎が連絡旁々食糧、器具若干を荷上げに下りて來た。その報告で今日中にC・Ⅲを建設出来るかどうか分らないとの事、その困難は想像するに餘りある。寒暖計は零下十五度を指してゐるが大して寒く感じない。百瀬・近藤はB・C迄食糧を取りに十三時出發、それと前後して佐野・山崎もC・Ⅱに歸つて行つた。相變らず平穩な天候で風さへない。連絡員が十四時半登烟洞トウランドに下つて行つた。紅茶を沸かし、餅を焼いて食ふ。十七時百瀬・近藤が登つて來た。今夜も暖い。日光を浴びて外で炊事をする。我々は樂に休養してゐるのであるが、上の方では登攀隊が前進隊と交つて非常な苦闘をしてゐるのだ。是では未だ極地法が充分マスター出來たと云へない。隊の運行は慎重に研究、計畫せられねばならぬ。」

六 C・IV 建設

一月五日

青隊・赤隊・紫隊日誌 「連日のアルバイトで心身全く疲勞し、今日は休養の意味をも含んで赤隊はC・Ⅲに入る丈とし、紫隊・青隊は赤隊をサポートしてC・Ⅲに往復する事とする。十一時半C・Ⅱを出發、二時間でC・

Ⅲに到着する。昨日のラッセルのお蔭で快適な登高を味ひ得た。赤隊は天幕の整備及び荷の整理に残る事となり、青隊・紫隊は直ちに雪嶺の頂上迄ラッセルを兼ねて偵察に出發する。岳樺の矮樹が密生した地帯を縫つて三〇〇米程膝を没するラッセルに喘いで、遂に灌木地帯を突破すると、積雪は烈しい西北風に吹飛ばされて殆んどない。蘚苔類の生へた茶褐色の草原の所々にシュカブラの波が白く走つてゐる。十三時半北雪嶺の頂きに第一歩を印した。頂上と云つても曠漠として、一面に岩石がごろ／＼した間を雪がセメントしてゐると云つた状態であり、五〇〇米四方もあるであらう廣野は、些か内地の山とは勝手が違ふ。吹雪にでも遭遇したなら完全に方向を失ひさうなので、ケルンを數箇所に残し、赤色のベナントを處々方々に打ち當てる。虹臺峰、西冠帽峰、冠帽主峰、今や我々のルートは一望の裡にある。目前に眞白く雪を湛へてゐる圈谷は、左方に迂回して北冠帽峰、渡正連山の間を縫つて延水面の源となつてゐる。前回の遠征の折と比較して雪は可成少い。十四時歸途に着く。風は相當強くなつて來た。十五時C・Ⅲ着、十五時半青隊はC・Ⅱへ向ふ。C・Ⅱ歸着十七時二十分、C・Ⅰより黄隊・綠隊及び連絡員二名が來て焚火をしてゐた。C・Ⅱの赤隊・紫隊は明日愈々C・Ⅳを張りに行く事となり、早目にシュラフザックにもぐる。夜風が少々出て來たらしく、天幕がばた／＼煽られてゐる。」

綠隊・黄隊日誌 「昨日降つた連絡員二名が、部長の手紙と新聞を持つて登つて來た。午後からC・Ⅱに入る。綠隊の安達は黄隊の近藤と入れ代る。安達の炎症も思つたより好い方に向つてゐる。」

一月六日

赤隊・紫隊日誌 「張り切つて早朝起床する。直ちに炊事に取りかかり、旁ら赤隊は個人の荷を整理して大リュックに詰め込む。C・Ⅳ建設迄C・Ⅱ、C・Ⅲ建設の如き事を繰返してはならぬと思ひ、急いで出發の用意を

し始めたのであるが、ラヂウス三個の炊事は矢張り相當手間取る。紫隊のサポートを得てC・Ⅲを出發したのは十時五十分、雪嶺迄のだら／＼した長い登りは、折角張り切つた氣持を一角から崩し始める。途中赤旗に附近の灌木をもぎ取つて柄を着け、クラストした雪面に幾つも挿して行く。十二時二十分雪嶺頂上に至る。懐しい登烟洞の方を見ると滿洲の曠野が雲海を通して地平線の彼方に霞んでゐた。雪嶺、虹臺峰、冠帽連山、渡正連山が圍繞してゐる大カールは穂高の潤澤で見られるやうな雪壁が一大圓陣を作つてゐる。圈谷の縁の雪底に沿つて歩くアイゼンがクラストした雪面に小氣味好く軋る。十四時虹臺峰頂上に着き、赤旗を三角點の殘骸たる柱に高く結び附けた。紺碧の空に翩翾とはためく赤色の旗は純白の尾根に映えて實に印象的であつた。清淨美の極地と云はうか、贅言を附して印象を傷つけるを恐れる。我々は隨分冬山の生活をして來たが、是程大らかな、然も明日の登頂を控へてのこの餘裕ある氣分を味ひ得たのは不思議である。C・Ⅳは虹臺峰の雪でセメントされたガレを降り切つた二三〇〇米の瘤との中間鞍部、高度約二二八〇米の草原に四人用グレンフェル天幕を建設した。天幕は積雪を豫期して設計されてゐるものであるから、此の様な雪の無い場所に張ると、底面から支柱が突き出て、天幕は浮き上り、凍つた岩を掘り出したり、苔を下に敷いたり、張るのに大分苦心をする。紫隊の支援を感謝しつつ、明日の登頂を固く握り合つた手に誓ふ。附近一帯は大草原の如き觀を呈し、浩蕩たる尾根は西冠帽峰を通じて主峰に至つてゐる。太陽が怪しげな量を被つてゐたのが、明日の登頂へ一抹の不安を残す。」

黄隊・綠隊日誌 「連絡員二名を伴つて九時四十分C・Ⅱを發ち、C・Ⅲに向つた。十一時二十五分C・Ⅲに着く。天幕の中に通信票があり、今日二隊は十時五十分、C・Ⅳを建設せんとして出發す」と書いてあつた。天候は相變らず快晴、この天候も二十五日以來續いてゐる。雪嶺迄遊歩する。連絡員も一緒に頂上に行つて感慨無

量と云つた様子をしてゐる。歸途豹の足跡らしいものが點々と雪面に附いてゐた。黄隊と連絡員はその足でC・Iに降る。十七時紫隊が歸つて來た。」

青隊日誌 「休養、東京を出て以來初めての休養らしい日を送る事が出來た。此處C・Iに十一時頃連絡員が手紙を持つて上つて來た。パン、紅茶、ホットケーキ、食ふ事が何よりの楽しみである。」

七 冠帽主峰登頂

一月七日

赤隊日誌 「天幕の底に地衣類を掻き集めてふか／＼した絨氈を作り、その上にヘヤロックを敷いた贅澤極まるC・Nの一夜であつたが、登頂を明日に控へて流石に昂奮を禁ずる事が出來ず、夜深更に至る迄轉輾反側して熟睡出來なかつた。明け方とろ／＼と微睡んだと思ふと既に六時半、直ちに炊事に取りかかり、旁ら登頂の準備を始める。東京を出發して以來殆んど休養らしい日を送つた事のない我々は、既に相當疲勞を覺えてゐたが、天候が明日にでも崩れさうな氣配なので、本日登頂を決意した。天候は幸ひ今日一日位保ちさうである。それにしても朝鮮の天候が大陸的であるのが有難い。九時、早くも今日我々をサボートして呉れる綠隊が天幕の入口を開いて顔を出す。百瀬が石油を一罐大切さうに腕に抱いて來て呉れる。九時半出發、風が少々出て來た。大小の起伏ある大高原の如き茫漠たる山稜は海原の如く高山草が波打ち、到底之が尾根とは想像出來ない。幾多の起伏を越えて十時半西冠帽峰の頂に立つ。我々は暫しの憩ひを頂から數歩の凹地に求めてバスケットを煩張つた。西冠帽^{アカベコシ}から赤旗^{アカハタ}乗越への降りは、アイゼンの齒がやつと喰ひ込む程固くクラストした急斜面が續く。慎重に下つて赤旗

乗越に至れば案外暖く、太陽が氷雪にきらきらと照り映え、曲折した岳樺が疎生して實に美しい。我々が幼児夢想した桃源郷とは此處であらうか。烈風次第に加はり、北西の空には暗憺たる雲が非常な速度で擴がり始めた。我々を此處迄サポートして呉れた緑隊は時間の餘裕がないので此處でC・Ⅲに引き返す事となつた。峻烈な朔風を避けて中冠帽を左に搦み主峰に向つた。此の一步が全隊員の努力の結晶と思へば踏みしめる足に力が籠る。十二時二十五分、我々は冠帽主峰二五四一米の頂上に至つた。我々の大任は終つたのである。日本海は茫漠たる雲海に被はれてゐた。烈風の寒さを忘れて小一時間登頂の喜びに浸つてゐた我々は、十三時二十分歸途に着いた。

満ち足りた氣持と云はうか、云ひ知れぬ幸福感が全身に漲つてゐた。中冠帽峰と主峰のコルの日當りの良い風陰を擇んで晝食を食ひ喰ひ終り、中冠帽峰を通り再び岳樺の照り輝やく赤旗乗越に憩ふ。西冠帽峰への登りは可成勞らかつた。雪煙が手と云はす顔と云はす全身に叩き附けて、呼吸が一時怪しくなる。オーバーシューズとアイゼンを穿いた足は重苦しく、四肢の指が痛い。西冠帽峰から又平坦なる大草原を吹き募る風に全體重を凭せかけてC・Ⅳへと急ぐ。小さい四人用天幕は風を孕んで今にも吹き飛ばされさうになつてゐるのを見て、慌てゝ駈け寄り、直ちに應急補強工作をなした。十六時天幕の中に入り、内側より體を凭せかけて天幕の倒壊を防いだ。先にC・Ⅲに歸つた緑隊の通信票に、登頂を祝す。明日撤收のサポートに來る。餘り無理をしないやうに“と書いてあるのを心強く眺める。支柱や天幕の布が心配なので今夜は體を凭せかけて天幕を守り、とりとめのない雑談に夜を更かし、曉方どうやら風も穏かになつたのでシュラフザックにもぐり込む。」

緑隊日誌 「張り切つてゐた所爲か四時頃から眼が醒める。昨夜作つて置いた紅茶とチーズとパンで簡單な朝食を済ます。紫隊は昨日の疲勞と、今日はC・Ⅲに入る丈なので、未だ寢息を立てゝゐる。七時出發、天候は相

變らず上々である。雪嶺の頂に到達した時は渡正山トシヤマの方向に朝日に照り映えた雲海が莊嚴に漲つてゐた。夜明けの美しさは又格別である。虹臺峰ニライタケ迄一氣に飛ばして来る。大圈谷は逆光に映えて眼が醒める許りである。C・Nの赤隊は未だ出發してゐなかつた。——我々は赤隊の成功を確信してゆつくり西冠帽カシガサの登りへと歸途に着く。途中振り返つて見ると赤隊の三名はもり／＼頂上を指して登つて行く。三人の姿は何時しか蟻位の大きさになつてゐるが、不斷見慣れた連中丈にその後姿で誰か判然と分る、我々が西冠帽カシガサの頂きに着くと同時に赤隊は主峰を登り切つた。烈風が吹き捲つてゐるので聲の届かぬのは分り切つてゐるが、我々は聲を限りにヤッホーと叫んだ。C・Nに着いたのは十三時三十分、少憩して一刻も早く全隊員に知らせたいと強風を押して進む。左の顔面が凍て附いて痛い。雪嶺の頂き迄來てはつと身を苔の上に横たへると頭がぐら／＼する。C・Ⅲには青隊が早くも來てゐた。明日の天候を心配しつゝ眠りに着く。」

青隊日誌 「昨日の休養で體の調子も好くなつた。十一時ゆつくりとC・Ⅱを發してC・Ⅲに着く。紫隊は未だC・Ⅲにのんびりしてゐた。綠隊の連中は十六時半、薄紫の顔をして歸つて來た。」

紫隊日誌 「昨日のC・Ⅳ建設を終つて一役済ました感が深い。青隊の登つて來るのを待つてのんびりとC・Ⅱに下る。黃隊の連中と久し振りで話合ふ。」

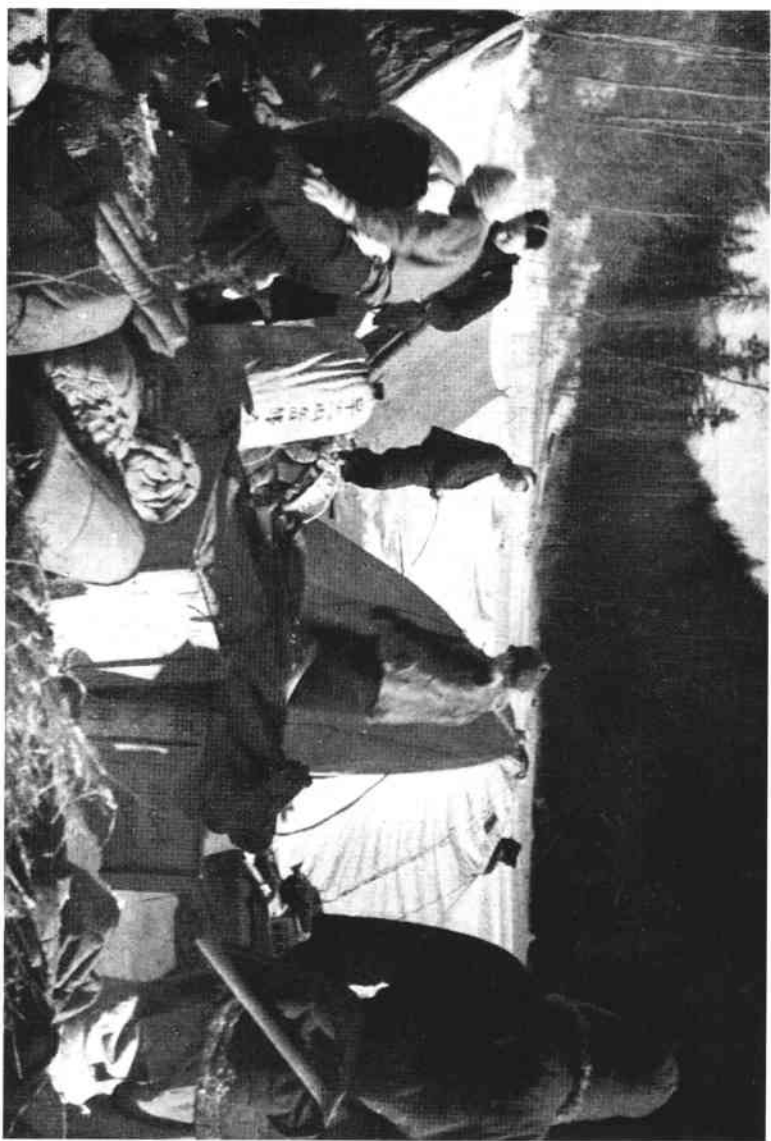
黃隊日誌 「休養。八時三十分登烟洞トウコウドウより連絡員一名來る。十二時新聞を持つて一名又來る。赤隊の登頂は確定的らしい。」

八 C・Ⅳ 撤收

一月八日

緑隊日誌 「遠征も峠を越した感が深い。氣が緩んだ所爲か眼を醒した時は既に九時を少し廻つてゐた。昨日のアルバイトで三人共大分疲勞してゐる。パンと紅茶で軽い食事を攝つて十一時C・Nの撤收のサポートに出發する。陰鬱な雲が空一杯に擴がつてゐて、遠くの間々は遙かに霞んでゐる。太陽の光は鈍く吹雪の前兆を思はしめる。雪嶺の頂上附近から又寒風に惱まされ、十三時虹臺峰を過ぎC・Nに着く。天幕の中の赤隊の三人は今起きた所だと云つて腫れぼつたい眼を頻りに擦つてゐる。一先づ天幕の中に入つて荷造りをする。昨夜の暴風で眠れぬまゝに磯邊が作つたと云ふ、平たくした空嚢にビッケルで一面に穴を開けたパン蒸器で、湯氣の立つ蒸パンを御馳走になつて天幕を疊んだ。十四時半、黙々と胸中を去來する想ひを反芻しながら、虹臺峰に登る。風は相變らず強い。虹臺峰の頂きで冠帽連山を沁々と見直し、網膜の奥にそつとその映像を包む。大小の起伏を越えて雪嶺に至り、下りに差しかゝるともう冠帽主峰は見えなくなつた。標識の赤旗は見付け次第取り去つて行く。赤旗は我々にとつて幸運にも餘り役に立たなかつた。十七時C・Nに歸着す。天候は益々惡化して二十三時頃から小雪が降り出した。外に出て見ると日が朦朧と霞み、岳樺の木立を幽邃に映し出してゐる。肩に降り積る小雪は飽く迄も清淨で軽く、羽毛が亂舞してゐるやうな錯覺に襲はれる。早い處C・Nの撤收が終つたのは幸ひである。溫度下り、零下十六度となる。」

赤隊日誌 「昨夜の烈風に一夜まんじりともせず、四時頃漸く風も風ぎ、五時眠りに着いだ。天幕の内側に凍て付いた小雪がバウルに二・三杯もあつた。十二時頃漸く起き出で、緑隊の連中と一緒に蒸パンを食ふ。昨夜の差し迫つた氣持に較べて、今朝の平靜さは些か意外の感がないでもない。――



根據地建設

早大山岳部

色別け各隊行動表

使用天幕	7.6.6. Base Camp	7. C. 1.	荷物 置場	7.4. C. 2.	7. C. 3.	雪嶺	虹台峰	4. C. 4.	西冠帽	冠帽 主峰
29	登烟洞 → 建									
30	→ 建									
31	→ 建									
1	→ 建									
2	→ 建									
3	→ 建									
4	→ 建									
5	→ 建									
6	→ 建									
7	→ 建									
8	→ 撤									
9	→ 撤									
10	→ 撤									

黄

関山近
根崎藤
吉安治
郎等

青

鈴木佐加
木野和藤
正俊男博

赤

磯川大
辺原庭
俊明章明

緑

百松安
瀬田達
孝一郎春
雄

紫

伊加輕
藤計部
久朋隆
夫

青隊日誌 「十時四十分綠隊はC・Ⅳの撤收に行く。十一時我々はC・Ⅰに出發する。十三時C・Ⅰに着いて紫隊・黃隊と一緒に夜は物凄く陽氣である。」

黃隊・紫隊日誌 「休養。連絡員二名寒氣の爲め登烟洞に下る。青隊の報告で、紫隊は昨日十二時二十五分登頂し、綠隊は赤隊と一緒に西冠帽^{カンゴウ}を過ぎて赤旗乗越^{アカハタノコシ}迄行つた」と云ふ事が判明する。」

九 C・III 撤收

一月九日

赤隊・綠隊・黃隊日誌 「昨日各隊の間に連絡を取り撤收の豫定を大體定め、明日出來得るならばB・C迄全部荷を下す事とする。昨夜の空模様^{ソラノカタ}に引換えて今日は雲一つない快晴である。久し振りで熟睡した今朝天幕の外に出て見ると、附近一帯の樹林は一面雪化粧を施してゐる。朝食兼晝食のパンを蒸してゐる内に、早くも黃隊の三人がC・ⅠよりC・Ⅲの撤收をサポートしに來た。直ちに撤收作業を始め、附近の枯枝を集めて不用物を燃やす。周囲の雪を溶かして大きな黒い穴が出來上つてゐた。十五時半C・Ⅰに下る。途中三回も休んで我々の開拓した尾根に別れを惜しむ。C・Ⅰ着十六時五十分、直ちに焚火を始める。前進根據地の最後の夜は靜かに更けて行く。誰も天幕に入る者はない。千古不伐の原始林の靈氣を胸一杯に吸つてゐる皆の顔は燃え盛る焔に赤黒く映えてゐる。彼等の胸中を去來するものは次のエクスペディションの構想か、將又故郷の親達の幻影か、樹間を通して冷やかな半月が皎々と輝いてゐる。皆夫々物想ひに耽つてゐる内に傍らの大きな枯木に引火した。慌ててシャベルで雪を叩き附けて危く消し止める。氣溫は徐々に低下し、十八時零下十八度、明日も亦好い天氣とな

ならう。」

紫隊日誌 「我々は今朝登つて来た連絡員と一緒に自衛團の出動を依頼する爲、C・I、B・Cを素通りして登烟洞トウエンドウに降つた。登烟洞トウエンドウの材木事務所で我々の下山を待ち受けて居られた安岡巡査に萬事お願い出来たのは好都合であつた。北鮮の片田舎では、警察が司法、行政、教育等の中心であり、登山者に極めて親切である事は讀んでゐたが、之程迄我々の遠征に援助を惜まない警察の盡力には唯感謝あるのみである。登烟洞トウエンドウの部落民も亦淳朴であり、B・Cに戻らうとすると、今晩是非泊れと云つて聞かない。我々は暖い溫突の誘惑を斷切るのは辛かつたが、B・Cの後始末も残してゐるので、薄暗くなつて天幕に歸つた。夕刻から氣溫が降り、十九時零下二十八度となつた。遅い夕食を済ませてアークチックに入つたが、ラヂウスの氣化パイプが破れて使へなくなつて終つた。百目蠟燭を數本並べて暖を取つて見たが顔に煤が附く許りである。二十一時零下三十五度、B・Cはどうしてこんなに寒いのであらう。防寒の正装をして早々寢袋にもぐつた。」

青隊日誌 略。

十 C・II、C・I及びB・C撤收

一月十日 相當寒い。B・Cに於ては八時零下二十五度、C・Iに於ては七時零下二十度、C・IIに於ては七時零下十八度、上に行く程氣溫が上昇してゐるのは奇妙な現象だ。晝近くC・II撤收に約三十名、C・I撤收に十二名の自衛團がやつて来た。人数が多いので荷を等分するのに一苦勞をする。餘つた乾パンやバターを皆に頒けてやつた。バターを怪訝さうに眺めてゐるので喰べる物だと教へてやると大事に懷にしまひ込む。C・IIの下

りはアイゼンを外して急勾配の苔の蒸した斜面をグリセードの要領で滑つて行く。自衛團員の穿いてゐるボゾン（木綿の布と綿で出来てゐる長靴）は滑るのにもつて來いである。彼等は奇聲を發し乍らつるつるやつてゐる。十二時三十分C・Iの地點に到着すると、既に撤收し終つてゐた。急ぐ必要もないので、再度或は訪れる事もないであらう附近の景色を嘆賞しつゝ溝のやうな一條の雪道と化したB・Cへの道を辿り、十四時歸着する。途中地圖の上で判然としてゐる尾根の出合は何處であらうかと注意し乍ら行くと、雪面にビッケルで、此處が尾根の出合ひと誰かが書いて行つたのを發見する。地圖と照し合せて成程と頷ける程判然としない尾根であり、その位置も大分地圖と違つてゐるやうである。曾田部長が直ちにB・Cをも撤收して登烟洞に下る事を頻りと勧められるので、我々も部長の好意に甘える事とした。直ちにB・Cの撤收作業を終る。約六十名もの大部隊が蜿蜒と續く壯觀は遠征の終幕を飾るに相應しいものであつた。行く時氣付かなかつたが、登烟洞から北雪嶺附近が遙か彼方に霞んで見えた。各々勝手な熱をあげてゐる内に、部長が自衛團の人々に圍まれて訓示を始められた。時折笑聲を交へての訓話は我々にその言葉こそ通じないが、慈父の幼兒に諭すが如き和氣霽々たる中に肅然と襟を正さしむる或るものを感じしめた。我々は自衛團の人々にその勞を謝し、一先づ荷を材木事務所の倉庫に入れて、暫く振りで温泉の感觸を楽しむ。部長を圍んで夕食を共にし、その御盡力を謝し、成功を祝ふさゝやかな酒宴を催した。快談續發して大いに氣焰を擧げる。

一月十一日 昨夜來の小雪が未だ降り續いてゐる。斜交ひに幾條もの線を引く間から、模糊として膚の露はな部分と白皚々の積雪の部分とが交錯した山々が、此處登烟洞（トウエンドウ）を取圍んでゐる。附近に點在する軒の低い民家の屋根から細々とした温泉の煙が立ち上つてゐる。今日は休養をして荷造をする事とする。天候も本格的に崩れたら

しい。細紐を握つた手がその儘凍えて終ふ程の寒さで、交替にストーツのある部屋に逃げ込んで箱包作業を続ける。来る時に使用した木箱、行李、袋等に詰めてどうやら十七箇の荷を纏め上げた。夜關根隊長より歸途の日程に就いて發表がある。我々は清津から船で歸京する豫定であつたが、日數の關係上陸路歸京と變更した。

十一 歸 路

一月十二日 今日荷物を牛車二臺に積んで、全隊員は身の廻りのものを詰め込んだセミリックを背負ひ、延社造一六軒の雪道を歩く豫定である。種々お世話になつた登烟洞製材事務所の人々に厚く御禮を述べ、十一時出發する。外は耳がちぎれるやうに寒い。太陽は五彩の暈を被つて妖しい光を放つてゐる。牛車の轍がかち／＼に凍て付いた路上の雪にきい／＼と軋る。大岡延社警察署長が兩水坪に我々を出迎へて下さつた。水站駐在所に於て部長さん一家の心を籠めた御馳走を戴き、部落の人々に贈られた牛肉を鰯腹詰め込んだ。我々が青息吐息で食卓上に並べられた御馳走を怨めしげに眺めてゐるのを見て、部長は満足げに童顔を綻ばしてゐた。地元官民の熱誠溢るゝ御好意には、我々一同唯感激するのみであつた。朝鮮服を纏ひ甕を頭に乘せて井戸水を運んでゐる婦人の風俗を眺める餘裕が何時しか我々の心に出来てゐた。延社の二軒程手前で日が翳り、路上は益々凍て付いて全でスケートリンクの上でも歩いてゐるやうである。二、三人固つてタックルでもされたやうに倒れるのも面白い。牛車は既に驛に着いてゐた。何日か振りで一風呂を浴びて、夜延社のお歴々の招待宴に臨む。異國風な踊りと地酒、そして山積せられた山海の珍味と物寂しいアリランの調べは遠征の一つの思ひ出として末長く残るであらう。

一月十三日 九時三十分の列車で延社驛^{エシヤ}を立つ。昨夜顔馴染となつた驛長が特別列車を配慮して下さる。我々の成功の大半を形造られたと云つても好い曾田部長とも愈々お別れである。部長は何時迄も手を振つてゐられた。白茂線はランプとストロヴの附いた輕便で、車内の寒暖計は零下二度を往復してゐた。一七〇〇米と云ふ我國に於て最も標高の高い軌道を通るこの列車は、目にくつきりと陰影付けられた高原の物寂しい雪景色の中を通過つて喘ぎ進む。以上

自分達のやつたことを自らが批判しても果して正しいものが出来るかは疑問であり、聊か蛇足と思ふが、二三の點に付き解說的に感想を述べてみる。紀行文及び行動表を一瞥すればわかる通り、豫期以上に恵まれた點もあつたが大體計畫通り遂行することは出来た。然し少しく内容を検討してみると、上手にいつたこともあるが、失策もあり缺點も目につく。關根は部報「リユックサック」十號に感想を述べ、犯した失策の第一は登攀隊の運用の拙劣さであるとしてゐる。このことは計畫の進行中、全隊員が氣付いたのであるが實際にはもうどうすることも出来なかつた。隊長や登攀隊に作用した特殊の心理的なものも考へられ、仲々複雑し

たむつかしい問題であるが、一般的問題にするためには、もつと平易に考へた方がよさうである。即ち隊の運用と同時にキャンプ構成をもう一度検討してみたい。實際に我々が行つたキャンプ構成でも、隊長以下が非常に極地法の運用に熟達してゐれば理想的な登攀は確かに出来た筈である。何となれば登攀隊は始めから綠隊の位置に置き、登攀の日をもう一日遅らせればそれでよかつたのである。濟んでからだとよくわかるがその當時、このやうな動かし方をするといふことは氣が付かなかつた。もつとわかり易くするにはどうすればよかつたかといふと、前進ベースキャンプC・Ⅰを擴大することである。若しC・Ⅰに全員宿泊出来た

とすれば、C・Ⅱに於て登攀隊が出過ぎたと感じて、C・Ⅲを建設するに當つて、その缺點を十分補へた筈である。以上のやうに考へてみると、氣を使つてC・Ⅱを遠慮したのが悪かつたやうに思はれる。やはり前進ベースキャンプは出来ることなら、より多くの隊が集まれるやうにしてをくのが定石かもしれない。

尾根の發見も、豫期してゐたことではあるが、半日を無駄にした。この根本の原因は我々が最後に泊つた登烟洞を地圖に登烟洞と字のある附近だと簡單に思ひ込んでゐたためであり（實際はそれより約二軒上流の地點であつた）、そのため、B・Cの位置も約二軒下流の同じやうな地形のところだと信じ、豫想してゐたガレがないところから、そのまゝ目標の尾根より二軒程溯つてしまつた。まづたく慚愧に堪へない。

露營地は、後に一寸説明するがB・Cが特別に寒い地點であつたことに検討の餘地はあり、C・Ⅰなど明らかに怪我の功名ではあつたが、他に動かし得ない完壁の場所だつたと思はれる。

珍らしき氣象現象に就いて

零下四十度といった厳しい寒さに觸れることは、この計畫の目的の一つであつた。ところが四十度に近い寒い日はあるにはあつたが、多くの日は豫想したより極めて暖く、それが尾根の上に出てから顯著になつて來たので、この目的は明らかに失敗した。これは北朝鮮が三十年來の暖い冬を迎へたといふことが、あちらの新聞にも出てゐた位であるから、天を怨むことも出来ずどうすることも出来ないわけであつた。この一般には四溫續きのやうな氣候の中で我々は今迄味つたことのない奇妙な現象に遭遇した。これは下山して氣の付いたことであり、その説明は我々には付かないのであるが有りのまゝを、感じたまゝをこゝに記録する。

昭和十五年十二月三十一日B・Cの位置で八時に180°を経験し、この分なら頂上附近へ行くと、或は140°の附近の寒さに出遭ふのではないかと心配してゐ

た。ところが三寒が去り、四温が廻つて來ると、計畫が進んで尾根の上に出てても -20°C といふのは稀な位に暖い日が続いた。今に來る、今に來ると氣遣はれたが、終に三寒らしいものは再び現はれず、第四キャンプ邊りで幾らか朝鮮らしい感じを受けた限りで、豫想した厳しい氣候を経験出來ず、それを不満に思ふ位の氣持で下山の途についた。その時も我々の平素の常識でB・Cに下り更に登烟洞に下つたら、正しく春だらうと考へてゐた。全隊B・Cに下山した時、先に下りてゐた隊員が、B・Cは猛烈な寒さだつたが上の方はどうだつたかと質ねた。一月十日のことであり、その朝C・Iに於ても亦三寒が來たかなと考へられる位ではあつたが大した寒さは感じなかつたので、不思議に思ひ始めて記録を比較してみたのである。それ以前にC・IからB・Cに下る途中も急に氣候が變り始めたやうな感じを一樣に受けた。一月九日の晩と一月十日の朝のB・C、C・I、C・IIの記録を示してみる。

昭和 16 年 1 月 9 日				
時刻	場所 B.C (1050m)	C.I (1200m)	C.II (1864m)	
17				-18°C
18				
19	-28°C			
20		-30°C		
21	-35°C			
22				
23				-25°C
昭和 16 年 1 月 10 日				
7				-18°C
8	-25°C	-20°C		
9				
10				-14°C

この表は始めから、かゝる結果の出ることを意識して氣溫の測定をしたのでないから互に連絡がなく極めて素略なものであるが、一八〇米乃至二〇〇米登ると攝氏一度氣溫が下るといふ常識の逆をいつたものだといふことはわかる。

B・Cは地圖でわかる通り、延面水の河原であり、約一〇〇米巾の雪の原をなしてゐる地點であつた。南面は小さな澤が延面水に流れ込み北側は適度な斜面で

陽當りは相當よいところであつた。

C・IはB・Cより東南東直線にして約四杆の地點であり、南北に澤を控へる細い尾根の上であり、柵・落葉松等の疎林の中である。延面水より約三〇米登つた地點である。

C・IIはC・Iより直線で約二杆南に當り、標高差にして約六五〇米上方の廣い尾根中の小突起に位し、その附近は凡て原始林と思はれる密生した大きな林であつた。

測定に用ひた溫度計は、零下四十度迄測定可能のア

ルコール寒暖計を用ひ、出發前に補正を行ひ、歸路登烟洞に於て互に比較してみたが誤差は認められなかつた。

附記 この計畫の實施に當り朝日新聞社、朝鮮總督府警務局、延社警察署に特に御援助を賜はつたことを厚く御禮申上げる。

附記二 第一次計畫の報告である山岳三十三年二號「冬の小長白山脈」二五頁の冠帽峰附近の圖中雪嶺（二三三九・六米）とあるは雲嶺の誤りに付き訂正す。

雪崩の描寫

勝 見 勝

- (1) 本文・歴史的素描
- (2) 年 譜
- (3) 参考文献
- (4) 本文註釋

山岳の美を發見して、これを畫材にとり入れ始めたのは文藝復興期の畫家たちの大きな特徴であつた。しかし多くは遠い地平線に、山岳がただ背景としてあしらはれる程度に止まつた。有名なレオナルド・ダ・ヴィンチの「聖アンナ」や「モナ・リザ」などにしても、山岳描寫はただ比較的重要な背景として登場してゐるに過ぎない。瑞西の郷土畫家といはれたハンス・ホルブインやハンス・ロイやニクラウス・マヌエルなどの作品^(註1)にしても、その域を餘り遠く脱したものではなく、僅かにアルプスの前山がやゝ主要な畫題となつて扱はれてゐる程度であり、それも背景以上の効果を持つものではなかつた。これは當時十五・六世紀の畫家たちが、未だアルプス山間に滞在して、直接山にモチヰウをもとめると云ふやうなことの殆んど無かつたためであらう。従つて雪崩の繪畫となると一そう稀有である。

もつとも雪崩の存在は早くから山地の住民たちに知られ、文献による記録はリヴィウス、シリウス、クラウディウス等既に古く羅馬時代の史家によつて傳へられてゐる。^(註2)たとへばリヴィウスによると、例のハンニバルの軍隊がアルプス越えをした時、《自からひき起した雪崩》によつて、兵士や行囊に非常に大きな害を受けたといふことが記述されてゐる。これは西紀前二一八年のことであるから、遠くこの時代より雪崩の存在が知られてゐた譯である。

また時代はずつと下つて一四七八年には、ミラノに對抗する瑞西同盟の軍隊が、小サン・ベルナル峠を越えようとした時の記録がある。チューリッヒ出身の一〇〇〇名の兵士からなる一隊が《最先鋒》としてこの峠にさしかゝつた時、巨大な雪崩に一行中六〇名のものが浚はれ、著しくその士氣を殺がれたといふことが傳へられてゐるのである。同じやうな雪崩による危害は、一四九九年のシュワーベン戦争に際して、瑞西人側でもオーストリ人側でも屢々アルプス越えの途中、それに悩まされたことが記録されてゐる。

十六世紀に入ると雪崩に関する記録は愈々多く、中でもヨシアス・ジムラーの「アルプス誌」^(註3)（一五七四年）中の記述は、當時として最も觀察の正確な優れた文献としてフライクもその著「雪崩」の中で推賞してゐる（参考文献目次参照）。この「アルプス誌」は元來はラテン語で書かれたものであるが、一九三一年にその獨逸語譯が上梓せられ、フライクもそれによつてジムラーを読んだもののやうである。次にその「アルプス誌」の中の雪崩に関する記述の一部を引用して見よう。

《ほんの僅かな原因でも、雪塊をなだれ始めしめるのに十分である。急峻な樹木の無い斜面では、邊りを飛び過ぎる鳥や、或はその他の獸、烈しい突風、また通りかゝつた人々の叫び聲によつてさへ、刺戟が與へられる。

最後の人聲の場合は、いはゆる木魂と呼ばれる反響の作用によつて空氣が動き、それがはすみとなつて雪はなだれ始めるのである。さうしてこれ等の刺戟は、それがどんなに微弱なものであつても、雪崩は直ちに起る。雪崩が最も屢々發生するのは、春の暖氣で雪が融けて軟くなつた時、或は秋や冬に突然多量の新雪が降つて、表面の氷化した滑りやすい舊雪の上に積り、それが滑りだす時、また酷烈なる寒氣と晴れ渡つた天候が続いた時などである。」

これを讀むと、ジムラーがすでに雪崩發生の原因であるショットクの意義・雪層の問題・滑劑と滑面の作用などに關して、かなり進んだ知識を持つてゐたことが想像される。

またナボレオンたちの軍隊が一七七九年及び一八〇〇年に、パニクゼル峠、大サン・ベルナル峠、シムプロン峠、サン・ゴタール峠などの峠越えを敢行して、雪崩による多くの被害を蒙つた事實は、も早や古記録として擧げるまでのこともないかも知れない。

文献上の雪崩の記録の歴史は極めて古く、大たい以上に概觀したやうなものであるが、雪崩の繪畫となると、現在識られてゐる最も古いものでも十六世紀以前に溯ることが出来ない。前に述べたジムラーの「アルプス誌」の出版年代より僅かに早く、一五一七年頃のハンス・レオンハルト・ショイフェライン(註4)の木版畫に、恐らく最初の素朴な雪崩の描寫が見出される。ショイフェラインはアルブレヒト・デューラーの弟子の一人で、「ネエルドリッデンのシャイフェレン」とも呼ばれ、一五一二年以來マキシミアヌス一世に仕へた宮廷畫家である。彼は一五一七年に上梓された「大帝行狀記」の爲に、澤山の木版畫を他の二人のアウトグスブルク出身の挿繪畫家たちと



第一圖・「マキシミリアヌス大帝雪崩に遭ふ」

ショイフェライン作（1517）

一緒に作製してゐるのであるが、これはその後散逸して久しく塵に埋もれてゐたのを、一六七九年マットイス・シュルテスといふ^(註 11)アウグスブルクの出版者が、非常な努力と苦心の後ほぼ原形に復し、その序文の言葉に従へば『衣魚の巢から拾ひ出して明るみに』再びさらしたのである。現在傳はつてゐるのはこのシュルテス版であるが、その挿繪の第三十六圖の木版畫に問題の最古の雪崩の描寫が認められる(第一圖参照)。

その表題は「大帝また雪崩の危険にも遭遇したまひけること」とあり、下には『イン河の邊りなるハラー谷において、マキシミリアヌス大帝野獸を森に追ひたまひし時、三つの大いなる雪崩山上より襲ひ來りて、山々御身の上に倒れかゝらむとせしが、その聾きをいち早く聽きつけたまひし大帝は、駒の手綱をひきしめ、危ふくも難を脱れさせたまひぬとなん』といふ説明がつけ加へられてゐる。

これを見ると、雪崩は巨大な雪の團塊として描かれ、澤山の小地を伴ふ三つの雪崩が、丁度狩りの途上にあつたマキシミリアヌス皇帝に襲ひかゝつてゐるところである。多少現在のわれわれの眼からすれば滑稽な氣もする雪崩そのものの表現に較べると、皇帝によつて手綱をひきしめられ、怖ぢ恐れて後すさりする馬の方が遙かによく描寫されてゐるといつて好いやうである。もつとも恐怖を示して後すさりしてゐるのは、ただ皇帝とその乗馬だけで、かたはらにつき隨つてゐる二人の騎士とその乗馬は、まるで危険も何も感じてゐないやうな有様であるが、これも多少滑稽といへば云へなくもない。しかし兎に角、ショイフェラインが一種の雪崩を描かうとしたことは明らかである。ただ彼がどの程度に實際の雪崩を目撃した經驗があつたかといふ點になると、可なり疑はしいやうに思はれる。

それは背景の山岳の描寫からいひ得ることで、様式化された東洋の山水畫の場合とは、大分その意味が異ふ



第二圖・シュトゥムプ「瑞西風土誌」中の木版畫。作者不詳(1548)

のである。彼はどこまでも寫實主義に向はうとした文藝復興期の畫家であつて、寫實の不足や缺陷がもしあつたとすれば、それは彼の體驗や觀察の不足をもの語るものに他ならない。

雪崩を雪の團塊として描いたものには、ヨハンネス・シュトゥムプ^(註6)の「瑞西風土誌」(一五四八年)の中の作者不詳の木版挿繪がある。これはシュトゥムプが一五四四年夏八月に瑞西のワリス地方を視察して、その見聞録を纏め一五四八年梓に上せたものであるが、當時としては立派な、貴重な文獻であつた。その第九卷のレボンチイエルの部に、《最も高きアルプ

ス連山の頂と荒涼について、いかにそれらが恒に雪に覆はれてゐるか、またその万年雪と氷河について」當時の人々に耳新しかつたに違ひない多くの描寫を彼は傳へてゐるのである。その挿繪として雪崩を示す色刷の木版畫が入つてゐるが（第二圖參照）、それによると邊りの光景がどんな風になつてゐるかは全然示されずに、ただ突如として岩山から巨大な雪塊が往來の上に落下して來たところを描いてゐる。岩や木々を根こぎにして浚つて來た雪崩の風壓が、二匹の駄馬と一人の馬子を打ち倒してゐる。一人の馬子は三番目の馬の方へ逃げ出してゐる。

この挿繪より雪崩の眞の姿に近いものを描いてゐるのは、むしろ挿繪に加へられた説明の方である。シュトゥムプは恐らく彼の旅行中の見聞によつて、挿繪の作者よりは餘程正確な知識をもつてゐたことが解る。彼は次のやうに書いてゐる。

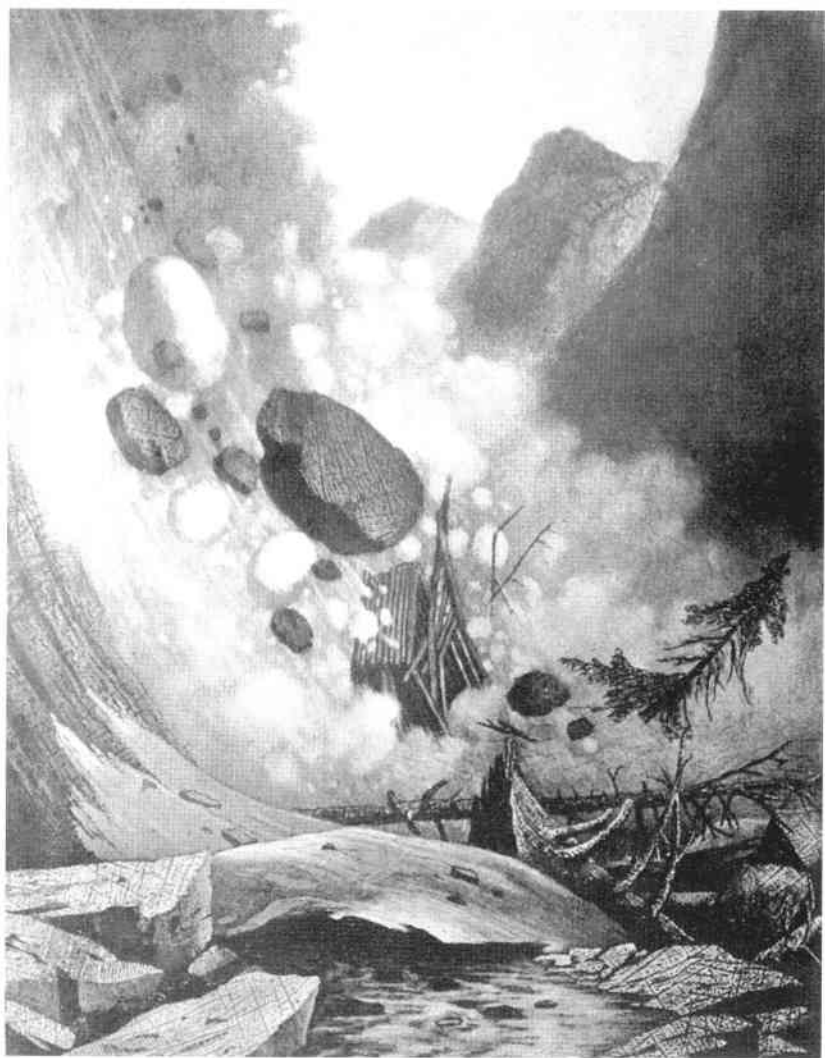
《かやうに冬期は山中が雪に埋もれるので、道路の大部分は、雪が凍つて堅くなつた時を除いては殆んど通行出來なくなる。——たとへ出來たとしても雪が軟かくて、固まらない限り非常に危険であり、また困難でもある。殊に春には暖い風か雨のために非常に動きやすくなつてゐるので、どこか山の上の方で一寸したはずみが鳥や風や、或は木塊によつて加へられてさへも、たちまち最初は少しの部分が裂け落ち始め、續いて次第にかさを増し、谷に向けてなだれ落ちる。さうして地面でも、樹木でも、岩でも、遂に當るすべてのものを薙ぎ倒し、突き落とし、ふれるものをなにもかも木葉微塵にしてこの雪崩は轉り落ち、埋め盡す。従つてこのやうな危険が待ち伏せてゐる多くの土地では、落下して來る雪を怖れて、人々は山沿ひに家を建てるのを無用としてゐる。さうしてかういふ雪の落下を土地の人々は「ローヴィン」《Lowin》と呼んでゐる。このやうな「ローヴィン」が山上で起ると、丁度雷鳴か地震のやうな音がして、それを遠くから聴くことが出来る》（註・中世高地獨逸語で書かれてゐる。前出

のジムラーの「アルプス誌」中の記述（一五七四年）と比較して頂きたい。又この記述はそつくりその儘が、一五九八年にバーゼルで出版されたセバスチャン・ミュンステルの「宇宙誌」^{（註7）}の中にも採用されてゐる。さうしてこの博學な著者は、別に他かに新しい知識を持ち合せてゐなかつたやうである。雪崩の挿繪もそれには省かれてゐる。

またリュツェルンの市書記のヨオハン・レオポルト・ツイザートは、その「有名なるリュツェルン湖及び四林湖の記述」（一六六一年）の中で、前掲のシュトゥムプの雪崩に關する報告を部分的にその儘利用してゐるが、それにも挿繪はない。

その他か一七三一年から一七三五年にかけてアウグスブルクから出版されたチューリッヒのヨオハン・ヤコブ・ショイヒツェルの「聖自然」といふ全六卷の書物の中にも、非常に豊富なアルプス山地風景の銅版畫が挿入されてゐるが、著者は特に雪崩の光景の挿繪を畫家に注文しなかつたと見え、これといふものもない。ただ第一卷に二枚、第一一八圖と第一一九圖において一種の煙か焰に似た雪崩の姿が、山上から非常な重力で落ちてゐるところを描いたものがある。この挿繪の銅版畫を鏤刻したのはG・D・ホイマン^{（註10）}といふ畫家であつたといふから、少くとも彼はかつて大きな雪崩が落下するのを遠くから目撃した經驗はあつたものと見られる。

雪崩の姿を巨大な雪の團塊として考へる觀念は、十七世紀及び十八世紀の書物の中でも、幾度も現はれて來る。たとへばエドワード・ブラウン^{（註11）}もその「旅行記」の中のフリオーールの部分で、《この山村が何十尺といふ深い雪の下》に冬は埋もれることや、またいかに《雪の團塊》が人馬の往來の大きな危害となるかといふやうなことを述べてゐる。この「旅行記」の獨逸版は一六八五年にニュルンベルクで印刷されてゐるから、原著は少くともそれより以前のものである。



(別) 第一圖 (リュデイシュリイの雪崩)



(別) 第二圖 (ホドラーの雪崩)

十八世紀では一七六五年にバーゼルのニコラス・ケエルネル書店から「新訂聯邦大地誌」が上梓されてゐるが、これはチューリッヒのダヴィッド・ヘルリーベルゲルが^{註12}非常な努力の結果著したものである。その第一巻にヘルリーベルゲルは、特に「雪崩」《Launen oder Schneebrüche》と題する一章を設けて、この中で彼が雪崩について讀んだり、聽いたりした事實のすべてを詳しく述べてゐる。それによると彼はすでに新雪雪崩と底雪崩の區別、すなはち主として風壓によつて害を與へるものと、衝撃や地すりによつて害を與へるものの相違を識つてゐたやうである。ヘルリーベルゲルは《Windlawinen》、《Schlaglawinen》、《Schlosslawinen》といふやうな名稱を以て、その區別を表はしてゐる。

しかしまた雪崩が《巨大な團塊となつて轉落する雪の彈丸であり、それが高い峻しい山々から、狂暴な、身の毛のよ立つやうな轟きと地響をたてて谷間に轉り落ちる》といふやうな記述をも行つてゐるし、他かの個所でも《團塊となつて落ちる雪》とか、《ごろごろ轉り落ち、飛び跳ねる》などといふ説明を加へてゐる。これを見ると彼も舊來の一般的雪崩の觀念から、完全に自由であつたとは思はれないのである。

またそこに挿入されたデュリンゲルの^{註13}原畫による銅版畫にしても（第三圖参照）、やはり同様の謬りを使してゐるのであつて、この繪に描かれたやうな峨々たる岩峰から、そのやうな形で雪崩が、谷間の憐れむべき山村の上を直接に襲ふといふ情景は決して考へられないことである。その上、一たいこの巨大な雪塊がどこからこんなに縦の樹や、小屋や、人や、獸をさらつて來たのであらうかといふ點なども、この畫面から十分理解するには苦むのである。

デュリンゲルは第一圖ではずつと山の上の方で、雪崩の始まつたところを表はすために、砲丸のやうな雪塊が

雪崩の描寫（勝見）

第三圖・ヘルリーベルゲル「新訂縣邦大地誌」中の銅版畫（一七六五）



五〇

空中を落下する様子を描いてゐるが、第二圖では雪崩が途中まで落ちて來たところを表はさうとしてゐる。しかしづれも風景全體と何ら有機的な關聯が認め難く、未だまだ雪崩の描寫としては不十分なものと言はなければ



第四圖・『地球上最も注目すべき地方の総圖』

中の彩色畫。作者不詳（1805？）



第五圖・ハスリー博物館蔵の手彩石版畫（1830？）

ならない。

このヘルリーベルゲルの地誌の銅版畫に強く影響されたと思はれる雪崩の繪畫が、大たい一八〇五年頃に現はれてゐる。それは「雪崩」と題する彩色畫で、ラ
イプチヒから出版された「地球上最も注目すべき地
方（註14）の縮圖」と題する書物の第四卷に挿入されてゐるが、
作者も出版の年號も明記されてゐない。

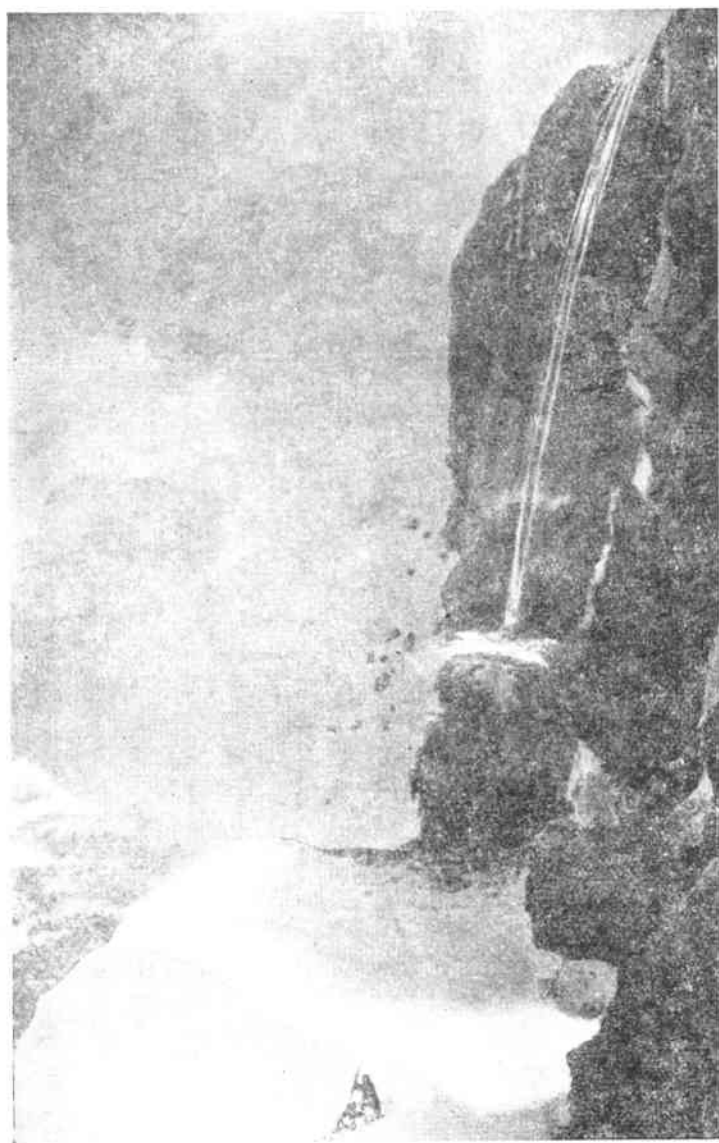
この挿繪（第四圖參照）を見るといろいろ缺陷や滑稽な點も存在するが、全體としてはヘルリーベルゲルのものより可なりの進歩を示してゐるといつて好いやうである。もつとも雪崩を團塊として考へる形式は、なほこの繪の中にも相當に残つてゐるし、點景の様々の道具立ても相變らず舊套を墨守してゐる。しかし雪塊はただ漠然と理由なく落下してゐる譯ではない。いろいろの大きさの岩石や樅の木を根こぎにして押し出した巨大な雪崩から、さらに前方に抛りだされた雪塊を描き示さうとしてゐることが分る。

次に大體一八三〇年前後の作品と見られる手彩石版刷の雪崩の繪が、現在マイリンゲンのハスリー博物館に保存されてゐる(第五圖參照)。しかしこれも本質的に雪崩の描寫の上では進歩を示してゐるとは云ひ難い。この繪では三つの巨大な雪の團塊が谷間に向つて一緒に轉がり落ち、貧しい家屋やその住民たちを脅かしてゐる。作者は不詳であるが、恐らく彼は團塊を三つにすることによつて、雪崩の巨大さと重壓を三倍に強調しようと考へたもののやうである。着の身着のまゝで逃げ出して恐れ戦いてゐる人々の姿を點出し、大いに雪崩の危険を表はさうとも努めてゐるのであるが、全體として現在のわれわれの眼から眺めると、未だ十分に成功したものとは云へないやうに思ふ。

それよりも時代は古く一七七六年に出版された「瑞西山岳風景とその記述」といふ本の中のカルル・ヴォルフ(註16)による「ヘルレンベヒリの冬景色(第六圖參照)」と題する彩色畫の方が、遙かに興味が深い。これはまた高山の冬景色を描いた最初のものといふ點で、シュタイニッセルもその著書の中に採録してゐる。こゝでも早や雪崩を砲丸や團塊状のものとして考へる觀念は、全く跡を絶つてゐる。たゞ嚴冬の粉雪雪崩として眺めるには、雪煙の描寫などに不足を感じる。しかし圖に表はされたやうな岩壁にあつては、このやうな一種の雪崩——といふより雪の落下——もあり得ることと思はれる。

カルル・ヴォルフは最も忠實な山岳風景の描寫家として、二十世紀になつて再認識せられて來てゐるが、當時十八世紀のロココ時代の人々にとつては、餘りにも寫實味が勝つてゐたものか、彼の作品は世にうけいれられなかつた。ヴォルフは不遇と貧窮のうちに、一七九八年に歿してゐるが、この恵まれなかつた畫家のために、ハインリッヒ・クーンは「瑞西の繪畫と挿繪に表はれた高山(參考文献參照)」の中で、力を入れてその業績を紹介し

てゐる。もつともE・W・ブレットの方は「アルプスとその畫家達」の中で、このヴォルフのことを簡単に「一



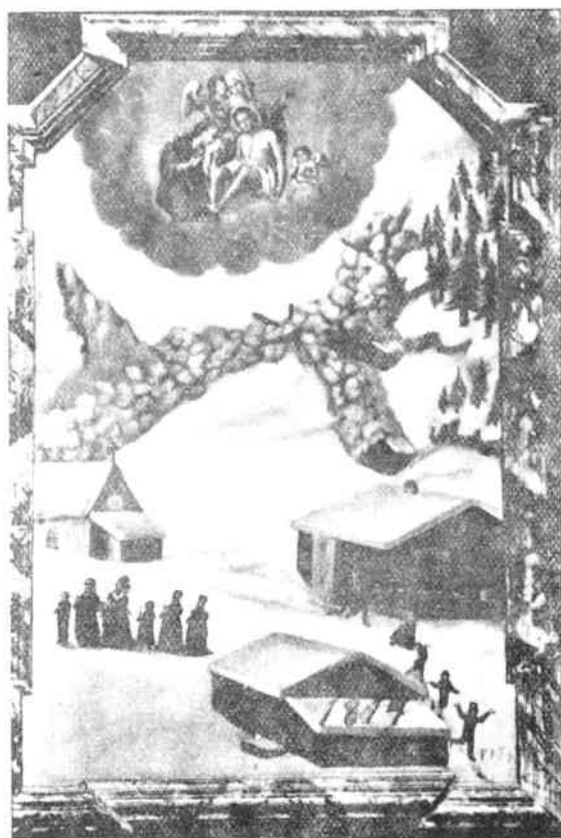
第六圖・「ヘルレンベヒの冬景色」ヴォルフ作（1776）

人の挿繪作家》として片づけてゐるといふことである。併しクリーンのヴォルフ讚美には多少同國人としての身びいきがあるにしても、確かに注目すべき初期山岳畫家の一人であるといふことは、筆者も十分にこれを認めたいと思ふ。

大分筆が餘談に走つたから、次に主題にもどつて、十九世紀に入らう。一八一〇年の「チューリッヒ救護協會」雜誌の新年號には、「シエッヘン谷の雪崩」と題するエッチングが掲載された。これはフランツ・クザフエル・トリールネルの原作によつて、J・H・マイエルが銅板に腐蝕彫をしたものであるが、このトリールネルといふのは一七六六年アアルトに生れ、その後大たいウリイに移り住んだ瑞西の風景畫家である。彼がこの雪崩の繪を描いたのは一八〇九年頃であらうと推測されてゐるが、これも決して雪崩の特徴を十分捉へたものとは云へないやうである。畫面の重心はむしろシエッヘン谷の谷間の風景におかれてゐる。下シエッヘンの小さな教會堂の前から眺めたところで、雪崩は二手に岐れて落下してゐるが、遭難した不幸な人々や破壊された家屋の残骸が、もし前景に描かれてゐなかつたとしたら、或は人々は雪崩の存在に餘り注意を拂はなかつたかも知れないと思はれる。トリールネルは當時の風景畫家として優れた腕を持ち、殊に田園や牧舎の風景描寫にはその才能を十分發揮してゐるのであるが、しかも雪崩といふやうな自然の劇的な、緊張した光景の描寫には、餘り向かなかつたものと云はねばなるまい。

同じやうに雪崩によつて遭難した人々を描いて、しかももつと素朴な描寫に満ちてゐるのは、現在リューチイの教會堂の壁にかゝつてゐるもので(第七圖參照)、それは一八一四年にガルゲルレンの谷を襲つた雪崩によつて一家族全部がみなごろしに遭つた悲しむべき事件の追悼の額である。作者は不詳であるが、繪には上み手の家屋が

埋没され、そこで生埋めになつた六人の女と子供たちが雪の上に跪き祈つてゐる。さうして一方では難を逃れた人々が駆け出してゐる。雪崩の描寫にしても、全體の構圖にしても、極めて幼稚かつ素朴なものではあるが、現在も雪崩の被害の絶えない同地方の住民にとつては、或は感銘の深い圖柄であるかも知れない。わが國の繪馬のやうな民俗的なものであらうかと思はれる。



第七圖・リュートイ教會藏の「1814年の雪崩遭難の追悼額」

とを描かうとした。一八一〇年頃の刊行にかゝると推測される「バクレ・ダルフ將軍回想畫集」の中には、鉛筆描きの原畫による約二〇〇枚の石版刷口繪が納められてゐて、その一枚に「シ・ザン・サヴォワ谷と雪崩の光景」と題する雪崩を描寫したものがあつた（第八圖参照）。これはシュタイニツェルもその著の中に採録してゐるが、

これ等と大たい同じ頃の佛蘭西の風景畫家
ルイ・アルベール・バ
クレ・ダルフも、烈し
い雪崩の恐怖と雄大さ



第 八 圖 ・「シ・ゼン・サヴォワ谷と雪崩の光景」バクレ・ダルブ作（1810？）

この繪を見ると自然現象のディナーミッシュな迫力を描かうとする明瞭な努力が、線描による單純な手法の中に示されてゐるやうである。もつともバクレ・ダルブも色彩を使用したら、果して十分に成功したかどうかは疑問であらう。

§

§

ところでこのバクレ・ダルブや前述のトリネールまたカルル・ヴォルフなどの作品になると、それ以前のもののやうに雪崩を「轉落して來る雪の彈丸」と考へる觀念は、も早や完全に跡をたつてゐる。彼らは恐らく自からの眼で山を眺め、雪崩を目撃した經驗があつたものと考へられる。彼らの雪崩の繪畫の製作は、大體十八世紀末から十九世紀初頭に互つてゐるが、當時漸くアルピニズムが勃興して來て、山岳に對する關心と知識が深まつたことを物語る一つの例證としても、これらは面白い事實であらう。



第九圖・「グロース・ヴェネーディゲル登攀中の雪崩による遭難」

ラルレンベルゲル刻（1828）

モン・ブランの初登攀が一七八六年であり、一八〇九年にはシヤモニイの旅館の女中がとに角女性として初めてモン・ブランに登つてゐる。^{〔註21〕} またユンクフラウの初登攀は一八一一年であり、モンテ・ローザのツムシュタイン峯が初登頂されたのは一八二〇年である。大體これ等の點から考へても、漸く登山風潮の黄金時代に入り始めた時期であつた。従つてこの時代になると、夥しく多數の雪崩の描寫が表はれて來て、その取捨に困るほどである。勿論多くはなほ書物、それも主として山岳に關する文献の挿繪・口繪等であつて、獨立した繪畫作品といふものは未だ見當らない。その代り著しく雪崩の描寫は眞に迫り、現代のわれわれの眼からしてもその巧妙さに心惹かれるものが少くない。それは現代の寫眞の描寫力には及ばないとしても、別に一種拘すべき雅致と趣きがあるからである。

たとへばJ・ラルレンベルゲルの銅版畫に、一八二八年八月八日の有名なグロース・ヴェネーディゲル登攀中の雪崩による遭難を描いたものがあるが（第九圖）、それは非常に忠實



第十圖・「ダルヂョンチェール村近傍婚禮の一行雪崩に襲はるの圖」(1851)

克明な作品である。これはまた登山家の雪崩による遭難を描いたものとしても最初の、最も特色ある繪畫で、後述するホドラーの作品のある意味では先驅をなすものとも見ることが出来る。この時代以後の雪崩の描寫が正確であつた例證は、また一八五七年にデュネーヴで出た「瑞西繪卷」^(註23)といふCh・シャウブとE・H・ガウリウルの共著にも見出される。まさに落下してゆく雪崩そのものの姿が巧みにそこに描かれてゐる。或はまた一八五三年刊のチュウデ^(註24)の「アルプスの動物生態」といふ書物にも、同じく巧みな雪崩の挿繪が見出されるし、一八五一年刊の「瑞西案内」といふユーヂェヌ・グエールの素描による通俗書の口繪の中にも、「ダルヂョンチェール村近傍婚禮の一行雪崩に襲はるの圖」^(註25)と題する可なり正確な雪崩の描寫(第十圖参照)がある。この書物はパリイで刊行され

てゐるところを見ても、いはゆる名所圖繪風のもので、藝術的にも記録的にも特に貴重なものとは云ひ難いが、山地から遠く離れ、雪崩のやうな現象から疎遠な巴里で出版せられた書物ですら、當時この程度には雪崩の姿を掴んでゐたといふ點に興味があるやうである。更に一八六一年刊のH・A・ベルレブシュの「アルプスの自然と人生圖錄」になると、「雪崩發掘」[Lauvinnen-Ausgrabung]と題する原色版の挿繪があつて、これはエミール・リットマイエルの非常に劇的な効果を描いた原作によつたものであるが、その主題はも早や雪崩そのものではなく、生き埋めにされた馬車客や馬を發掘しようとして急ぐ村人たちの上に移つて來た。

同じやうな題材が一八六〇年頃の作者不詳の「ある雪崩」[Une avalanche]と題する繪にも描かれてゐることをエルンスト・イエンニは述べてゐる。彼によるとそれは大サン・ベルナールの修道院の下手附近の光景を表はしたもので、巨大な雪崩が押し出して旅人が生き埋めにされたのを、丁度バアナード種の犬が見つつけ出して、救助の修道尼たちが現場へ急ぐところを描いてゐるといふ。

またアウグスト・ファイエルアーベントの「^{註27}瑞西アルプス地方」(一八七三年)には、E・ハインが「アルプス山間の街道におし出した雪崩」と題して、力強い原色版の挿繪を描いてゐる。それは雪崩が郵便馬車に襲ひかゝつて、四匹の馬をうち倒し、馬車を轉覆させ、御者は大の字に抛り出されてゐる。脅えた一羽の鳥が飛び立ち、岩塊と木の折れたのが谷間深く落ちてゆき、電信線はすたすたに千切れてしまつてゐる。

もつと迫力のある繪は「おし出した雪崩」と題するオーゼンブリュッゲンの豪華版「^{註28}瑞西の高山」中の一枚であらう。それはフウベルによつて鐵板に腐蝕法を施された細密畫であるが、何ものも荒し盡さずには止まぬ勢で、巨大な粉雪雪崩が中腹の森を薙ぎ倒してゐるところを描いてゐる。しかし亭々たる樅の巨樹がうち倒される

程の風壓にもかゝはらず、傍らで見えてゐる人物や犬が立つたまゝ平氣でゐるのは、少しおかしい。さういふ小さな缺陷があるにはあるけれど、描寫としては極めて優れたものと云ふことが出来る。

雪崩そのものを、いかなる人間との關聯もなしに、たゞ雪崩そのものとして描いた注目すべき作品は、レンツブルクのJ・L・リュディシェーリのものである。それはヤコブ・フライの一八六八年に刊行された「繪と文章による瑞西」^(註20)といふ本の中の鐵板畫である(別刷第一圖參照)。こゝには團塊または卵形として雪崩を描かうとする古い觀念の痕跡がやゝ表はれてゐるが、しかし雪崩の通路、崩落の有様、形態などは確かに力強く迫眞の描寫力を示してゐる。さうして畫面の空間を餘すところなく利用してゐる點を見ると、作者は餘ほど雪崩をよく識つてゐたと結論しても好さそうに思はれる。

以上のものに較べて繪としての面白味には多少劣るが、非常にその描寫が直截簡明で興味のあるのは、グラールの牧師エルンスト・ブス^(註20)が描いた鉛筆畫「グレエルニッシュの粉雪雪崩」であらう。これは繪としてよりも、科學上の資料として役に立つぐらゐ正確なものであり、一九一〇年刊のコアツ博士の雪崩に關する科學的著述の中にも、この繪は再録せられてゐるといふことである。

次に描寫の正確緻密な點では科學的であるが、同時に獨立した繪畫としての美しさにも極めて優れた描寫力を示した注目すべき作品は、アルベール・ゴオ^(註21)の「雪崩」《L'avalanche》(別刷第四圖參照)といふ油繪であらう。彼はデュネーヴの山岳畫家で、一九〇五年グラン・ミューヴランの山麓、ボン・ド・ナンの池畔でこの作品を描いた。それは落ち盡して池畔に靜止した雪崩を表はしてゐるが、靜止の中にも雪崩の持つ巨大な潛勢力を示して、眞に雪崩の實相を捉へた優れた作品といふことが出来る。恐らく雪崩の描寫史の最高峯をなすものと云つても過

言ではあるまい。これは發表當時も非常に好評で、「カラム賞」^(註32)を授けられた。

同じく優れた雪崩の畫家であつても、フェルディナント・ホドラー^(註33)は全く異つた觀點から題材を扱つてゐる。

もつとも彼より前に既にシャル・デラルデ^(註34)が「クレヴァスへの墜落」といふ作品を描いてゐる（第十一圖参照）。

第十一圖・「クレヴァスへの墜落」デラルデ作（一八三〇年頃）



の有名なマッターホーンの初登攀（一八六五年）の際における遭難事件を描いた。このドレの作品は、構圖の上でホドラーの「墜落」（別刷第三圖参照）にも影響を與へたものと見るのが定説のやうである。

それは一八二〇年のモン・ブランにおけるハアメル博士^(註35)一行の遭難を題材としたもので、三人の案内人が表層雪崩にさらはれ、巨大な氷河の深淵の中に吞みこまれようとするところを描いた。構圖その他の點から見て、デラルデは確かに佛蘭西の天才的な挿繪畫家といはれたギユスターヴ・ドレ^(註36)の影響を受けてゐると云ふことが出来る。ドレはその「墜落」と題する作品の中で、例のウィムパー一行



(別) 第三圖 (ホドラーの墜落圖)



(別) 第四圖 (アルペール、ゴアの雪崩)



第十二圖・「雪崩の中」E. プラッツ作 Gouache 水彩畫 (1904)

ホドラーはこの「墜落」を「登攀」^{〔註〕37}といふ作品と一對にして、一八九四年アントワープで開催された「世界美術展」に出品した。その構圖の雄渾で力強い點は、たとへモチイヴの上でドレの影響を受けたとしても、決して模倣といふことは出来ない。

墜落の光景の力感、神祕な劇的な背景との必然的な構成、すべては全く別個の一つの新しい繪畫の世界をそこに展開してゐるのである。それにドレの作品は、人物の動作を描くのに殆んど科學的、或は寫眞的な正確さを追究してゐる。これと同じ傾向を追つてゐるものに、ミュンヘンのエルンスト・プラッツ^{〔註〕38}の「雪崩の中」(第十二圖参照)がある。しかしホドラーの「墜落」にはそのやうな冷さと凝固とがない。夏の新雪雪崩によつてさらはれた登山家の一行のさまざまな姿態が、極めて有機的に、活々と、自然に描かれてゐる。またドレの作品では四人の人物が、事故のために岩壁の上から谷底へ墜落してゆく。ホドラーの作品では墜落の

原因は不可抗力の雪崩である。さうしてその濛々と立ち昇る雪崩の龍卷は、見る者をしてその風壓を直接身に感
じるかのやうな錯覺を抱かせるほど眞に迫つた描寫である。この龍卷の中に、雪崩そのものの巨大な生吹きを私
たちは感じる事が出来る。これは恐らく批評家たちがホドラーに認めるいはゆるミケルアンヂエロ的側面の、
最もよく現はれた作品の一つではあるまいか。

ホドラーはこの作品の他かに、既に一八八七年にグリンデルバルトで、ウエッテルホーンの「粉雪雪崩」を描
いた繪がある。^(註39)これは現在ソロトゥルンの博物館に藏されてゐるが（別刷第二圖参照）、確かに雪崩の描寫として
最も獨自な境地を開いたものと云ふことが出来るであらう。この繪を最初に見た時は、人は恐らくこんなに明る
い晴れ渡つた冬空の下に、突然に起つた五彩目もくらむばかりの奇異な現象を、殆んど信じ難く感じる。しかも
よく見てゐるうちに、複雑な五彩綾なす渦卷の活々とした力に惹きこまれ、作者ホドラーの意圖が十分胸に來る
やうになる。この繪がバーゼルで一九三〇年の末に展觀された時、ある朝その下に月桂冠が飾られ、《三人の畫家
より作者へ》と書いた紙が下つてゐたといふ逸話がある。^(註40)確かにホドラーは雪崩の畫家としても最高の一人であ
らう。

§

§

以上は雪崩の描寫の繪畫における進化の跡を眺めて來たのであるが、雪崩は近代に到つて彫刻家のモチイヴと
もなつてゐる。それで最後にこれ等を紹介しておくのも無駄ではあるまい。

ベルン出身のロドォ・フォン・ニイデルホイゼルンは、^(註41)ホドラーと同郷の優れた彫刻家であるが、またホドラ
ーと同じくデュネーヴと巴里の間を往復して活躍した。その一八九〇年頃の作品に「雪崩」と題する彫刻がある



第十三圖・「雪崩」(浮彫) ブルックハルト作 (1915)

し、それより以前に「谷川」といふ作品もあつて、一寸變つた彫刻家である。もつともC・A・ロー
スリイに云はせると、それ等は決して圓熟した完
全な作品ではなく、極めて生なところがあると批
評されてゐるが、題材として大膽且つ獨自なとこ
ろが多く、運動の美を非常に情熱的に、激しく追
究してゐる點が面白いと賞める人々もある。エル
ンスト・イェンニイなどがそれで、彼によると
《それ等は非常に情熱的であり、運動の美を追
せんとする止み難い内からの精神力に溢れ、ま
たく情感に充ち満ちてゐるので、これを無視する
ことは不可能である》と云ふ。しかし筆者は作品
を見たこともなければ、その寫眞を見たことすら
無い。従つてイェンニイの言葉を紹介するだけに
止めねばならないのは甚だ遺憾である。

次に雪崩の彫刻として擧げるべき作品は、パー
ゼルのカルル・ブルックハルトの浮彫りであらう

（第十三圖參照）。これは一九一五年フルカ峠で遭難した軍醫であり、スキー家でもあつたりヒヤルト・ウェーベルの遭難記念碑として製作を依頼されたものであるが、題材の扱ひ方は單純素朴のうちにある深さが感じられる。雪崩を表象する女性が雪のマントを擴げて、死に瀕してゐる若者の身體を包みこまうとしてゐるところが表はされてゐる。雪崩の女性の身振りは重々しいと同時に、ある愛撫するやうな優しさと誘惑がこもつてゐる。雪崩を女性として表現した點は、わが國の雪女郎とか雪娘とかを聯想させ、極めて興味深いものがあるが、それと共に山での死、殊に雪の中での死の持つ一種の誘惑的な甘美さといふものを、このブルックハルトの浮彫はよく象徵化してゐるやうにも思はれる。

§

§

最後にわが國の繪畫史上においては、雪景色の描寫は極めて古くから澤山表はれてゐるが、雪崩の描寫があるかどうか、淺學の筆者にはよく分らない。「北越雪譜」^{〔註46〕}の上の卷の挿繪に「三國嶺雪類の上往來の圖」といふのがあつたのを思ひ浮べるばかりである。この初篇の上梓は天保六年であるから、西暦の一八三五年に相當する。丁度アルプスの黄金時代前期に當り、風景畫家コンステーブルがこの翌年に死んでゐる。かういふわが國の雪崩を描寫した繪畫がもつと見つかつて、彼我の自然や山岳現象に對する知識や關心を比較對照しながら研究して行つたならば、極めて面白い結果が得られるかも知れない。従つて今後識者の御示教を仰ぐ機縁にもなればと思つて、非常に不備な材料ではあるが一應小文をまとめて見た次第である。東洋は元より、西洋でもスカンデナヴィヤやフィンランド等の北歐には、恐らく雪崩の古い繪畫がありはしまいかと思ふのであるが、それ等もすべて資料を缺く。従つてこれはアルプス地方を中心とする、ほんの小さな覚え書きに過ぎない。

「雪崩の描寫・年譜」

さて以上眺めて來た雪崩の描寫の進歩の跡を要約すると、大たい三つの段階に區別することが出来るやうである。

〔第一期〕—まだ雪崩に對する知識が淺く、極めて觀念的なものであつたのが、次第にアルプス地方の交通が開け、少しづつ雪崩の描寫も眞實に近づいて行つた。一五一七年のショイフエラインの木版畫から一八三〇年頃までを含む。これを「雪崩の記録時代」と筆者は假りに名づけることにしたい。

〔第二期〕—登山の風潮が旺んとなり、アルプス地方の風物に對する知識は非常に正確となつて、雪崩の描寫も寫實的になつた。しかし未だ藝術作品としての獨自性をもつたものは生れず、登山家の紀行文やアルプス地方に關する地誌類の挿繪や口繪に止まつた時代。大體一七七六年から一八八〇年頃までを含む。これを假りに「雪崩の寫實時代」と名づけておく。

〔第三期〕—ホドラーの「雪崩」(一八八七年)やアルペール・ゴオの「雪崩」(一九〇五年)が生れ、更らに彫刻の世界にまで雪崩がモチイヴとしてとり上げられるに到つた時代。全く雪崩といふ現象がアルピニズムの普及によつて人々の生活感情と結びつき、藝術の素材としてとり上げられるに到つた時代。雪崩といふ現象が珍らしかつたり、單に好奇

の對象となるやうでは普通の理解を豫想する藝術表現は成り立たない。この點年代的に云つて雪崩の描寫史は、山岳描寫史がカラムにおいて一應完成の域に達した時期から、約半世紀は遅れてゐたと見て好いやうである。とに角この時期はホドラーの一八八七年の「雪崩」以後を含み、假りに「雪崩の表現時代」と呼びたい。この三つの時期にあてはめて年譜をつくつて見ると、大體次のやうになる。

〔第一期 雪崩描寫の記録時代〕

・西紀前二一八年 ハンニバルのアルプス越における雪崩遭難の記録(リヴィウス)

・西曆一四七八年 瑞西同盟軍のサン・ベルナル越における雪崩遭難の記録

・一四九九年 シュワーベン戦争における雪崩遭難の記録

・一五一七年 マキシミリアヌス皇帝雪崩に遭ふの圖(ショイフエライン作)

・一五四七年 ジムラーの「アルプス誌」における雪崩の記載

・一五四八年 シュトゥムプの「瑞西風土誌」の木版畫

・一五九八年 ミュンステルの「宇宙誌」における雪崩の記載

・一六六一年 ツィザートの記載

雪崩の描寫 (勝見)

六八

・西曆一八八五年 エドワード・ブラウンの「旅行記」中の雪崩の記載

・一七三一—一七五五年 ショイヒツェルの「聖自然」の挿繪 (ホイマン作)

・一七六五年 ヘルリーベルゲルの「新訂聯邦大地誌」中の「雪崩」の章、及びデュリング作の挿繪銅板畫

・一七九九年—一八〇〇年 ナボレオンのアルプス越における雪崩遭難の記録

・一八〇五年頃 「地球上最も注目すべき地方の縮圖」

・ (作者不詳) 挿入の雪崩の彩色畫

・一八一〇年 トリーネルの「シエッヘン谷の雪崩」の圖が「チューリッヒ救護協會雜誌」に出る

・一八一〇年頃 バクレ・ダルブの「畫集」における雪崩の鉛筆畫

・一八一四年頃 リュチイの教會堂の雪崩遭難者追悼額

・一八三〇年頃 ハスリイ博物館蔵の作者不詳の手彩石版刷り雪崩の圖

〔第二期 雪崩描寫の寫實時代〕

・西曆一七七六年 カルル・ヴォルフの「ヘルレンベエヒリの冬景色」における雪崩。

・一八二八年 グロオス・ヴェネーディゲル登攀中の雪崩によるヨオハン大公一行遭難の圖

・西曆一八三〇年頃 デラルデーの「クレヴァスへの墜落」に描かれた表層雪崩

・一八五一年 ユーヂエヌ・グエラールの「瑞西案内」中の挿繪「ダルヂャンチエール村近傍婚禮の一行雪崩に襲はれるの圖」

・一八五三年 チュウディの「アルプスの動物生態」中の雪崩の挿繪

・一八五七年 シヤウブとガウリウル共著の「瑞西繪卷」中の雪崩の挿繪

・一八六一年 ベルレプシュの「アルプスの自然と人生圖錄」中の挿繪「雪崩の發掘作業」

・一八六〇年頃 作者不詳の「ある雪崩」の圖。サン・ベルナルの修道尼の遭難者救助を描いたもの

・一八七三年 ファイエラアーベントの「瑞西アルプス地方」中の「アルプス山間の街道におし出した雪崩」の圖

・一八七〇年頃 オーゼンブリュッゲン「瑞西の高山」中の雪崩圖

・一八六八年 フライの「繪と文章による瑞西」中の挿繪。リュディシュリー作。原作は一八五〇年頃

〔第三期 雪崩描寫の表現時代〕

・西曆一八八七年 ホドラー作「雪崩」。ヴェツテルホーンの

粉雪雪崩を描く

・西暦一八九四年 ホドラー作「驟落」。雪崩による遭難を描く

- ・ 一八九〇年頃 ニイデルホイゼルの彫刻「雪崩」
- ・ 一九〇四年 エルンスト・ブラッツ作「雪崩の中」
- ・ 一九〇五年 アルベール・ユオ作「雪崩」
- ・ 一九一五年 ブルタハルト作「雪崩遭難記(急流急降)」

〔参考文献〕

- (1) 足立源一郎, 山の寫生に就いて, 「山岳講座」第五卷, 東京, 1936, 257頁以下
- (2) d'Arcis, Egm, Albert Gos, „Die Alpen“, 1932, S. 197.
- (3) de Beer, G. R., Early Travellers in the Alps, London, 1930.
- (4) Berthoud, Dorette, Pour le centenaire de la peinture alpestre: Alexandre Calame, „Das Werk“, 1940, S. 236.
- (5) Flaig, Walther, Lawinen! Leipzig, 1935, S. 28—32.
- (6) Giandi, L., Les peintres de nos Alpes, „Die Alpen“, 1926, S. 36.
- (7) Gisler, F., Franz Xaver Trimer als Graphiker, „Die Alpen“, 1927, S. 134.
- (8) Jeanneret, Maurice, La peinture alpestre, „Die Alpen“, 1928, S. 186.
- (9) Jenny, Dr. Ernst, Von schweizerischer Alpenmalerei, „Die Alpen“, 1926, S. 300.
- (10) Jenny, Dr. Ernst, Die Lawinen in der Kunst, „Die Alpen“, 1931, S. 41.
- (11) Kern, Walther, Hodler und die Schweizer Landschaft, Schweizer Reise-almanach 1939, S. 93.
- (12) Kuhn, Heinrich, Das Hochgebirge in der schweizerischen Malerei und Graphik, „Die Alpen“, 1930, S. 162.
- (13) 松本亦太郎, 山水人物叢談, 東京, 1940.
- (14) Müller, Werner, Ferdinand Hodler: Aufstieg und Abstieg, „Die Alpen“, 1934, S. 136.
- (15) 高橋文太郎, 山の入道, 東京, 1938.
- (16) Simler, Josias, Die Alpen (De Alpius Commentarius), Deutsche Ausgabe, München 1931.
- (17) Steinitzer, Alfred, Der Alpinismus in Bildern, München, 1913.
- (18) Thun, Constantin, Einiges von der Jagd in Tirol, in „Tirol“, Innsbruck, 1928, S. 35.
- (19) Tietze, Prof. Dr. Hans, Die Malerei in den Alpen, „Die österreichischen Alpen“, Wien, 1928, S. 381.

その他間接にその文獻の存在を知つて、未だ閱覽する機を得ないものが二三ある。識者の御教示を得ばと思つて次に記しておく次第である。

- (20) Breth, Dr. E. W., *Wie die Künstler die Alpen dargestellt*, „Zeitschrift des D. u. Ö. A. V.“ 1906—1908.

- (21) Breth, Dr. E. W., *Die Alpen und ihre Maler*, Leipzig, Thomas Verlag. (發行年度不詳)。

- (22) Uzieli, G., *Leonardo da Vinci e le Alpi*, „Bollettino C. A. I.“ 1889.

なほ本稿の執筆に際し、加納一郎・諏訪多榮藏・勝田甫・箕口治信の諸氏にいろいろの點で御配慮頂いたことを附記して、ここに心から謝意を表した。

〔本文註釋〕

外國語の地名・人名・書名等は既に書き表はし方や譯語の確定されたものは好いが、餘り耳馴れぬものなどの場合、筆者自身他の人々の文章を読みながら、それが果して何の譯語であるか、誰のことを指すかといふ點に不安と心もとなきとを感じるが多い。そのやうな經驗に基づいて、蛇足のやうではあるが、原語・原綴・原書との對照に便利なやうに註釋をつけることとした。横文字が多く、いつも

表面には出ない大きな共力者・植字工諸君に誠に濟まないが、その寛容を祈る。

〔註〕

1. Hans Holbein der jüngere (1487—1533) フラマン・ルネッサンスの畫家。Hans Leu チューリッヒの畫家。Niklaus Manuel ヘルンツの畫家。その他十五・六世紀の瑞西の畫家で、山岳の描寫を残してゐるものに、Hans Fries, Urs Graf, 少し遅れて Tobias Stinner, Conrad Meyer 等がある。
2. Livius, Silius, Claudianus.
3. Josias Simler, *Vallesiae Descriptio et de Alpibus Commentarius*, Zürich 1574.

この原著の獨逸譯《Die Alpen》が1931年に München から出版された。W. Flaig がその著《Lawinen》の中で、この「アルプス誌」の年代を1547年としてゐるのは、恐らくミスマリットであらう。de Beer もその著の中で16世紀における最も貴重なアルプス文獻であるとしてゐる。W. A. B. Coolidge も《Josias Simler et l'origine de l'alpinisme jusqu'en 1600》, Grenoble, 1904. の中で重視してゐる。

ここでは《雪崩の描寫》と直接の關係はないから詳しく述べることをさし控へておかねばなら

ないが、「雪崩」に關する記述の他にも、アルペンストックやアイゼンやアンザイレンの方法などにまでふれてゐて、云はば最も初期の《Alpine Handbook》とも云ふべきもの。

4. Hans Leonhard Schäufelein, また Scheifelen von Nördlingen と呼ばれた。

《Theurandach》は Maximilians I. とその秘書官 M. Pinzing の筆になる「大帝一代記」とか「行狀記」とでも呼ぶべきもので、様々の奇蹟や挿話が豊富な挿繪と共に記録されてゐる。初期の登山術とか山岳風景の記録を含むものとしては最も古い文獻の一つである。Schäufelein は、Burgmayr, Beck 等の木版畫家と一緒にその挿繪を描いた。

5. Matthäus Schultes, Augsburg の出版者。

6. Johannes Stumpf, 《Geneiner loblicher Eydgenoschaft Stetten Landen und Völkereu Chronick-würdiger Thaten beschreibung》, Zürich, 1548. 普通 Stumpf の „Schweizerchronik“ とか Swiss Chronicle と呼ばれてゐる。この編纂の資料を蒐集する爲 Stumpf は 1544 年 Wallis 地方を旅行した。これは最も古い記録の一つとして史家に重要視されてゐる。19 世紀になつて Fischer

及び Meyer von Knonau 等の研究により、その旅程その他次第に明瞭となつた。H. Fischer, 《Reisebericht des Chronisten Johannes Stumpf aus dem Jahre 1544》, 1884. がある。

7. Sebastian Münster, 《Cosmographia Universalis》, Basel. 初版は de Beer によると 1550 年とされ、E. Jenny によると 1598 年となる。Jenny の引用したのはその後の重版書ではあるまいかと思はれるが、斷言出来ない。Münster は 1546 年に Wallis 地方を旅行してゐる。

8. Joh. Leopold Cysat, 《Beschreibung dess Berühmten Lucerner oder 4. Waldstätten Sees》, Luzern, 1661.

9. Johann Jakob Scheuchzer, 《Physica Sacra》, Augsburg, 1731—1735. 彼には他かにも《Itinera per Helvetias Alpinae regiones》Leyden, 1723.

《Naturgeschichte des Schweizerlandes》, Zürich, 1748.

《Natur-Historie des Schweizerlandes》, Zürich, 1752.

等があり、これ等の方が山岳史文獻としては有名である。Scheuchzer (1672—1733) は Zürich

の産。瑞西各地方を可なり廣汎に亙つて9回も旅行してゐる。元來が博物學者であつて、Royal Society of London の Fellow でもあつた。そのアルプス地方の植物學、礦物學、自然地理學に關する業績のほか、考古學等に關する研究にまでも既に手をつけ、例の Drachen, Dragon に關する研究などがある。

10. G. D. Heumann, Schenker の《Physica sacra》に挿繪を描いてゐる。

11. Edward Brown, 英吉利の醫者。17世紀の中葉瑞西を旅行して紀行文集を出してゐる。その獨逸譯が1885年に Nürnberg で出版された。

12. David Herrliberger, 《Neue und vollständige Topographie der Feydenossenschaft》 Zürich, 1754. Basel, 1765. 氷河の研究に最も早く手をつけた一人として、J. Grand Cartier もその著《La montagne à travers les Ages》, Grenoble 1803.の中で大いに推奨してゐる。また Steinizer もその著の中で彼の氷河の描寫を詳しく紹介して、注目すべき資料と賞めてゐる。

Herrliberger は 1697 年 Zürich に生れ、1777 年同所で歿したエッチングの作家である。この「新訂瑞西聯邦大地誌」の版行の年次について、

de Beer は 1754 年とし、Jenny は 1765 年とし、Steinizer は 1773 年と記してゐる。筆者にはこれを採るべきか斷定の資料がないので、假りに Jenny の記載に従ふこととした。

この大地誌の「雪崩」の挿圖は、Jenny も Steinizer も引用してゐるが、Jenny はその描寫をけなし、Steinizer は《家や樹や獸が、いかにして圓塊狀の雪崩によつて捲きこまれるかを示す作者の表現には、誠に愛すべき魅力がある》と賞めてゐる。

13. Düringer, Herrliberger の《Topographie》の挿繪を描いてゐる。板刻は Herrliberger 自身が行つたものらしい。

14. 《Abbildungen merkwürdiger Gegenstände aus der Erdbeschreibung》od.《Repräsentation des contrées les plus remarquables de notre globe》, traduit par J. Ilseault, Leipzig. 出版年度は不詳。1805年頃と推測される。Jenny は《Gegens-tände》として引用してゐるが、佛譯の《contrées》から考へると、《Gegenden》の誤記であらう。

15. Haslmuseum zu Meiringen 藏。この石版畫は Jenny も Flüg も、1830 年頃に尙ほ一部の人々が雪崩を圓塊狀のものとして考へてゐたことを

示す好資料として大々その著書の中に採録してゐる。

16. Carl Wolf, 《Merkwürdige Prospektie aus den Schweizer-Gebirgen und derselben Beschreibung》, Bern 1776.

Wolf (1735—1798) は Kanton Aargau の Muri で生れ、Mannheim 市で没した水彩畫家である。エッティングもやつた。本文に書いたやうに、不過のうちに世を辭したが、18世紀の畫家としては、高山の描寫に優れたものがあり、瑞西の美術史家 Heinrich Kuhn は《Das Hochgebirge in der Schweizerischen Malerei und Graphik》(Die Alpen, 1930, S. 162 ff.) の中で、詳細に彼の生涯を説いてゐる。筆者も別の著書で Wolf のことは可なり詳しく紹介する積りであるから、ここにはこれ以上ふれないこととする。挿繪の題は《Herrenbachli, pris en hyver》

17. Zürcherische Hilfsgesellschaft.

18. Franz Xaver Triner (1766—1824). Arath に生れ Birglen で没した當時可なり有名だつた Graphiker。彼の行蹟に關しては F. Gislser が《Franz Xaver Triner als Graphiker》(Die Alpen, 1927, S. 134) の中で詳しく説いてゐる。Gislser の言

集によつても、《Triner の繪には詩》があつたと云はれ、本文で筆者も述べたやうに、彼の本領は詩的な牧歌的な風景を愛した畫家であつたことが分る。Triner の原畫によつて、J. H. Meyer が《Die Schneelawine im Schächental》を銅版に刻んだのである。

19. Rutkapelle に藏される《Erinnerungstafel an die Lawine im Gargenel 1814》として、Fiaig の著書の中に紹介されてゐる。Gargental は瑞西國境に近い Tirol 地方の山谷で、Rhein 河の上流の一支流のまたその一支流に當る。この地方には、近く1935年にも大きな雪崩の被害があつたことをフライタは述べてゐる。

20. Louis Albert Bachelier d'Albe, 《Souvenirs pittoresques du Général Bachelier d'Albe》, ca. 1810. これは Steinitzer が《Der Alpinismus in Bildern》, 1913, S. 63. にも再録してゐる。

Bachelier d'Albe (1761—1824) は St. Pol に生れ、Sevres に没した佛蘭西人。最初は地圖の製圖者。ナポレオンに寵用せられ、軍用地圖の作製にも従つた。後年旅團長となる。彼の描いた戦争畫は Versailles 宮の畫廊にある。《Souvenirs pittoresques》は山岳風景とサヴォイ・伊太利・西班

牙等における戦場スケッチを含む。

21. Maria Paradis, シヤモニイの案内人達に半強制的に連れられて, 1809年 Mont Blanc に登った。Balant の名物男に對してシヤモニの名物女となった。筆者の《女流登山の先駆者》(山小屋誌) 参照。

22. J. Rallenperger 刻《Lawinenfall bei der Besteigung des Gross-Venedigers am 8. August 1828》として Flaig の前出の著書にも, Seintzer の著書にも採録されてゐる。

- この事故は奥國の Johann 大公 (1782—1859) が, Förster Rohregger をリダーとして, Gross-venediger の北西壁を登攀中に起つたもの。頂上を 200 米の眼前に望む地點で, 突如襲つた雪崩に Rohregger は埋没されてしまひ, 生き残つた一行はそこから逃げ歸つた。しかし Johann 大公は當時最も登山を好んだ王族として有名であつた。特に東部アルプスの開拓に力を入れた。
23. Ch. Schaub und E. H. Gaullieur, 《Die malerische Schweiz》, Genf, 1857.

24. Friedrich von Tschudi, 《Tiereleben der Alpenwelt》, 1858. de Beer の挙げてゐる《Gallia Comata》の著者 Aegidius Tschudi と關係のある人

物であるかどうか, 筆者には未だ十分の典拠がない。後者は 1758 年に出版されてゐる。

25. Eugène Guérard 《La Suisse》, Paris 1851. 中の挿繪, 《Noce surprise par une avalanche près du village d'Argentière》である。當時流行した通俗名所畫集の一種。

26. H. A. Berlepsch, 《Die Alpen in Natur- und Lebensbildern》, 1861. Emil Rittmeyer が挿繪を描いてゐる。

27. August Feierabend, 《Die schweizerische Alpenwelt》, 1873. E. Heyn が挿繪を描いてゐる。

28. Osenbürgen, 《Das Hochgebirge der Schweiz》, ca. 1870. C. Huber が挿繪を描いてゐる。

29. Jakob Frey, 《Schweizerland in Wort und Bild》, 1868. Tenzburg の畫家 J. L. Rütschli が挿繪を描いてゐる。

30. Ernst Buss, 《Staublawine am Glarnisch》, この繪が Dr. J. Coaz の《Statistik und Verbau der Lawinen in der Schweizer Alpen》, Bern, 1910. に再録されてゐることは, 本文でも既に述べたが, Jenny は《Die Lawine in der Kunst》の中で多少この著書に關して思ひ遣ひをしてゐるやうである。

31. Albert Gos, 《L'avallanche》, 1905. Gos は 1876 年及び 1877 年巴里の美術展に出品して大いに認められ、次いで 1880 年にはマンブソの R. A. に《Cervin, matiné d'été》を出品、山岳畫家としての名聲を確立した。彼は音楽も文學もやる。Genève 切つての才人である。現存。彼については参考文献にもあげておいた Egm. d'Arcis の《Albert Gos》といふ論文がある。

32. Calane Concours, Alexandre Calane (1810—1864) はある意味では近代山岳畫の開祖といふことも出来よう。Genève の生んだ最も優れた畫家の一人である。彼の記念として設けられた賞が Calane Concours である。Albert Gos は學生時代 Calane の息子と同級生で、その頃から Calane を非常に尊敬してゐた。このことに關しては A. Gos 自身《Souvenirs d'un peintre de montagne》(Die Alpen, 1883.)といふ文章の中で美しく描いてゐる。なほ Calane に就いては筆者の近くアトリエ社より刊行する《山岳畫譜》を参照せられたい。

33. Ferdinand Hodler (1853—1917), 彼も 1874 年に 21 歳で Calane Concours に入賞した。その時の作品は《Waldmären》といふ。わが國にお

いては表現派の先驅者としての彼の一面は餘りにも有名であるが、山岳畫家としての重要な他かの一面を全く忘れられてしまつてゐるのは残念である。

34. Charles Girardet, 《Chute dans la crevasse》. Girardet (1810—1871) は Neuenburg 出身の風景畫家。又風俗畫をも多く描いた。

35. Dr. Hamel, 筆者には未だよく史實が分らないが、Hamel 他が二人の英國人一行を指す。Mont Blanc 登攀史最初の遭難事故と云はれる。

36. Gustave Doré, 《Ascension du Mont Cervin 14 juillet 1865》は《Arrivée au Sommet》, 《La Chute》の二つよりなる。Doré (1832—1883) は 19 世紀巴里の挿繪畫家としては最も人氣があつた一人で、Doré と Hodler との關係については参考文献目録にもあげておいた、Werner Müller の《Ferdinand Hodler: „Aufstieg“ und „Absturz“》に詳しい。

37. Ferdinand Hodler, 《Aufstieg》, 1894.

” ” 《Absturz》, 1894.

38. Ernst Platz, 《In der Lawine》(Gouache), 1904. Plat (1867—) はサン・ギイフの登山家として高名。畫家としては大したものではない。岩登

りの籍などがある。

39. Ferdinand Hodler, *《Avalanche》*, 1887.

40. Walther Flaig の前出の著書中第一篇第六章
《In vergangenen Zeiten und in der Kunst》, S.
 29—31. を参照。

41. Rodolphe von Niederhäusern, *《Wildbach》*, ca. 1890;
《Lawine》, ca. 1890.

42. C. A. Loosli.

43. Dr. Ernst Jenny, 瑞西山岳會の長老（名譽會員）
 であり、久しくその *《Die Alpen》* 誌の首席編輯
 委員であつたが、1941 年の春心臓臓病で死去
 した。彼のいつも文化史的觀點を忘れぬ研究や
 論文には、*《Die Alpen》* を通じて、われわれは
 常に大いに啓蒙されて來た。この小文も彼の
《Die Lawine in der Kunst》 にその多くの資料
 を負ふてゐるのである。

44. Carl Barchardt.

45. Richard Weber.

46. 「岩波文庫」版による。

登山再編成論

袋 一 平

1

お互ひが日本人であるといふ信念、その日本人に對する信頼と尊敬の感情、さういふものが不思議に減退しつゝあるやうに思はれる。中世的な瑣末主義の滔々たる流行がその一證左に他ならぬ。

ラグビー、スキー、スケートといった言葉が問題になる。一部の名曲レコードが発賣禁止になる。果してこれ等の言葉を使ひ、音楽を聴いた場合、われ／＼日本人たる者が爪の垢ほどでも敵國側に心惹かれることがあるだらうか。果して然りとすれば、こんなことは極く末端の微粒子的問題に過ぎない。日本人一般の日常生活に浸透し、毎日の新聞紙上に大きな寫眞版で飾

られてゐる「洋服」姿は一體どういふことになるのか。「洋服」を着、「靴」をはいて日本主義を説く辯者の姿は何を意味するのか。「ラヂオ」とか「ニュース」とかいふ言葉は英米語ではないのか。

これはわれ／＼が氣のつくほんの一例だが、この微細な一例からでも窺はれることは、問題が常にその根本の重要部門においては取上げられず、その瑣末な、根本問題さへ解決されれば自ら氷解されてゆくやうな部門において際限もなくこねかへされてゐる、といふことだ。しかもなほ悪いことには――

一、取上げられる問題はいづれもお互ひが日本人だといふ信念を持ち、お互ひを同胞として信頼し尊敬す

るの念さへあれば、ほとんど問題といふにも値せぬほどの末瑣神經的問題でしかないこと。

二、取上げられる問題が常に庶民階級のものに屬し、假に不當に大聲叱呼した場合でもこれに對する抵抗が極く弱いといふことが計算されてゐること。

2

私の言はうとするところは近頃やかましい登山の諸理論に就いてであるから、一般論的のまへおきはこれで止める。たゞ私論の意圖がそこに出發點を求めてゐることは斷るまでもあるまい。

一、登山はひとりであるといふこと

登山といふ行爲は極めて特殊なものであつて、萬人が萬人、登山家であることではない。それは例へば甲斐の吉田或は駿河の御殿場の住民でまだ一度も富士に登つたことのない人がゐる、安曇野の住民で白馬や燕に一度も登つてゐない人がゐることでも知られる。たゞしそれは萬人が萬人、登山家たり得ぬといふことではない。たゞ彼が山に興味を持たず、山に登らないといふ

だけの話である。これに反し、日常生活において山とは何の因縁も持たぬくせに、ひまさへあれば遠い山々を訪れ歩いてゐるやうな人もある。さういふ外部徴候から、登山は原則としてひとりのものである、と考へることができぬ。

もう一つは、われ／＼が實際に山に登つて受ける感情である。ひとりで登らうと、團體で登らうとそれは問はない。山のふところ深く入り、頂上に立ち、他の山々の大展望をほしいまゝにした場合、直接に呼びかけて來る山の聲である。その瞬間の聲を今われ／＼は正直に思ひ起す必要がある。その聲は果して何かの演習或は行爲に際して指導者の發する命令に似てゐるかどうか。或はまた微妙な音樂の呼びかけに似てゐるかどうか。さういふ内部徴候からも、登山は原則としてひとりのものであるといへると思ふ。

この際、淺く廣く行きわたつてゐるある種の誤解に就いて一言する必要がある。それは「ひとり」といふことに對する誤解である。「ひとり」といふことは元來

決して個人主義とか自由主義とかを意味してはゐない。それに關しては後でもう一度考へる筈だが、今假にさういふ「主義」にこれを置き換へたものとしよう。こゝにひとりの人間がある。この人間が自己の思想、行爲に何の責任も持たず、自己を律することができず、自己を自由に發展させることができない、とすれば、さういふ個々人が集つて營まれる集團生活、社會生活は一體どういふことになるのか。個は集團の單位であり、個なしに集團は成立たない。その個がぼんやりとした腑抜けの自働人形でしかない場合、健全な集團の生れる理窟はない。全體主義といふも、それは個人主義、自由主義に對する戦々兢兢たる排撃の上に成立つてではなくて、その最もよき意味での消化、克服の上に打樹てられるものでなければならぬ。このことはわれわれが日本人たる點において簡單直截に理解されることであり、その著しい例をわれゝの軍隊教育でみることができる。

かくも理解されやすく、しかも身近かにその顯著な

實例があるにも拘らず、滅多無性に「ひとり」を怖れ、口を開けば「全體」を叫び、やゝもすれば理窟にならぬ神がかりを持出して嚇かす、といふ手が流行するのは、そこに日本人たるの自覺、お互ひに日本人であり同胞であるといふ愛の觀念の稀薄が漂つてゐるものと觀するのほかはない。

困ることに、或る方面の一部の頭を、自分だけが選ばれた日本人である、といふやうな頗る個人主義的な錯覺が支配してゐる事である。登山界にあつてはそれが「日本の世界觀的登山」とか「皇道登山」とかいふ標語で現れる。この種のむづかしい標語がお互ひ日本人同志の登山に果して必要であるかどうかが疑はれるし、その具體的な意味もよくわからぬ模様だが、假にその精神が古くからある「行」といふやうなものに要約されるものとすれば、端的にいつて、これまでの登山家はほとんど例外なくその「行」に參じてゐたものと斷言できるのではないか。たゞ日本の行者らしく、黙々と實行し、徒らに言挙げしなかつたゞけでは

なかつたか。もしそれ、さういふ標語の精神の具體的一例として、武蔵御岳の訓練實習の如きを押立てるものとすれば、私はその低調卑賤なるに驚かざるを得ない。いかに高邁な精神でも、これを容れる器がチャチでは決して完全なものにならぬことは、今もなほ眞理とみていゝだらう。すでにケーブルを通じ、茶屋小屋の梯比する散歩的低山で充分に鍛鍊できる程度の「精神」でそれはあるだらうか。

錯覺が一種の利己主義に作用されて止まることを忘れた場合の影響にはかなり重大なものがあはしないか。現にその凄じい實例があちこちにポツポツ現れてゐるやうに見える。要は、登山といふ行爲を自分の體驗に照らして素直な氣持で考へることだ。自分が日本人であり、お互ひもまた同じ日本人であり、お互ひに信じ愛し合はう、と反省さへすれば何でもないことなのだ。流行に乗り、調子に乗り、心にもないことを壯語し、しかも他の心服は絶対にかち得られぬ論議に時を費してゐるのは、かへつて決戰態勢にそぐはぬ態度

といはねばならぬ。

個より全體へ！　そして個をそつち退けにしての全體であつてはならぬ。

なほ納得ゆかぬ向きは、こゝ數年、いろいろな標語が氾濫して以來、山の風儀が目に見えて惡化した事實を直視すべきだ。國民服の鍊成登山隊が山頂で酒を傾ける狼籍ぶり、集團と泊り合せた時の山小屋での盜難騒ぎ、こんなことは全く口にしたくないのだが、しかもこれはほとんどすべての登山家の目撃してゐる事實に他ならない。

3

前の御岳鍊成の一件でもわかるやうに、理論家(?)はとかく實踐がお留守になる。その一方では實踐家は理論を好まず、腹の中で思つてゐることもおつくうがつて口に出さぬ。止むを得ず私はこゝに

二、登山は實踐であるといふこと

を持出さねばならぬ。このわかり切つた問題を持出さねばならぬのは、それが登山界の再編成といふ問題の

實踐にあまり有効に認識されてゐない模様だからである。

山を知り、山を愛し、山と親しみ、山の精神を體得するには、登山する行動がまづ第一にかつ最後の必要である。特にその精神の方面では日本人獨特の感じ方があり、また日本人である限り誰でも必ず感じられるものがある。それを行といふもよし、靈肉一致の絶對境といふも妨げず、またもつと碎けて「山氣に觸れて身も心も洗ひ清められた」といつてもよからう。

それが登山の真髓であり、まことの醍醐味といふものである。登山の道はこれにきままるのである。そのこれにいたる道程の艱難辛苦と思ひ合せて、大自然の絶頂に解放された身心は正に次の瞬間の生死を超へた絶對境に準備される。もし身心の鍊成といふことが要請されるとするならば、このやうな登山の醍醐味に勝る何ものが他にあらうか。

思ふに、日本人たるわれ／＼は生れながらにして忠君愛國の心をも身につけてゐるのであつて、特に意識し

て、或は他から強ひられてそれを持つてゐるのではない。例外はどこにもあるが、一般にわれ／＼は日本的な家族生活を營み、親に孝に、兄弟姉妹に友に、夫婦相和し、朋友相信じ、近隣相助けて暮してゐる。そして一朝の時に會せば、それまでの多少の例外も吹飛して、一人残らず笑つて大君の御前に醜の御楯となる。これが日本人である。これが日本人以外の人間にはどうしても理解され得ぬところであると同時に、日本人ならば誰にでも、口にこそ出さね、あまねくわかり切つてゐるところである。

われ／＼が時に不審に堪えぬのは、何を頼んでことさら外國かぶれの何々精神、何々主義を廻りくどい、容易に理解されぬ言葉で、われ／＼に説きつけるか、といふことである。しまひには、さういふことを職業的に説き廻つてゐる人が果して眞の日本人であるか、さういふ人に日本人としての自覺があり、お互ひに日本人であるとの友愛の精神が果してあるのかどうかをさへ疑つてみたくなる。疑ひ出せばきりがなく、例へ

ばわれ／＼は決戰態勢を身をもつてあがなひ、あらゆる困苦に堪えて、なほ國策協力に足らざるところなきか、を憂へてゐる時に、一方では「重要會議」のために連夜料亭が満員だといはれてゐる。われ／＼も時局柄、會合の機會は非常に多い。しかし、重要な會議は晝間でもやれることを體驗してゐる。

およそ發言者は權威を持たねばならない。しかし權威は形容詞や嚇し文句からではなく、その人への信頼から生れる。その人への信頼なしに權威はなく、權威なき發言は言葉の遊びに過ぎぬ。近頃登山に関する新趣向の理論がよく大新聞の紙面に現れるが、何しろこれ等の大新聞は軍の要路にある人から「ルビつき官報」の能なし猿といった風に嗤はれてゐるほど、すでに燒が廻つてゐるのだから、そこには理論の展開も批判もさらに實踐上の具體的聯關も見ることではできぬ。いはんや、さういふ發言の權威と責任にいたつてはなほさらである。

さて登山の眞髓を心身ともに無垢に洗ひ清められる

瞬間の絶對境に見、次の瞬間の生死を超へた絶對境への準備の中に見ることができるとすれば、それはすでに心身錬磨の奥義に通ずるものでなければならぬ。すでに然りとすれば、今日において登山精神の徒らに煩瑣な詮索は單に無駄であるばかりでなく、かへつて有害でさへある。例へば、ひとりの山といふのが個人主義的な古い考へ方だからこれを排撃し、全體の山、すなはち全體主義的な新しい考へ方に轉換せねばならぬ、とするが如き論法だ。一見もつともらしいが、その實は單なる觀念論の遊びに過ぎぬ。ひとりの山といつても、何も單獨登行を意味するのではなく、その顯著な實例の一つを學校山岳部の集團登山にみるが如くそれなしでは登山行動といふものがはじめから成り立ちはないのである。肝腎の基本原則の上に立たない觀念論は砂上樓閣といはれる。ひとりの山を飛び越してのいはゆる全體の山とはどんなものか。その消息を「行者の山」といはれる登山行動に就て考へてみよう。ただし、こゝでいふ行者は前に言はれた「行」や「行

者」とは何の關係もない。

舞臺を假に木曾の御岳にとる。季節にこの山を訪れてまづびつくりするのは登山する行者の數の夥しさだが、續いてびつくりするのはその種類の多彩さである。ひと口に老若男女あらゆる人間を網羅するなどとはいひ切れぬものがある。全然足腰の立たぬ老婆が誰かに背負はれて登つてゆく。頭が地面につくほど腰の曲つた爺様が杖にすがつて登つてゆく。若いおかみさんが赤坊を背負ひ、片手で五、六才の子供の手をひいて登つてゆく。これ等の痛ましい行列は決して途中で引返すことなく、三千米の頂上にたどり着くのである。しかも登路は、例へば燕や槍の普通の登路より悪くこそあれ、いゝことはない。そこを同じ行列が來年も、その次の年も、幾年も續けて通つてゆく。私は何か肌寒いものを感じた。

思ふに、開祖がこの峻峻の高山を道場と定めた達觀は、今日一千米級に道場を置いて自ら満足するの近視眼に比して、遙かに雄大である。しかし世は漢季とな

り、心身鍊磨の道場はいつしか心身取引の道場となつた。自分が生きながら神の登録を受け、死して極樂の特等席を勝ち得るために、見るも無残な同じ登行が繰返される。自分一個の一代をかけての、單なる山との取引でしかないのだ。

しかしこの事實は深くかつ複雑な問題をわれわれの前に提出する。まづ、客觀的に、そして實際においても無意味に等しい、しかもこの上なく酷烈な登山に自分を驅り立てるその必死の精神力に驚かざるを得ぬ。それが何等強要されぬ精神であり、生のまゝの自由の精神である點において、なほさら然りだ。ただそれが永遠に未組織の精神である點に注意する必要がある。なるほどこの人達は「先達」の統率の下に整然と集團として行動する。集團の分子と集團全體との方向も一致してゐる。一見それは一つの有機體のやうである。ところが實體は正に便宜上の機械的な集りに過ぎない、といふことは、分子個々の精神の猛作用にもかゝらず、集團それ自體としては全く機械的作用以外の

あらゆるものを缺き、かつ分子相互間にも少しも内面的なつながりを持たぬ、ことで知られる。個に徹して、全體がないのだ。それはまた形の上では、登山は實踐であるといふことを、これほど身をもつて顯現してゐるものはないとも見られる。しかし全體なき個はわれわれの意味する「ひとり」ではなく、取引の道場である山はこれを他のものに置き換へられ得る。従つてこの場合の登山の意味は本來の絶對性にも必然性にも責任なきものである。

さらに注目すべきはその現代登山との比較であらう。現代登山は最も高い段階において精神的にも方法的にもひとりが全體をになふことを原則とし、それを要求する。ひとりが全體をになふとは、つまり個々人が全體の精神を自分の精神として體し、全體に對して責任を負ひ、全體のために自分を捧げることにならぬ。すなはちそれは全體主義の精髓である。その顯著な實例は敢て外國の高山登攀の歴史にみるまでもなく、白頭山冬季遠征とか學校山岳部の北海道の山々や

北アルプスの冬期登攀など、枚舉にいとまなきほどだし、ごく近い時代までのわれ／＼の登山家のほとんど悉くがその心を登山の心としてゐたのである。

これに反し、いはゆる行者登山では、精神的には個々人が全體とのつながりを持たず、方法的には個々人が全體を頼つてゐる。その中で個々人が自分だけの法悦を享樂してゐる。正しく一種の利己主義の典型といふべきではあるまいか。

「日本の世界觀的登山」ないしこれに類する提唱の眞の趣旨といふものは、おそらく、完勝を目指し、決戰態勢に即應し、最上の心身錬磨のために、登山を導かう、といふにあるのだらう。まことに何人といへども心から協力せずにはゐられぬ趣旨である。いやしくも日本人である以上、しかも今その世界觀の一大變革の内面的運動を自覺しつつある以上、われひとともに進んで登山道再編成に協力を誓はうとせぬものは一人もゐない。その提唱者や指導者にとつてこれほどの好機がまたあるものでない。しかもその成就の見透し

がこれほど簡單明瞭なものもない。すでにわれ／＼の登山道の最高觀念がひとりで全體をになふこと、すなはち全體主義の魂に徹してゐるからだ。

しかし、登山道の眞理を知らず、全體主義の淺薄な流行意識に便乗し、お互ひに日本人であることをうっかり忘れ、思ひ上つて神がかりに近づき、功を焦つて機械的な集團鍊成などに乗出し、理解されぬ言葉でのりとを奏しはじめるやうなことがあると、それは一轉して「行者登山」の道に顛落するおそれ充分である。

前に言つたやうに、全體主義と利己主義とは相去るはなはだ遠き存在でありながら、或る微妙な一點で極めて共通相似の切線を通して。一たんこの線で迷ひ、なほ反省の救路を見出し得なかつたならば、簡單明瞭なものはたちまち複雑怪奇の相に變じ、この怪奇さが今度は逆に迷へる人の錯覺を刺戟し、つひには止まることを知らず、本人自身も知らぬ間に、山が巧利の對象になつたり、取引の道場になつたりする。その昔、行者がひとりであつた時、彼は山を知つてゐた。いは

ゆる行者道が繁榮し、先達が出現するにおよんで、彼は數十回、數百回、同じ一つの山を登るも、つひに山を知らなかつたのである。

4

バスに乗り遅れまいとする新珍登山論の悉くが、功に焦つて足元をお留守にし、踏段でまづ躓いてゐるのは、

三、登山は元來餘技であるといふことに對する放心ないし無反省に由來する。

問題となつてゐる登山が、探鑛とか、森林賣買とか、水電調査とか、營林署の仕事とかによる登山を指してゐるのでないことはいふまでもない。人は登山しないでも生き得るものである。そして實際に人は一生涯登山など一度もしないで生きてゐる。僅かに高い文化を持つ極く少數の大國に屬する國民の中の極く少數が登山といふことをやつてゐるだけだ。それなしでも生きてゆかれることを敢てやる——これを餘技といふ。餘技とは生活のゆとりであり、生活の豐饒化であり、生

活の美化である。餘技の形は従つて消極的でもあり、消費的でもある。餘技の形にかくれて悪儲けするやうな輩がなきにしもあらずだが、そんなのは本筋には入らぬ。

それなしでも生きてゆかれるにも拘らず、またそれが大なり小なりの消費に伴はれるにも拘らず、ほとんどすべての人が餘技を持つてゐるのは、また單に持つてゐるだけでなく、多くの場合特に熱心にこれに對してゐるのは、どういふわけであらう？ 端的にいへば「人はパンのみにて生きるものにあらず」だからだ。

宗教を趣味に置き換へてもいい。趣味は生活をおほらかにし、豊かにし、美しくする。それは人の本能の求めて止まぬものだ。それがやゝ消極的な形に現れて餘技となる。

戦時下、餘技否定の説が擧げられたこともあつたが、はじめから人間性に反してゐる説の成立つわけがなく、いつかそれは立消えとなつた。今日ではむしろ明日への活力素として、それが鼓舞獎勵されてゐる。た

だ餘技の消極性をできるだけ積極的なものに轉換することが今日の課題といへよう。

登山はその形においては餘技の持つ消極性と消費性から免かれるわけにいかないが、その反對給付においては驚くべき積極性と生産性を發揮する。同様の傾向を持つ各種のスポーツもこの點で登山に迫付くものはほとんどないし、どんな人でもやらうと思へばやれるといふ登山の普及性にいたつてはこれに匹敵するものがない。人は誰でも思ひ立つた時に登山し、大自然と語り合つて心身ともに洗ひ清められて歸つて来る。その過程が勇氣、注意力、沈着、果斷、剛毅、缺乏への忍耐力、危險の判斷とその征服、個の全ての奉仕、全體と個人との有機的結合など、およそ人間として最も希求される限りの強靱な精神の錬磨であり、その結果が肉體の一層の強健化である。こゝで注意すべきは、登山の結果としてもたらされる高度の心身錬磨の一點に眩惑されて、結果を目的と見誤る錯覺が生ずることだ。登山は餘技である。餘技は實利を直接の目

的とせぬところに特徴がある。登山は趣味の行動であり、緊迫せる日々の営みからの解放であり、それによつて休息し、生活をうるほし、豊かにし、そして次の日のために新鮮な心身の用意をする。もしはじめから何かの精神に律せられ、何かの観念を課せられ、何かの行動に縛られ、かくかくのものを獲得せよ、といふ實利目的に指向されるものとすれば、登山はたちまち本來の特質を失ひ、生活の二重の緊縛になつてしまふ。登山の結果を目的とすることによつて、かへつてその結果を喪失し、従つて目的は達せられず、モトも子もなくなる。このことは前にも言つたやうに、國民服集團登山の現状が最も雄辯に語るところである。

日本人はユダヤ人と異り元來が實利主義にあまり得意でない。登山行動のやうな、大國民に限られた特權的とさへいへる素晴らしい生活餘技まで實利主義に轉化せねばならぬほどわれ／＼日本人はまだユダヤ化してはゐないと思ふが、どんなものだらう。水電、伐材の如きにみられる實利主義は相手が桁違ひの大自然だか

ら實現化される。いかに日本人が偉大な國民であらうとも、しよせんはケチな人間に過ぎぬ。全體主義以下のいろ／＼珍しい主義で擬装してみても、實利主義に徹し得ない人間をユダヤ主義化す企ては當分成功の見込がないと思はねばならぬ。

かくて、この問題の實際の焦點は今明かとなつた。すなはち、登山が元來餘技であるといふ認識に立ち、登山行動の過程ならびに結果の卓拔さを充分に知つた上で、これをいかに國家目的に有機的に導くかといふことであらう。この段階に來ると、もはや認識論や精神論や觀念形態論など、一切の理論は全く不要になり、たゞ方法論だけが唯一根本の鍵となつてゐる。といふことは、方法よろしきを得さへすれば、登山の戰時的再編成たちどころに成るといふ意味に他ならぬ。

さういふ用意が登山家には常に具つてゐるのである。登山に鍛えられた人間はまことに純一無垢だ。誤つた指導の入り込まなかつた數年前までの登山界をみればいゝ、例外は問はぬ。一般に山の仁義は堅く守ら

れたし、殊に岳人に惡人なしと定義されたほどだ。しかも登山行動は常に日常生活に浸透し、不敵な面魂が明るい笑ひと交錯し、生死を共にする戰友的な深い情味をたゞえ、岳友のまちはりといふものは兄弟も及ばぬ親密さで生涯を貫いてゐるのである。

5

一般に精神論が氾濫する原因として、それが論者の空虚と無能とを迷彩するに好都合な道具となつてゐることが指摘されてゐる。この迷彩は問題が具體的な形をとつた場合に常にはける。方法には常に具體的必然性が裏付けされなければならぬからだ。たとへ無理矢理強行したところで、もと／＼必然性のないものは長続きせず、いつしか煙となつて消えてしまふ。近くはミソギに参加した文學者などの實例を残してゐる。

登山を不急不要の閑餘技とみて、これを排撃しさうな氣配が行過ぎ時代に現れたことは前にもちよつと言つた。その時慌てゝ急救策を考へ、引込みがつかぬままに今もなほくすぶつてゐる問題に、

四、登山を行軍力鍛錬の一手段とするといふことがある。その事柄に非難の餘地なきものを冠し、皇道、軍といふやうな不可侵にして神聖なものに頼り、事柄自體の眞相を曖昧模糊にしておいて、人を煙に巻くといふ傾向は特に舉國一致の決戦局面にとつて正しい利益があるとは思はれない。ことにその事柄が淺薄な考慮や自己満足の上に立ち、いろいろな矛盾を自ら含んでゐるやうな場合はなほさらで、この場合、むしろ不可侵、神聖なものをかへつて輕んじ、はづかしめるのそしりを免れないではあるまいか。

皇軍戦力の重大要素の一つといはれる行軍力の増強に登山がお役に立つとすれば、これほど結構なことはない。また何でお役に立たぬことがあらう！ たゞ登山を行軍力増強の目的とするといふやうな幼稚なかつ誤つた觀念ないし方法によつては、單なる一時的な昂奮以外に何等効果を得られないことを知らねばならぬ。こゝではこの提唱の持つ矛盾を眺め、その正しい意味を知ることによつて、問題の適切な解決と指導と

に資したいと思ふ。

第一に、根本的に、行軍力増強といふ目的を登山に課することが、登山の原則に反してゐる。登山は實利的目的の對象となり得ぬものである。目的と結果との倒錯である。登山行動はその結果として全く例外なくかつ最大限にこの目的に適ふものだが、それは「結果」であることを認識する必要がある。従つてこの問題の眞髓は目的を登山行動の高揚に置き換へ、行動自體を鐵の規律と訓練とにおいて組織化し、さうして結果を充分に導くやうにする點にある。

次に行軍力増強といふことは國民全部に要請される問題に他ならないから、單に一局部の問題の解決に利用さるべきではない。まして登山といふ局面は必ずしも國民全部に直接のつながりがあるわけではない。元來日本人は生れながらに特別の脚力を持つてゐる。例へば、歩行の訓練を知らぬ普通の健康體を連れ出し、いきなり一日十里を歩かせるとか、三千米の高峰に登頂させるとかしても、指導よろしきを得ればさほど困

難なく實行されるのである。私はかつて一兵卒として軍隊生活にあつたが、軍の規律と訓練とが何と短い時間であらゆるシャバの人間の歩行力を鍛え上げるか、といふことを體驗してゐる。おそらく、行軍力といふやうな絶對の念實を、それとは別の問題の解決に利用されるやうなことは、軍としても迷惑な話ではないだらうか。

第三に歩行訓練を目的とすることは登山行動とは全く別な問題に屬するがゆえに、それは登山の理論なり實踐なりにいさゝかの關係もない。登山の道を明澄にし、單純にするためにも、歩訓目的論は登山界を離れ、その論者は登山者たることを止めねばならない。現にさういふ人達のために、歩訓を第一の目的とする團體や組織や運動が別にあるのではないか。現にまたこの目的のために國民學校から大學にいたる學生々徒の強歩鍛鍊も行はれてゐるではないか。歩行訓練は全く必要なのである。たゞそれが登山の目的といふことは何のつながりもないといふに過ぎない。それにしても

この種の運動の間歇性や非日常性がその本来の目的にどれだけ大きく貢献するかは疑問であらう。たと登山家だけは昔から登山に具へて歩行鍛錬を日常生活に持込んでゐた。例へば、毎日の通勤を利用して歩くとか、ビルの昇降機を無視して階段を上下するとか、さういつたことを黙々と實行してゐた。

すなはち行軍力増強といふことは、登山の目的とすべくあまりに一般普遍の問題であり、しかもその真相は何かむづかしい高遠な説諭や運動の中にあるのではなくて、日常不斷の實踐の中にあるといふにつきやう。

6

こゝまで來ると、

五、高山か低山か、といふ問題

に對する解答はもう自然に出て來ると思ふ。だから簡単にそれを展望するに止めたい。

登山に關する問題の中でおよそこのくらゐ愚劣な低調極まる問題もなかつた。登山の第一課、例へば、ひとりの山といふことだけでも理解してゐれば、すでに

起る餘地すらない問題なのだ。ほんの常識からいつても、高きを望むは人間の本能であり、益々高いよいよ大なる試煉に立向ふは選ばれた大國民の本能的使命である。これを實際にみても、もし一千米の山に登つて其醍醐味を一たび知つた人は、必ず二千米を志し、二千米は更に三千米となり、進んでは同じ三千米でも一層困難峻峻の場面を望むにいたる。西部支那やヒマラヤの七千米級、八千米級が常に登山家の肩を壓して聳えてゐるのは決して偶然ではない。そこには人間の體力、智力の極限の發揮が望まれる。優れた武士は一生に一度、その根限りの武道を用ふるの機會をどれくらゐ待望してゐたことだらう。まことに八千米級の山をのぞむ心は大敵との最後の決戦に完勝をのぞむ將兵の心に直接通ずるものといつて過言でない。しかしそれは誰にでものぞまれることではない。登山家は常に謙讓に自分の體力や技術を反省して三千米に、或は二千米に、或は一千米にそれぞれの山を見出すことができる。しかも登山はそれぞれの山において常に前に言

つたやうな體力や智力の最高の發揚をその人に要求するから、結果として得るところは山の高低に本質的にかはらない。こゝに登山の顯著な特質がある。すなはち、登り得る人は高峻峻岳へ。高峻峻岳への力足らざる人は自分に相應せる山へ。いろいろ煩雜なモヤモヤを洗ひ去つてみれば、何と簡單明瞭な本體がそこにあることだらう。

登山におのづから道があり法があることはいふまでもないが、高山主義とか低山主義とかいつたものもともとより存在もしてゐない。しかしそこにつけ込んで、低山のより大衆性により安易性にと頼り、登山の道はこれで充分だ、といふやうな自慰的論説を他に押賣りする心得違ひが時に現れて、紛亂のタネを蒔いてゐる。くどいやうだが、「これで充分」ではなくて、「これがギリギリ結着の限界點」でなければならぬのだ。例へば、三千米に登高し得る人が、もし登山家であるとすれば、二千米で「これで充分」だとは決していふ筈がない。一方、自分の肉體的條件の總計を量つた上で、二千米

以上がむづかしいといふ場合には、はじめて二千米において「これで充分ではないけれども、しかしこれが自分のせい一ぱいだ」といへるのだ。人は高さをのぞむ。そして登山家は常にエヴェレストをのぞむ者だからである。

山が高くなるに従つて、それだけ登山の道も法も峻厳を極めて来る。それだけ、個が全體をになふといふ精神と實踐との最高度の發揮が要求されて来る。そこでは全體の成功のために常に個が自分を空しうし、自分を犠牲とするの用意がなければならぬ。山は高くあれ、高きに處する道と法とを學べ、而してより高きに登れ！ もし冠するならば、かくの如きに對してこそ皇道の文字を冠して欲しいものである。

7

登山再編成への結論はもう明かだ。個人主義的ないし自慰的な動機から出る一切のモヤモヤを思ひ切つて吹きはらひ、頭を事態の真相に向けて切り替へ、清澄な大氣の中で靜かに山を仰ぐのである。斷案は期せず

してそこより下るに違ひない。いひ換れば、すでに無駄な遊びとなつた山に關する現代の神話や、精神論講座を一度打切り、局部的、煩瑣主義的な問題的實踐運動から解放され、謙虚に山を見直し、お互ひ日本人同志の心で登山することから出發するのだ。言葉の意味どほりの登山再認識——それによつてのみはじめて摩擦なき一般普遍の登山再編成が可能となるのである。

（十七年十二月）

編輯部後記。袋氏のこの論文は引續き具體論に入つてゐるのであるが、それは尙發表の時機でないと思はれるので筆者の了解を得て割愛する事とした。

ラウンド・カンチエンジュンガ抄譯

(Round Kangchenjunga)

D・W・フレッシュフィールド著

吉 阪 隆 正 譯

ま へ が き

みかへされる。

古典といふものは時代が経つても、益々その價值を高めてこそすれ、いつまでも光を失はないものである。

ヒマラヤも一般に知られる様になつて、既に半世紀以上になつた。それから目まぐるしい發展が見られ、初期の報告書はいつの間にか古典に數へられる様になつてしまつた。登攀そのものの記事はもうある程度の參考にしかならないかも知れない。併しそこにある著者の山に對する熱情、闘志それはいつまでも我々を鼓舞し、激勵するものである。その意味で古典は今なほ讀

ヒマラヤの古典も相當な數になつたが、我々が特にこの書「Round Kangchenjunga」に手を付けた所以は、我々のカンチエンジュンガ (Kangchenjunga) への憧れもその一つであらうが、この遠征隊の歴史的な意味も、又 D・W・フレッシュフィールド (D. W. Freshfield) の記述に表はれてゐる豊富な蘊蓄と、更にそれ以上に各所に溢れてゐる彼の山に對する情熱の爲である。

ヘンリー・レイ・フレッシュフィールド (Henry Ray Freshfield) の一人息子として一八四五年四月二十七日に英國サセックスに生れた彼が九才の頃スミスを訪れ

てから、如何に山に對して熱心であつたかは、彼の登山の履歷を見てもわかる事である。こゝにその主なるものゝみを擧げて見れば、

一八六四年頃から毎夏アルプスに遠征して各所で盛に初登攀、初通過、初試登を行つて居り、その足跡もスミスと限らずサヴォイ、チロル、或はイタリアとのびてゐる。

一八六八年には正月からエジプトに赴き、十月までにシリア、トルコから初めてコーカサスに立寄りベトログラードに出てゐる。この年のエルブルスの東峰の初登頂は有名である。

その翌年からも毎年一月乃至二月づゝ夏はアルプスに遠征し、殆んど到らざる所なしといつてもよい程である。またある年はスコットランドに、コルシカに、又アルジェリアにも訪れてゐる。

一八八七年及び八九年には再びコーカサスにて夏を過し、各所にて成果を収めてゐる。

翌年は子供を連れてスミスに遊び、その翌夏からは

西歐を股にかけて、ビレネーに、コルシカに、スミス、イタリアのアルプスを駈け巡つてゐる。

一八九五年から暫く休息があつて、遂ひに九九年ヒマラヤに到り、この大業を果したのである。その歸路なほビルマ、セイロンに立寄つて山に登るなど全く精力絶倫なのに驚かざるを得ない。

スミスへ行くのは習慣になつた様にその翌年も、またその翌年も訪れて居り、他所へ出掛けぬ限り、決して怠つてゐない。

ノールウェー、ギリシャ、ポルトガル、バルカン更にのびて南アフリカの數ヶ月、そして一九一三年にはシベリア經由にて支那から日本に渡り、上高地まで入つてゐる。これらの事はまとめて、彼の「Below the Snow Line」に載せられて居り、日本アルプスはその「A Playground at the East End」の中に含まれてゐる。

一九二〇年にはカナダにロッキーマウンテンをさぐつてゐる。

彼の著作も亦頗る豊富で、山の單行本だけでも十數冊になる。その内には山の詩集も、又 H・B・ド・ソーニエール (H. B de Saussure) の傳記の如き研究なども含まれてゐる。

26 「Round Kanchenjunga

A Narrative of Mountain Travel

and Exploration

by

Douglas W. Freshfield

with Illustrations & Maps.

は一九〇三年アールド社から發行された赤い地に金で塔婆を描いた表紙の本である。又内に挿入された四十葉近くの寫眞は有名な V・セラ (V. Sella) の苦心の作である。全文三七三頁にて、第一章より第十二章までの遠征の記事はフレッシュフィールド自身が、第十三章以下ル・ムズリエ (Le Mezurier) が西藏の美術品について、ガーウッド (Garwood) は地質及び作製せる地圖について、又フレッシュフィールドは世界最高

峰の呼名について記してゐる。更に、チャンドラ・ダス (Chandra Das) が西藏まで測量した、いはゞ先蹤者の報告をそのまゝ再録して、その功績をたゞえてゐる。又セラ (Sella) 撮影の寫眞の總目錄を末尾に附して、愛讀者並に研究者の爲に考へてゐる等凡てを盡してゐる。

この様な名著が未だに日本語となつて出て居ないのを遺憾に思ひ、自らの力を願す、せめて抄譯なりともしたいと思つて、こゝに暴舉を敢てしたわけである。なほ一部の翻譯には川原章、山崎安治兩君の手を煩はし、大いに助けて頂いたことをこゝに謝する。

今後立派な完譯の出るまでのテンポラリー・キャンブとなり得れば幸甚の至りである。各位の御了解と御垂教を幾重にも願つて止まない。(昭和十六年十月)

一、本文中括弧内の數字は原著の頁数を示す。

一、固有名詞は一般によく知られたものゝ他は原語を括弧内に附して置いた。

一、D・W・フレッシュフィールドの登攀履歴はアルバイ
ン・レジスター第二巻による。

第一章 ヒマラヤ

(p. 1) 所謂未開人は最も徹底した精靈説の信者である。併し文明や科學の進歩の前には各々の家に棲んで居た妖精も、巖や礫にかくれてゐた鬼も、或は小川や林の優しい精たちも澁々乍ら次第々々に退いて行く。

そして人の住み得ない地方、道なき砂地や雪の國、砂漠や氷河が、宇宙の靈のかくれがとなつた。かくて世紀を通じて山はその麓に住む人々の認識し得る以上のあるものゝ象徴として聳えて來た。(p. 2) 高山のこの魅力は、それが世人の住居から遠く離れ、近付き難い僻遠の地にあるところから生ずる。もし巨大なホテルを以て山を圍み、まはり木馬の様に満員で絶えず動く汽車の煙で谷を塞ぎ、危急の時には百人位押し込める掘立て小屋を山稜にばらまき、岩には鎖をつけ、案内者なしの旅行者に自殺を促す如く赤い印をつけると山はその原始の美しさをおほかた失つてしまふ。それでも山は立派な保養地であり、體育場であるがそれに魅

力を感じるのには既に全く異つた人間達である。

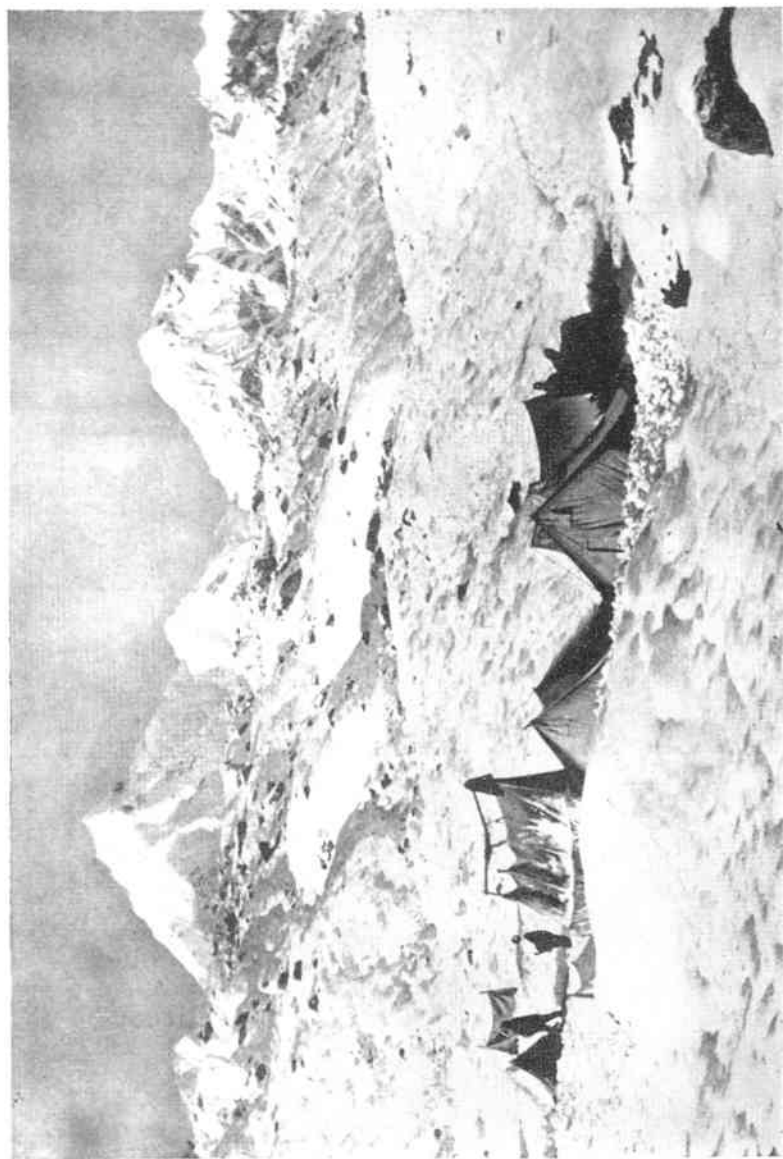
併し必らず登山家や、山を愛する老若男女の内には、唯健康とか景色とか或ひは登山技術とかのみの爲ではなく、山登りから得られる乃至は得られたすべてを求めて旅する人々がある。我々初期の探險者は今日では、唯それ等の思ひ出を胸に浮べて、當時の香りの残つてゐる土地を探して以て甘んじて居るより致し方がない。

(p. 3) リッフェル (Riffel) やヴェンゲルン・アルプ (Wengern Alp) は二度と昔の姿にはなるまい。併しアルプスはまだ廣く、その變化も無限だ。未だ世界的になつてゐない谷もあれば、ガラスの片に傷つけられる怖れのない山頂もある。

だが、我々の如く早い頃から人込みを通れ、中央ヨーロッパの探險で甘やかされた者にとつては、初期の登山者達がアルプスに見出し得た様な邊鄙な地方に誘惑され、當然、機會さへあればその地に赴かん事を考へた。(p. 4) 山の景色に對しては玄人と思つてゐる我

カンチエンジェンガの絶壁





ブヤンキ下部の氷水ゼム

我は、手足や眼力の衰へざる限り、地球上のより大きな山塊たるコーカサス、アンデス或はヒマラヤを知りたく思つてゐる。

ヒマラヤはアジアのアルプスだといはれる様になつたが、それはアルプスに比して約二倍の高さがあり、廣さも幾數倍であるかをいひ得ない程である事を記憶して置かねばならぬ。

それにしてもヒマラヤ漫遊ならばわけなく出来る。土人の知つてゐる雪線下の道を旅行するのは大した事ではない。(G)併し未知の峯や氷河に遠征するのは周到な用意と經驗と深慮とを要する大變な冒險である。

自稱探險家がその探險地を選ぶに當り、先づ第一の難關に當面するだらう。ヒマラヤ山脈は一、五〇〇哩の延長だ。又印度アルプスの登山期は相憎短い。加之最も心を惹きつけられる地方は夏が丁度雨期である。そして雨中を探險するのは困難なばかりでなく、雪も岩も熱と濕氣に作用されて絶えず崩れ落ちるので、急

斜面の下や、斷崖の下を行く事は又非常に危險でもある。山嶺には今にも落ちさうな懸崖氷河が斷崖毎に吊下つてゐる。東ヒマラヤでは秋の晴天が続く頃になると既に川は氷に閉され、谷の上流の草は茶色に枯れ、僅かな牧人達は羊や^ヤ牛を連れて下つてしまふ。

(D.6) 目的地と期日が決つたら隊を組織しなければならぬ。所で困難な登攀には登攀隊は少くとも四人居なくてはならぬ。而も彼等は登攀者たるだけではだめだ。人々にとつて一般の旅行でも確かにその人の試鍊にはなるが、狭い間に旅の辛苦と危險が凝縮してゐる登山に比すれば殆んど何でもない。全く大遠征に共に行ける如き友を見出すのは至難の業である。E・ウィンパー(E. Whymper)の如きは案内人、即ち何時でも解雇し得る人以外には同伴者のない事を好んだ。

次 問題は軽い完全な、天幕と裝備、及び燃料も食糧も得られない高所の爲の用意をする事である。

(G)それから印度當局と豫め打ち合はせて置かないと、旅行者はよく當局の命で計劃を妨げられる事が

ある。併し當局の承諾を受け、その目的を豫め知らせて置けば、地方の役人は好意を以て助力してくれる。特に人夫のかり集めとか運送の事に關しては便利である。

又隊員の内に少くとも一人印度語を話す者が居ない場合には通譯が必要である。その人は色々の方言を知つてゐて、人夫達の氣まぐれな恐怖や想像を抑へ、ホームシックになつて逃亡するのを暴力によらずに引止め得なければならぬ。

(p. 8) 最初から最後まで運送はヒマラヤの旅の痛である。峠も、橋も、谷の小徑も——少くともシッキムでは——荷を負つた獸には通れない。こゝに扱ひにくい人夫達の手を借りねばならない。亞熱帯から來た彼等は、魔の棲むといふ雪と岩の地方に目的もなく侵入するのを當然嫌ふ。佛寺の壁にカンチエンジュンガ(Kangchenjunga)の神として描かれてゐる様な恐しい魔神を騒す如きは且那サヒブのみの考へ得る馬鹿げた行ひだと考へてゐる。

アルプス初期の冒險談を読んだ人々は危機に際していつも案内人の爲にまづ終つてゐた事を覚えてゐられるだらう。ヒマラヤの人夫はそれに輪をかけて無經驗な、腹立たしくなる様な性質である。彼等の主食物は米なので非常に高ばる。我々は三週間の食糧を持つて行つたが、各人の荷の半分位は彼等各自のものでつた。(p. 9) 又シッキムの人夫は早立ちといふ登攀成功の爲第一に必要な事に對して根強く反對する。着物や靴、眼鏡をやつて凍傷や雪盲にならぬ様にすれば、之を玩具と思ひ投げ捨てたりする。

それで計劃が失敗に終つても彼等に怨を懷く事は出來ない。彼等にして見れば且那サヒブは明かに間違つた事をしてゐるのだ。狂人の且那のあとについて、どうして寺院の旗や壁畫に描いてある冷い地獄の門とも思はれる雪の中に何週間も居なければならぬのか？

(p. 10) 高峯を目指し、大氷河の探險を安全になすには前に述べた如く四人の隊員は必要である。今日までの所、岩場ではかなりよい土人でも山案内人としては

氷瀑や雪の急斜面などに對する氷の技術が足りない。

併しこの難題もブルース (Bruce) 少佐、マーチン・コンウェー (Martin Conway) 卿の後援を得て、グルカ兵をスキスのアルプスで訓練した事に依つて解けてゐる。印度の如く國境に山の多い國では、歐洲のアルプスに國境をもつ諸國の如く、山嶽軍團をつくるのが得策だらう。(p. 11) かくるものが出来れば、副王乃至は司令長官の心一つでヒマラヤの高峯を探險する者にとつて難題たる「訓練された有能な人夫」を得る事も出来る様になる。

かくする事に依つて結局得するのは山岳地帯を守る將校である。であるから私は印度にヒマラヤンクラブばかりでなくイタリーのアルピニの如くヒマラヤ聯隊が出来て、休暇には將校達は、狩の獲物ばかりではなく未知の氷河、處女峯の地形學上の資料等をも持つて歸る様になる事を望んでゐる。もしザイルやピッケルの使用に馴れて居り、高所での野營の方法を知つてゐる人が印度に五十人もあれば、ヒマラヤ高峯の攻撃

をするのは非常に樂になる。(P. 12) 否彼等の手をかりずにヒマラヤの一流峯に行く事は出来なうであらう。

これ等色々の障害の爲か、印度ヒマラヤ地方旅行者はかなり多いが、山に登つた者は稀である。アンドリュ・ウィルソン (Andrew Wilson) の「The Abode of Snow」は生きた山の記録である。ナイト (Knight) 氏の「Where Three Empires Meet」も山の本である。又 J・フーカー (J. Hooker) の本も、本著もさうである。十九世紀の終までにヒマラヤ遠征の數も指を折る位しかない。主なものとしては一八五四年から五八年までシュラギンワイト兄弟 (Schlagintweits) が、一八八三年にはシッキム及びクマオン地方へグラハム (Graham) が、一八九二年にカラコラム地方へコンウェー (Conway) が、そして最近一八九五年にナンガパルバット・マンメリー (Mummery) が赴いた。一九〇〇年以後としては K 2 に行つた合同遠征隊と同じく米國のワークマン (Workman) 夫妻の根氣強く成功した遠征を記して置かねばなるまい。

(p. 13) 古本商のカatalogにはヒマラヤの事は旅行の部に屬し、高價な登山の内に含まれてゐない。専門家はよく狭い範圍にしか興味を持たない。雪線下の地方には目もくれずに連れて行く様な案内人は癢に障る事もある。だが雪と氷の地方の諸現象になれてゐない人の書いた高山の描寫も單なる好奇心をすら満足させないし、まして地理學者乃至は登山家の求める所でもない。例へばシッキム地方の地圖(一吋二哩)のゼム(Zemu)氷河の下方は部分的に石屑に覆はれてゐるが、堆石地とあるだけでカンチエンジュンガの氷河に關しては何らこれ以上記されてゐない。

第二章

シッキム (Sikkim) とカンチ

エンジュンガ (Kangchenjunga)

(p. 14) 私がどうしてヒマラヤを見る氣になつたかは既に述べた。併しその機會は中々來なかつた。一八九九年の夏漸く雪の山脈までわけ入る事が出來た。

私がシッキムを選んだのは極く簡単な當然の理由か

らである。私はいつも先づ景色、次に科學を求めて旅し、山に登つた。そして又最後に今日いはれてゐるあらゆる意味の記録の爲に。所謂景觀探求者が山の高さを見るのは地圖の上に記されてある海拔のそれではなく、その見えてゐる麓から頂までの高度差である。而して雪に至るまでの景色の變化と長所とはそこに到る間に過る植物群落の數に比例する。(p. 16) 然るにカラコラム地方の山々は高さこそシッキムのそれに劣らないが、既に海拔一萬二千呎の土地の上にある爲見た目にはカンチエンジュンガより一萬千呎も低いわけである。併し乍ら登山者にとつては實際上有利な點もある様に思はれる。例へば夏は割に乾いてゐるし、近くにもシッキムの如き濕つた不健康な谷を行かずに済む。

最近ある文壇の人々からカンチエンジュンガとは山であるのか島であるのか、アジアにあるのかアフリカか?と問はれた。(p. 16) 間違つた謙遜の爲か我々自身でよく知つてゐる事は一般にも知られてゐる事である

かのように思つてゐる。併し我々も亦ゴルフとかボロとか或ひはその他の何かの様に専門的になつてゐる。それで次の様な説明を敢てしたのである。

カルカッタを基點とすれば、それより三五〇哩北方に、ネパールとブータンを東西に別けてゐる小さな國がある。これがシッキムである。

商業的乃至軍事的にはチュンビ(Chumbi)の谷を経るかティースタ(Testa)川の上流の峠を越えて西藏へ入る橋となつてゐる點にある。

(p. 17)カンチェンジュンガはシッキムにある高山で、測量の結果(註、一九〇一年の印度測量局年報による)二一八、一五六呎で地球上では第三位の高さである。第一位は二九、〇〇二呎で英國ではエヴェレスト(Everest)として知られてゐるが獨逸では印度名でそのまゝゴーリサンカル(Gaurisankar)と呼ばれてゐる。但しこの名はカトマンヅ(Katmandu)の東方の高山を總稱してゐるのであつて、多分それに屬するものと思はれてゐる。ウェーデル(Wadell)少佐はその報告

自信を以て、その山には西藏名ではチョモカンカル(Chomokankar)として知られてゐると云つてゐる。

(p. 18)第二位はK 2で、原名をチョゴリ(Chogori)といふが、有名な測量者の名をとつてマウント・ゴドウィン・オースチン(Mount Godwin Austlin)とも呼ばれてゐて、カラコラムの僻地に聳えてゐる。

カンチェンジュンガ(Kangchenjunga)——はシッキムとネパールに跨がり西藏にも觸れてゐる大山塊の最高峰である。

西はコッシ(Kosi)河によりネパールの山と距たれ、東にはシッキムの河が西藏及びブータンの山と隔てゐる。分水嶺はなして居らず、どの水河からもブラマプトラに注いでゐない。分水嶺とは僅かにジッソン・ラ(Jonsong La)の鞍部の西から北にのびた尾根に依つてつながつてゐるに過ぎない。この鞍部を越えれば西藏領に入らずにカンチェンジュンガを一周し得るわけである。

(p. 19)私の目的は出来るだけ頂に近く道をとり乍ら

カンチェンジュンガを一周するにあつた。これは未だ

歐人の行つたことのないものだ。五十年前にフーカー

(J. Hooker) 卿はこの近くに來てゐるが、彼の著ヒマ

ラヤン・ジャーナルス (Himalayan Journals) につ

てゐる地圖にはカンチェンジュンガの東北と西北部は

眞白に残され次の文句が印刷されてゐる。(p. 20)

『この地方は峻嶒なる高山天に聳え、雪少なけれど

人畜共に棲み難しといはる』とある。

私はこのフーカー卿の小さな地圖が腦裡深く刻まれ

て、カンチェンジュンガを巡つてこの不足せる部分を

充さうといふ希望に燃え立つのだつた。

J・フーカー卿に残した白い部分はその後一八九一

年にホワイ特 (White) 氏に依つてティースタ河の支流

地方は探險された。同行したカルカッタの寫眞技師ホッ

トマン (Hotmann) 氏はカンチェンジュンガの東面並

に氷河の素晴らしい姿を掴み、又雪の山としては最優美

なシニオルチュム (Siniolchum) の北面を撮影した。

(p. 21) ホワイ特氏は更に峠を四つ越えて西藏領まで入

つてゐる。

次に一八九七年にオウコンナー少佐 (Major O'Con-

nor) は東からローナク (Lhonak) に入り、西藏に通ず

るチオルテン・ニャ・ラ (Chorten nima la) を越え、コ

ングラ・ラ・ラ (Kongra Lama la) から戻つてゐる。

一九〇二年ホワイ特氏は副王の命により再びローナ

ク地方を訪れてゐるが地圖と寫眞の外何の報告もな

し。

(p. 22) カンチェンジュンガの南面に關しては一八八

一—八三年にロバート (Robert) 氏がシッキム地方の

カン・ラ (Kang la) の尾根を偵察してゐる。彼は又ド

ンキヤ・ラ (Donkha la) を越えた時にかゝつた凍傷

の爲フロレンスで逝つたが、ハルマン大尉 (Captain

Harman) とローナクの下流にも赴いてゐる。ロバー

ト氏の報告は極めて解りの悪いものであつた。

『ロバート氏はカンチェンジュンガの西北方に關し

て意外なる消息を齎らした。この地方には二萬三千よ

り二萬八千に到る尾根が錯雜し、二萬呎を下らない。

氷河は一つもない。下部の斜面は氷原と萬年雪を圍らすのみで、下の方にまで到るものはない。云々。』(測量報告書(一八八三—四年度))

(p. 23)この間違つた報告の中で唯一つの事實として認められるのはヒマラヤのこの地方の氷河の下流は厚く堆石で埋められてゐる爲望遠鏡のみの觀察では氷河と見きはめ難いといふ事である。

英國官憲の人々はシッキム獨立國內の地帯は殆んど偵察し測定した。十九世紀の後半ではカンチェンジュンガのネパール側は未だ歐洲人には閉されてゐた。勇敢なウェーデル少佐の如きでも衝突や拘留を恐れてこの地方に行くのを好まなかつた。(p. 24)それでその地方へは土地の人を派遣してゐる。

有名なサラト・チャンドラ・ダス(Sarat Chandra Das)のラサへの旅行記は王室地學協會から發行された。彼が一八七九年に初めて西藏のタシルンポ(Tashi-lumpo)へ行つた時越えた峠はジョンソン・ラ(Jonsong la)とあるが私は疑つてゐる。色々の點から推して見

てもチャンドラ・ダスの峠とジョンソン・ラとは別の様である。

(p. 25)併しこの一事に依つてチャンドラ・ダス氏の正當なる名聲を奪はうとは思つてゐない。ベンガル灣の岸に生れた彼が、雪や異國の危險に打ち勝つた事に比すれば高い峠の一を越したか越さぬかは、小さな問題である。

次にリンシン(Rinsing)であるが、彼がその後私達と來た時の態度から推して見るに例の峠は越えて居らしい。ブチア人としても之は大した功績である。特にそれが十二月になされたといふ事を考へればなほ更である。(p. 26)彼はこの峠はヒマラヤのこの地方で最も峻険な、困難なものであるといつて居た。

こゝで困難なといふ字を用ひたが、山岳會で限定した意味に用ひたのではない。ジョンソン・ラは確かに石の悪い所もあり落石や惡天候の恐れもあるが、それ程の所ではない。

リンシンの旅行は次の如く正しく評價されて記述さ

れてゐる。即ち

『今まで封じられて居たカンチエンジュンガの北方はリンシンの一八八四年の探險によりかなり知る事が出来る様になつた。寒さと疲れに人夫二人を失ひつゝも堅忍終にカンチエンジュンガを巡る地帯の調査を完成したるのみならず、初めてネパール東北方と西藏の國境を明瞭ならしめた云々。』

(p. 25) 現在の測量局長のゴール大佐 (Colonel Gore) の云はれる如くリンシンの旅行は印度の地圖特にカンチエンジュンガの西北斜面に貢獻する所が多い。リンシンの報告の寫本は局長の好意で貸して下さつた。

この地圖では谷は大概正しく、唯氷河の記號が登山者が見ればやゝ稚拙ではあるが氷河の主幹を表はさうとした所は見るべきである。

私も旅行中彼の測量家としての活躍振りを親しく見る機會を得て、彼が小ちんまりした居心地のよい天幕の内に坐つて綺麗にかき込んでゐる所から来る缺點などをもし知り得た。(p. 28) 又例へば氷河といふ言葉は彼

は青氷の意味に解してゐる。氷河上部の萬年雪や下部の堆石に蔽はれた部分は結局わかつてゐない。

(p. 29) そこで唯單にカンチエンジュンガを廻つて來るだけが目的ではなくなつた。印度測量局が他の地で地理學者に提供し得た様な氷河の型とか、アルプスやコーカサスとの比較を可能ならしめる資料をこの山塊について獲られるだらうと思つてゐた。

目的とする物と所が決つて次に同行者を探した。エドムンド・ガーウッド (Edmund Garwood) は登山家であり、旅行にはマーチン・コンウェー卿 (Sir Martin Conway) とスピッツベルゲン (Spitzbergen) に赴いた事もあり地質學教授で、寫眞も出来る人だつた。ヴィットリオ・セラ (Vittorio Sella) 氏は歐洲で山岳寫眞で名聲を博した人である。コーカサスやアラスカでの望遠寫眞やパノラマは特に成功した。彼が同行を引受けてくれた事は誠に有難かつた。彼の弟のエルミニオ・セラ (Erminio Sella) 氏も同行する事となつた。彼は又マッターホルンと結びつけられてゐる山案内人のア

ンジェロ・マキニヤ (Angelo Maquignaz) 氏をも雇つてくれた。又寫眞の助手としてボッタ (Botta) とス
ふイタリーピエモンの人をも連れて來た。

歐人六名は一八九九年八月十日マルセイユを出帆した。

第三章 ダージリン (Darjeeling)

(p. 30) ベンガルの主都カルカッタから汽車にて僅か二十時間でダージリンに到る。印度に居る英人達は汽車旅行を何とも思はず週末にこゝまで上つて來る。

午後出發すれば、ガンヂスを渡る小汽船の甲板の上で夕食をとり、その夜は車中の人となる。(p. 31) 翌朝空が晴れてゐたらごく早起きするがいゝ。窓の外を見れば先づ暗い平野とぼんやりと圓い形に麓の丘が目につるだらう。併し注意して上の方、思ひもよらない程高い所にうす明くなつた空に薔薇色にもえる焰の列を見出すだらう。それは雲ではなく、見てゐる内に形が次第にはつきりして來る。それこそシッキムの雪の

山々、ヒマラヤの巨峰である。

ロンバルディアの山のように急な道を四哩も登つた所、シリグリ (Siliguri) の驛で汽車を下される。玩具の様な輕便鐵道に乗りかへ、平な廣い平野を後に熱帶の原始林の間を縫つて登る。

(p. 32) やがてヒマラヤの雪嶺にやゝ並行な低い山脈の鞍部 (七、四〇〇呎) に出る。尾根を越えて西斜面を二哩程下つてダージリンの大きな役所や病院、庭のある別荘やトタン屋根のバンガローの建つてゐる所につく。

ダージリンについて最初の印象は全く別天地へ來た様である。こゝでは印度的の氣候も風土も、建築物も、力のないあはれな住民も居ない。近くに切り立つた尾根や谿谷が巨大な畝や溝の様に錯雜してゐる。

狭い山の上に土地の許す限り發展した大きな町といつた感じ。(p. 33) 町といふのは入り亂れて建つた別荘と庭の間に教會や尼寺や學校、病院、その他俱樂部や商店の點在してゐる所だ。これが兩側が六、〇〇〇呎も

切れて落ちてゐる豚の背の様な所におさまつてゐる。近くの原始林は伐り開かれて茶畑となつたが、ライン地方の葡萄畑の様に殺風景だ。文明の力の及ぶ限り小綺麗である。印度の大都市のだらしない倉庫の様なものに較べればホテルも上等である。

家々は大部分乗馬道でつながれて居り、又斜面が餘り急なので下の列の家の煙突が上の家の列の一階の所に來る程である。「列」といふ字は全くよくその様を表はしてゐる。ダーズリンには歐洲でいふ様な道路らしいものは見當らない。

(p. 34) 威風堂々とした英國國教の高僧がつかはしからぬ馬に乗つて來たかと思ふと、次には黄色の衣を纏ひ赤い僧帽で喇嘛僧が來る。最も多いのは茶園で働くレプチャ (Lepcha) 勞働者である。黒髪を頭の上で束ね弱々しい顔で青と白の縞の布を纏つてゐる。頑丈で不恰好で頬骨高く小さい目で笑つてゐるのはブチア人 (Bhutia) である。彼等の女は財産をすつかり身につけて歩いてゐる。蒙古族か更に北方の人の様で西藏

族は氷河期の生存者の如く稀だ。この種々雑多な群衆の内に、陽焼した英人將校達はグルカ兵召集の目的で來てゐる。彼等は方言を皆知つてゐる。

こゝにレプチャ、ブチア兩種族は今後も重ねて出て來るから極く簡単に彼等の歴史と性質を記して置かう。(p. 35)

レプチャ人はシッキム土着の人である。悠久の昔より三百年前位までこの地方の主であつた彼等は、村に住まず、理想的に質朴な森の子で、玉蜀黍や大麥、稷、蜜柑の森や車前オホバコや稍大きな竹藪に圍まれて育つ。住居は木造の四角なもので、蛇や野獸を避ける爲に一段と高くなつてゐる。家、橋から席、コップに到るまで竹で造られる。男女の別は一見してわからない。何れもシャツを被り下袴をはいて、髪は中央からわけてゐる。(p. 36) 彼等にとつては崖の様な急な道も何でもない様であるが、態度や姿は女性的だ。誰でも彼等からよい第一印象を受けるが、子供じみてゐるのにあきれらるだらう。

彼等の目は森の不思議を總て見盡したかの様である。粗野で原始的な生活の内に獨特な詩的なものを持つてゐる彼等は弓矢と共によく笛を持つて行き長嘯する。獸や鳥は皆知り親しんでゐて、いつでも鳴き聲をまねて呼ぶ事が出来る。生來の自然兒である。

宗教は單純な自然崇拜である。夢の多い彼等にとつて丘も森も、小川も無數の妖精の棲家である。それについてキャンブファイアーを圍んでつきせぬ物語りをしてくれる事だらう。

約三百年程ヒマラヤの此の佛徒の宗教的軋轢からシッキムに三人の喇嘛僧が侵入して來たと傳えられてゐる。(p. 37) カンチェンジェンガ近くの一歩高いヨクスン (Yoksun) の村におちついてこの地方を治めた。この時から事實上シッキムは西藏から來たブチア人のものとなりレブチア人はその奴隸の様になつてしまつた。

西藏より南下してネパール乃至ブータンに土着したブチア人の純粹なものは頬骨の高い小さい輝く目をし

た韃靼人である。いつも上機嫌で道化者である。頑丈な體で騒々しく荒々しいが私の知つてゐる限りでは惡い人ではない。

女はすんぐりしてゐて、ごく若い内だけは綺麗だ。暇さへあれば糸を紡いでゐる。

高地には僧院が散在し、怠け者の喇嘛僧が墮落した佛教を鬼神崇拜の形で行つてゐる。

(p. 38) ダージリン並にシッキム低地には多くはネパール人中のパハリヤ人 (Pahariya) が多く住んでゐるが、山とは關係がうすいので省略する。

我々が着いた日、山にはガスがかゝり霧雨さへ時々降つてゐた。ダージリンの中央の觀測臺 (Observatory Hill) は聖域とされて紀念碑が澤山あり祈禱の旗が夥しく立つてゐる。こゝを中心白い家がばらまいた様に建つてゐる。商店街は西の凹地に土民のバザーと隣り合はせにある。東側の急な斜面の家々は人の家よりは燕の巢に似てゐる。

(p. 39) 我々は四日滞在して居たがその間遂に雪の峯

峯の前に垂れた帳はあげられなかつた。が、讀者の爲今假にあげて語らう。十月のある晴れた朝見晴臺から眺めたところ。遠くに連なる堂々たる雪の山々の内、中央に特に秀でた頂がカンチエンジュンガの長い山嶺である。足下、〇〇〇呎の線の内に太陽の光を反射して光るレンジット(Ranjit)河から岩と氷の壁の高所に到るその間には幾つもの尾根が並行に横たはつてゐる。それ等は所々に見える田圃の他一面に森に蔽はれてゐる。僧院の白い斑點の他に家らしいものは見えない。

(p. 40)併し登山家の目は直ちに又雪の方に戻るだらう。長い間唯黑白の寫眞で表はされたものを眺めて、夢み、研究して來たものが、今、目前の空間に色彩られてあるではないか。満足と驚歎の心。登山家には必ずある程度の虚榮心があつて、自分のみが眞に神の建て給うたものを理解してゐる、この考を懷いてゐるものだ。遠くから見た雪の山は人々を感動させずには置かぬ不思議な力を持つてゐる。特に登山家達には夫々経験からその山々が人里を離れた巨大なものである事を

よく知つてゐるからなほ更である。

一般の人はこの様な廣い景色の前に出ると大きな觀念を失つてしまふ。雪線の下にある黒い岩(Kabuh 15,830呎)はモンブランの高さにあり、その岩からカンチエンジュンガまではまだ一二、〇〇〇呎もあるとは。中心となつてゐるカンチエンジュンガの頂は尖峯ではなく幕の様に幅廣い。(p. 41)空との界をなす氷の稜線は巨大なもので、美しい曲線を描いて眞中のこの岩塔に繋つてゐる。その一方に馬蹄型の谷を圍んでカブルー(Kabru)に續く尾根が出てゐる。にぶい頂を二つ雪嶺でつないだ様な山がそれだ。

その後ろ遠くにジャヌ(Jannu)の岩峯が、スフィンクスの様な型をして見える。急過ぎて雪のついてゐない様はその道の人にとつては實に魅力的なものだ。カンチエンジュンガを挟んで反對側にはパンディム(Pandim)がひかへてゐる。(p. 42)カンチエンジュンガの傍にある爲とその支稜に幾分隠されてゐる爲にシニオルチュム(Siniolchum)はこゝからはあまり映え

ない。

山を知つてゐる者ならば望遠鏡なしでも、山の萬年雪、氷河等は大ききこそ違へアルプスのそれと變りない事がすぐわかるだらう。

ある旅行者が私にダージリンの景色はチエルマットの程印象深くないと云つたが、その比較は當つてゐない。アルプスにしても雪山を離れたその麓から見たものと較ぶべきであつて山の懷から見たものとは自ら異なる。

目を西藏國境のチョミオモリ (Choniomo) やチョモラリ (Chomolari) に轉じたる後更にカンチエンジュンガの偉大さを眞に味はふには近くのセンチャル (Senchal) の丘に登らねばならない。こゝに到ればティースタ (Teesta) 河が平野に注ぎ出してゐる所、(p. 43) 又西にはカンチエンジュンガからでて居てティースタ盆地の境であるシンガリラ (Singalela) の平凡な長い尾根にネパールの雪の山々がかくされてゐるのを見るだらう。

以上で出来るだけ細かに驚愕に慣するこゝの景色を

描き出さうと努力して來たが、私がダージリンの觀測臺から眺め得た崇高な光景の幾百分の一を語り得たらうか。

カンチエンジュンガの山塊は四五十哩も離れた所にも十分に雄大な力強い形を示してゐる。併しこゝからは形よりはその色と動きの方が面白い。夜明けに二流所の頂がまだ紫水晶の蒸氣を通して見る様にぼんやりしてゐる頃、緑の谿々が藤色を帯びた群青で恰もベネチア派の背景の様だ。聽てどの凹地にも太陽が射すと暑い蒸氣が昇り、寒氣に會つて垂直の眩い雲の柱となり、それがちぎれて一塊づつ北へとんで行く。(p. 44) 一部は尾根の上に逍遙ひ琥珀色の畠地に淡い蔭をなげてゆく。

かうして刻一刻と變つて行く景色は、夕方になつて、黄昏に包まれた町には點々と燈がともり、山の雪も死の様に青ざめて見える頃、唯ひとりカンチエンジュンガは黄金の衣をぬぎ捨て、その廣い肩を濃い紅に近い桃色に染めた姿はアルプスの夕映よりはもつと

莊嚴で信じる事も出来ない幻惑として目の底深く刻みつける事だらう。

第四章 山麓の山々

(p. 45) アディソン (Addison) 氏はスキスのオーバーランドの山々をベルンから遠望して満足してゐた。ギボン (Gibbon) 氏はローザンヌに居て、サヴォイアの氷河を見に行く人を見送つて喜んでゐた。彼等には庭の四阿^{テラス}より外に出て見ようといふ氣は起らないらしい。

ダージリンの人がセンチャル (Senchal) の丘が、世界最高峰の見えるネパール國境のサンダクフ (Sandakphu) より一步も出ないのも無理からぬ事かも知れない。地方當局者は旅行者の爲、使用し得る小屋、道路等の一覽表を拵へたが、運送の不便、經費のかゝる事、病氣等に脅かされ、加ふるにネパールの鎖國が旅行者の足を喰ひとめてゐる。

(p. 46) カンチエンジュンガを巡る道の殆んど半分はネパール領にあるのでこの入國禁止は大きな障壁物で

あつた。「斷じて行へば鬼神も之を避く。」とか。J・フーカー (J. Hooker) 氏のいふ此の無人境を越えてネパールに入つた人がないのを幸、もし人の棲まぬ土地のみを通つて行ければよし、不幸にして人家のある地に出たならばネパール官權の人に依頼して最短コースから英領に戻る様にすればよいと考へた。

この決心さへつけばもう出發を躊躇することはない。そこで駐在官ホワイト (White) 氏の説に従つてラチェン及びラチェン (Lachen, Lachung) の溪谷を経て西藏へ出る道を取り、ティースタ溪谷を溯つてカンチエンジュンガの東側から向ふ事になつた。

(p. 47) フーカー氏はゼム (Zemu) の谷は人の通れない密林であるといつて居るが、ホワイト氏の通つたタールン溪谷 (Talung) からユムツ・ラ (Yumtso la) を越える道を兎に角試みる事にした。ホワイト氏の露營地を根據にして、奥の盆地をよく調べ、カンチエンジュンガの東及び北方にある鞍部を越えようと思つた。一ヶ月分の食糧があるので、かうすればより長い期間を

調査に費せるわけであつた。

ダージリンでは長官代理のアール(Earle)氏が我々の計畫に非常に興味を持たれ、リンシン(Rinsing)を連れて行く事を勧められた。ホワイト氏の代理でガントク(Gantok)にゐるル・ムズリエ大尉(Captain Le Mesurier)からは現在シッキムの道路監督官であるJ・ドーヴァ(Dover)氏に紹介された。(p. 48)この人には旅行中ずつと御世話になり、事實上彼が引率者であつた。旅行に馴れた彼はあらゆる困難を克服する事を知つてゐた。

「カンチェンジュンガ巡り」にダージリンを旅立つたのは一八九九年九月五日のひるだつた。到着以來空に滯つてゐた霧はまだ稍でまご／＼してゐた。荷を負つた人夫達は先に行つてしまつたので我々と一緒なのは馬丁ばかりだ。グーム(Ghoom)のみすばらしい市場を過ぎて道は森の中に入つた。

七乃至五、〇〇〇呎のこのあたりでは杪櫨^{ササ}や亞熱帶の植物はもう生えてゐないで(p. 49)樗とか栗や木蓮な

ラウンド・カンチェンジュンガ抄譯 (吉阪)

どが高く茂つてゐる。

原始林は先づ争闘とか衰頹を思はせる。シッキムの如き土地の肥えた所では過剰に生えた木々は太陽を求めて伸び／＼と幹は眞直に高い所まで枝をはらない。幾千萬といふ灰色の柱が緑の屋根を支えてゐる。朽木は倒れる事も出来ず幽霊の様に立つてゐる。併し物凄い濕氣は蔓草や寄生植物を繁らせてそれ等を包み隠してしまふ。羊齒は幾重にも茂り、苔の間には蘭が咲き枝から枝へ黄色いひるがほが匂つてゐる。森は植物の繁茂する樂園だ。然るにダージリン附近は文明が入つて來て大木を焼き拂ひそこへ茶園の主は小さな灌木を並べて植ゑた。ヒマラヤ山麓をライン河畔の葡萄畑化してしまふ。崩れ易い急斜面の危険な事は一八九九年の九月シッキム地方一帯に及んだ物凄い雨が、(p. 50)ダージリンの一部をも崩し落して、我々に如實に示してくれた。

一〇哩程行くと森林はなくなり開けた所に出た。それと同時に雲も切れて幅廣い雪の頂が現はれた。正に

カブル (Kabru) である。やがてティースタ河とランジツト (Ranjit) 河の出合の持出した尾根にかゝつてゐた。

雲も晴れ、初めてカンチエンジュンガ (Kangchenjunga) の絶壁が姿を見せた。夕焼けした空は非常に蒸氣を含んでゐた。『青と金色。青い丘や谷、金色の雲と雪』とその時の日記に記してある。

その夜はパシヨク (Pashok) のバンガローに泊らず、茶園主のレスター (Leicester) 氏の所に厄介になつた。カンチエンジュンガを仰ぎランジツト河に臨み、庭は花で一ぱいだ。(p. 51) その夜は氏の立派な蝶の蒐集を見せて貰つた。

夜の内、瀧の様な雨が降つたにも拘らず翌朝は晴れてゐた。谷底へ下るにつれて一歩々々熱帯の色を帯びて、温室の中の様にむつとしてゐる。水の溢れた河に沿つて僅かについてゐる徑を行くと遂に最奥の市場^{バザ}に到る。

狭い釣橋を渡るとカリンボン (Kalimpang) の地方に入る。(p. 52) 色とり／＼の布に祈禱文をかけたもの

が橋の鎖につけてある。下には溢れさうなティースタ河が流れてゐる。レプチャ人は死人をこの流に流す。

河岸からカリンボンへは三、二〇〇呎の登りである。

シッキム人夫は坂の急さには一向かまはなく、車道によらず舊道を登つて行つた。この坂は暑く馬で安樂に行くには餘りに急な所だつた。併し私はイタリーヤスベインでもつと暑い目にあつたことがある。

棕櫚の木がなくなる位になると四圍の空氣もずつと涼しくなる。

カリンボンはダージリンの如く尾根の上にある。

(p. 53) 土人の市場^{バザ}の上に蘇克蘭教會が四圍の景色と不調和に建てられてあつた。官立のバンガローは今では荒れ果てゝ雨漏りのする程だつた。

最近こゝに年一回の定期市が開かれ農産物の獎勵を行つてゐるが、骨董蒐集家にも仲々興味がある。

(p. 54) ルイス (Louis) 氏に依れば、カリンボンには數年前盜をしたとかで英國の兵卒がこゝの或る家へ蟄居を命ぜられた。所がこゝに到る途中で西藏娘に戀せ

られて、壁の下に掘つてくれた穴から逃げ出して二人で西藏へと走り去つたとか。

翌朝我々が見たこの地方の景色は、西藏人をして「稻と果物の國」といはせたのも宜なるかなと思はせる様な樂園だつた。敵軍に備えた防備などのない平和な所も東ヒマラヤの特徴だ。

こゝよりの緩かな徑は香氣に満ちて神祕的な所だ。

(p. 50) この魅惑的な森に獸が居たら全くエデンの園だ。併し出會つた仙人の様なレブチャ人旅客は寧ろアーケディアの様な感じを與へた。

八哩行つた所で道は下り出した。森を抜けて開けた所に出ると廣い陽の當つた谷底にばら／＼と建つた木造の小屋を縫つて小川が流れてゐる。ボドン (Bodong) のバンガローに到り、思ひがけない慰安を得て、番人によつてかくも違ふものかと考へさせられた。

向ひ合せて羅馬教會が建つてゐた。(p. 56) こゝの管長は半世紀以上も西藏で宣教師をしてゐたデゴダン神父 (Desgodins) だ。再び深い谷に下り、再び一、〇〇

〇呎を登つてレーノック (Rhenok) の市場に出る。

こゝを流れてゐる川はシッキム獨立國の界である。途中で竹筒にマルワといふ粟酒を持つた僧侶に逢つた。J・フーカー卿も之はよい飲物で試みる價值ありといつてゐる。

レーノックのバンガローは町の中央の土人の家で、郵便局を兼ねてゐる。寺から太鼓の音や、何かガタガタといふ音が聞えてゐた。蜜柑の木や竹藪越しに河が見え、緑色の鸚鵡や虹の様な色の蜂雀等が飛び交ふてゐた。

こゝでチュンビ (Chumbi) の谷を経て西藏へ行く道と別れる。

暑い耕地に沿ふて行き、時々涼しい谿流を渡りガントクの下凹地に出る。(p. 57) 途中で土人にバイナッブル、オレンヂ、大きなレモンやバナナを澤山御馳走になつた。

尾根の上には著名な佛徒の墓 (Chai) が建てられてあつた。谷を隔てゝ向ふの丘にはガントクの建物が見

えてゐた。徑は畑を通つて再び原始林に入り思ふまゝに繁つてゐる植物の間を潜つた。

坂道の途中には荷を負ふた人夫の爲の高い腰掛が設けてあつた。ガントクに到る道半ばでル・ムズリエ氏に會ひ、ペンロン・ラ（Penlong la）の方に伸びてゐる尾根の上に建てたホワイト氏の家に案内してくれた。

この様な所で英國風な家を見て驚く。

ル・ムズリエ大尉夫妻の御蔭で詩的な環境の内にゆつくりと休めた事を感謝してゐる。窓からカンチエンジュンガが見えるなど山岳會の人なら誰でも歸りにガントクで幾日か過したいと考へるだらう。（p. 59）ホワイト氏が自分の家を建てる程長く一所に止つてゐたといふ事は實にいい。併し彼は唯快樂を求める様な所謂食運人ではない。彼は自分の治めてゐる地方は最も邊鄙な所にまで足跡を留め、カメラに収めてゐる。唯恨むべくは公に發表しなかつた事だ。

ガントクには現在シッキム王^{ラジヤ}の宮殿あり、主都である。北へ一日行程のトゥムロン（Tumlong）に地震が

あつて王宮が崩れて以來こちらに遷された。

私はこゝにシッキムの統治權や外交史を書かうとは思はなう。スチュアート・ベイリー卿（Sir Stewart Bayley）は之に關し詳しく述べて居る。

（p. 66）又大佐はシッキム官報の歴史欄に詳しく述べてゐる。こゝでは約百年間位の間に起つた主な事件の梗概を述べるに止めよう。

十九世紀の始（一八一七年）東印度株式會社は當時西藏人の統治してゐたシッキムにネパール人の侵入するのを防がうとした。この頃より會社はシッキム地方に主權を得る様になつた。一八三五年王^{ラジヤ}はダーズリン地方を譲られた。一八四八年キャンベル博士（Dr. Campbell）と J・フーカー卿はシッキム政府總理の名で逮捕された。會社では之を口實に更に一地方の合併を行はうとしたが意外に頑強であつたばかりでなく犯人をかくまつたりした。一八六一年軍隊を差し向けトゥムロンから首府にまで入り統治權を確保するに到つた。

一八七三年 J・ウ・ア・ハドガー卿 (Sir J. Ware-Edgar)

が長官代理となつた。(p. 61) 彼の政策で西藏國境の
ジェレブ・ラ (Jelep La) に到る馬道が造られた。

一八七五年現在の王の王位繼承を許した。八〇年代
に到るまで暫く平穩であつたが、一八八四年コルマン・
マコーレイ (Colman Macaulay) 財政部長は西藏との
通商條約を結ぼうとした。翌年北京政府の許可を得て
政治並に科學使節をラサ (Lhasa) に派遣し、又土人商
人の入國許可を得た。翌年使節團はダージリンに集つ
たが、當局は西藏との關係は拋棄するとかでそのまゝ
になつた。西藏側は之を見て相手を見くびり兵を進め
て來たのが一八八八年の紛争となつた。戰鬪はグルカ
兵により一四、〇〇〇呎の高度で行はれた。

(p. 62) この戦の行はれた地方に關し今少し詳しく述
べて見よう。ティースタ河とその東にあるアンモ河
(Anno Chu) との間には南北に走る尾根がある。ア
ンモ河の上流はチュンビ (Chumbi) 谷といつて現在で
は西藏領である。所がシッキムからこのチュンビ谷に

出るにはアンモ河の下流がブータン領に入つて居る爲
にこの河を溯ることをせず、専らティースタ溪谷をの
ぼつて高い峠を越えるのが常である。ジェレブ・ラ
(Jelep La 一四、五九〇呎) はその一つであり、印度と
ラサを結ぶ最短コースである。従つて戦の最も激しか
つたのもこの峠である。

峠はすぐ下のシッキム王の避暑地であるチュンビの
谷に臨んでゐる。ルイス氏のいつた如くこゝはヒマラ
ヤのエンガチンだ。(p. 63) 雨量はシッキムの八分の一
位、九、〇〇〇呎の高度にも拘らず暖かで乾いてゐる。
一哩幅位の谷で洲の多い川が中央を流れてゐる。麥畑
あり牧場あり、果樹も豊かで魚も釣れる。四圍の山々
は雪を戴いて、すべてが幸福にひたつてゐる様な所だ。
當時支那は強國と思はれてゐた。従つて友好關係を
結び正當なりと雖も合併によりラサへの一步などと思
はれない様に無私の慈善行爲に出た。併し間もなく東
洋では弱者のみが强者に對して慈善的行爲をするのだ
とわかつた。(p. 64) 西藏は印度との通商條約を無視し

開國を肯じなかつた。五十年前のJ・フリーカー卿の豫言こそ正に當つてゐた。

曰く『彼等同士ですら對等な友誼の内に生活し得ぬ者がどうしたつて我々とうまく沿つて行けるものではない。印度政府程平和を欲してゐる政府はないのに印度では尊敬を強要し、條約は最も些細な事までも几帳面に勵行を強制しなければそれは得られない。』と

この小紛争後西藏はもうシッキムに乗り出さうとはしなくなつた。

そこでシッキム王は血を受けた國と縁を切り英國に屬する事となつた。併し之は彼の望む所でなかつたので一八九二年夫人並に従者を伴つてカンチエンジュンガの南シンカリラ尾根を越えてネパールに逃亡した。

(p. 66) 越境は成功したがネパール當局によりダーズリンへ送還され兩人共ダーズリン近くのクルシオン(Kushion)に國事犯者として三年居住する様命ぜられた。一八九六年漸く英國の保護の下にダーズリンに遷つて再び治める事を許された。

この數年の間にシッキムには橋をかけ道路をよくし色々國を開くことに努めたが、西藏との交渉は例の事件で『大しくじり』に終つた。國境も不明であり、通商關係も著しく鈍つて殆んど零に近くなつてゐた。大佐は之は支那政府の仕業だといつてゐるが、私の聞いた所では喇嘛僧の他に豪商が居て專賣權を保持しようとする者がある事、(p. 66) 結局西藏の民衆よりはさうした人々が鎖國を望んでゐる事にあるらしい。

印度政府がかやうな態度に出た事は意外に見えるが、之は黃禍説に左右されたものである。日清戰役まで支那は物凄い侵略國と見なされてゐた。當時ビルマとの國境の事件の爲西藏は犠牲に付されねばならなかつた。この爲幾度も侵略されて辛い思ひをしなければならなかつた。

この問題に注意して居た人ならば漸く外交折衝も可能な時機の近く到來する事は信じられやう。(p. 66) 我々は侵略は防いだが未だその利福を刈りとつてゐない。加之不徹底な我々の行爲は益々ラサ當局の人に支

那が頼れない場合は他の主権の庇護の下に我々に抗すべきを信ぜしめる恐れがある。一方セントピイタアスブルグ政府はその魔手を伸ばしてゐるではないか。

この問題は印度當局の玄人にすら難解である。忍耐強く、聰明にはたらし特に終始一貫してゐる事が必要である。交通を便ならしめ、絶えず西藏人と交渉し得る如くする等爲すべき事は多い。

(p. 66) 先の條約の履行をさせるには西藏並に支那政府に我々が本氣でやつてゐる事を信じさせねばならない。それには先づチュンビの谷の如きを占領し、その獨立を保證しないといふ態度に出る事だ。

ガントクで最も目立つものは古い佛寺 (Inchi Gampa) でロングリ河 (Rongli Chu) の流れる谷より三、〇〇〇呎上つた尾根の上にある。(p. 69) その玄關には大きな地藏車が置いてある。黄、赤、緑、白の四神の恐ろしい姿が壁に描かれてある。二列の木柱が立つてゐる廣間にも様々な神が描かれてあるが、白獅子に跨つたカンチエンジュンガの鬼神が一番凄みがある。柱や

梁は朱塗で蓮の花の飾がついてゐる。戸口と反對側の所には佛像が列べられてあつた。黄色い衣の僧は我々に寺の中を見せるのを得意としてゐる様だつた。

官邸の後の小丘の上に出ると雪の山が見える。左手目の前にナルシン (Narsing) 山が低いが美しい姿を横たえてゐる。灰色の岩山の上にパンディム (Pandim) が聳え、中央に一段と高くカンチエンジュンガの稜線が屹立してゐて (p. 70) 登山家には仲々面白い景色だ。

シムヴォヴォンチュム (Simvorochum) 通稱シムウ (Simvu) (二一三〇呎) は三つの雪の頂を有する魅力的な山だ。その東側には廣い萬年雪の斜面があつて、タールン谷の一支脈となつてゐる。そこにある鞍部に ついてタンナー大佐 (Colonel Tanner) は「一七、三〇〇呎位でゼムへ出る爲に土人のよく越えるもの」であるといつてゐるが、又「南斜面には所々にのみ残雪あり」等いつてゐるからユムツォ・ラの峠と混同してゐるのだらう。

この鞍部から岩を頂とする途方もない尖峰が聳えて

ゐる。(p. 71)がシニオルチュム (Siniolchum) である。夜明、先づ一番に朝陽を受けようとしてゐるかの如く銀の槍の頭を天高く衝いてゐる。この素晴らしい峰は處女峰として今聳えてゐる如く、まだ數年に近寄り得まい。東又は北からこの山の優雅な姿を見た者にとつては忘れようとしても忘れられないものだ。

一體にガントクからの景色はダージリンのその如く山から餘りに遠過ぎる。

私は毎朝霧の昇る前に早く起き出て朝陽の美しさを拜まうとした。併し寫眞は遂に成功しなかつた。

(p. 73)荷物の事や人夫達の靴、眼鏡等の監督で忙しい日を過す。時々ラサに行く徒歩旅行者の畫の様な姿に慰められた。

王と女王との茶會を二回催し、面白い日を過した。初めの時は蒙古人の中年の王は眞赤な衣を着て美装した馬に跨つて來た。その後から女王が轎にのつて來た。従者や小姓はそのあとから續いた。空にはカンチュンジュンガとシニオルチュムが夕映して浮んでゐた。ま

るで夢の様な一時だつた。

翌日は王に呼ばれて假御殿に招かれた。(p. 73)朝臣達には皆御目見えを給はつた。パミオンチ (Pamionchi) の喇嘛僧で、その他豹の皮を着た人、黒髪の小さな女、倫敦を見たいといふ嗣子等々。通譯を通じての談話は限られたものではあつたが、女王は愛想よく微笑んで居た。

ベンガル政府はシッキムの爲に一際目立つ様な立派な新宮殿を建てた。壁は黒つばい石で造り、玄關の上はバルコニーになつてゐて下の庭で舞ふ惡魔の踊を觀覽出来る様になつてゐる。閱見室の柱は重くアッシリア風だ。細部には西藏建築の様式をとり入れ仲々面白い。(p. 74)私がガントクに居た頃には未だ完成して居らず西藏から壁畫描きを呼ぶかどうか問題となつてゐた。

今度の遠征の爲英國で用意出来るだけの事はして來た。例へばワインバー天幕、鹽、砂糖に到るまでの一日の食糧を一つ／＼包む様な事は出來てゐたが、人夫

の天幕、人夫の食糧その他の裝備を整へなければならなかつた。

シッキムの交通機關は極く幼稚で、最近でも馬の通れる道すら少い位である。従つて荷は人夫に依らざるを得ないが、之の召集に時間がかゝり、而も氣に喰はねば逃げる、一〇哩以上の行程は拒む等實に煩雜である。出發は午前十時が普通となつてゐてヒマラヤの高所を多く踏破したウォークマン (Workman) 夫妻の如く早立をしようとすれば人夫に逃げられるのである。

(p. 15) 我々は幸にもル・ムズリエ大尉の援助でこの様な目には會はなかつた。又ドーヴァ氏の如く土地と方言に通じてゐる人の親切がなかつたならば、ゼム氷河以北には行かれなかつたかも知れない。

又アール氏の推薦で頑強な人夫を雇ひ首長^{サグイ}を一人つけて貰つた。ル・ムズリエ大尉も人夫を選んで之にも首長^{サグイ}を一人つけて貰つた。ダージリンの人は多くブチア人であり、村の人は多くレブチャ人である。後者は

弱々しい様な體をしてゐるが決して前者に負けてはゐない。ゼム氷河に出た頃には五十人も居たが、食糧が減るに従つて人數も減らされた。

又シッキムのグルカ警官六名を伴ひ、カンチエンジュンガ以北の危険地域通過に備えた。

(p. 16) ダージリンからガントクへ我々がとつた道は最短のものではなかつた。谷に沿ふて強行すれば二日で行ける。併し雨期の終りに而も旅行に馴れてゐないから不健康な谷を通つて熱病などにかゝるのを防がうと思つた。この點では成功し不運な先縦者の如く熱病にも蛭にも、毒虫にも悩まされずに済んだ。

第五章 ティースタ (Teesta) 谿谷

(p. 17) ガントク、トゥムロンを経てティースタ河の上流に到る道はひどく峻しい廻り道である。之は元、村と村とを結びつけてゐた道を擴張したからで、海拔六—七、〇〇〇呎の峠を越えたかと思ふと二、〇〇〇呎位の谷底まで下る有様だ。金をかけても馬道を本流

に沿つて作つた方が有効であつたらう。技師であるホワイト氏を攻めるわけではないが、先の事を考へた場合今のまゝでやるのと前金でシッキム經濟を補つたのとどちらがよいだらうか。(p. 78) 一地方のみの問題ではない。國境に到るいゝ交通路が出来ればどれだけ距離が縮められ、時間的にも努力の上でも節約出来ることか。現在ではティースタにかゝる橋は海拔七〇〇呎にありチュンタン(Chungtang)村は五、〇七〇呎にある。而も之に到るには一七、〇〇〇呎の登坂を四つも越えねばならない。

今の國境地區の地圖にはこの様な道の高さが載つてゐないので旅行者或は將校にとつて一日の行程を決め様がない。

ル・ムズリエ夫妻は本道と別れるラチェン(Lachen)まで同行して下さつた。この間僅か五〇哩だが習慣的に五日の行程となつてゐる。乃ち途中の旅舎レストハウスに一泊づつして行くわけであるが、我々の様な大部隊では一時に泊れないのでセラ氏はドーヴァ氏と共に人夫半分と

一晝夜先に立つ事になつた。

(p. 79) 第二隊は九月十三日降り續くしと雨の中を出掛けた。ペンロン・ラの峠(Penlong la 六、二五〇呎)に到る緩かな坂道は熱帶的な鬱蒼と茂つた森林で所々狭い峡谷になつてゐた。カンチェンジュンガやシニオルチュムのありかは先づ高い積雲がそれを示してゐた。谷向ふの斜面には焼き拂はれた密林に人の手が入つて行く事を暗示してゐるかの様に淡い煙が細々とのぼつてゐた。

この様な開墾は多くは土人、特にネパール人の手に依つて行はれてゐる。印度政府は土人の領地内に英人の茶園を造る事を許可しないのだがレプチャ人は怠者であるために、(p. 80) こちらで色々努力はして見たが結局彼等は祖先傳來の土地をも次々とネパール人の手に渡してしまふ様だ。

峠に立つたが別に新しい景色には接しなかつた。道はやゝ急になる。人家と覺しきものはあちこちに散在して見える茶色の小屋だけだ。三、五五〇呎下つてディ

ク・チュ (Dik Chu) の河の急流に出る。兩岸には温室の鉢にでもありさうな珍らしい木々に色とり／＼な花が咲いてゐる。こゝからの登りは梯子といった方がよい程に急だ。

ヒマラヤへ初めて来た我々には四十五度に傾いた馬の鞍の上にあるよりは歩く方が遙かに樂だ。登るにつれて暑い蒸氣は雨にかはり、ラブロン (Labron) の僧院の前を過ぎた時はひどいどしや降りだつた。

(p. 8) 御蔭で僧侶達は笛や太鼓を叩いて迎へてくれただけで例のマルワを受けずに済んだ。

こゝより半哩で、三室浴室付、ベランダ及び納屋の備へあり」と案内記に記されたバンガローに着く。所が私の日記には「ぐら／＼する寢床、毀れかけた椅子、片の様な瀬戸物のあるしづが伏屋の類」とある。この様に荒れ果てるには確かに氣候の關係もあらうが、番人のよし惡しに依る事も確かである。もし村長と近くの僧院の長が責任を持つたならばこれ程でもあるまい。

私がこの様な贅澤をいふのは僭越と思ふ讀者も居られるだらう。併しそれは切角地方官の骨折られた事が、不行届の爲に水泡に歸する事を憂ふるの餘りに過ぎない。現今のまゝではいゝ所に氣持ちのよい宿泊所を拵えようとして居られるホワイト氏の盡力も無に歸してしまふのではあるまいか。

(p. 8) 私はアルプスの小屋にも、コーカサスの茅屋にも或は岩小屋に、冷たい堆石の上にも寝た事がある。こゝで私は決して辛い事に對して文句をいふ氣はない。

この様な事をいふのは私ばかりではない。J・フリーカー卿はダージリン近くの一旅舎について『私の見た最も醜いもの、スキス風の住居にゴチック様式を入れ無下に不便で不快極まる建物。冷い壁に甲虫がぶら下つてゐたので早速壁に收めて置いた云々。』とあるが、甲虫を見付けた自然科學者こそ幸なれ。

雨は降り續いたが、寺まで行つてお茶にしようと思つて歩き續けた。ラブロンの僧院は典型的な佛寺で水

はけのよい尾根の上に建つてゐる。(p. 83)僧侶達は旗竿のたち列んだ草葺屋に住つてゐる。この家々の奥にガントクと大體同じ様な神殿がある。この近くのトゥムロンの部落は曩にはシッキムの首府であつたが今は地震に壊れた宮殿の壁と百姓家が幾つか散在するに過ぎない。

翌日も雨、瀧の様な雨だ。ロンドンで始めてホワイト氏に會つた時「終に雪を見ずに濟むかも知れない」といはれた事が思ひ出されて氣がふさぐ。

行手の道に關してオウコンナー大尉 (Captain O'Connor) は「雨後特に泥濘深く迂り易い徑」と案内書に記してゐる。高い尾根を巻いて行く徑からはタールンの谷やカンチエンジュンガの素晴らしい姿を望み得たらうに全く天候に禍ひされてしまつた。見えたものとは水の滴たる森の斜面、ティースタ溪谷の緑の深潭とそれに立ちこめた蒸氣だけだつた。このあたりは脆い雲母や片岩なので、動く斜面といひたい程だ。(p. 84) 泥が流れるばかりでなく石も時々不氣味な迂り方をし

てゐた。併し人馬共に事故も起さずに通過出来たのだから、或はバリーの町中を馬で行くより危険は少いかも知れない。

これより先は所謂密林であるが、普通の森林と變りはない。この憂鬱な一日に今一つ記すべきはロンロン河 (Rongrong Chu) を渡つた事である。橋から下に渦巻きしぶきをとばして奔流する川を見てふと詩人ソージー (Souhey) の一句を思ひ出した。

「まあなんとロドアの瀧には水が流れて来るのだらう。」

私がかつて英國カンパerlandのロドアの瀧へ行つた時には殆んど水はなかつたが、その瀧の爲に歌はれた形容詞は皆このロンロン河の事をいつてゐる様に思へた。

サマテク (Samatek) はどの案内記にも申し合はせた様に素晴らしい景色の所と書いてゐる。(p. 85) さうかも知れぬ、併し私の頭には乾し物の事と幾重にも重つた尾根が遠くは次第に青味を帯び、上部が密雲に閉さ

れた谷の景色しか残つてゐない。

サマテクの旅舎は森の中の一軒家で、川から大分上つてゐる。下方に我々の案内人リンシンが長をしてゐる部落がある。又冒險的な英婦人二名が宣教の目的でこゝに數年來落ちついてゐるとか。

こゝからタールン谿谷を経てグイチャ・ラ (Cincha) からカンチエンジュンガの東面に到る悪い徑が出てゐる。その少し北にはタールンの僧院を経てユムツォ・ラの峠からゼムの谷へ出る徑がある。我々は更にラチェン地方への道を進みその方からゼムに入る事にした。

サマテクを過ぎると北へ進んで居たティースタ河は東北に折れ、景色もかはり、山が近くなつた事を感じさせる。(p. 86) 荒々しい岩の尾根が森林地帯から抜け出して聳えてゐる。凹地を流れる激流のしぶきはあたり一面に生ひ茂つた密林の緑の葉にふり注ぎ木の股、洞には蘭やその他の寄木が咲き亂れてゐる。風の死んだ暑い灰色の一日、竹や芭蕉の下を馬で行く。下り坂

七哩を一日の行程としては人夫達にも短か過ぎるのでトゥーンの旅舎 (Toong) は晝飯に一寸休んだだけで六哩先のチュンタン (Chungtang) の部落まで行く事にした。

幾つかデグザグを切つて道はティースタにかけた鐵橋を渡つてから右岸に沿ふて部落に出る。植物はがらりと變つてベゴニヤやしもつけ草に代つていきいちごやアネモネ等が咲いてゐる。(p. 87) 歐洲で見る様な植物も顯はれ、水松や山躑躅が森の姿をすつかりかへてしまつた。チュンタン (Chungtang 五、〇七〇呎) に着く頃には天候もやや恢復して來た。こゝはラチェン、ラチェン兩谿谷の出合にあり戰略上、政治上重要な據點である。かつてはこゝの僧院まで西藏の勢力が喰ひ込んでゐてこゝの住持は川の上流地方の司法權を有してゐた。今では撤廢されて空いた二階は稀にある旅行者の旅舎といつた俗事の爲に用ひられてゐる。

ラチェン、ラチェン兩河は沼狀の濕原で合流してゐる。そしてそこにある截り立つた岩壁の上にチュンタ

ンの村がある。ガーウッドは蝶を追ふ事が好きで下の草原で大分捕つて來たが、蛭にやられた。(p. 88)併し我々一行は踏み固められた道を通つてゐる限り蛭にはやられなかつた。

翌朝目醒めた時は太陽は既に高くラチュンの谷の東奥に聳える尖峰を輝かしてゐた。氷河の見えた時の喜び、いよゝ目的の雪の山に來たのだ。ガーウッドと二人でラチュンの谷を出来るだけ奥まで馬で行つて見る事にした。二哩も行かぬに川の岐路に出來た高い土手と深い溝に行手を阻まれ、馬丁を残して歩く事にした。川の物凄い流を見てゐるとJ・フーカー卿の愛犬がこのあたりの釣橋から落ちた事などが思ひ出された。暫くして再び垂直な岩と渦巻く淵に道はぶつかつた。連れの土人が葡萄の卷鬚ツルを持つて來たので岩を攀ぢて越えた。(p. 88)その先は籤ツルの中を漕いで、ちよろ／＼流れる小川に出て木蔭で晝飯にした。なほ私は一人で昔の氷河の末端と覺しき堆石の上に登つて見た。行手程遠からぬ所に一際大きな村があつたがラチュン

の村であつたらう。晴れて暑い一日だつた。

翌日からの行程であるラチュンの谷を登る道はその姉妹谷のラチュンのそれよりずつと荒れてゐた。ホワイト氏の盡力により新しい徑がつけられ釣橋がかけられるまで、この地方は寧ろ西藏に繋つてゐた様な有様だつた。

(p. 90)その夜は又雨で、翌朝まで霧が滯つてゐた。チュンタンまでの徑は詩的であつたに反し、これから次第に荒い凄い所となつて行く。カンチエンジュンガの北側の氷河から流れて來る水の刻つた谷は深いV型を描いてゐる。山の斜面が一般に凸型に見えるのはその樹木の爲ではあるまいか。

政治組織の景色に及ぼす影響について一章をなす程書く事があらう。(p. 91)例へば谷は堀によつて區切られ川には堤が築かれ森林は經濟的に手入れされる等民主主義は畫の様な景色の美しさに對しては敵である。スコットランドの方がスミスより野趣がある。ピレネー山中の樹は自然のまゝに茂つてゐる。中央コーカサ

スでは人の存在は山を益々大きく見せる。シッキムでは人が居ないのが特徴だ。詩情、變化、原始的な有様等の點では丁度スキスと反對だ。

東ヒマラヤでは雪線に到るに嚴肅な杉の代りに豐饒な森林があり、アルプスから來た人々の目には異様に映る。チュンタンの上一三哩の長途森林は亞熱帶的な所が次第に失はれて行く。三—四〇呎もあらう躑躅が赤い幹をのぼしてゐる。(p. 36) 針葉樹のえぞ松、唐檜、樅、ヒマラヤ杉が落葉松の上に聳えてゐる。更に常夏の地を出た事を知らせるかの様に秋風が吹いて森に華やかな色を見せてゐた。

左岸(東側)に沿ふた道は高く上つたり下りたりしてゐて、馬には辛過ぎる位の階段徑だ。

時々しぶきを立てゝ流れる激流を渡る、川の中の岩すら苔に蔽はれてゐる程綠色に圍まれて滔々と流れてゐる様は實に目に涼しい。

テイススタ溪谷が極くせまつた所に釣橋が懸つてゐた。その針金に旅の安全を祈る色のついた布や紙片が

結んであるのも西藏國境の近くなつたことを感じさせる。(p. 36) 大きな顔で厚い衣を着た徒步旅行者の幾人かに會つた。我々に會ふと舌を出して心から挨拶して行つた。

橋から二哩、森を後にジグザグを切つて峻崖を登る。案内記の所謂「急な悪い濕つぽい」所である。こゝで峡谷は終つて谷はずつと廣くなり、全然人の手の觸れた事もない草原に高山植物が既に花盛りもすんで種を結んでゐた。晴天でありさへすれば南方の谿谷を見下ろす壯觀と共に又谷の奥には銀嶺の白く輝いて見える事であらう。こゝにしっかりとした旅舎を建てれば立派な靜養地となるに違ひない。又ゼム谿谷を溯れば一日行程にして氷河に到り得る。(p. 37) 我々は更にお花畑の間を進み櫛や落葉松の一群に沿ふて曲り、ラムテン(Lamteng)の僧院又は通常ラチェン(Lachen)と呼ばれてゐる部落に落ちついた。

第六章 ゼム (Zemu) の谿谷と氷河

(p. 96) 屋根の下で寝る最後の晩、もう雨も續くまいと他愛もない事を信じて樂しく過す。村の人は唯グルカ兵がゼム氷河に到る徑を切り開いてゐるとしか傳へてくれない。がこれで五十年前 J・フーカー卿の行手を阻み、ロバート氏の測量を妨げた密林を抜けられるわけだ。

情容赦もなく夜中雨が降つた。しつとりとした霧は山に沿つて低く垂れてゐた。屋根にも、道路にも別れを告げて、大自然の原始生活の中にとび込む用意も覺悟も出来てはゐたが、(p. 96) いつもの様に馬道を捨ててピッケルを握る時のあのうき／＼した喜びは大幅に減じられてゐた。

焚火を圍んでル・ムズリエ大尉夫妻とお別れの朝飯を済ませた。御兩人はその後一週間も我々の爲にラチェン村に留り、手紙や新聞に到るまでを色々と送つて下さつた。併し何といつても未開の地や雪の所に入るに

當つて人夫が逃げ出すのを喰ひ止める事は一番の難事だつた。

第一回の五十人許りの人夫の勢揃ひは、天氣が悪かつたが印象的なものだつた。傘をささずに小枝を編んだものを冠つてゐるので防火簾に足が生えた様だ。長^サ達は一風變つた三角の帽子をかぶり、赤と緑の布の靴をはいて整列をさせてゐた。佛像か祈禱文の書いてある小さな銀のお守護を首にかけてゐる。人夫はテイースタ溪谷から來たレプチャ人、ダージリンから來たブチア人それにラチェンの西藏人達である。

この人夫達を送り出して我々は馬でゼム・サムドン (Zemu Sandong) の橋まで行く事にした。こゝで西藏のギャゴン (Giagong) に到る馬道と別れる。(p. 97) ギャゴンは分水嶺の南側キンチンジャー (Kinchinjow) とチョミオモ (Chomionio) の尾根に挟まれてテイースタ河の源泉に當つてゐる。條件上は西藏領ではないのだが、英當局が黙つてゐれば西藏より來り住み込んでその住んだ年限を以てその土地を占領する口實とし

てゐる。

二哩も行つた時水と石がぶつかる異様な音が聞えた。ちよろ／＼と流れてゐた小川の水がふえて泥や礫を流し出した。ほんの僅かの間に崖が崩れてもう馬が通れない程になつてしまつた。先頭は早速ビッケルで人夫の通れる道を拵へた。

ゼムの橋は肘木橋(カシゲリキ)のしつかりしたもので、前にＪ・フーカー卿が清國との國境を示す紐が張つてあるのを見付けたのはこゝである。西藏は最近又こゝまで領土を伸さうとしてゐる。(p. 96) 一八九二年には事を起さぬ様遠征を禁じてゐたが、昨年(一九〇二年)意を決してホワイト氏は自らローナク(Lhonak)地方に探險に出掛けた。

密林は餘り快いものではなかつた。先行させたグルカ人の道しるべが漸く認め得る有様だ。相變らず霏霏たる霖雨、ぬれた枝に顔を撫でられ、石に沁り泥にはまる。斜面は急であり大木にさえぎられてあたりは暗い。川の音のみ單調に耳に響く。午後になつて谷の

別れ目まで來た。北に急な澤はローナク(Lhonak)に到るものであり西に向つたのは直接ゼム氷河からカンチエンジュンガに續くものである。Ｊ・フーカー卿はこゝに露營し木々の花の咲き亂れる森の春の美しさを味はつてゐる。(p. 96) 左に道をとリ間もなくローナクとゼム川の出合に出る。

日のまだ高い内にＪ・フーカー卿の第二の露營地も過ぎ、一寸した林間の空地に出た。煙が這ふ様にして登つてゐる。先發隊の露營地だ。我々も小さなテントを張つてやつと體を乾せた。この傍にラチエンの百姓の建てた小屋があつた。近頃土人は冬食物として食べる海芋百合の根を掘りにこゝまで入るさうだ。翌日それが貯藏してある所を見た。餘りうまいものではない。

この夜も亦雨、朝になつて霧。時々時間には樹の生ひ茂つた斜面、裸の岩肌などが青くもの凄く大きくぼんやり浮び出る事があつた。(p. 100) 進むにつれて谷は荒れて行く。先頭はわけもなくがむしやらに急な

斜面を上つたり下りたりした。トゥムラチン河(Tum-rachen Chu)の流に行手を阻れた。案内人は道に迷ひ迷ひして漸く渡るを得て再び本流に戻る。こゝに橋がかゝつてゐたがユムツォ・ラ(Yuntso la)よりの徑に續くのではあるまいか。左岸に沿ふて更に行く内人夫達が動かなくなつた。どんな行者でもねられさうもない急傾斜な所だがテントを張る。

谷が曲つてゐるので行手は見えない。正面には縞の入つた瀧、その上に雪崩道、更に氷河がかゝつて聳えて見えた。之がカンチエンジュンガ山塊の最東端の峰ラマ・アンドン(Lama Anden)の麓である。森は大部分疎らになり低い木々があちこちに生えてゐる。(p. 101)もう花の季節は過ぎてゐたが、實や種や、又紅葉した木の葉が秋の色どつてゐて決して單調な眺めではなかつた。躑躅の葉さへ青味を帯び、すき透つた様な雲の白い幕といひ、全くいゝ畫の題材だつた。

糠雨に續く糠雨はその夜も亦降つた。朝になつて人夫達の「足の生えた防火簾」はのそ〜と動き出した。

樅や他の大木が見えなくなると道は消えて恐しく滑な斜面に出る。草にかくれた石に躓きつゝ進む。屈曲點を過ぎると堆石を一ばいかぶり大きな口をあいてゐる氷河の有様に催眠術にかゝつた様に興奮させられた。その上の雪の斜面は見えなかつた。がまゝよ今はカンチエンジュンガの氷河まで行きつけた事だけで満足だつた。堆石の土堤はエンガデンのとそつくりだ。

ゼム河又はボキ河(Poki Chu)の源泉に立つた。行手の北の斜面は石で擦り減らされた様になつてゐた。(p. 102)之に反して南側シニオルチュム山塊と堆石との間には少しばかり平地があつた。併しホワイト氏のいはれた雪の橋は既に落ちてゐて渡れない。

來た道に戻る憂さを考へてゐるとき、昨日川の途中に見た上部が殆んど觸れ合つてゐる様な巨石があつた事を思ひ出した。そしてこの岩の隙に石をつめ、木を渡して渡る事を得た。支那服のリンシンは岩の上で怒鳴つてゐた。對岸の巨石は切り立つてゐた爲、鳥の群の様に皆鈴生りになつて立止つた。(p. 103)石を積み

上げ、綱を手係りにして長い事かゝり漸く全員右岸に遷れた。犂牛の通つた跡がまだ鮮かに残つてゐた。これはタールン溪谷より西藏に續く足跡で、ユムツォラを始めタンチュン・ラ (Thangchung la) 、テ・ラ (The la) の三つの尾根の峠を越え更にナク・ラ (Naku la) を越えるのである。もし之をティースタ河に沿ふて行けばカングラ・ラ・ラ (Kangra Lama la) なる峠一つで同じ地方に出られる。所がシッキム地方では森林地帯の上の高い所よりは、夏の間雨の多い削り、掘られた谿谷の方が、絶えず地這りをして危険なのである。それで『一番遠廻りして、一番急な所を登るのが、一番の近道』といふ結果になるのだ。

(p. 104) この特別の徑は西藏より鹽を出し、代りに材木を運び込む爲のものである。この道はゼム氷河の先端を越えて行く。幽かな急な徑に沿つて登る。古い堆石地の草の間を縫つて上に出た。人夫達がそこに着いた時は氷河を渡るには既に遅かつた。

野營するいゝ所はなかつたが、岩の尾根と尾根の間

の一寸した凹地の水溜を排水し、石を除いてやつとテントを張つた。河から一、五〇〇呎の上流、高度は二三、九〇〇呎である。ガールウッドの他は皆元氣であつた。日没に天氣はやゝよくなり、翌朝テントの垂れをのけて見たものは青空と銀色の鋸状の山稜だつた。靴をつつかけて堆石をかけ上つて見た。カンチェン・ジュンガは山端にかくれて見えなかつた。唯その北のネパール國境の稜線が見えてゐた。(p. 105) 一一、〇〇〇呎の鞍部はすぐわかつた。漸く運が向いて來た様だ。山の太陽は胸いつばいに希望を充ててくれる。

稜線を調べた後、全體を見廻はした。始めて接するヒマラヤの氷河。カンチェン・ジュンガから眞直に大波打つて流れて來る灰色の流れ、堆石は列をなさず四方に散らばつてゐる。南を區切る雪嶺はシニオルチュムより出てゐる支稜、北にはタンチュン・ラの下の方の岩の斜面が境をなしてゐた。幅一哩位に涉り大部分石屑に蔽はれてゐるが、所々白い氷を見せて、動かなくなつた堆石の上に居るのではないことを證してゐる。

(p. 106) 畫家は或はその反對側の谷の方の景色を好むかも知れない。そこには煙の立ちのぼる白いテントの影が池にうつり、遠くラチェンとラチェンの間に聳える雪の頂は朝日に映えてゐる。

もし相當の案内人を連れてゐたら犂^ヤ牛の道に沿つて氷河を渡る所だつたが我々の先頭はむしろ樂なこちらの溝にそつて溯つた。いつの間にか時が經つて、午後漸く支流との出合に出た。當然氷河を渡らねばならぬが、生憎又霧にまかれた。隊員全部をまとめて行く事に苦心しながら氷の斜面を渡り土堤を越えて對岸に降り立つた。

(p. 107) 山と堆石地の間に又小川のある凹地を見出した、この川は少し下で氷河の下に流れ込んでしまふ。テントが張れると今後の計劃をたてた。始めての雪で人夫達の内には怠者や役に立たなくなつた者もありするので優秀なもの十二名を選び、早速偵察を行ふ爲に二隊に別ける事となつた。ドーヴァ氏はベースキャンプに残る事となつた。

翌日も霧だつたが、温度も濕度も下の森林地帯よりは氣持がよかつた。

左に大きな鐵道線路の土手の様な堆石、右には凹み毎に氷河の懸つた山の急斜面、そしてこゝには高山植物が咲いてゐた。(p. 108) 廣い緩かな斜面を登ると所謂「マイダン (Maidan)」と呼ばれる草地に出る。

ホフマン (Hofmann) 氏の言ふ山池は見當らなかつたが、いかにもその様なものゝありさうな所だ。一五、一三九呎にテントを張る。

隱忍持久の甲斐あつて、その翌朝はカンチエンジュンガを差し向ひに見る事が出來た。セラ氏は早速寫眞を撮りにかゝつた。ガーウッドは山羊を追ひに出掛けた。併し今度の旅では狩獵の様な遊びは食糧補充の外はやらない事にして來たのだ。

(p. 109) 既に冬眠に入つたのかこのあたりでモルモットは見かけなかつたが、尻尾のない鼠の様な獸が居た。

一方その日私はマキニヤと出来るだけ高い所まで登

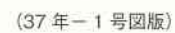
Ed. J. ガーウッド*

+ 測量地

..... 道 程



o Camps + Stations of observation
Route



つて、更に高所に露营地を見出し、又ネパールに出る二一、〇〇〇呎の鞍部へ出る道は人夫に通れるかどうか、カンチエンジュンガの西部に出る他の道ありや、及びカンチエンジュンガの東にある一九、三〇〇呎の鞍部は登攀可能なりやを調べた。

扇形の堆石に沿ふて登る。ゴルフ場にはもつて來いの廣場だ。ダージリンの斜面は急過ぎるから何れゼム氷河の上に俱樂部が建つ事だらう。

(p. 110) 咲き亂れてゐる高山植物、丁度舊友に手を擴げて迎へられる様に嬉しい。聽て Hoffman 氏の池に出た。山小屋を建てるにこれ程よい所があらうか。薪も豊富だし、登攀にはいくらでも面白い所がある。

池の上の岸を傳ひ氷河にうつり、ゼムと北西の一大支流との出合ひの岩に向つた。この氷河をグリーン・レーク (Green Lake) 氷河と呼ぼう。このあたり凹凸はあるが難路とはいへない。(p. 111) 歩みはのろい。目的の岩の少し手前で十分程休み四圍の山々を簡単にスケッチした。

中心は勿論カンチエンジュンガだ。三哩の奥、二三、〇〇〇呎の急斜面、直登路はどう考へても不可能の様だ。左右のバットレスは絶えず雪崩に洗はれてゐる。特に右手西の方シッキムとネパールの國境をなしてゐる尾根は長さ急さ到底アルプスの比ではない。その向ふ側も馬蹄型の崖があつてトウウィンス (Twins) と命名した二兒山とカンチエンジュンガとの間の尾根に登る事を阻んでゐる。

東にはダージリンから見た尾根が丁度逆になつて大きく一九、三〇〇呎の鞍部に落ちてゐる。更に手前にはシムヴの肩が聳えてゐる。(p. 112) ガントクから見た廣い鞍部からはシムヴとシニオルチュムに挟まれてゆつくり氷河が流れてゐる。北西に向ひ新しい景色が展開された。グリーン・レーク氷河は二一、〇〇〇呎の鞍部から小さな氷河とテント・ピーク (Tent Peak) と覺しきものから來る急なセラックを受けて流れてゐた。この後者は確かガントクの附近から鞍部を越して見たものだと思ふ。

ゼム、グリーン・レーク兩氷河の堆石の間の淵湖に下り、次に狭い漏斗狀の所を登る。長い狭い雪の廊下狀の谷が一九、三〇〇呎鞍部に續いてゐた。その二、〇〇〇呎ばかりの登りはクレバスは多いが易しさうだ。

(p. 113) テントを出てより四時間で、カンチェンジュンガ直下から来る氷河と、トゥウィンスとの間の馬蹄から来る氷河との出會に出た。一七、〇〇〇呎位の所だつたらう、うまい晝飯を食べた。マキニヤは暑かつたので上衣を脱いでひるねをした。私はその間更に氷河をのぼつて見た。

山のひとり歩きは用心深い登山家の禁する所だ。だが、大自然の内に、唯一人で行く事、それが全然前人未踏である時、その魅力はたえ難い。十年程前コーカサスのディクタウ(Dyiktau)でその快味を得、今一段と大きなカンチェンジュンガの懷にとび込んだのだ。

かなりの間歩いてカンチェンジュンガの大支稜の麓の岩の所に立つた。一九、三〇〇呎鞍部とトゥウィンスとカンチェンジュンガの間の雪原を前後に眺められる

所だつた。(p. 114)

一九、三〇〇呎鞍部へ登るガレは決して急過ぎはしない。だが、之を越えてタールンの谷の方へ出るのは、後に知つた事だが、餘り思はしくない。地圖に低く書いてあるが、一八、〇〇〇呎は下らないと思へるシムヴの鞍部の方が越え易い様だ。この方に登りネパールへ入る道を探して見る事にした。

かうしてカンチェンジュンガ山塊の前に、絶えず雪崩に洗はれた灰色の花崗岩の山壁、山稜の美しい曲線に眺め入つて感慨に耽つてゐる間に空模様が變つた。

山の姿はそのまゝに空一面にうすいヴェールがかゝつた。(p. 115) 濃い青は淡くなり、懸て灰色に、更に黄色味さへ帯びた。一九、三〇〇呎に出たいやな雲は一度消えたが、又あらはれてすつかりあたりをかくしてしまつた。氷河の上は風一つない無氣味さ、青ざめた太陽は虹の輪を描いてゐた。

土地の人の様に想像力の逞しい男だつたら、私もこの空を鬼神の怒と見たかも知れない。悪天候のあらゆ

る徴候は現はれてゐた。私は急いでマキニヤの所へ行き、凸凹な氷河の上をゆるす限り急いでテントに歸つた。氷河の出合のあたりから霧がまき出した。走る様にして草のある堆石地に駆け上る。(p. 116) 五分の後濃霧に巻かれ、雪は横に吹きつけ出した。細い流れのみを頼りにあと一哩をテントに向ふ。ダーズリン人夫長の叫び聲と共に布や傘をふりまはす強さうな男達の姿が日本の滑稽畫の様に見えた。我々は無言で砂糖菓子のように白い姿でテントにもぐり込んだ。こゝのテントはモンブランの頂上位の高さにあるのだ。

自分達のウィンパーテントは防水だつたし雪をうまく凌げた。雨期が止むとこの天候では全く情けない。翌日になつても唯灰色の闇。テントは次第々々に埋つて行く。(p. 117) 正午近く下から郵便物を持つて来てくれた。全く思ひがけない事だ。新聞にはドレイファス事件が載つてゐて、午後は仲間の伊國人との間に議論に花が咲いた。

人夫達も元気で、外での仕事が済むとテントに入つ

て笑ひ聲がしてゐた。我々が寢袋に入つてからも誰かの話聲が乳色の闇を通して聞えてゐた。

併し夜に入つて問題が起きた。非常な苦勞をして下から上つて來た數人の人夫は前日下した筈の人夫が未だ下に歸つてゐないと告げた。

土人は天候が悪くなるとよく岩小屋に遁げ込む事を知つてゐたので私はそれ程心配はしてゐなかつた。第一この闇では搜索隊を出しても無駄だ。(p. 118) 議論の末私が責任をとつて何もしない事に決めた。

日曜の晩はよくねられなかつた。一日運動をしなかつたのや、行方不明の人夫達、刻々埋つて行くテント等で頭がさえた。

夜中降り続けた雪は四十時間経つた月曜の朝になつてもまだ止みさうもない。テント附近は一米の積雪、退却せねばならぬ。下のテントまで道も易く雪崩の危険もないと思へた。

併し愈々片附けて出發までには相當な努力を要した。テントを掘り出したり荷物をまとめたりしなければ

ばならなかつた。(p. 118) 今度グリーン・レークへ行かれる人に、申し上げて置くが、あそこにビッケル一本その他が残つてゐる筈だ。

人夫の一隊を先にやつてラッセルをさせた。我々は荷物と一緒に奇妙な姿で列をなしてあとに続いた。辛いのろい行軍、一步一步膝までもぐりながら、時々は腹までも落ち込んだ。

突然霧が晴れてヒマラヤの巨峰が更に茫大なものに見えた。一面に光り輝く絶對の明るさで目が眩みさうだ。太陽の光は新雪の山々に反射し、霧にあたつて益益強い。氷の上に立ちながらこの時程暑さを烈しく感じた事はない。

人夫達も黒眼鏡をかけ顔に布を巻くやら、油と煤をぬりつけたり髪を前にたらしたりした。(p. 120) スピッツベルゲン服を着込んだガーウッドは一番惡條件に置かれてしまつた。

併しかうした厄介な事ばかりではなかつた。上から下まで眞白なカンチエングは夢の様な姿を青空

にくつきりと浮かばしては又消える。霧の様な暑い霧はそれでも次第に濃くなつた。新雪の中をながいて泳ぐ。

川の所には雪がなかつた。それで徒渉してもまだ足場に見える方がよいと川沿ひに下る。漸くにしてテント地に着く。行方不明の三人も着いてゐた。(p. 121) 頭痛はする、咽喉は痛む、而も日没と共に非常に寒い夜だつた。

當時我々はこの嵐はシッキム地方特有の造化の戲だと思つてゐた所、ヒマラヤ未曾有のひどいものでグリーン附近の家をかなり吹き倒したものだとなかつた。

グリーンでは土曜の午後二時頃雨が降り出し日曜の夕刻には土手崩が觀測臺の東の各所に起り、建物、道路、茶園等の損害甚大な上、町内で百名、近郊で四百名の死者を出した。

騒ぎをする新聞記者はこの事件を大々的に報道、我の事に及び、雪崩にさらはれたのを四〇哩の彼方よ

り見たといつてゐる。(p. 122) このニュースは更に倫敦にまで傳はつたので一時同情を呼びあつてゐた。

カルカッタの氣象臺で調べた所に依れば、嵐はベンガル灣より上陸、ダージリンに到り、最強となり雨量も一番多く、それよりティースタ溪谷を中心に北上ローナクの方へ抜けて消えたものださうである。

この氣象擾亂の直接の被害としてはガウウッドが三日ねこんだのと、セラ氏も私も顔に陽焼してひどく痛んだことだ。後にジョングリ(Jongri)で出迎への隊に會つた時「無事なれど負傷せり」と報じたとか。私は又唇も暑さ寒さにやられ、毎日の食事が苦痛の種だつた。

最も打撃の大きかつたのはゼム氷河にて登攀したり、鞍部を越える計劃を考へなほさねばならなくなつたことだ。(p. 123) 雪線は一八、〇〇〇から一四、〇〇〇に下つた。秋、アルプスに赴いた人ならば一米の新雪の降つた後に六、〇〇〇呎も登つて新しい峠を越える事の不可能な事がわかるだらう。まして五十人の人

夫を連れて行くに於いてをやである。そこで犂牛^{ヤク}の越える峠を過ぎり、リンシンの行つたといふジョンソン・ラ(Jonsong la)に行く事とした。

セラ氏には、ドーヴァ氏と共に人夫を幾人かつれてユムツォ・ラに戻り、ジョングリで落ち合つてもと話したが、やはり我々と行動を共にする事になつた。

九月廿六日の朝雲一つなく晴れて、今までの辛さも今後の面倒も忘れさせてくれた。四圍の銀世界には半埋れた川のせゝらぎと遠くで雪の沁り落ちる音ばかり。(p. 124) 前日の驚異的酷暑はもうすっかり消えて、これ以上望めない様な上天氣だ。

その日は大きな丸石の上で氣持よく過した。ガウウッドはリンシンと共に平板測器を出してゐた。翌日も晴、私はマキニヤとテントのすぐ後の山に登つた。テントから一、五〇〇呎の山の端で見晴しのよくきく所で休んだ。當時の雪の状態では山頂を極める事は望みうすだつた。

その時の美しい景色をこゝに描きつくすのも望みう

すの様だ。唯カンチュンジュンガとシニオルチュムとがアルプスでユングフラウとアッレツチホルンの様な位置にあつて、こちらはエッグスホルンから眺めてゐると思へばよい。

従つてシニオルチュムが景色の中心となつてその崇高な姿を見せてゐる。(p. 125) 二、五七〇呎ではあるが、その對稱な形、大きさの割合、谷の入り具合といひ山嶽建築の最も優美なものである。

ゼム氷河の上部から見では唯の針峰としか見えな。之に反してタンチュン・ラからはその全貌を収めて得て恰もエギュー・ヴニルトかダン・ブランシュを二倍の大きさにした様だ。そして斜面は雪と氷で飾り盡されてゐる。その間に灰色の岩が細く雪崩のあとを示して顯はれてゐる。凍つた雪底は餘りにも薄く、印度の強い太陽は透けて見えさうだ。(p. 126)

シニオルチュムこそ理想の山だ。

「遙けき彼方の靜寂に、

近寄れもせぬ奥の聖なる地に

この世はなれて神は坐す」

「近寄り得ない。」とは私の代にはさうかも知れない。だが、今後如何なる人が出て、ホーマーの時代の様に我こそはと名乗らんかも知れない。アルプスもコーカサスの處女峯もさうであつた様に。シムウとシニオルチュムの間から行けばかの山頂に立つてビスガ山の如き遠望を得るだらう。

シニオルチュムを近くにひかへては他の山は目をひかないが、他所にあつたら、小シニオルチュムでも、トゥウインスでもシュガーローフ(Sugarloaf)でも結構立派なものだ。(p. 127) 日が傾くにつれて南の谷間から流れて來た靄が僅かにカンチュンジュンガの廣い胴に帶を巻いてゐる。東に目を移せば廣い氷の流れが、足下を通つてゼムの森の中に落ち込んでゐる。こちらには鈍い雪を冠つたラマ・アンデンが背景となつてゐる。ラチュンとラチュンの間の岩山の向ふに西藏國境を越えてチモラリ(Chomolhari)が白く光つてゐる。

晴天二日、ゼム氷河は征服出來なくとも「來て見た」

とはいへよう。カンチエンジュンガを一巡するにはもうこゝを立たねばならぬ。宿のないばかりか住民すら居ない土地を旅するには持つてゐる食糧と共に計劃を立てねばならない。

第七章 ローナク (Lhonak)

(p. 128) J・フーカー卿のいはれる住居に適せぬ地に入る前にル・ムズリエ大尉にこの事をお知らせしたら色々な便りと一緒に別れの杯まで持つて來て下さった。

氷河に沿つて一哩足らず下つてから左手を九曲折に急に登る。こゝで嵐の時の陽に當つて以來具合の悪かつたガーウッドは終に一步も登れなくなつた。椅子を拵えて人夫に擔がせたがすぐ駄目になつてしまつた。

土人の野營する一寸した草の平地でどうしても泊らねばならなくなつた。(p. 129) チュマラリは再び美しく見えた。その半缺のドームは歐洲のオルトラー山塊から見たシマ・トザを思はせた。

ラウンド・カンチエンジュンガ抄譯 (吉阪)

夕焼を眺めながら愉快にその夜を過した。後にベンガル灣で見たもの程鮮かではなかつたがその夕方のヒマラヤの夕映は實に美しいものだつた。東の方に偽日沒の光が黃道光の様にうすく細く光るのがまるで別の光源があるかの様に見えた。

露營地は丁度雪線にあつた。翌朝ガーウッドも恢復したが、人夫達は相變らず出發が遅い。峠は約二時間位の所に見えて居たが、登るに隨つて退く山に欺かれ、加ふるに新雪に行手を妨げられた。(p. 130) シニオルチュムは依然目を喜ばし、後續部隊の先頭にはリンシンが絹の衣を着て傘をさして來る等繪の様な光景にはこと缺かない。

タンチュン・ラは幅の廣い峠で、傍らにまるで鳥の様な形の岩がある。又小さなケルンが幾つか積んであり、祈禱の旗が飾つてあつた。こゝより北方の眺めは特筆すべき程ではない。テ・ラ (The La) の長さ斜面と取るに足らない低い頂や氷河が三〇〇〇呎の深さの谷を取りかこんでゐるに過ぎぬ。

タンチュン・ラの北斜面はお花崗だらうが、我々は唯一面の雪の中を進んだ。途中ケルンと思ひ近附いて見れば大きな大黃の莖であつたりした。

もつともこれは一八八八年に英國の軍隊が敵兵と見誤つて射撃したとの事だ。(p. 131)

斜面は大變急で、膝まで雪の中に没しながらも重力の力で前へ進める程だつた。荷を負つた人夫達は重力がなほ大きいので困つてゐた。

漸く後れた一行も着き天幕を二つの流の合流點の下に張る。トゥムラチェン (Tumachen) の谷はネパール國境線まで出ない小さなものだ。こゝよりローナクにもゼムにも簡單に出られる。

翌朝襪を來た人夫達の點檢を行つた。(p. 132) グリーン・レークへ連れて行つたものゝ他は雪中行軍一日で如何に惨めな事になつてゐたかゞわかつた。

或る者は凍傷に、他の者は半ば雪盲にかゝつてゐた。然しその様な者ばかりではなかつた。ラチュンの酋長の息子はこの旅行に非常に興味を持ち、色々な道具の

使ひ方も早く覺えた。いゝ子だつたが今頃は村へ歸つてゐるだらうか。それともどこかの旦那の使用人になつてしまつただらうか。ダージリンで傭つた人夫にも元氣のいゝのが居た。レブチャ人は一寸弱々しいが面倒が少い。(p. 133) 連中は賃金が高いので總てを諦めて黙つてゐた。

點檢してゐる間に、頑丈さうなブチア人二人が舞臺へでも出したい様な顔をして寝て泣きじやくつてゐる。そんなのや、私が近づくと呼いて涙をこぼす者なものが居た。目を強くつむつて雪盲だと騒いでゐるのも居た。幾人かを解雇した。食糧も減つて來たので丁度いゝ。半日の休養をしてテ・ラの雪線迄行く事にした。

セラとガーウッドは別々に谷を登つて行つた。私も午後になつて人夫達の登つた方へ行つて見た。連中は私が居る事を知らない間は元氣に笑ひ乍ら行くが私を見ると魔術にかゝつた様に呻いたり倒れたりする。併しこちらが笑へば又皆子供の様に笑ふ。

(p. 134) 私の知つてゐる範圍の内の者にも、何とい

ふわけはないが何かにかこつけて無情な非人情な事をして召使ひを苦しめて喜んでゐる人がゐる。それで今度人夫達にははつきりと普通より待遇をよくしてあるのだといひきかせて置いた。仕事も半日程度の事に止めて置いた。その爲か或る時などは十時間も働いてくれて露營をせずに済んだこともあつた。病氣や凍傷の人はE・セラ氏の診察を受けた。唯出發が遅いのは困つたが一般に人夫長もほがらかにやつてくれたのは有難かつた。(p. 135) ドーヴツ氏はそれから一年後の手紙に私の使つた人夫達が『もう一度雪の所にぬるのが好きな不思議な旦那』と旅行したいといつてゐたと報じて來た。

テ・ラもタンチュン・ラと大差ない。臺地の様な廣い尾根が稜線の飾旗の道標までつゞいてゐる。願ればゼム、カンチェンジュンガ、シニオルチュムの尖頭がタンチュン・ラの白い肩の彼方に聳え、行手には新雪に蔽はれた緩かな斜面が、茶色の廣い、無毛の谷に續いてゐる。チョミオモ (Chomionmo) を除いては氷河

を戴く山の頂上も平である。

(p. 136) この景色の變り様はアルプスのヴァル・テリナからリヴィニョ地方へ出る時の様である。地圖や條約によつてカンチェンジュンガとチョミオモを繋ぐ稜線を國境と定めてあるにも拘らず、西藏はローナクを主張してゐる。地理的分水嶺は必ずしも人種的に界をなしてゐない。この地方一四、〇〇〇から六、〇〇〇呎の草原には定住者なく、カンバジヨング (Kambajong) 地方の西藏人がナク・ラ (Naku La) を越えて放牧に來るだけである。だが我々が計畫的にこの地に入つた爲、英領とはいひ乍ら問題の起る可能性は考へられた。

この地方の國境線の齟齬につき今少し詳しく述べよう。五十年前にはシッキムは西藏に屬し、従つて支那に屬してゐた。(p. 137) 一時は、ネパールやブータンの如く鎖國になりかけたが、幸にシッキムの長官が印度當局に保護下に置く計畫を實行させる様な刺戟を與へたのだつた。

併し乍らシッキム領はどこまであるかの問題が残

された。零落しつゝあつたシッキムは西藏ネパール兩國から押されてゐた。一時はタシルンボ(Tashilumpo)まで領してゐた王も^{ツシヤ}J・フーカー卿の時代にはゼム河が國境になつてゐた。當時ラチェン、ラチュンからチュンタン(Chungtang)の合流點まで事實は西藏であつた。

英當局の長官は地勢を相當に知つてゐたと見え、分水嶺を國境とするをよしとした。一八八九年の測量圖は支那人の承諾も得てティースタ河の各源泉までシッキム領としてゐる。然るに西藏政府は之を無視してギャゴン(Gyagong)に守備隊を置き(p. 138)更に所有權を示す爲にチョミオモの麓に支那流の城壁まで築いた。

地圖製作官の躊躇がよく國際紛争の時都合の悪い結果を生むものだ。現に分水嶺を國境とするものとギャゴンのそれを國境とする地圖などある。この地はさして通商上又軍事上重要な所ではないのだから、寧ろチュンビ溪谷と交換した方がよいかも知れないが。

ローナクへの下り、二、〇〇〇呎強は普通なら草地の氣分のいゝ所であらうが、軟かい深い雪と照りつける暑さでこの(p. 139)氷の竈を逃げて谷沿ひの土手に登つた時にはやれ／＼した。龍膽の淡青の花の中で豪壯な晝食を攝つた。我々は無人境に入つたのだ。土地の人はこゝをローナク(Lhonak)即ち暗南(Black-South)の地と呼んでゐるとか。

この無人の谷々はシッキムのエンガディンと稱してよからう。冬九ヶ月、夏三ヶ月で、こゝの七月の吹雪は有名である。風と水、熱と凍りの破壊力にも拘らず斜面は雪に守られて滑かになだらかである。かつての氷河の跡をとどめる堆石が幾つもある。その各々の土手が圍む沼澤地は空の色に映え或は同じ様に青い龍膽の花畑に圍まれてゐる。樹木はもとより、石楠花もなぐ灌木としては僅かに杜松の盆栽があるばかりで、草地らしいものもない。漸く犂牛^{ヤウ}の用に足りる草が斑らにあるばかりである。空との境には白い雲が、白い頂に戯れてゐる。

前面の丘には三つの通路があつた。(p. 140) 右手のものはナク・ラを経て西藏に到る最も樂な路である。又ルンナ・ラ (Lungna La) を越えてギャゴン近くのティースタ溪谷にも出られる。正面のみちはゴラフ (Goraphu) の盆地に續くもので、左手のみちからはランボ河が流れて來てゐる。奥にカンチエンジュンガ山塊の北側の前衛たる二峰が聳えてゐる。私はこの二峰を夫々ランボ (Langpo) 峰及びジモンソン (Jonsong) 峰と呼んだ。人跡は全然なく。

先に行かせてゴラ河 (Gorachu) の入口に野營の用意をさせた。然るにランボ河 (Langpo Chu) —— ローナク河の上流——に面し、彼等は立ち止つて、水量の減るのを待つてゐる。私は直ちに渡る様に命じた。(p. 141) 原則として雪解け水の流れる川は夕方水が殖えてゐるのだといふ現象を無視してゐる様ではあつたが、無理して一〇〇嗎ばかり下流の地點を渡り得た。人夫達はうまく涉つたが、且那方は肩に負ぶさつて餘り香しい恰好ではなかつた。

大きな岩塊が平らになつてゐる所に出た。野營地には好適の所であつた。こゝで人夫群は出来るだけ歸す事にした。

翌朝快く晴れてローナクがよく見えた。ゴラ河の奥の平たい山々、その裾の一樣な風化前の岩の姿はマーチン・コンウエー卿のスピッツベルゲンの寫眞を思ひ出させた。殆んど一年中雪に蔽はれ雪に守られた岩床は僅かしが水の浸蝕作用を受けない。あるものは唯高い急な裸の尾根筋から凍害によつて得た僅かな石を堆石としてゐるに過ぎない。ローナクの景色の特徴は (p. 142) 滑かな圓い面が連續して、尾根は波の様に起伏してゐることである。

ランボ河溯行には先づカンチエンジュンガの北に伸びた尾根とトゥムラチン谷 (Tumrachen) の北の尾根との間の氷河の残して行つた巨大な塊をのり越えねばならなかつた。北の丘についてゐる細い急な徑をのぼると直徑二哩もあらう草原となつた湖の跡に出た。

正面をふさぐ美しいランボ峰以外は單調な景色である。残雪斑らでこの分では夜までに谷の最奥のジョン・ラの麓まで出られると思つた。

突然先發隊の騒ぎに立ち止つた。西藏の前哨か、追刺^{ドグパ}の襲來かと恐れたが、野生の犛牛^{チウ}の出現だつた。(p. 143) 狩獵家は獸が襲ひかゝり又は逃げない様注意して進んだが、衷れ、スペインの闘牛の様に靜かに立つて彈をうけた。

期待した見物が屠殺に終つた。牛肉はうまかつたと見えて續く辛苦にも皆氣分も調子もよかつた。

どうしてあの所に一頭のみ居たか問題となつた。前回リンシンはこゝで野生のものを二度も追ふて得られなかつたといふので野生であるとの假定もあやしく、ドーヴァ氏は牛群の中で仲間を追ひやられたものと推定した。リンシンは牧人が西藏に歸る際に山の魔神に捧げたものであるとの意見だつた。

この食糧の臨時補給に手間どつて、右手の丘から流れ出る小川に差しかゝつた頃は皆長い影を引いてゐ

た。ホワイト氏はこゝをラナク (Lanak) と稱し標高一七、〇九九呎としてゐる。リンシンのいふゴイズ (Goize) である。餘りいゝ場所ではないが、今日は之以上は進めぬ。

谷の中に今日の滞在と決まる。エルミニオ・セラと私はリンシンの提案に従つてチオルテン・ニマ・ラ (Chorten nima la 一八、七〇〇呎) に登る事とし、ウィットリオ・セラはポッタを連れて寫眞を撮りに行く。ガーウッドは苦力と共に残つた。

川の出合に出來た角地を横切る爲に (p. 145) 丘の横斷を試みた。そしてぐら／＼する大小様々の石の間にはまり込んでしまつた。南向きの急な草と磊石の斜面に突進し、峡谷を二分するバットレスにとつくと長い奮闘の後やがて尾根の下の短い氷河に到る。

氷河にうつり二十分程でシュルンドのある急斜面を二つ程登つて尾根に出た。これより先向ふ側に下るにはロープなしには危険と思はれた。土人達が越えるといふ樂な峠はこゝより西寄りにあるらしい。

それから狭いやゝ平らな尾根の上に出た。絶好の日和であつたが、直射光の下で暑さ、日蔭の寒さ共に休むには極端過ぎて適さなかつた。高度一八、〇〇〇呎であらうか。(p. 146) 頂の下でポケットブックを落した時グルカ人が一人走つてとりに行つてくれた。この高度とも思へない速さだつた。

目前に擴げられた景觀は陽光に眩しく輝いてゐたが、心が押しつけられさうな無機の世界のものでつた。一面に白に被はれた中に色としては僅か二點山池の青味がランボ河ランボの南にあるばかりだ。こゝよりゼム氷河を南に見る尾根、トゥムラチェンの谷の頭、ネパールとの分水嶺のランボ峰に囲まれた高地一帯をよく見通し得た。

氣候の變化でこの盆地の雪線が高くなつたために氷河も共に後退したものらしい。ローナク全體が氷河の後退の跡を示した氷蝕地帯の好例である。

このきら／＼する高原の彼方極く左の端に鋭峰シニオルチュムとシムヴの三つの頭、それから巍然たるカ

ンチエンジュンガが認められた。(p. 147) そのネパール側の肩が今日始めて見られた。手前にはその山腹を覆ふ様にトゥウインス及びテントピークが横はつてゐた。

我々の立つてゐる所からピラミッド・ピーク(Pyramid Peak 11111、11500呎)は半分かくれて見えなかつた。

次に目立つものはランボ峰で、アルプスのブライトホルンの山壁に小マッターホルンをつけた様な姿である。

それから山稜は白い半圓を描いて、急な雪峰に續いてゐる。ローナクの奥はこれにかくれて見えない。頭を回らして北を見れば、即ち未だ人跡のないこの峠の向ふ側には荒涼たる谷に東へ氷河が流れてゐる。その後方に美しいチョミオモの雪峰が頭角を顯はしてゐた。

(p. 148) 周囲の地形は頗る複雑である。リンシンはチョルテニマ・ラ(Chortenima La)の峠に立つてゐると保證してゐたが、北側に見える低地が西藏の方である事には納得し兼ねた。川が南東に向つて流れてゐる。それでは方向が違ふではないか。この謎は一ヶ月の後に漸く解けた。我々はランボ河ランボとゴラフの源泉の

間にある尾根に登つたのであつて、リンシンは前回の時も多分同じ間違ひをしてゐたものであらう。本當の Chol Teni Ma・ラは更に西方六哩の地點にあつて、ランボ河の上流の氷河をつめて、石灰岩質の西藏高原に續いてゐるものである。一八九六年にオーコンノー少佐が之を横斷し、一九〇二年にはホワイト氏がその峠まで登つてゐる。

二時間程或は焼かれ或は凍える様な思ひをする。歸りには礫石をさけて (p. 146) 氷河の軟かい雪に足を時々とられ乍らも氣を晴らした。峡谷に入つて浅い川をぽこ／＼樂に歩いて歸つた。

テント地はその前夜の所から三哩登つて、ローナク氷河の四哩下にあつた。本當の Chol Teni Ma・ラに續く臺地の上である。三方に雪の高地を圍らしてゐて、一方に氷の岩がある。これはチャタン・ラ (Chatang La) への道らしく、多分チャンドラ・ダス (Chandra Das) は之を越えて、一八七九年に西藏のタシルンボへ入つたものであらう。

第八章 ジンソン・ラ (Jonsong La)

(p. 150) 翌朝リンシンはランボ河上流に見える氷河の乗越を指して、あれがジンソン・ラだといつた。

前日彼が示してくれたもう一段と高い峠はこのテント地からは見えてゐなかつた。こゝから稜線まで出るには四、〇〇〇呎以上の登りである。もし登つてしまつてから峠が違つてゐた事がわかつたとしたら、果してその後苦力達は我々について來てくれるだらうか。

ランボ河が幾つかの流れを一つに集めてゐる所まで河の左岸に沿ふて上る。この時程山登りを止めたい氣持になつたことはない。深雪の丘の上に出て、やゝ足場がしつかりする。道の悪いのに手古摺つた上に非常に暑い。不案内な行先を氣遣ひながら大きな岩影に腰を下して晝食をとる。此の度の旅行中の一番辛い日であつた様だ。仲間のものもいつになく神經過敏になつてゐた。晝食後再び小川に沿ふて徒渉したり跳び越えたりして一日で僅かに垂直一、二三〇呎登り得ただけ

であつた。

深雪中のテントは不愉快だつた。まだこの先三回この様なのが横はつてゐようとは考へてゐなかつた。(p. 153)翌早朝雪はやゝ良質となつた。ジョンソン・ピークの肩に到る割に緩かな斜面を横切つて行く。空には一點の雲もない。チ・ミオモやキンチンジャー(Kinchinjo)の彼方には西藏の未知の山々が無名の山々が尖つて見える。あれらはグライラマの宮殿である普陀羅から見える山々ではあるまいか。

眞白な無人境と思つて居たら、突然目の前に仙人の祠が現はれた。雪の築山の中央を削つた懸崖に錯雜した氷の柱を建て、上から下までキラ／＼とした氷の塊で飾られてゐる。そしてその全體が氷の床に反射してゐる所を想像して頂きたい。アルプスでもコーカサスでも之程奇怪な氷の洞を見た事がない。子供の頃見た萬華鏡をもう一度のぞいてゐる様だつた。

その日はこれ以上さして記す事もなかつた。ジョンソンの東側を巡つて次第に登る。人夫の列は段々の

びて途切れ／＼になる。(p. 153)やがて夕陽があたり一面を一色に溶かし込んだ。

長くて急なこの斜面を登り切つて、峠直下に喰ひ込んでゐる窪地に出た。併し峠への最後の斜面へはまだ大分あつた。人夫達は疲れて來たと見えて、その夜遅くなつて着いた者、終に着かなかつた者などを生じた。

太陽が山端にかくれると同時にひどく寒くなつた。

それでも私は寢袋一枚で、かつてこゝより七、〇〇〇呎も低いモンブランの小屋に泊つた時より遙かに寒にねむれた。峠の下に出る爲に堆石らしいものを越え、氷河を渡り再び堆石地を横切つた。

遠征中のいつよりも私はこの時消耗してゐた。高度の關係もあらうが、主として食事の足りなかつた事と辛い雪中の行進の爲であらう。

この日之までになく長い列になつた。夜營地が不愉快であればあるだけ、翌日のまとまつた出發は難しかつた。人夫長もその部下をまとめられない有様だつたし、(p. 155)グルカ人の諫めも無駄だつた。

最後の登りは油断のならぬ新雪の急斜面だつた。割合平坦だつたそれまでと違つて、潜る事はなくなつたが、その代り後迂りする。

餘りくどくどしく雪の困難な状態について描いたので、讀者諸氏には倦きられたことと思ふが、この事は此の度の遠征が並外れた條件に當面したことから強調されざるを得ないのである。二三、〇〇〇呎乃至二四、〇〇〇呎の山を前に之を攻撃もして見ずに通り過ぎるといふ事は實に辛い。今日になつて、家で當時のことを回顧する時、何故あの時登つてをかなかつたか不思議に思ふことがある。併し新雪の降りた頃にアルプスを訪れた経験のある方ならばわかつて頂けると思ふ。斜面は小さな岩屑となつて終り、割に苦勞せずじグザグに登る。その上にクレバスの出來つゝある雪が残つてゐた。

先頭はビッケルで雪庇に穴をあけ (p. 156) 次の人に押し上げて貰つた。かくて障壁はのり越えられた。私は暫く下で休んでゐたが、先頭に行つたリンシンは私

に「峠が違つた」と叫んだ。私は幸うじて彼の口を押えた。この事が苦力達に知れたなら、カンチエンジュンガ一周の計畫もこゝで果敢なく潰えたことであらう。

リンシンは、天氣さへよければ峠からは足下にネパールの東部一帯を見下し、近くはアルン (Arum) の谷から遠くは世界の最高峰が周圍の山を抜いて巍然たるのが見えると斷言してゐた。之等は總て見えてゐた。ジョンソン峰は我々のすぐ右手に急な斷崖となつて聳えてゐた。

南に向けば有名なカンチエンジュンガの姿が目に入り、J・フーカー卿の挿畫によりジャヌー (Tannu) と認められる岩の胸壁と圓い塔が見えた。足下にはジョンソン峰の南側の雪原が下の氷河に流れ込んでゐるが行先は見えない。(p. 157) 山に馴れた私にも氷河の西岸を塞ぐ絶壁に鞍部を見出す事が出来なかつた。而も南はカンチエンジュンガそのものに塞がれてゐる。東にはランボ峰 (二二、七五〇呎) の荒い肌に視野を限られてゐる。リンシンは私がグリーン・レーク氷河と名

づけたゼム氷河の支流に出たのだと説いた。

ガーウッドは平板測量の結果地圖上のジョンソン・ラの地點に立つてゐる事を確かにした。それで私も足下の氷河はネパールに注ぐものであるとの結論に達した。

思ふにリンシンが峠に異議を持ちだした所以は、彼がその後に越えたチュンジェルマ・ラ (Chunjerma La) の眺めと混同してしまつたからではあるまいか。或は亞細亞人的な考へからとも考へられる。ウェーデル少佐はネパール領に入る事、特に (p. 158) 歐人が入る事を恐れるシッキム人の特徴を強く例をあげて説いてゐた。リンシンも我々の豫定路を譲したく思つてゐたのだらうか。

セラ氏兄弟はリンシンの自信ある陳述に賛成したゝめ、ひどい議論になつた。ガーウッドは私と同じ意見で、ドーヴァ氏はどちらにもつかかなかつた。風が吹いて來て終に最後の決定權を發揮しなければならなくなつた。そこで私は隊に更に先へ進む事を命じた。同時

にリンシン、セラ兩氏にはよかつたら考への通り行動される様にと申し出た。

「前進」の號令に皆冷い風から遁れるのを喜んだ。今度の旅行中一般に空は靜かであつたが、この日は珍らしくヒマラヤらしい風を味はされたのだつた。

(p. 159) 下り初めは急であつた。それから廣い寧ろ椀狀といひたいクレバスに沿ふて下つた。第一の雪原の雪はしまつてゐたが、一〇〇呎下の第二の雪原は再びぬかつて、また／＼轉輾として行かねばならなかつた。

目前に繰りひろげられた景觀は歐人の未だかつて見た事のないカンチェンジュンガの北西面である。一番上の尾根の下に長い雪の臺地が見える。高度乃至その影響を無視すればカンチェンジュンガはこの方面から登攀出來るとの印象を得た。雪崩の落ちるのは一つも見なかつたが、カンチェンジュンガ試登は今少し早い時季に行はれるだらうからその點は危険である。

セラ氏は寫眞をとる。マキニヤ、ガーウッド兩氏と

私は先に行くが、驢で日没までに野營に適してゐると思はれた先方の岩まで行きつく事が出来ない事がわかつた。(p. 160) 途中に岩の斷崖と巨大な氷柱に挟まれた凹地がある。そして山影が雪原にのびた頃後續部隊はなほ峠に點々と黒い姿を印してゐた。氷河の中央浅い谷間に雪の小丘が澤山ある所に出た。こゝに天幕を張る事に決する。不可思議な景色の所だつた。

やがて夕闇の中に暮れ、寒さは酷しくなつた。星がいつもより明るく近くに見えた。生の領域を越え、死も届かぬ天と地の間に存在してゐる様な感じであつた。

天幕の中で華氏零下二七度だつた。ジョンソン峰からの雪崩の音だけが時々禮砲の様に轟くばかりである。

(p. 161) 翌朝早く起きる。皆今日中に早く草地に出たいだらうと思つて出發を早くしようとしたが、この様な所では太陽の光が照らすまでだめだつた。

點呼で兵員に缺員の多い事がわかつた。多分峠の向ふ側の氷原で、まだ勝手に岩の上に露營をしてゐるのだらう。グルカ人を遣つてまとめさせる。こゝは二〇、

〇〇〇呎の高度にも拘らず彼等は走る様にして行つた。(p. 162) 我々一行にしても亞熱帶性の谷間から、氷河地帯へ出る一三、〇〇〇から一五、〇〇〇呎の時の方が今よりは高度の爲に惱まされた。

グルカ人はいつも元氣であつたが、苦力グリーはさうではなかつた。漸く天幕をたゝませると各自の荷物に對していつも激しい喧嘩になる。荷の目方のわからぬ爲、互に欺き合ひ、詰り合ふのを毎日のスポーツとして一日も缺かした事がなかつた。總て用意出來たものと思つて私は一〇〇〇碼程歩き出した時ウィトリオ・セラ氏に呼び止められ六人ばかり動けない者がゐるが見てやつてくれとの事だつた。與へた靴を嫌つてはかなかつた爲足を少し凍傷にやられてゐる者、高度と寒さに氣分のすぐれない者などであつた。(p. 163) エルミニオ氏は痛む足に厚い布を巻いたり、氣付け藥をやつたりした。山壁に圍まれた深い雪の谷をとぼくと下つた。カンチエンジュンガの巨大な尾根とテラスは出口を皆塞いでゐる様だ。左方のランボ峰の南、シッキム側に廣

白い凹地がある。我々の下りつゝある氷河はその麓の所でピラミッドと命名した頂の平らな山の爲に西方に迂げられてゐる。

一體この牢獄から何處へ出られるのか一向にわからない。滑らかな雪の斜面が曲り角へ來ると谿流の様に波立つてゐる。そこまで來て、始めて下方が見え、二峰の間の遙か下方に小さい雲の群が浮んでゐた。

氷河は巨大な畝や溝となつて下りられなくなつたので右岸を埋めてゐる割石の長い斜面によらねばならぬ。(p. 164) 雪に蔽はれては居るが、すぐ溶けて水になる氷河よりはよい休み場であつた。出發の際許されなかつた朝飯をあちらこちらで炊き出した。

午後中かゝつて大きな石が不安定に積かさなつてゐる嫌な斜面を横切つた。この堆石や磊石の混つた土地の歩行はこの度の旅行中荷を負つた人夫達の一難儀した所だつた。蔭が長く伸びる頃再び氷河は南に曲つてゐて幅の廣い支流が右から流れ入る地點に立つた。それは怒つた海の様荒れた表面だつた。凍つた波

は高さ五〇乃至一〇〇呎もあつた。決して踏み止らなかつたにも拘らず進むといふよりは迷宮の中を廻つてゐる様だつた。

陽に暖められた大地の上に天幕を張る希望は捨てられた。(p. 165) 其間高距一、五〇〇呎下つたに過ぎない。距離にして四哩位も進んだであらうか。

幸ひ天候はなほ快晴。前夜より寒さは酷しくない。併し翌日の行程は前日のを少し變化したものに過ぎない。アルプスのクレバスのない荒れた氷河の各部分が擴大されたものと思へばよい。

アルプスとシッキムの氷河の違いはその表面にある。アルプスの緩かな氷河の面は滑かである。(p. 166) 然るにシッキムでは不規則な凸凹の迷宮である。クレバスは二流所の氷河にはあつたが、一般には殆んどない。又流水は表面で行はれると見えて堅穴は一つもなかつた。

右の山塊から落ちてゐる支流の氷河は奇怪な景觀を呈してゐた。山壁に沿ふて段々になつた氷の尖塔や氷

雖が陽の光を浴びて怪しく光つてゐた。太陽熱、夥しい温度差と、所によつてはその老大な雨量に左右されるものであらう。「水溜りや磊石だらけ」と當時の日記に記してゐるが最も單的に土地の印象を描いてゐる。

(p. 167) 前日の如く後から来る連中を待つ時間がかなり多かつた。これは自然を眺めたり研究したりするには好都合であつた。益々高く目前に聳えるカンチェンジュンガはいつ眺めても倦きない。

午後遅くなつて我々の居る氷河が狭い谷に落ち込んで他の支流に出合つて廣い溪流となる所に出た。リンシンは再び地理に對して自信を持ち直し、急な堆積地へ我々を導き出した。その上は斑らに生えた灌木や褪せた花が殘雪の間に見える所だつた。危險を遁れた安心の様が苦力の顔に明かに表はれた。草の生えた古い堆石の上を歩く。火を焚くにやつと必要なだけの柴のある所でテントを張つて、後續部隊を待つ事に決した。(p. 168) 苦力達は荷を下ろすと英人を眞似た喜びの聲をあげた。

突然ウィトリオ・セラ氏が發病したとの報に接したが、纏て本人が表はれて幸ひさう悪くもなく自分でも高度の爲よりは「犂牛^{ヤク}の冷し肉が過ぎた」のだらうといつてゐた。

第九章 カンバチェン (Kangbachen) の谿谷

(p. 169) 我々のテントは三方雪の巨峰にとり圍まれた氷河の本流と山との間の緑の棚地にあつた。こゝに滞在して少くともカンチェンジュンガの寄附きだけでも探りたかつた。

この地はリンシンの略地圖にあるパンベル(Pang-perna)なる名稱を採用する事とする。こゝは地圖を見ればわかる如く地形學的にも亦景色を得るにも重要な地點である。(p. 170) 四地方から流れ来る夫々支流をもつた氷河が合流して第一流の長い氷河の本流となる所である。

下りに卷いた尾根のすぐ下に我々を通し導いて來た

氷河が上方の尾根の残骸と共に細い瀧の様になつて落ち込んでゐる。東からは深い切り通しを掘つて二つの氷河が流れ込んでゐる。その南にシッキム側から見られた二一、〇〇〇呎の鞍部が見える。之はカンチェンジュンガを一周するには重要な一點である。吹雪さへなければ我々は必ずこゝに立ち得た筈である。

この鞍部の南に双峰のトゥウィンス・ピークが急にそゞり立つてゐる。直接カンチェンジュンガに續かぬにしても之は確かにその一バットレスである。その頂からこちらへ伸びてゐる尾根は、鋸状の岩の尾根に終つてゐて、(p. 171) 恰も上の白く王座の足臺の様である。

我等のテントの正面の支流は最も興味ある立派なものであつた。カンチェンジュンガの北と西との尾根の懷から來るものである。その最奥部は雪の臺地となつて二七、〇〇〇呎の頂に續いてゐる。それは主峰の下僅か一、二〇〇呎であり、そこに到る岩尾根は如何にも登れさうである。唯この臺地の下に物凄い馬蹄型の絶壁がある。併し乍ら登山家の目には絶壁も小さな氷の崖

に分解し得るから私は敢へてカンチェンジュンガ直登路にして不可能でないのはこゝだけであるといはう。それにしても雪の斜面は急でクレバスが多い。岩も樂なものではあるまい。この難行、垂直にして六、〇〇〇から七、〇〇〇呎の登攀はかなり問題である。

他に危険なく唯長いか急であるだけならば勇敢なる登山家は何等躊躇することはあるまい。主なる難關はその最下部にあり、之には左方トゥウィンス・ピークとの鞍部に登路を求めるとよいと思ふ。(p. 172) 併し乍らこの道は人力を以て最も避け難い山の危険に曝らされてゐる。急斜面のクレバスもセラックも上の懸垂氷河からの雪崩に埋められてゐる。まるでカンチェンジュンガの魔神が人間の攻撃を防ぐ爲に態々拵えたかの様に。

マンメリー (Mumery) 氏の運命を聞いた我々にはこの危険だけは避ける術のない様に思へる。私はこの道を試すなといつてゐるのではない。併し苦力達は恐らく最下氷崖の上二三泊分を持つて上らねばなるま

い。氣候の次に東ヒマラヤの巨峰に向ふものゝ肉體的苦痛は荷運びである。それに比すれば高度の影響はそれ程でもあるまい。

(p. 173) この谷は比較的低い尾根によつてジャヌ(Jannu)との間から出る大きな氷河と界されてゐる。

この平たい尾根がカンチエンジュンガの西壁と繋がる所恐ろしい峰となる。アルプスのウィッターホルンの上にアイガーをのせたと考へたらその有様を想像してもらへるだらう。その岩壁は氷河に直角に落ちてゐるかの如く、上からおとされるものは山肌に何らの跡をつけず直接滑臺である氷河の上に落ちて運び去られるかの様である。

こゝに驚くべき景色を並べ上げる事は出来るが、讀者にその感じを納得せしめる事は恐らく出来まい。個個の風物は變らないが、ヒマラヤは偉大なアルプスであるといふだけの違ひである。(p. 174) ネパールの犂^ヤ牛飼ひが山々を「多くの神や仙人」の住居と思ふのも無理はない。

我々のテントは丁度雪線の所にあつた。五〇〇呎下の日向は地肌を見せてゐる。だが、こゝからネパール・ギャップ(Nepal Gap)まで日歸りはいくら輕快な偵察隊でも無理である。ましてカンチエンジュンガのものに向ふことは許されない。乃ち翌朝は寫眞を撮つたり眺めたりするだけで、午後にはカンパチエンの夏場の部落まで下る事とする。

險しい偉大な峠を越えて來た我々にとつては、この谷の下りは既に豪勢なものでつた。踏む地面は確かなばかりでなく、大部分が草地であつた。(p. 175) 扇型の沖積洲を行き過ぎるとかつての小池底が縁に包まれてゐて、天幕を張りたい衝動にかられる。谷はこゝで南に折れてゐて、カンチエン、タンチエン(Kangchen, Thanchen) 兩溪流の出合の向ふ側に聳える雪嶺のために眼界が塞がれてゐる。ナンゴ(Nango)と近くの二一、〇二七呎峰は、ダージリンから見える雪の連山の最西端にあるもので、さうした意味で測量上重要である。午後霧が出たが夕方再び晴れて素晴らしい日沒を

見た。

翌朝氣持のいいテント地に心残り乍ら草地を平らに進む。(p. 176) ラチェンを去つて以來三週間振りにて再び石の小屋の群のある所に出る。この小屋はカンパチェンの住民の夏の宿である。この地の本名はラムタン(Ramthang)であるらしい。チャンドラ・ダス博士はこゝから北の峠の一つを越えて西藏のタシルンボへ行つたものらしい。

兩溪流の出合は過去の氷河の作用で面白い形状を見せてゐた。

こゝからみちには明かな山徑となつた。チャボク河(Chabok Chu)を過ぎて古い堆石地の緩かに起伏してゐる所に行く。池がそこゝの凹地に光つてゐる。(p. 177) その内カンチェンジュンガを圍む岩の絶壁が切れて西側にかゝつてゐる氷河が見えた。之をラムタン氷河と呼ぼう。之によつてカンチェンジュンガの西峰に達し得るであらう。併しそれから主峰へは長い凹凸の多い尾根である。こゝで我々はこの氷河とチャボク

河とに挟まれてしまつた。徑は右岸に見えてゐたが橋がなくなつてゐる。さぶ／＼と濡れて無事全員對岸に渡る。

この邊りから景色が變る。(p. 178) 氷河のあとは消えて谷はU型からV型になつた。我々の徑は急峻な北側の斜面の下をはふ臺地に沿ふてゐる。綺麗な瀧がかつてゐた。カンチェンジュンガの周圍に瀧は稀でもあるが、チャンドラ・ダス氏は特にこの瀧に感心してゐる。そしてその鳴動の爲二時間ばかり聾になつたさうだ!。雲がかゝつて來てそれから數哩は、今まで程の眺望はなかつた。

谷が更に南に曲り相當大きな他の谷と出合ふ所に出た。旗や社の間を縫つて鞏固な石の小屋のある所に下る。(p. 179) 田園的な家庭的な緑の地に感じられたが人の姿も聲もしない。

反抗されずに第二の段階たるネパール旅行の繼續出来るのは有難かつた。

午後出た霧は夜になるまで晴れなかつた。

曉になつて暮はあけられた。(p. 180) 手前にピラミッド状の山、遠くに二つの頂を持つた山が我々の上に冷たい影を投げかけてゐた。その後更に大きなジャヌが西南尾根と岩塔とを見せてゐた。朝飯前にジャヌの全貌の見える山の端までよぢ登つた。この景色には感動した。我々は探險家がその全苦心に値するだけのものを見出した時の稀なる喜びを味ひ得た。

登り來つたジグザグ徑には秋色に染つた叢林、凋れた春の草花の原、野營の火の煙、さすらひ人の竈の煙柱がねむさうに立ち昇つてゐた。

(p. 181) この地點からは更に二方へ谷の見透しがきいた。カンチエンジュンが山塊の西北隅に立つてゐるので、カンチエン溪谷に沿ふて下はその西側を見透し得、上はカンチエン氷河まで何等目を遮るものはない。

下方の眺めも亦快。ジャヌ氷河の下、緑の森を縫つて川が光つてゐた。

この地點へ一時間後全員で戻つたが、夜の間低地に

沈んでゐた霧が既に谷をのぼり、氷河の大壕に岩から岩へ腕をのばして大穹窿をつくつてしまつた。徑は再び川に下り丈夫な橋を渡る。徑は磊石に見え隠れする乳色の小川に幾度も横切られてゐる。

(p. 182) 半時間程でこの石の荒蕪地を過ぎ美しい森林の入口に到達した。ジャヌ氷河の麓は一三、五〇〇呎である。氷河の下から森林となつてゐるが、ティースタ溪谷の様な森林ではなく、イタリー國境かチロルあたりの様である。

様々な緑の蔭の内に既に秋の紅葉黄葉が雜つてゐた。落葉が軟かく地表を蔽つてゐた。澄んだ泉が苔の生えた峰の間に湧いてゐて休んで食事する様に促してゐた。

始めの内は川のある度に森が一寸途切れるだけであつたが、谷底が廣くなるにつれて川に沿ふて草地がある様になつた。(p. 183) 林の切れ目から遠くに見えたやゝ廣い草地に茶色の小屋や犂牛の群が草を食んでゐるのが見えた。

數分の後始めてネパール人に逢ふ。男女の一群は微笑を浮べてゐるばかりか、色々の野菜、卵、いも、乳など籠に入れて持つて來て居た。兎に角双方に都合よく取引が行はれた。女や娘達ははづかしがらずに着飾つて來た金や寶石の耳飾、腕輪などにさわらせて見せてくれた。併し寫眞にうつる事とこれ等を手離す事だけは嫌つた。それにしても皆が餘り驚かない事は不思議であつた。この歡迎振りも東ネパールとダージリンの間に茶園に働きに行く人や(G. 186)蝶、蘭類を賣る人の往復がある爲かも知れない。

二十四日振りに隊員以外の人間に逢へた感激にそれより森を出るまでの徑は短く感じられた。平らな牧場は簡單な柵に區切られ茶色の二階建の家がアルプスのそれによく似た外觀で建つてゐる。

コーカサスでの經驗から推して、今後何かの行き違ひで退却を餘儀なくされない様に、村を通り抜けて最後の家よりまだ先の、明日入らうといふ谷の開けてゐる地點に天幕を張る事にした。歐人のネパール入國は

首都カトマンドゥに行く公官が賓客に限られてゐるだけに土人もリンシンもこの歡待を不安がつてゐた。翌朝グルカ人達の化粧振りを面白く眺めた。今迄寒さに唯こはゞつてゐたひげにも油がつけられ捻られて如何にも威嚴ある様になつた。(G. 186)一方我々も歡待の様を不思議に思ふと共に亦無氣味にも思つた。我々がダージリンを立つてからネパール當局で我々が國內に入つた際の特例の手段を講じてゐるかも知れない。併し我方には不意の降雪に追はれて來たので直ちに最短期間により英領に歸らしてくれと陳述すればよいのである。何所かに歸してくるであらうし、既に主なる目的は果したわけであるからかまはない。之にてJ・フーカー卿の地圖に残された白い部分は充され彼が通つた徑へ出たのである。

フーカー卿は「私の見た谷でこゝ程荒れた、雄大な而も陰慘な所はない。」と書いて居るが、我々はほゞ笑み迎へる谷と感じた。この違ひはJ・フーカー卿が比較的開けたヤンマ(Yangma)谷からクンザ(Khunza)

に出たに對し我々は (p. 186) カンチエンジュンガの懷たる最奥地から出て來た爲である。

早速テントの周圍に集つた村人と通譯二名は話合ひ出した。シッキムのヨクスン (Yoksun) に出るまで眞直に行つても五日かゝる。之に對する食糧を仕入れねばならない。

群衆は多く北から移住した屈強な西藏人であつた。男女共黒い上つ張りを着て腰でしばつてゐる。

十八世紀頃までこの地方はシッキム領であつた。上方の谷は (p. 187) その高度にも拘らずその廣い牧場と森があつて住ふに最も望ましき地であつて商業通路がここを通つてヨクスンの方に通じてゐたものであらう。

仲間の者は各々色々忙しくしてゐるので、私は一人川に沿ふてぶらついた。斷崖の上は霧にかくれ、この谷を圍む不思議に、目を惹かれる事なく近くの田園的な風物を樂しめた。

林の間から泉の音と共に大きな地藏車の音が聞えた。(p. 188) 夏の盛りを想像し乍ら川が峽路となつて

落ち込む所まで來た。この景色を眺めてゐると過去の有様がわかる様である。村の臺地をなしてゐる草地は氷河の造つた堤防の上に溜つた湖の底であらうか。

タッシチュンディン (Tassichunding) の寺に續く橋まで行つたが、テントの事が氣になつて戻る。道々民家をよく見たら殊の外アルプスのによく似てゐた。その他に特有のものとしては低い長い石の壁をつくり之に銘文を入れてある事で、三呎位の高さで雨露を避ける爲に笠石を置いてゐる。今日では佛教の文句を用ひてゐるが明かに土地の魔神を宥める爲の寄進である。

テントを出る時は總てうまく行つて新しい食糧も得られると思つてゐた。(p. 189) 所がネパール税關吏が入つて妨害されてゐた。汚い白い服を着た小さな人間だつた。威嚴を保つ爲に一つには我々に村人から食糧を渡されるのを遮り、一つには我々の武器を取り上げた。私はおごそかにテントの前に坐り、二人の通譯及びグルカ人を横に税關吏は前の芝の上にしやがませた。ドーヴァ氏にリンシンを抑えさせて置いて、雪の爲山

を追はれ今英國へ戻る所であり、武器はこの國境線の山中では護身並に食糧の補給上必要である事を説明し、食糧問題に關してはその干渉する理由なく敢て難題をかけるならばカトマンドゥへその由訴へるぞとつけ加へた。

官吏の態度は變り(p. 100)彼の反對は止んだ。やゝ不十分ではあつたが夕方再び食糧が運ばれた。

これがネパール官吏との交渉の始めて終りであつた。クンザに一週間滞在し、ナンゴに登つたならば快く且地理學的に得る事も多かつたらう。併し食糧も少く、政治的紛争をなるべく避けねばならぬ状態では旅行を續けた方が聰明な策であつた。

荷も軽くし、等分に別けてやり、こちらが與へて置いた眼鏡や靴を勝手に嫌がつて彼ら自ら招いた因果に對しても手當をし庇護してやつたが、雪中の一週間は苦力達にとつて辛い事だつた。(p. 101)途中で誰か必ず見えなくなる者がゐた。池の底のテント地では最後の者まで來たと請合はれたのである。所が今になつて一

人足りない事が告げられ、次の話を始めて耳にした。

リンシンが長カシをしてゐるティースタ谿谷内の村の一苦力は、殿に居たのだが、峠を越えた日、同輩に現在の生活は辛く死にたいから放つて置いてくれと頼んだ。そしてこの哀れな男は遺産の處置について頼んだ。同輩は之に同意したとの話である。初めはこの話を信じる事が出来なかつた。同輩等は私がその友に對する薄情さを蔑すむ氣持が一向わからぬらしく、『彼は死にたかつたのだ。どうして彼の意志を無視出来よう。』といつてゐた。我々にして見れば頗る奇異に感じられるが、多分佛教的な人生觀の特異性によるものだらう。

第十章 カン・ラ (Kang La)

(p. 102) 巨峰の影になつてゐて、朝の空氣は身を切る様に寒かつた。

散り／＼に家を見つけて泊めて貰つてゐた苦力達は勿論出發を好まなかつた。それでかり集めるのに大變時間を喰つた。我々はヤマタリ(Yamataru)峽谷に入

る森林帯の徑を登つた。ナンゴの氷の頂や稜線が對岸に聳え魅力的な景色となつた。徑が幾つかに別れてゐて、リンシンは再び迷ひの色を浮べてゐた。村から三十分と離れてゐなかつたので、(p. 193) 土地の案内者を探しにやつた。やがて元氣のいい青年が來て先頭となつてくれた。暫く川に沿ふて登る。そして非常に急な、風も通さぬ様な密な叢に入り暑い長い苦しい坂にかゝる。漸くにしてヤマタリ峡谷とカンチエンの谷を界する山の端に出た。祈禱旗が立つてゐて峠である事を示してゐた。いつもより濃い午後の雲が昇り出してゐて、寫眞技師は一刻の猶餘もなくヤマタリの奥に聳えるジャヌの氷峰や尾根をおさめねばならなかつた。

丘の背傳ひに、上方に向つて更に一段と大きな尾根に行き當る所まで登り、そこから東南方へ、(p. 194) 裸の斜面を横切つた。さうかうする内に二層の雲の間に挟まれてしまつた。かくてヒマラヤの高原もスコットランドの様な景色に縮められ、ハイランドの何處かの大谿(グレート・ス)に居ると思へてならなかつた。私はこの旅行中

のいつの日よりも空氣の稀薄の爲に苦しめられた。高さは一二、〇〇〇乃至一三、〇〇〇呎に過ぎなかつたのではあるが。

始めの數哩はヤマタリ峡谷の界をなしてゐる尾根の南麓を行く。そして小川を涉り、露營の跡のある石道を抜ける。徑は明かに右に曲り、この澤の南岸を登る。ゆるい登りではあつたが、出發が遅かつたので峠の下、一、〇〇〇呎で泊る事となつた。

夕方になつて、例の如くガスは消えて夕映したジャヌの堂々たる頭が近くの丘の上に現はれた。(p. 195) 夜の内に僅か許り降つた雪で、すっかり拭はれて翌朝は清く輝やかしく明けた。ジャヌの頂とその脇侍が暗い前面の丘の上に僅かに顔を見せて、今日の素晴らしい景色を豫想させてゐる様だつた。世界最高峰にこれからお目通り出來ると確信してゐたので寫眞技師達をせき立てた。

半時間の登りに、昨日の惰氣を忘れ、苦力や皆より先に尾根の上に出た。

この見晴臺からは廣さといひ、美しさといひ、又光と影、氣分といひ、色といひ、その豊富さは驚くべきものだつた。テニソンの詩の鷺の様に

「太陽に近く 遠く淋しい所

蒼空にかこまれて」

立つてゐた。一五、三〇〇呎の高度、カンチエンジュンガの一西南稜に、その雪に接して立つてゐたのだ。一方に氷と岩の巨大な壁が、他方に東ネパールの殆んど全部を見下ろしてゐる。(p. 196) 濃い色の蒼穹の下には、北のはてに大きな曲線を描いてネパールの巨峰が列んでゐた。新雪の輝かしい雪線の下には茶と黄の秋の草木の色や針葉樹の濃い色をした尾根が幾重にも重つてゐた。更に下には常夏の緑の敷物が廣く、所々青い深い谷底に光る川の流れに中斷されてゐる。

土地の旅人達の寄進の赤や白の布が私のそばで翻つてゐるが、之は自然のこの素晴らしい眺望に面した彼等の感激のしるしである。私より以前にこゝに立つた唯一の歐人 J・フーカー卿は彼の著書の内にこゝの景

色を實に巧に描いてゐる。

私は他所でもかういふ景色に恵まれた幸運兒であるばかりか、(p. 197) 又之を樂しむ事を知つてゐる幸福な人間だ。我々の「觀測點」からの景色は所謂頂上からの完全なパノラマではなかつた。そこにはジャヌがあつた。百萬言を費すよりセラ氏の寫眞によりこの山の素晴らしさを見て戴かう。

「私の見た最も素晴らしい眺め」と J・フーカー卿はジャヌについて漏してゐるが、更に「モン・セルバンより遙かに大きいが、繪の様な美しさに於ては劣る」と付け加へて居る。しかし私はヒマラヤの山々に對し此の比較は妥當ではないと思ふ。(p. 198) それはアルプスやコーカサスにもジャヌより奇なる山がある事は認める。しかしヒマラヤの巨峰が他より優れてゐるのは、近くの大山塊より量的な威大さ、どこまでも續く急峻さにあるのだ。それは二五、〇〇〇呎が物をいつてゐる。

チュンジェルマ (Chunjerma) よりの眺望の特徴は

山と平原との接合である。低地には植物におほはれた流れる様な曲線と色がある。是に對し、氷の山が堅い尖った形で濃い空に輝いてゐる。その對稱が強く印象に残つてゐる。時を経て漸く細部に目をやつた。遠山の眺望程聯想をたくましくさせるものはない。アルプスで登山家は個々の山を見知るばかりではなく (p. 199) 古い友達に圍まれてゐる様に楽しく感じるのである。コーカサスですら二度目三度目の時は若い時に見知つた山々に再會してどれだけ魅力が倍化された事だつた。併し前人未踏の所では全く當惑させられる。況や地方の呼名すら知らぬに於てをやである。

唯一つ異例がある。一番平野に近い西のはて金色の霞に包まれて、そこに世界最高の峰を、印度測量部の最高 (二九、〇〇二呎) と測量した山を見たのである。當時その名の知られなかつた爲、時の功勞者の一人で測量局長をしてゐた人の名をとつてマウント・エベレストと命名されたものである。

それは直ちにカトマンドゥ駐在のブライアン・ホヂ

ソン (Brian Hodgson) 氏によつて反對されて、一地方名によつて中部ネパールでは知られてゐると發表された。調査の結果 (p. 200) 測量局ではガウリサンカル (Gaurisankar) なる名は一般的にカトマンドゥ東方に見える雪山を總稱してゐるのだとした。最近ドイツの旅行家のボエク (Boeck) 氏はカトマンドゥの近くの七、〇〇〇呎の所からうつした二九、〇〇二呎峰の寫眞を發表した。

併し長い間アルプスのモンテ・ローザなる名は一雪山群に對して用ひられて來たのが、後に一峰のみに適用される様になつたのである事を記して置かう。ガウリサンカルなる名は一群の山に對してあるか一つの山の名であるか未だ判然としない。

更にサンスクリット學者のチャンドラ・ダス氏によれば山群とは別に二九、〇〇二呎峰は (p. 201) 西藏名チモカンカル (Chomokankar 雪の神の意) があり、佛敎の聖山ラプチカン (Lapchikang) の上に君臨してゐると。

世界の最高峰に英國名を付するといふ事柄について私は賛成し兼ねる。極地や北米の人類未踏の地ならいざ知らず、ヒマラヤには土地の名があるのだ。之を無視するのは有利な事とも正しい事とも思へない。

閑話休題。前方のネパール山地は三つの頂に別れて見えた。アルンの谷に臨む尾根の鞍部を越してマカルー (Makalu 二七・七九九呎) が、(p. 202) そしてその北の肩に續いて「山の王者」が聳えてゐた。遠距離であるのと、北面が緩かであるので一見チョモカンカルは易しい山の如く見えた。第三の峰はその北に巨大な岩の齒を植ゑた様に見える。地圖を見てもこの山が何れの山であるか判然としなかつた。

(p. 203) チョモカンカル又はラプ・チカン山塊の北には大した雪山は見當らない。更に北方は我々の立つてゐる所から一〇〇呎程上方の岩で眺望は妨げられてゐる。

この岩とナンゴとの間の地平線上に相當大きな雪山が認められた。ダージリンからも望み得るナンゴ (Nang)

30110 (二二六呎) は僅かにカンパチェンの谷のみを距て、聳えてゐる。前にも述べた如く、彼の山の一つに試登すら許されなかつた事が惜しくてならぬ。

ナンゴとジャヌの尾根との間には、カンパチェンの谷を越して雪の高山が續き、その中特に (p. 204) 我々の視野の内ではチョモカンカルにも比肩し得べき凄い雪のピラミッドに目を惹かれた。

之等の山はカンチェンとアルンの上流の地域のある。その後北緯二八度五〇分東經八七度にあると報ぜられた非常に高い山々は見えない。この地方にチョモカンカルに匹敵する程の山があると信ぜられてゐるが。

夕暮前にヤルン (Yalung) の谷まで行くにはもう出發しなければならなくなつた。平板測量をすませる爲後に残つたガーウッドの姿が、チョモカンカルを前に天にくつきりと切り出されて見えた。

(p. 205) ヤルン谷の上流に下り出すまでまだ幾つかの小さな尾根を越えねばならなかつた。

近くの岩にJ・フーカー卿のいふ獨立柱やチャンド

ラ・ダスのタモイディン(Tamoidin)やハヤグリバ神(Haya-Griba)の姿たる奇怪な石柱が立つてゐる。ヤルンとカンチエンとの分水嶺と覺しき尾根の所で霧に巻かれた。(p. 206) 朦朧とした中を下り口の峠まで長い道の様に感じられた。こゝよりカブルー(Kabru)の背面とヤルン氷河の美しい眺めがと思つて霧の晴れるのを待つたが徒勞であつた。唯一時カブルーの西峰が一寸表はれただけだつた。

雲の下に出て、木のよく茂つた深い峡谷が見下ろされ、川の畔に石の家や牧場も見えた。上流の方にはカンチエンジュンガの一主流たる氷河の堆石が見えてゐる。英人でこの下流を見たのはW・W・グラハム(W. W. Graham)氏唯一人である。

(p. 207) 政治的困難を除きたら、何でこの氷河を探險せずに置く理由があらう。ネパールの信仰によると、この奥に地上の樂園のナ・ペマタン(Na Pemathang)があり不老不死のレブチャ人夫婦が七組住んでゐるさ

うである。

急な石のジグザグ道や草の斜面を馳け下りると雑木に囲まれ、小さな池の二つある洲に出た。こゝで茶を沸してはいけないさうだ。それは水の精が煮る事が嫌ひだからだといはれてゐる。ヒマラヤの静寂さは人々の心に山や岩や、川や湖の精で一ぱいにさせてゐる。我々の連れて來た連中も、氣紛れな妖精や意地悪い鬼を恐れて、暗くなつてからは勿論、晝間でも(p. 208) 人から見えない所へ一人で行くのを嫌つた。

池からの下りは鋳の生えた崖の急な階段になつてゐた。峠で逢つた百姓夫婦から、乏しくなり出した我々の食糧を補給させた。

私は少くとも一晩位この地に留りたかつたのだが、早くネパール國外に出たく思つてゐるリンシンはシッキムに通じるセム・ラ(Semu La)及びカン・ラ(Kang La)へ通じる谷の別れ目によい野營地があるといつて聞かない。天候、食糧、苦力達の狀態より遂に私もその説に従つたが、カンチエンジュンガの一大氷河の傍

を通り乍ら上部を探險せずに過ぎるのは惜しくてならなかつた。村から一哩程の所に (p. 209) 堆石の先端があるらしく、グラハム氏によれば

『カンチェンジュンガの西南に流れ出る美しい川のある氷河の下へ右に折れて出る。まるで大きな舞臺の堆石の上にテントを張る。眞東にカブルの壁の様な西面を、東北にカンチェンジュンガの灰色の絶壁、北にジャヌの恐ろしい南崖を見せて、西には之も偉大な雪と岩の山であるのだが、周囲の爲に小さく見える山が聳えてゐる。翌朝早くエミル・ボス (Emil Bos) とこの西の山に登る。』

西方は雲にかくれて見えなかつたが、カンチェンジュンガの西北は素晴らしかつた。』と。

この地方の最初の地圖はリンシンに負ふものである。(p. 210) 測量局長より惠贈されたものは英國國境外は間違つてゐる。

リンシンの調査したこの地方の報告が地圖と共に一八八四—八五年の報告書に載つてゐる。彼が西洋流の

氷河や土地の記號を教へられて居なかつたのは實に惜しい。さもなくば疾うにヤルン氷河の正確な圖があつたらうに。

(p. 211) ツェラム (Tseram) の村の前の草地で憩の後印度で所謂プカ (Pukha) なる橋を渡る。アルプスの橋の様にしつかりしたものでカンティレヴァーを利用してゐる。

秋色に染つた葉と濃緑の常緑樹の間を登つて、小一時間にしてカン・ラ (Kang La) へ導く支流の入口の可愛い林間の明るみに出た。夜更けて、霧も晴れ月明りに照らし出されたジャヌの西南の一氷峰を仰いだ。

我々に從いて來た土人達も (p. 212) この美しい景色に感じずに居なかつた。聞く所によれば十七世紀にシッキムへ佛教を傳へたラツム (Lhatsum) はこゝをナムガ・ツアル (Nangpa Tshal 歡びの園) と呼んで、景色の餘りにもよいので數日こゝに泊つたとか。そしてすっかり元氣になつた彼はカブルの頂まで飛んで行つたさうである。我々も彼の様に飛燕の術を心得て

置きたかつた。

チャンドラ・ダス氏もこゝで休んだ。

カン・ラへの入口に比して、後はそれ程美しくな
く。徑は單調な谷に沿ふて行きセモ・ラ (Semo La)
(p. 213) の尾根の下を東に曲る。緩かな斜面を一寸登
ると雪や氷河からの流れのある河原に出る。更に右手
の鞍部からも流れて來てゐる。之がカン・ラへの道で
ある。再び憂鬱な霧に卷かれ峠では祈禱の旗を見たば
かりである。この峠は全然困難な所はない。

思はしくない天候にも拘らずセラ氏は更に登つてヤ
ルンの谷を眺める爲こゝに泊る決心をした。ガーウッ
ドも私もつと安樂な所を求めて下つた。初め磊石の
堆石を、次に木のない草地を横切つた。

(p. 214) 雜木の生えた平地にテントを張つた。いつ
もより長い行程であつた。それなのに苦力達は我が家
の方へと流れる溪流の水の様に快速に下つて來た。そ
の晩はじめくと寒く、霧や雪が降つて翌朝は雪どけ
のまだらな土地になつた。日の出して二時間で、セラ

氏は一緒になつた。一同そろつて出發、外界のニュー
スに接し得るかも知れないジョングリ (Jongri) まで
の道を歩いた。

川を渡り、石楠花の多い鉸の間を下る。徑は次第に
急となり、川は瀧の連續となる。遙か下にカプルーの
氷原から流れ來るラトン (Rathong) 谷の森林が烟つ
てゐる。漸くにして底に達し橋二つ越えて峽谷を渡る。
之より二、〇〇〇呎の登りを (p. 215) カプルーの支脈
たるラトン河とブレーグ河 (Prag Chu) の界の尾根に
挑む。登り終つた所に例によつて旗が立つてゐた。之
より本當にアルプスの牧場の様な高原だ。小川と凹地
をよぎると急に陰氣な霏雨の中に石の小屋がぼつと
浮き上つた。歡ばしい眺めだ。相當立派な白い小屋——
見廻りの官吏が立ちよるそれもある。——ジョングリ
に着いた。ダージリンの友達はこちらまで援軍を出して
くれて居た。

數分後小屋の入口に坐つて、實にうまいコーヒーを
啜り、物凄手紙の束をうれしく眺めた。ニュースに

事かく事はなかつた。

第十一章 ジョングリ (Jongri) と

グイチャ・ラ (Guicha La)

(p. 216) 吾々が今到着した場所は特別詳細に述べねばなるまい。恐らく何年か後にはシッキムの登山根據地となるだらうと思ふ。森林限界の上の廣い平地は一方に晴々した雪景色が眺められ、同時に面白い散歩のコースが三方にある。私は乾燥した稀薄な空氣を必要とする印度在住英人の保養地として役立たないわけはないと思ふ。

(p. 217) ジョングリの位置は、カブルーの北東峰から南に走つてゐる大支脈の上にあり、ブレーグ河とラトンの谿谷を別けてゐる。

ジョングリの小屋はブレーグ河に落ち込む草の臺地の西一〇〇碼にある。ブレーグ河の周圍の山や附近を觀測するに最もよい一番高い丘を私は「見晴し臺」と呼ばうと思ふ。

見晴し臺の北の眺めは圓い丘や低い尾根が沼地をとりかこんで、以前の氷河の河床は雨に洗はれた裸の白い斜面を除いては現在緑や褐色の草で蔽はれてゐた。

(p. 218) 見晴臺に坐すれば容易にブレーグ河が近くの巨峰ジュボヌ (Jubonu 一九、四五〇呎) の懸垂氷河やバットレスから白い瀧になつて落ちるのが眺められる。ジュボヌの南側、森林帯と同じ又は少し高い所にいくつかの池が輝いてゐる。池はシッキムでは宗教的魅力を有してゐる。その中に棲む女神は山の惡魔と交はると噂され、特別の小池は社會で醜聞を起したラマ僧の追放され、自然の奥深く隠者として住つた跡であるとしてゐる。

反對側には目の前にバンディム (Pandin 一一、一〇二〇呎) が厚い氷の衣をつけて聳えてゐる。西方には緩かなジョングリの斜面を越えて、長い、だが平凡なカン・ラの尾根がより上つてゐる。そこにある谷は hanging valley として地理學者の目を止めるだらうが、風景の美しさを求める人はいつまでもこゝに目を

止めはすまい。

(p. 219) 私が近くで行つたもう一つの場所は、ラト山谷の方へ落ちてゐる峻しい溪谷の端で大石がごろごろしてゐる所だつた。その崖下には素晴らしく木が茂つて居り、ラトンの向ふの丘は緑の牧草や芝生が生えてゐて、窪地には心地よさうな池が見られ、將來のホテルや宿舎の理想的な敷地である。この方向に我々の食糧を補給の爲一隊の通つたシンガラ尾根がある。

カプルーの反對側にダージリンの散在せる建物が明かに見られた。草屋根をよしてトタン屋根としたパミオンチ(Pamionchi)のラマの僧坊が森の中に光つてゐた。ダージリンとセンチャルの東に峠を越してベンガルの平野が見え(p. 220)蛇行するティースタ河の銀色の帯が見えた。午近くなるにつれ、そこに雲が湧いて我々の頭上を通つて北の雪山の峠を越えて行つた。

ジョンダリの日没、これ以上美しい天地の色を、私は今までに見た事はない。前景の大きな影の向ふ、遙

かな丘は青玉ツクリタマの波の如く、雪は薔薇色に染まり、低い山から次第に消えてバンディムとカプルーの頂を最後にたゆたふ。月が昇るまで、輝く空はゆつくりとたそがれを深め、高い峰々の氷の額に接してさし出でた月はそのやはらかい光で、足下の廣い空間を包んだ。

我々は必要品を補充してから、主としてブチャ人からなる最も活動的な人員を選んだ。そして彼等と共に二日乃至二日半の行程にあるグイチ・ラ(Guicha La)に向つた。「見晴し臺」の北の鞍部を越え、ブレーグ河ブルグを右にカプール(Kabur 一五、八七八呎)の岩を左にして進む。(p. 221) 對岸のジュボヌはアルプスのミューレンからの景色を彷彿させてゐる。その岩壁は登り得るだらうが相當に困難であらう。今朝はその麓まで行かうとしてゐるのだ。バンディム(Pandim)は氷のクボラを支へて花崗岩の斷崖を毅然と現はしてゐる。私が暫定的にフォークド峰(Forked Peak)と呼んでゐるカプルーの南東支稜の最南峰から流れ出た支流を渡る。それから數分愉しい森の中を通つてブレーグ

河^{カミ}の急湍の縁に出る。

橋を渡つて、急坂を登り、政府の地圖にタンメ

(Thangme) と記してある牧場に出る。これより徑は

やゝ不確となり、穴におちたり、つまづいたりして、

(p. 223) 哲人でもなければ、やがて癪癢を起すだらう。

やがて谷は裸となり、例年訪れるラマ僧の爲の廢屋が、アルクタン (Alukhang) の位置を示してゐる。

この聖地へは、カンチェンジュンガのデモンに一週間の祈禱を捧げる爲、毎年バミオンチから若いラマ僧の一隊が登つて来る。クンザやジョングリでも見た様な長いメンドン (mendong 銘を刻んだ石の壁) が、土地の聖なる事や信者の數を物語つてゐる。實際地形上はグイチャ・ラを越えた所がカンチェンジュンガの眞の麓であるが、アラクタンからカンチェンジュンガの鋭

い獨立したピラミッドがカプルー、ジュボヌ、パンディム等の雪の列柱のかなたの正面に臨まれる。このあたりの氷河の有様は誠に錯雜してゐて、(p. 223) 地圖によつて漸く理解し得るものである。

アラクタンの谷の寫眞を見、追憶して見ても、確かに大きな景色には違ひないが、ヒマラヤの大きさの最も印象的なものの一つではない様だ。少くとも目立つたバットレスの如き劇的效果はなかつた様だ。

(p. 224) 夜になつて景色は一轉した。満月に近かつた。ジュボヌの壁にかくれて月は永い事見えなかつたが、近くのうす暗い山塊の間にカンチェンジュンガの全頂がサーチライトに照らされた様に輝いてゐた。岩も氷も銀の神殿と化して、之が禮拜の對象となるとは全く當然と思はれた。

翌日の爲、荷物の隊を連れない廻遊を計畫した。ヒマラヤ遠征隊員はかうした中心地或は更に移動根據地を中心として、出来るだけ多く歩き廻る事に心掛くべきである。

我等のテントはアラクタンと堆石の中間に、(p. 225) 風を避けて張られた。このキャンプからグイチャ・ラに向つた。こゝは既に數名の英人の訪れた所である。初めにパンディムから押し出された急な氷河の先端

の堆石を登った。(p. 226) 三〇目の池の處がチェムタン (Chemtang) と呼ばれる所で快よいテント地たり得る。

苦力達^{グリ}はジョングリから城の様に見えた岩に向つて緑の斜面を登つて行つた。こゝで道は悪くなり疲れた者の多くは晝食にした。併し午後のガスが既に出だしてゐたので、私は峠からの眺望の爲、食事や空氣の稀薄な事を忘れて更に押し進んだ。

峠についた時カンチエンジュンガはまだ判然と見え、下を平地を見下ろした。(p. 227) 樂な斜面であつたから、雪さへなければ馳け下りて見たい所だつた。

眞正面に途方もなく大きいカンチエンジュンガの東尾根が伸びて、第二峰 (二七、八二〇呎) から一九、三〇〇呎の鞍部まですつかり見えてゐる。(私は低い雲がこの鞍部から Zemu の谷に流れ込むの Cloud Gap と呼んでゐる) 頂上はアラクタンで見た時よりも更に尖つて、岩の崖は自然には之以上に垂直に出来ないとい

思はれる程切り立つてゐる。氷の嶺線はダージリンからすらその影が見える程大きなバットレスに支へられて空高く聳えてゐる。

例のクラウド・ギャップが荷負ふた苦力^{グリ}の通路となり得れば、かつてのグリーンレークのキャンブ地へジョングリから三日で行けるだらう。併し苦力^{グリ}にはやゝ難しさうにも思へる。

タールン氷河の下部はシッキムの氷河の例に漏れず汚れてゐる。

(p. 228) この時に休まずに歩いて三、四〇〇呎を四時間半で歩いた。アルプスやノールウェーの經驗に比して特に障害がなくても一二、〇〇〇呎を越えようと歩度はかなり鈍るものである。

踵をかへして下らうとして、花崗岩と氷の巨大な楔型のパンデムに直面した。朝通つた池の所で、眞面^{マツメ}に氷の様な冷いガスに吹かれてふるへ上つた。(p. 229) 夕暮と共に再び満月によつて、最も神聖な劇場で最も劇的な自然を楽しんだ。

翌朝はすつかり冬だつた。あたりは凍つてゐたし、日は仲々射さずカブルー氷河の上を影はのろ／＼と下りて來た。

ガーウッドは既に早朝起き出でて麝香鹿を一頭射とめたし、セラ氏は附近をカメラに納めた。私は唯この雪の神殿の御前に詣でた數多くの巡禮の事を思つて、あたりを歩いた。

それからジュボヌの登路について注意して見た。

(p. 230) そしてグラハム氏の報告の通りである事を認めた。カブルーの方は餘りに近くに居るのでよく研究する事は出来なかつた。思ふに、雪の状態とか登路の見透しの良い悪いで非常に登攀の困難さは違ふだらう。一般に多くの山は決して難しくはないが、一つとして危険な時のない山はない。

タングメの下のジグザグ道を降り切つてバンディムを正面に見て愉快的晝飯をすませ苔の上で、ひるねを樂しんだ。ジョングリ牧場の高さまで戻つた頃驚く程澄んだ遠景に迎へられた。(p. 231)

人間、少くとも旅行者といふ種類の人間は不平をならさねばならぬらしい。その時の天候は餘りにも美しく誘惑的であつた。大きな頂を試みないのは残念に思へた。セラ氏等はカブルーの攻撃を提唱した。寒さと雪の状態をよく考へた揚句、私は惜しいが差控へる事に決した。

ラトン河チの源泉からカブルーへもつと直かに行く道がありさうにも思へた。併し上部の樂な萬年雪の所に出来るまでには岩と氷瀑との困難な所があるらしい。

大望を捨てた我々は一日を楽しくジョングリの附近で過す事に決つた。(p. 232) ガーウッドは左手の草の丘をぶらつき、セラと私はラトンの源泉をすつかり見下ろす奇妙な岩を登り、カブルーを東南の側から取付いた。

之をも一つの登攀と數へ得るならば、先づアルプスのリッフェルホルンのそれに比すべきものであらう。眺望は勿論廣く而も素晴らしい。近くの峰々の上にカンチエンジュンガの南面全部、シムヴの三つの頂、南

にはシッキムの山と谿谷が地圖の様に擴がり、バミオンチの寺院、切り開かれたダージリンの丘等が見える。山と平野の對照が特に強く印象づけられるパノラマである。ガーウッドは彼の専門で、(p. 233) 寧ろ地質學者の如く hanging valley なる全く小さな溝に興味を懷いてゐた。

この最後の觀測臺を下る前に、カンチエンジュンが山塊の氷河の状態について總括して見ようと思ふ。幾分重複するかも知れないが、特に今後訪れる人——私はその多い事を願ふ——の爲に便利であらうと思ふから。

カンチエンジュンがそのものからは四つの氷河が出てゐる。東にはティースタ (Teesta) に注ぐゼム (Zemu) 及びタールン (Talung) の氷河、西にはアルン (Arun) とロシ (Kosi) に注ぐカンチエン (Kangchen) 及びヤルン (Yalung) の氷河がある。(p. 234) 南と西とに突き出た支脈にカブル (Kabru) とジャヌ (Jannu) があり、前者にはアラクタン (Alakhang) とラトン

(Rathong) の谷を生じ、後者には相當大なる三つの谷が派生してゐるが、地圖によく示して置いた。

次にシムヴ (Simvu) シニオルチュム (Siniolchum) 等の南に落ちるもの、及びパンディム (Pandim) やナルシン (Narsing) を中心とする、ダージリン、ガントク等から眺め得るもの、ある事を記さねばなるまい。

ジョンソン・ラ (Jonson La) を北の界としても、氷雪に蔽はれた土地は三二七哩四方に當る。ちなみにモンブランは一〇〇哩四方である。

(p. 235) 更にシッキムの氷河の特徴を述べれば、萬年雪の生れる所は尾根筋から數百呎の所である。そして急な斜面ではいくつもの小雪崩で豎溝が描かれてゐる。

上部の氷瀑では、セラックとならずに、單調な幾つかの氷の圓錐塔を造る事がある。下の主流に入つて頗る複雑な迷宮となるが、クレバスは減多にない。大きな波を打つて流れ、兩岸から落ちる岩屑は一都市の建

築材料に十分な程あつて、爲に氷河の下流は遂には岩に埋れて終る。この巨大な氷河から流れ出す谿流は併しそれに比例したものではない。

この事は、地方的な氣候條件によつて説明がつけられる。酷しい寒さと強い太陽、物凄い雨や雪の量の降り続く數ヶ月。(p. 236) それ等によつて、氷は粘り氣のある軟かいものとなるのである。甚だしい寒暑の差は岩を絶えず落して、氷は之を運んで行く。古くは氷河はもつと低い谷まで伸びて居たものゝ如く、その形跡が見られる。氣候がよくなつて、後退した茫大な氷河の河床も見られる。

こゝ印度にも歐洲のアルパインクラブの行へる如く氷河の調査の行はれん事を切望する。

(p. 237) 湖沼としては、氷によつて鑿たれたものゝみであつた。唯、堆石が堤防となつて出来たものとして、カンパチェン(Kangbachen)の麓やローナク(Lhonak)にその例を見た。

シッキムの氷河は山との間に長い草地を有するのが

常である。之は探險家には非常に便利であるが、兩岸から流れ来る谿流が常に堆石を洗ふ爲に生じるのではあるまいか。

高山病について我々の經驗した特別な状態では何ともいひ兼ねるが、苦しみ方も各人各様である。(p. 238) 我々隊員も亦各々別々であつた。大體一五、〇〇〇から一六、〇〇〇呎の高度に出た時初めて感じた様であつた。

山の狀態にも大いに左右されるものである。私は鍛える事、馴れる事、食事に注意する事によつてかなり高山病に罹る範圍を縮める事が出来ると思ふ。(p. 239) 更に人間の體を馴化させる事によつていつかはカンパチェンジュンガの巨峰の上に旗の立つ日があると豫言しよう。

併しカンパチェンジュンガ登攀の障害は高山病だけではない。之程物凄い姿の山は殆んどあるまい。ではあるが如何なる巨峰と雖もどこかに弱點がある。私はダージリン側には望が薄いと思ふ。先づ可能なのはカン

チェン氷河から北の尾根であらう。下部の氷崖を雪崩をさせて登り得るものとすれば。(p. 240) この計畫で最も心配なのは輸送であらう。土地の苦力クワールは高くまで登るまいし、山になれたグルカ人のよい者は数が少い。又かゝる試みに如何なる季節を撰ぶべきかも混み入つた問題である。私は雨期明けが最もよいと思ふ。而して雨の中を出立して、晴れ上る時には現地に着く様にすると最もよからう。この様な遠征の費用は相當なものであらうが、極地探險に比べれば左したるものもあるまい。

雪線下に未だ一、二の問題が残されてゐる。

ダーズリンはこの地方の健康地としては最適の所ではないと思ふ。政治的理由でこゝが撰ばれたのであらうが、こゝはなほベンガル灣から来る暴風雨の圈内にある。(p. 241)

夏のサナトリウムとしての理想地はチェンビ(Chumbi)の谷であらう。併し之は今なほ西藏領である。受けなければラチェン(Lachen)の谷、シンガリラ

(Singalia) の尾根の上などよい所であらう。交通の不便はこの頃の汽車の發達を見れば永久的な問題ではないだらう。現在としては馬の道がシッキムとしては大いなる要求の一つである。(p. 242) この點友人の土木技師のドーヴァ氏から橋や山小屋などが設けられてラチェン、ラチェンが旅行者に開放されたと聞いた。もう一努力して、バミオンチとジョングりを繋ぎ、シンガリラ尾根を廻つて歸る道と、一〇哩程森を切り開いてゼム氷河に出て、グリーン・レークに石の小屋でも建てる事はさう難しくもあるまい。併し乍ら、政治的な問題は別としても、カンチェンジュンガを一周する事は當分面倒であらう。

(p. 243) ジョングりに戻つた夜、大いなるキャンプファイアを焚いて圍んだ。この火がはからずものろしの役にたつた。ベンガル副總督のダーズリン別邸で下僕が「カンチェンジュンガに新しい星」を見出したとジョン・ウッドバーン(John Woodbarn)卿に告げた。望遠鏡によつて、地上の現象が明かにされ、かくてカ

ンチエンジュンガ一周の計畫が完成したとの第一報は傳へられたのである。

第十二章 ダージリン (Darjeeling)

への歸途

(p. 244)翌朝不思議な事が起つた。いつも滞在の後
の出發には仲々小言や不平をいつた苦力達^{カフ}が、却つて
荷物を澤山擔がうとした。そして何の躊躇^{チウシュ}もなしに發
つて行つた。我々自身用意の出来ない内に、彼等は既
にテラス狀の尾根を一行に進んでゐた。その朝は全く
清爽であつた。私達は彼等の行つたあと靜かな山道を
景色を眺めたり、雪の嶺を寫したりして、楽しみ乍ら
行つた。

道は狭い岬狀の突き出た高臺を通つて次第に下つて
行つた。カンチエンジュンガやバンディムの繪の様な
姿が木の間から時々ぞかれた。プレーグ河^グの谿谷を
見下ろせば、(p. 245)極地の苔類から、熱帶の棕櫚に
至るまでのあらゆる植物が八哩に渡つて見られた。

やがて我々は心残り乍ら叢林といはんか密林の中にもぐり込んだ。約六、〇〇〇呎の下りである。植物が密生してゐて、近道が出来ないので非常に長く思はれた。下るにつれて森の様子は變つて行つた。下へく道は續けざまにジグザグに下つて行つて、遂に遠い瀬音であつた流が、大きな轟々たる音となつてゐる所で柳などの枝の原始的な橋に出た。この橋を渡つてからは、長い單調な下りに不平をつぶやいた事を悔いた。(p. 246)道は決して迂餘曲折には事かゝなかつた。

午後二時頃リンシンが出した迎への者に逢つた。彼は二日前にバミオンチへ立たしてあつた。迎への者は日暮までに森を抜け出るのは難しいかも知れないと忠告してくれた。

曲りくねつた險しいよく繁茂した谷の急傾斜を横切つて進んだ。前山の深い谷は溝となつて平野の水蒸氣を吸ひ込んで遠く西藏國境まで運ぶ作用をしてゐると思ふ。

時々森を透して展望が出来た。(p. 247)遠く段々に

低くなつた丘が見えて、最後に小屋と耕地のある山の端となつてゐた。それが雪に一番近い我々の目的のヨクスン (Yoksun) の村である。併し深い谷に沿つて廻り、梯子の様な急坂を攀ち、急流を涉らねばならなかつた。下るにつれて暖かくなつた。暮れ方の早い森の闇に我々は躓きつゝ道を急いだ。鸚鵡や猿に思はず聲を立てさせられたりして。

夕闇との競走に勝つて、一番星のあらはれる頃には明かに文明の印である垣根を見つけた。薄暗闇の中に阿舍らしいものが見えた。土人に招じ入れられ、黄衣の僧からマルワを饗せられ、喜んで飲んだ。(p. 236) 禮を述べて再び暗闇の中を下る。僧院の樂園が居て、笛やシンバルが焚火をかこんで鳴つてゐた。二十分程でガヤ／＼いつてゐる苦力達の所に出たが、テントは一つも張られてゐなかつた。

暫くしてその理由がわかつた。且^{オマ}那方はゆつくり來られるから、何れ森の中で一夜を明かさねばなるまい。その間に我々はヨクスンの果物やマルワを飲んで陽氣

に遊ぶうではないか。我々は雪の中に村を造る狂人のお伴で餘りにも長い事未開地で過した。だから一晩だけでも楽しもうではないかといふのだつた。

我々の出現は彼等にとつて思ひがけぬ痛事であつた。彼等は宴を張つたばかりだつた。太鼓が響き渡り、道路監督官の手厳しい聲がした。

幸ひ未だ夜も浅く、(p. 246) 宴を張つてゐた連中もまださう酔つては居なかつた。命令やおどしの結果、間もなくテントが張られ、夕食となつた。

ダブディ (Dubdi) のラマ僧正は、一度僧院にお越しを願ひたいといつて歸つて行つた。翌朝バナナのある朝飯を濟ませて出掛けた。ヨクスンの村のある緩い丘の間を抜けて、小川の邊に出る。こゝに昨夜の樂隊が待つて居た。太鼓やシンバルの音と共にジグザグ徑を登る。廟の建つてゐる臺地に近附くにつれて境内に正装した喇嘛僧達の集るのが見え出した。花で飾られた入口の兩側で突然トランペットが鳴らされた。

(p. 250) 喇嘛僧達は列をつくつて我々を奥の建物に

導いた。

緑柳の枝を透して、向ふに、廣いカブルーの雪の面が朝陽に映えてゐた。嚴肅な行列、簡素な式に、時代の流れから守られた、昔のまゝの世界に生きてゐる様な氣がした。自然の美しさは何一つかけてゐない極樂境であつた。

四天王のゐる室を抜けて本殿に上つた。一應御本尊に詣でてから皆に挨拶をした。(p. 251) 食後境内にて眺望を恣に楽しんだ。グブディは七、〇〇〇呎の高度にあり、その片岩質の南方の山麓は大きな波となつて絶壁などはない。ヨクスンの村はその流れから二、〇〇〇呎上にあるが、曾つては確かに氷河の河床であつたものである。今流れてゐる川の深い谷は氷河期以後の侵蝕によるものである。

歴史的に見ても、ヨクスンは、相當注意すべきである。いひ傳へによれば十七世紀の中頃西藏より三人の喇嘛僧がこゝに落ち合つて、ブチア人の酋長を立て、シッキムの王朝を拵えた。(p. 252) 従つてグブディは

シッキムに於ける最初の佛教移入地であり、その下の村はネパールの恐迫にティースタの方へ遷らねばならなくなるまでの主都であつた。

テントに歸つてから、再び行進に移つた時、なほ正午まであと三時間残つてゐた。バミオンチへは二つの道があるが、我々はラトンの右岸に沿ふてとつた。この道にはラトン河とその支流のリンビ(Rinbi)河の二つの流に下る急坂がある。先づ行程はヨクスンの臺地の縁に目を喜ばせた。急だが易い坂の下で美しい植物のよく茂つた谿流に出た。(p. 253) 橋が二つかゝつてゐて、一つは繩の典型的なもので他の一つは現代的なものであつた。

それから三、〇〇〇呎の登りは急ではあつたが快よいものであつた。

この日は幾回も村や寺の總代の挨拶を受けねばならなかつた。先行したリンシンが偉い方が通られると言ひふらして行つたからだつた。この間狂言は先づカツペリ(Katsuperi)の僧から始まつた。ティンリン

(Tingling) の村では更にしつかりした亭があり食事の用意がしてあつた。それから道は急に下り、リス(Risu)の谷を廻つてルンビ(Kungbi)の谷に落ちてゐた。

(p. 254) 對岸には馬が澤山待つてゐた。これからダージリンまで馬上危険も苦痛もなく行かれる。我々だけならばその夜までにパミオンチに乗りつける事が出来たらうが、苦力達が駄目であらうと思ひ、丘の中腹にてテントを張る事にした。暫くすると農夫達が果物や野菜を持つて來てくれた。夕方雪に映える夕陽や、過ぎ越して來た丘に伸びる影を眺めて楽しく過した。

翌朝はひんやりした空氣の森を抜けて馬で登つた。樂隊の音で廟に近付いた事を知つたが、(p. 255) 馬を下りたのはバン神の祭壇の前ではなく旅行者用バンガローのベランダの前だつた。この建物はよく出来てゐたし、場所も素晴しかつた。而し建具や調度品はすっかり傷んでゐた。

食物も澤山あり、我々も贅澤なしに済ますのには馴れてゐたが、何といつてもこのバンガローは「むさく

るしい」の一語に盡きてゐた様だ。

寺院は、更に四分の一哩程東の、眺望のよくきく丘の上に建つてゐる。パミオンチについては、J・フリーカー卿その他の旅行者が既によく傳へてゐる。寺の一部が新築されて、茅の代りに二〇哩のあなたから光つて見えた忌はしいトタンの屋根がかけられてしまつた。内部には例の如く祭壇があり、佛像が安置され、壁畫に圍まれてゐる。上部は書庫になつてゐる。

(p. 256) ネパールの侵入で相當壞され掠奪されたが、未だかなり残つてゐる。

池の向ふにシッキム王^{ラジヤ}の舊館邸がある。その壞れた段を馬で登つた。

その日リンシンは我々の爲に「惡魔の踊り」を催してくれた。アラクタンヘカンチェンジュンガに仕へに行く若い僧達が居て丁度よい機會であつた。踊りそのものは頗る美しいものである。それは宗教的な感激の表はれといふよりは寧ろ演劇的なものである。ロンドンのどんなバントマイム作者も描き得ない様な恐ろし

い面や、不可思議極まる動物が創造されてゐる。その服も貴重な古い支那の絹と金襴である。彼等がくるくる廻る時、裾は色の輪を描き、(p. 257) その下から歐洲のバレーの踊り子の足とは凡そ違つた重い布を巻いた足があらはれた。踊りには夫々意味があつて、自然の色々な力が或は人間の味方となり、或は敵となつて争ふのである。その中の一番の見物はカンチェンジュンガとチョモカンカルの精靈が湖と小森の愛情を得ようとする所であつた。

舞臺も適當してゐた。或は莊嚴過ぎる位。我々はグンパ (Gumpa) の前の臺地に置いてある長椅子に腰かけた。黄衣の小坊主は段の所に、熱心な子供達はその後に一團となつて動き廻つた。

キラ／＼する幕が除けられて、面を掩つた一人がぐる／＼廻り乍ら、段を下りた。續いて八、九人、緑、青、赤の面、恐しいものおかしなもの、惡魔も間抜けも。年老いた大僧正が法冠を着て階段の最上段に居る姿は、ヴェニスのマドンナ・デル・オルトの中のチン

トレットの Presentation of the Virgin 中の僧正の様であつた。又正装した見習僧は (劇作曲家) アルマ・タデマ (Alma Tadema) の研究材料となつた事であらう。

この目の前の種々な出來事を含んだ舞臺効果は、それ自體が劇であり、ヒマラヤを訪れた事のない人には (p. 258) 夢にもこの空間と光と色の表現は考へられな

いだらう。

周圍や足下には緑の森の尾根が波打つてゐた。遠く一方には黄金の平野が、他方には輝く雲の上に雪の山が聳えてゐた。頭の上の輝く蒼穹には鷲が二羽圓を描いてゐた。私の心は現在のしびれる様な喜びとこの卓越せる景色の美しさを記憶は不完全にし止め得ないと感じる淋しさに引裂かれる様であつた。

シッキム當局はリンチェンボン (Rinchenpong) を通つてパミオンチからダージリンまでの馬道を拵えた。約六〇哩、二日の行程である。パミオンチからラングット (Rangit) とクレイト (Kulhairi) の出合ひへ

五、〇〇〇呎下り、尾根二つ越して最後にランギットから少くも六、〇〇〇呎を登つてダージリンにつく。

(p. 259) この地方はティースタの東とは違つた印象であつた。向ふは自然の支配する未開地で人は僅かに侵入してゐる形だつた。今馬上より見る土地は長らく人も棲み耕した土地である。上つたり下つたり、巻いたり横切つたりして、夕方にはチャカン (Chakang) のパンガローに辿りついた。こゝはラムン (Rammun) の谷を隔て、ダージリンに面してゐる。パンガローの床は穴があいて危く、中の物も皆傷んでゐた。併し旅の終點に餘りにも近く、批評がましくもなれなかつた。最後の馬行の日。初めの數時間は頗る愉快だつた。丘に沿つた道は大きな竹の並木になつてゐて、その間から冠の様に上方に雪山が輝いてゐる廣い俯瞰眺望があつて、眺めながら進んで行つた。

(p. 260) 九月二十四日の水で流されたラムンの釣橋や倒された土人の市場の跡で晝食を攝つた。小ランギット川を渡渉してからはどこまでも續く茶畠の間を六、

〇〇〇呎、最後の登りを攀ぢた。

民屋それからブラック、そして廣い往還に出て漸く文明の世界に戻つた。

緩駟一氣、私は一行より一足先に「セントジェームス公園の樹蔭路」に出た。印度の紳士が近寄つて來て、「突然で失禮ですが、雪の國から來られた御一行の方では御座居ませんか。御身なりからしてさう拜察致しますが」と尋ねられ、正にそのとほりだといへば、「お年にも似ぬお元氣だ」と賞めて行つた。得意になつて、更に進む事數分にして、かつてカンチエンジュンガ一巡の第一歩を踏み出した扉の前で馬を下りた。旅は終つた。七週間にて約七五、〇〇〇呎又は垂直一四哩を上下したわけである。ラチェンからクンザまで二十四日間一木も見ず一人にも逢はなかつた。再び文明の世界に戻つた。併し今一度山に別れを告げねばならぬ。(p. 261) 觀測臺には例の大暴風の後で新にカンチエンジュンガの神の御魂鎮めの爲に旗が立てられてあつた。神の怒りについて土人達の間でダー

六、セラ氏撮影の寫眞の目錄

(以上)

ジリンの聖域近くで演習があつて發砲した爲といふのと、我々が餘りに神の御住居近く入つた爲だとの二説が唱へられてゐるとか。

信者の祈禱がそよ風に送られて、目的を果したのだらう。カンチエンジュンガは頗る機嫌がよかつた。毎朝日の出の時に、靜かに輝いてその崇拜者の前に現はれ、日中は雲の中にかくれても必ず日没後低い丘に夜のとばりが降りた頃に物質の世の中でない彼方への燈臺の灯の如く光り輝いた。

第十三章 西藏の骨董品(略す)

附 錄 (略す)

一、シッキムの地質構造及び地形

二、地圖について

三、パンディット Pundit の話(チンドラ・ダス

師のタシルンボへの旅行記)

四、測量された最高峰の土人名

五、參考文献錄

ラウンド・カンチエンジュンガ抄譯 (吉阪)

註 譯者出征中の爲校正の機會なく、爲に地名の呼び方等に誤りなきを保證し難い。その點諒とせられたい。

(編輯部記)



飯豊山頼母木川溯行記

第二高等學校山岳部

福島・山形・新潟三縣の境に聳える飯豊山に就いては嘗つて本誌二十五年第二號に二高山岳會の名で序説

的な紹介を行つたことがある。(註一)當時は二高山岳部が飯

豊山に入り初めた當初であつたので、その知識もさほど詳しいと言ふ事は出来なかつたが、その後連年各方

面から此が探究に努めた結果、今日では尾根といはず、澤といはず、凡そ飯豊山の登路と見做し得べきもので、

部員の足跡を印しないものは無いと言つても過言ではない程になり、飯豊山に關する知識も漸く深まつて來

た。是等個々の登攀についての報告は既に多く發表してあるし、又飯豊山塊全體に就いての概括的な報告も

近く行はれんとしてゐる。(註二)今茲に發表しようとするの

は飯豊山塊の諸澤中最後まで未踏のまゝに残つて今夏初めてなし遂げられた頼母木川の溯行記である。

頼母木川たもきは西北から飯豊山塊に切込んでゐる胎内川の支流である。胎内川は瀧澤峯・二ツ峯・藤十郎山等

に發源する諸澤の水を合せ、西北流して、途中で地神山・門内岳・二ツ峯から流れ出てゐる頼母木川を合せ

てゐる。胎内川も頼母木川も共に飯豊山塊に食込んで居る大きな溪谷であるが、澤が餘りにも長く幽が連續

してゐて通行が困難なので他の澤が究められた後までも長く未踏の處女谷として残されてゐた。我が部でも

昭和五年以來度々その溯行を試みたにも拘らず、常に撃退されてゐたが、胎内本流は昭和十五年七月に階川・

飯島の二人が人夫坂上稟次郎を伴つて夏井から夏越を越して胎内川に入り、オリカケ小屋から五日を費して登り詰めて瀧澤峯と二ツ峯との中間の尾根に取付くことに成功したので残る所は頼母木川だけとなつた。^(註三)

頼母木川溯行の試みは我々の知つてゐる所では在來三回企てられた様である。即ち昭和五・六年の頃越後山岳會によつて試みられたものと、昭和五年、十二年の兩度我が部によつて爲されたものであるが、孰れも溯行に成功せず、途中から尾根によつて前者は杭差岳^(註四)に出、後者は兩度共池平峯を経て二ツ峯に達してゐる。

昭和十五年に胎内川本流溯行に成功した後は頼母木川のみが飯豊に於ける唯一の未知の澤として残つたので、これが溯行完成を期して昨年度も班を送らうとしたのであつたが、インターハイ中止の餘波を受けて部の行動も制限されたので果し得ず、その解決も今年に持ち越されることゝなつた。本年七月部員大關久平・高橋昌福の兩名は約十日間の食糧を準備し、夏井から人夫坂上稟次郎を伴つて頼母木川に入り、高くへづりつゝ

も、兎に角頼母木川を登り切つて二ツ峯、門内岳間の尾根に到達して、遂に夏の飯豊山の最後の懸案であつた頼母木澤溯行に成功した。以下は兩名の手記である。

註一 「飯豊山の登路に就いて」(山岳二十五年第二號)

註二 山岳二十五年第一號第二號所載の諸報告の外に「二高山岳會會報」第一・二・四輯を参照せられたい。

殊に會報第四輯は「飯豊特輯號」で飯豊山の各澤に就いての紀行を網羅してゐる。是等の知識を綜合した飯豊山塊の概括的な紹介は今春の日本山岳會例會で部出身の野口義孝君によつて行はれた。詳しくは近く本誌に發表する豫定である。

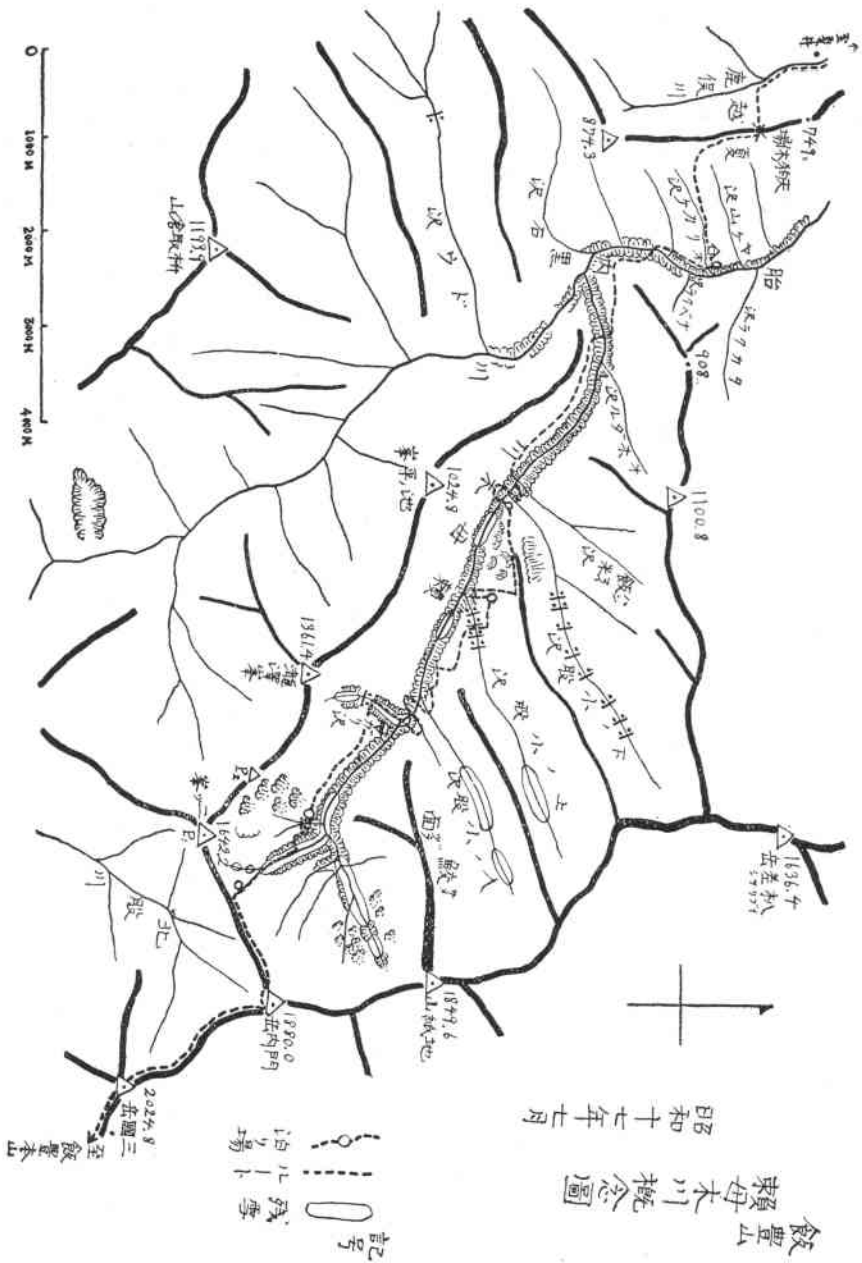
註三

階川廣水「胎内川」(二高山岳會々報第四輯) 参照。尙本流溯行は昭和十二年に東北帝大山岳部によつて(東北山の會々報第二號)、十四年には新潟高等學校山岳部によつて、十五年には新潟高等學校山岳部と越後山岳會の混成パーティによつても行はれてゐる。

註四

越後山岳會によつてなされたものは記録が發表されて居ない。二高の昭和五年の計畫は二王子岳から胎内川に下つて頼母木川を溯行する豫定であつたが胎内川で豪雨に遭つて頼母木川に入り得ず池平峯に登つて二ツ峯に出る事を餘儀なくされた(二高山岳部

昭和十七年七月



所蔵記録。昭和十二年には夏井から夏越を経て頼母木川に入つたが溯行約一〇〇〇米にして函のため前進不可能となつて池平峯に登つた(二高山岳會々報第四輯「頼母木川に就いて」参照)。

昭和十七年七月十七日 晴

北仙臺發(前六・〇五)―山杉、赤湯、今泉、坂町經由―
平木田着(後一・五〇)―夏井着(四・〇〇)

多くの山仲間を送られて朝仙臺を發つた。平木田から夏井への道を太陽に照りつけられながら喘ぎ喘ぎ歩く。後からリヤカーを引いた小母さんが追ひ着いて來て、親切にも車を貸してくれたので大部樂に道が捗つた。小母さんと別れてからは、又もむん／＼とむれる田舎道を、重いリュックに悩まされながら夏井に着いた。坂上長悟さんの家をたづね、二人は暫く主人の來るまで泉水の傍で休む。息子さんらしい人が熊狩や岩魚釣の話をしてくれた。夜の七時頃人夫の坂上稟次郎が來た。ルートの説明や賃銀の事等に就いて話し合つた。空には星が瞬き明日の好天を思はせ、楽しい夢路

に入ることが出來た。

七月十八日 快晴

夏井發(前七・一五)―晝食(後〇・〇五―一・一〇)―夏越(二・五五)―天狗休場(四・一〇―四・三〇)―キャンプ地着(六・一五)

五時に起床。空には殆んど雲もなく空氣は澄み切つてゐる。人夫と食糧を分け平均六貫程の荷となつた。人夫は吠に詰め込んで蓑を着込み雑作なく背負つた。坂上邸を辭したのが七時十五分。稟次郎も嬉しくて堪らぬ様だ。「今日は。」「何處へ。」「お山だよ。飯豊だよ。彼は誇らしげに答へる。胎内橋を渡り國民學校の前を過ぎる。熱田神社から暫く行くとトロッコ道に入り、それから次第に鹿俣川に近づいて行く。草いきれの道を三人はどん／＼歩き、杉のこんもりと茂つてゐる所に來た。我々は此處に在す觀音様の傍で暫く休憩する。此處からは丈高い草が兩側に叢生してゐるが、道は明瞭にわかる。山の神の祠を過ぎると道は急にわからなくなつた。稟次郎はかすかに残つてゐる踏跡を

どんく進む。道は澤沿ひになり左岸から右岸へと渡渉の連続である。兩岸は六十度位の傾斜をなす一枚岩で狭い棚をトラバースしながら進む。緊張が身に漲つて来る。五、六度渡渉し、程なく夏越にかゝるといふ所で飯を炊き晝食にする。一時間許り休んだ後歩き出すと間もなく先頭を歩いてゐた栗次郎が大聲を挙げた。ガサく。ドブーン。一瞬間の出来事であつた。十四、五貫の熊が草を分けながら現れ我々を見ると直ちに身を躍らして川に飛込んだのである。身のすくむ思ひがした。澤の中を溯ること約一時間で、右岸から水の涸れた小さな澤が入り込んでゐる地點に達した。この小さな澤の左岸が階段状の道となつてゐる。その取付は分りにくいが大體陸地測量部の五萬分の一の地圖に出てゐる道が消える所である。それから垂直距離二〇〇米の上りで道は判然としない。喉がひり／＼しやつとの思ひで天狗休場に出る。天狗休場は踏跡が夏越の尾根に出た所で二米四方位の平坦な地面である。此處で初めて頼母木川の全貌を見た。二ツ峯・門内岳

地神山を被ふ雲の中から三本の雪溪が垂れ下つてゐる。幾重にも折り重なつた山の間を深く長く續いてゐる頼母木川の魅力に心は躍つた。もう四時半である。夏越の上り初めから天狗休場まで二時間足らずかゝつたわけである。太陽もかなり低い。尾根を南に下つたが實に猛烈な下りで酷い渴を覺え夢中で下りた。下り切つた所で、やつと水にありつき、なほも脚を引きづりつゝ臺地をなす林の中を行くとオリカケ澤に出た。オリカケ小屋が壊れてゐて使用に堪へぬので、澤沿ひに合流點迄下つて胎内川本流の水面から五、六米の所にテンドを張る。

七月十九日 晴

キャンプ地發(前八・一五)―黒石澤の對岸(九・二〇)―渡渉(一〇・一五―一〇・三五)―オホダル澤の對岸(一一・一五)―晝食(後〇・〇〇―一〇・五〇)―ハンマイ澤との合流の上流(一二・二〇)―下ノ小段澤出合にキャンプ(二・五〇) 今日も快晴。胎内川の澄んだ水が豪快な奔流をなし、眼下を流れて居る。河幅は此の附近で十七、八米位

だらう。水量は多い。人夫が太い枝に針を付けて、簡単に尺餘の山女魚と岩魚とを三匹捉へて來てくれた。

八時十五分に此處を出る。兩岸は岩で五米位の高さがある。バランスをとりつゝ左岸をへづり程なく渡渉して本流の右岸をへづること一時間にして黒石澤との出合の對岸に出た。こゝから澤沿ひに頼母木川と胎内本流との出合に出ることは止めて、古い鉈目を辿つて尾根を越す。椿の藪と苦闘し乍ら急な傾斜を上つて、上の平地に達した。山毛櫨の林に落葉が散り敷いて暗い感じを起させる。いよゝゝ頼母木川の澤である。

頼母木川の兩岸は高さ三〇米乃至五〇米で、澤沿ひに段があり、上方は急な斜面である。下手には合流點が黒く刻られて見える。一時間許り林の中を行くと鉈目はぐつと降下し、一五米程の草付きとなつて頼母木川本流に向つてゐる。對岸には石塔が見える。昭和十二年七月、吉田氏等(當時二高山岳部員)が瀧澤峯にとりついたのは此の邊かららしく、吉田氏一行の行き詰つたガレが右岸に見られる。我々は暫く頼母木の水

に足を濡らしつゝ、稍上流から石塔にかゝり此に續くザツテルを通つて左岸を行く。鉈目は明瞭である。晝食後四十五分も進むと鉈目は再び澤へと下る。豐滿たる水は奔騰し巨岩の間に飛沫を上げてゐる。少し下流にハンマイ澤との出合が望まれる。小憩して再び左岸の藪に突つ込む。苔蒸した岩を越えて鉈目を追ふ。周圍は鬱蒼とした山毛櫨の林。下生えは比較的少く、一時間程要して澤に下る。下ノ小股澤との出合である。

頼母木川の本流と下ノ小股澤に狭まれた三坪位の地面を泊り場とする。此處から先は人夫も知らぬ所である。時刻は早いがテントを張つて上流偵察に出掛ける。二十五分許りも行くと兩側が壁で、其の上には草付きがある。此處までは割合に樂に溯行したがこれから上流は、いくら頑張つても、とても行ける見込がなさうである。右岸は空身ならば登れさうでもあるがリュックを背負つては到底行けさうにもない。それで明日は右岸を瘦尾根に沿つて高く巻くことにする。夜は蚊がひどかつた。

七月二十日 曇

キャンプ地發(前七・四五)―瘦尾根から上ノ小股澤を下
りる(正午)―晝食(後一・一五)―上ノ小股澤の瀧を見る
(四・四五)―晝食の地點に戻りキャンプ(五・三〇)

小雨の中に朝食を済まし右岸の尾根を登る。初めは
やゝ平坦な臺地で密生する藪を漕ぐ。人夫が鉈を揮つ
て進む。次第に尾根は細くなり、下には頼母木川の壁
にガレが隠見し、澤をのぞき込むと目も眩む程の傾斜
で落ち込んでゐる。雨も漸く晴れ上り、汗が額を、頬
を傳ふ。尾根は非常に細い。幸ひに長者ヶ原のマガギ
のつけた鉈目が此の細尾根を杓差岳まで續いてゐると
かで、大いに力を得る。兩側は物凄い岩である。此の
瘦尾根の乗越まで登る。乗越に立つと西方には尾根又
尾根と重り合つて見える。一條の瀧が遠くに判然と見
える。人夫の言ふことによれば、胎内川の下ウ澤に懸
る「ツバクロ瀧」との事である。此處から上ノ小股澤
の出合目掛けて又瘦尾根を降り初める。五葉の松の錯
綜した藪をこぐのも一苦勞である。もう鉈目を離れた

のである。一時間程して小さな澤に出た。晝食を攝り
二時十分に出發する。此の小さな澤を越えてその左岸
の尾根を上り鉈目をつけながら再び下る。苦闘二時間
餘。やつとのことで出合に着いたが本流の川面まで五、
六十米の絶壁で到底降りられない。上ノ小股澤をのぞ
いても同様である。時刻も遅く適當なキャンプ地も見
當らぬので最良の策として、晝食をした小澤の附近に
戻ることにした。五時半小澤の上の傾斜面に棚を作つ
てテントを張る。棚と言ふのは斜面に木枝や草を多く
敷いて水平に作つたキャンプ場である。

七月二十一日 晴

キャンプ地發(前七・四五)―休憩(八・五〇―九・二〇)―
本流に雪溪を見る(一一・〇〇)―雪溪に下る(一一・二〇)
―マガリ澤を上り左手の尾根にとりつき晝食(後〇・四〇
―一・二五)―キャンプ地發(五・三〇)

今日もよい天気である。昨日降りた瘦尾根を等高線
沿ひに巻くと上ノ小股澤に懸る四つの瀧(上から落差

約二米・三米・五米・一〇米）に出會ふ。第二と第三の瀧の間を渡る。それから又頼母木川の右岸に取付くのであるが急な上に下方には瀧壺が威嚇してゐるので、目が眩む。やつと登りつめると平地に出た。此處は長者ヶ原のマガギの春の泊り場で附近の木に「昭和十三年〇月〇日舟山登茂榮舟山〇〇山子十四名」と刻んである。我々も「昭和十七年七月二十一日二高山岳部大關高橋坂上」と彫りつけた。九時十分本流に向ふ。崖の高さは一〇〇米もあらう。更にへづつてゆくと、どうも行手がわからなくなつたので偵察にゆく。人夫が程なく見當をつけて来る。へづりながら下るにつれ、本流の音が近くなつた。右岸から落ちる小さな澤（入ノ小股澤か）の瀧の前を越して眼界の開けた所に出た。ここからは頼母木川には樂に入ることが出来た。本流を渡渉する。上流は狭くなり左岸は殆んど直角に近い急傾斜をなして中空にそゞり立つてゐる。再び右岸に渡り小さな澤に入る。此を上つて水が涸れた處でこの澤の左岸に上り頼母木川と、この澤に挟まれる尾根を下

る。やがて、再び本流に下りる事が出来た。腰の邊まで水に浸かり七〇米許り溯る。大きな岩を越すと目の前に雪溪が現れた。此處で暫く休憩する。雪溪には容易に取付けないので本流右岸を巻いて雪溪に下り立つ。正面にマガリ澤の残雪が大きく續いて居り恰も本流の感があつた。本流は、雪溪が切れてゐるのでマガリ澤の雪上を登る。一五〇米位行くと傾斜が急になり、雪が切れて瀧となつて落ちてゐる。此處でマガリ澤を離れて頼母木川本流の左岸をへづることにする。鉦目をつけても難行である。晝食十二時四十分。此處は川面から二〇〇米の高さにある。相當の傾斜で鉦にぶら下るやうにして進む。途中四十五度の傾斜で本流に落込む涸澤を二三横切る。涸澤の兩岸は草付きの斜面をなしてゐる。本流は雪がすばらしく、函を埋めてゐる。降り口を捜して右岸の斜面を上下しながら進んだ。もう日の暮れるのも近い。水をとるに便なキャンプ地をさがしつゝ猶もへづる。五時二十分、二ツ峯第二ピークから發する小さな澤にぶつかつた。此の澤には落差

五米程の瀧が懸つてゐる。様子を見て瀧の上を越えようとしたが時間がなく、此の附近で泊ることにする。瀧の一〇米下流、左岸に棚を作りテントを張る。人夫がイワキといふ植物を採つて来て汁に入れた。二ツ峯が背後にぐつと高く迫つてゐる。

七月二十二日 小雨

キャンプ地發(前八・五〇)―雪溪のある澤の左岸(一〇・三〇)―雪溪に立つ(後〇・三〇)―晝食(〇・四五)―キャンプ地着(三・〇〇)

朝飯を食つてゐると小雨が降つて來た。しかしもう大尾根は近い。小さな澤を越えて昨日より樂な傾斜だが酷い藪をこいで左岸に行く。藪は馴れたし氣も樂なのでファイトは猛然ともり上る。十時半小憩して、木に登つて俯瞰すると、下方に一直線に雪溪が見える。それから少し下り氣味に小さな澤に出、その左岸に沿ふて下り初める。賴母木川への下り口をやつと見付け一〇米位のガレを草にしがみついて、辛うじて本流に

降り立つた。雪溪がすばらしく續いてゐる。一五〇米許り歩くと雪は切れた。此處で冷風に、ふるへながら晝食とする。見通しは全然利かず、その上寒くてじつとして居れないので早目にきり上げて出發する。蜻蛉が雪上にへばりついてゐる。再び雪溪上を六〇〇米餘り進むと遂に雪は切れた。この雪溪は大した傾斜ではなく、靴で登れる程である。直ぐに右岸の草付きを登る。雪溪の續きは割に廣いが二ツ峯に寄り過ぎてゐるやうである。それで草付きを越してから、現れた澤(雪溪が二股に分れてゐるが、その門内岳寄りの澤)に入る。水は涸れてゐる。石段狀の傾斜を登る。此の頃小雨に遭ふ。標高一四二〇米附近にキャンプ地を選ぶ。雨中でも人夫はぼん／＼と火を燃やす。火の側に坐つて目を四方に凝すと、西方に二王子がくつきりと黒く屹立し、手もとどかん許りに二ツ峯の突凡としたヤケ(ガレ)が立ちはだかつてゐる。早目に夕飯を食つてシュラフにもぐる。

七月二十三日 雨 停滯

雨が降つてゐるので停滯とする。午後三時門内岳へ偵察に行かうとしたがキャンプ地から二〇米上は深い陣竹で身動きも出来ぬ。大關がやつと上に出た。良くは見えないが門内岳は直く前だ。二ツ峯は全貌を現さぬ。濃いガスがたちこめてゐる。北股川からガスが流れて頼母木川に入り込むのである。

七月二十四日 小雨 停滯

今日も霧と小雨。サポーターディングパーティーが梅花皮澤を登りつめて三國岳に來てゐる筈なので食糧等には心配の要なく今日も停滯することに決める。午後四時頃雲が飛び初め、周囲の山々が姿を見せてくれる。二ツ峯だけは頑強に霧のヴェールを取らない。落日に映える日本海に佐渡がぼつかり浮んでゐる。三人ともアーベントロートの中に物も言はず、うづくまる。日は落した。明日の晴天を思ふと心が躍る。

七月二十五日 快晴

キャンプ地發(前七・〇〇)―門内岳(八・三〇)―石コロミ頭(一〇・四五)―後一・三〇)―御嶽下ノ池畔のキャンプ地(四・三〇)

最後の尾根歩きだ。キャンプ地の上の簷を抜けると廣い緩やかな草原が大尾根に續いてゐる。門内岳へ出る手前の簷で大部エネルギーを消耗する。形容を絶した程酷い陣竹と偃松の連續である。門内岳の南の瘤へ出てリュックを下し門内岳の頂上に行つた。柔かな草原、和かな陽光、實に仙境である。だが天候を氣にして急ぐ人夫にせかれて發つ。雲も殆んどなく、唯太陽がわづかにぼんやりした暈を被つてゐたのみであつたが、やがて急にガスが籠めて來た。三國岳の簷で又も困憊する。三國岳で休憩してゐる時下方二〇〇米の雪溪上に熊が寝轉んでゐるので、遠いのを幸ひに三人でからかつた。簷にぞく／＼して居たがやがて見えなくなつた。三國岳を越え、石コロミ鞍部の見える所で梅花皮澤を溯つて來たサポーターディングパーティーを發見(十

時四十分)。雪は少いやうであるし、さぞ苦闘したことであらう。三時間程待つて一行を迎へる。共に健康を祝し完登を喜び合つた。もう樂な氣持で進んだ。ガスが濃く時間も遅い。後烏帽子と烏帽子岳との間の簷になやまされ、烏帽子の南の廣い草原を下り雪の上縁を通つて十米四方の池の畔に着いた。(御峯下ノ池か)此處に泊つて今夜こそ山を樂しまう。テントが二つ並んだ。今日も壯嚴な入日。尾根筋だけあつて、風も冷く頬を打つ。飯の出来るまで檜山澤の支流赤瀧澤をのぞいて友を思ふ。七時半頃不圖、雪溪上に四つの黒い點が、上へ／＼と動いてくるのを發見した。同じ飯豊山に挑みつゝあつた懷しき友の姿である。ヤッホーの交錯。一時間半程して彼等の顔が判つて來た。夜は星空の下で、赤々と燃え盛る火を圍んで、盡きぬ感傷に耽ける。

七月二十六日 晴

キャンプ地發(前八・〇〇)―御手洗池(九・三〇)―西ヶ

飯豊山頼母木川溯行記 (二高)

岳・大日岳親子新道との分岐點(後〇・一五)―本山小屋
着(一・三〇)

人夫稟次郎は、早朝一人で下山した。我々の出發は午前八時。ゆつくり前進である。一時間程歩くと、赤谷から飯豊本山へ至る道にぶつかる。道は尾根の向つて左側の雪田の縁を傳ひ、時々雪にかくれたりしてゐるが大體はついてゐる。雪田、簷が交互に現れる。しかし道がついてゐるのだと思ふと大いに樂である。御田(西ヶ岳の北西斜面)の雪田をすぎ親子新道(大日岳への道)との交叉點に着いた時はほつとする。この附近で本山から迎へに來てくれた三年の部員に逢ひ本山小屋の手前十分の所で水を飲んでゐたら又々裏川班・尾根班に邂逅した。すつかり楽しくなり、本山小屋では皆、十日間の飯豊の話に花が咲いた。

冒頭に述べたやうに頼母木川は今まで殆んど未知の澤であつたので、澤の名稱等も分明でなく、従つて以上の報告も極めて杜撰を免れ得ない。明治末期に此處

に入つて伐木を下流に流して居た古老が鼓岡の部落に住んでゐて、頼母木川について良く知つてゐるさうである。

我々の見て來た所では本流には大きな瀧は殆んど無いが、大部分は函の連続で澤の中を溯行することは不可能に思はれる。水量は常に多く、トロは深い。降雨によつて増水甚しく一夜に二米も水面が上昇すると言ふ。函の上は兩岸共、酷く錯綜した蘆が叢生し傾斜も急で、四十度前後の箇所も少くない。地圖では左岸が右岸よりも急な斜面を形成してゐるが實際には大した違ひはなかつたやうである。

オリカケ小屋から下ノ小股澤出合迄は鉈目があつて樂であるが、此處から上ノ小股澤に懸る四つの瀧の附近までは全然人が入つたことなく嶮を極めてゐる。へづるにしてもルートを如何に選擇するかゞ問題であるが、我々の採つたコースが最も安全ではないかと思はれる。それでも瘦尾根から頼母木川に下ることは可なり困難である。上ノ小股澤の出合から上流では、上の

小股澤の瀧からは頼母木川に入り得る見込はない。入ノ小股澤にかゝる前からマガリ澤に入るまでは位置と状況をよく見極めてへづるなり、下降するなりしないと迷ひ易い。二ツ峯下の諸澤の集る所と胎内川頼母木川の合流點との落差は五〇〇米に過ぎない。従つて門内岳・二ツ峯を連ねる尾根に取付く時は一氣に急傾斜を登るやうになるので、アルバイトは激しいが位置は理解し易いので樂である。この尾根筋は地圖によつて受ける感じよりも、遙かに樂なコースである。

船形山横川遡行記

二 高山岳部

つい二十年前までは殆んど人の入ることもなかつた東北の山や溪も非常な困苦とそれにも勝る深い喜びと共に一つ一つきはめられて來た。その中でも東北の代表的な山とせられる飯豊山や朝日岳等には年々休暇を利用して數々の登行が行はれたのであるが、それ以外の時期には比較的手近な所にある尾根筋谷筋に縦横に足がむけられた、船形山横川もその一つなのである。

二高山岳部以外で此の澤を試みた例を聞かない。始めて入つたのは大正十四年秋、沼井・佐々氏等の一行であつた。このパーティは白澤より大倉川沿ひに横川に入り第一の瀧（後述のF₁）迄到つたが溯行困難なるを知り、左岸よりC澤（圖參照）を経てB澤に到り、

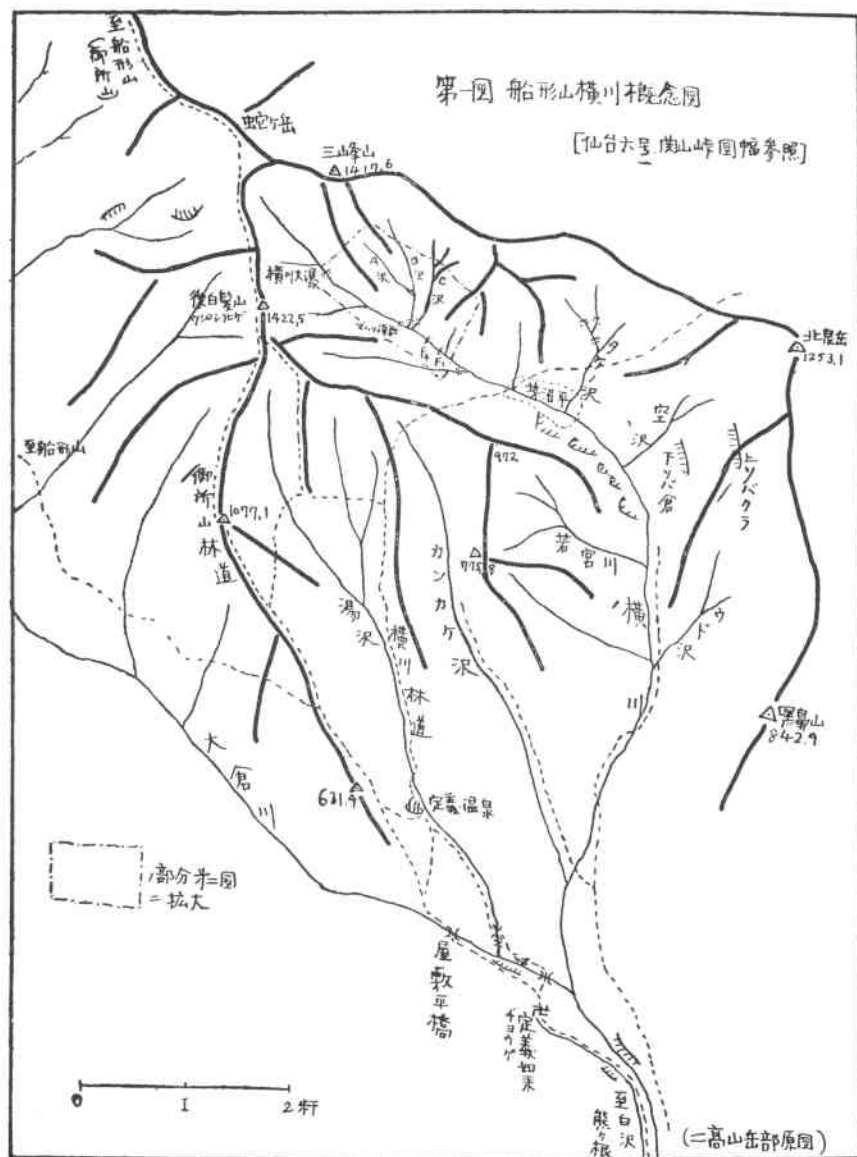
これをつめて三峯に到つて更に船形本山を經、山形縣野川に出てゐる（「山岳」二十年參照）。

昭和三年秋には同じく二高山岳部の杉原・伊東・久野・大島氏等によつて行はれ、根の白石より泉ヶ岳の南の尾根を越えて横川に入り矢ビツ瀧にはぐまれて三峯に出、矢張り山形側に下つてゐる。翌四年には大島氏他數名により試みられたが前年と略々同様のコースで吉岡に下つてゐる。

その後暫く試みられなかつたが昭和十四年秋に吉田・上田が芳沼平まで行つたが悪天候で引き返し、十六年九月には佐藤外三名は矢ビツ瀧まで到つたが結局三峯に出てしまつて、横川の全貌をさぐるに到らな

第一圖 船形山横川概念図

[仙台六号 横山峠図幅参照]





F 4 (矢ピツ瀧)

二高山岳部

つた。

同年十月に到つて始めて廻行が完成されたのである。以下その際の紀行である。

期 日 昭和十六年十月四日―八日

バーティ 丸山進(二年) 佐々木喜一(二年) 葛西森夫(一年)

装 備 ザイル(セクリタス三〇米、アーサービール二〇米)、天幕(ライトウエイト)

地下足袋、わらぢ併用、その他は普通の装備であるが、横川では鉄靴を用ゐることの不利と、ハーケンが使用出来ぬ岩質であることが知られてゐたので何れも持参しなかつた。

十月四日 快晴

北仙臺(前八・二七)―熊ヶ根(一〇・三〇)―定義如來(後二・〇〇)―定義温泉(三・一〇)―キャンプ地(六・一〇)

成功すれば初廻行だぜと勵まされて心を躍らせつゝ、汽車に乗り込んだ。北仙臺・落合間が山崩れの爲徒歩聯絡したので熊ヶ根着がおくれ、定義迄の道を急ぐ。この間約三里、如來まではバスも通じて居り參詣者で

にぎはふ。

如來を出て少し行くと地圖にある道は橋を渡つた所で消え先がわからない。林の中に細々とした道を見つけて此を辿る、静かな山道にはあけびが澤山なつてゐて、木に登つてとつたりなどして大分道草をくつてしまつた。

温泉で横川林道に就いて尋ね、芳沼平を通つて居ることを確め、右岸沿ひに數町行くと道は川岸に消え、對岸に續いてゐる。渡渉して暫くの所で早々にその日の晩飯を炊いてしまつた。

此處から道は小さな澤を二つ三つ越してから段々高まつて尾根の上に出て行く。邊りは大きな木がなく灌木の密生した藪である。陽はすっかり没して泉ヶ岳の後から十四夜の月が柔い黄色に輝いて上つて來た。道は大分荒れてゐたがはつきりついてゐる。六時も過ぎたので路上にテントを張ることにした。地圖で八〇〇米の標高がついてゐる邊りと思はれる。此處より三四百米先に行くと静かなブナ林があり、谷川から水を得

ることが出来た。枯木も豊富で焚火を赤々と燃し、月を眺めながら明日からの行程を不安と憧憬の入り混つた氣持で話し合ふ。夜十一時頃ボツリボツリと雨の音がした。

十月五日 晴

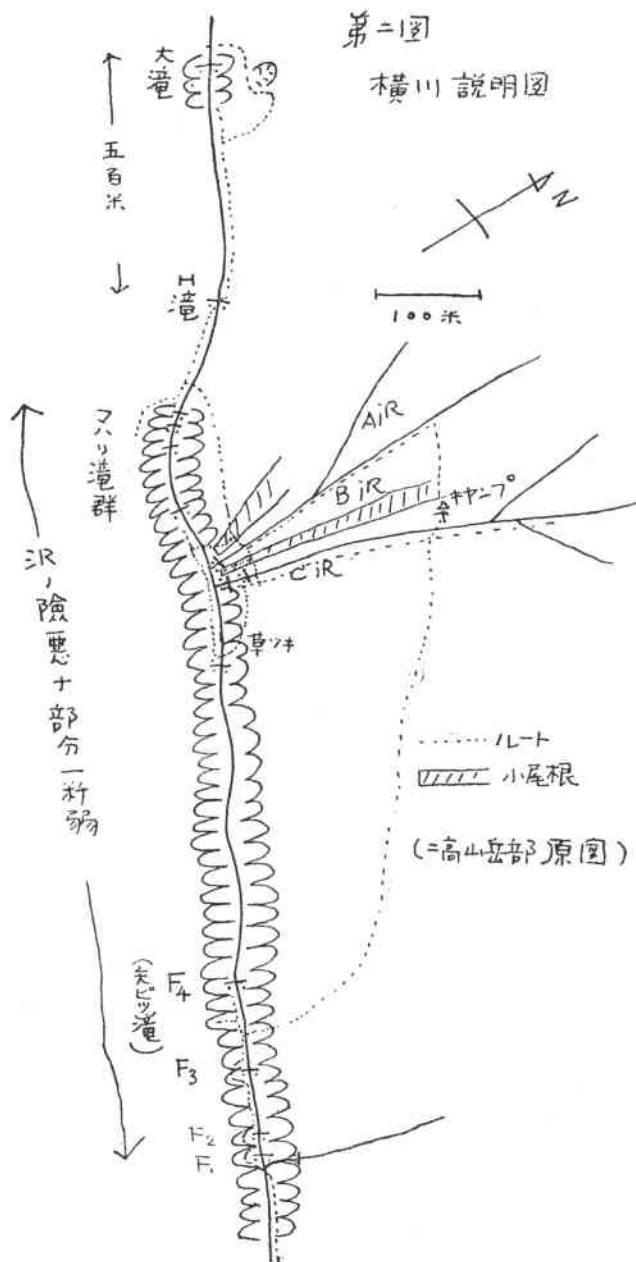
起床(前六・〇〇) 出発(七・五〇)―屋敷平へ行く道との
岐道(八・〇〇)―芳沼平(九・一五―一〇・〇〇)―F₁(一
一・〇〇)―後〇・二五)―矢ビツの瀧(二・〇〇)―C 澤キャ
ンプ地(五・〇〇)

昨夜の雨の音に心配したが今日も亦からりと晴れてゐる。道は標高尾根を越してカンカケ澤の源頭をへづり、更に九七二の標高點附近を通つて右に少し折れ、それより九十九折となつて芳沼平に下つてゐる。此處からは大きなブナの林の中の道である。殆んど人が通らないらしく落葉が厚くしてゐた。カンカケ澤の源頭迄來ると豁然としてひらけ、泉、北泉が直ぐ前にそびえてゐた。此の邊はキコリが入つてすつかり林を切り拂つたのである。一面に點在する切株の間に大きな

薪がえんえんと積んである。其處に居たキコリに横川についてきいて見たが渡りらしく何も知らなかつた。九七二の標高點を過ぎると道は右に曲り尾根傳ひに二〇〇米程下つてから左折して急斜面を一舉に芳沼平迄下る。此の下りは下生えもない陰氣なブナの原始林である。我々が横川に下りたのは標高八〇〇米附近で、ここにルックを置き暫く下流を偵察した。二〇〇米程下流に左岸から小さい静かな澤が入つてゐた。我々はこれがタケの澤かと思つてゐたが、タケの澤はもう一つ下流でやはり左岸より注ぐものであるらしい。タケの澤の出合附近は大分廣い平をなして芳沼平と呼ばれ、ブナの巨木が鬱蒼と生ひ繁りキャンプ地としても快適な所である。芳沼平から上流に進んで右岸の小瀧を過ぎる邊から兩岸の岩壁がだん／＼高まつてゆくが幸ひ水量が少ないので澤の中を歩き得る。暫くで澤が大きく左折する處の正面に美しい四〇米程の瀧が見えた。これは小澤が本流左岸の岩壁を落るもので水が岩に當つて幅廣く擴り銀絲を無數に垂れてゐる。此と並んで本

第二圖

横川説明図



流に F_1 (五米) がある。これから上流は聳えたつ兩岸がぐつと狭り澤が一變して險惡となつて行く。先づ腹拵へしてから此の惡場にアタックした。 F_1 の右岸には深くえぐりとられた様な、しかも底面がまつ平な澤が三十度位の傾斜で落ち込んでゐる。 F_1 は二間立方位の岩塊の間を溪水が流れ落ちるものでこれは全く容易に越えられる。 F_1 の上流三〇米に一〇米の F_2 がある。川底は細い砂に埋れ、 F_2 の瀧壺は深くえぐれて瀧の下まで行くことが出来ない。そこで右岸の壁を登る。下半分はホルドのない岩壁、上半部は土砂の急傾面となつてゐる。高さは二〇米でこゝから丁度うまい具合に小さな溝が瀧の落口まで下降してゐるがうつかり足を滑らさうものなら眞下の瀧壺に落ち込んでしまふ、 F_3 (八米)は奔湍である。こゝから F_4 (矢ビツ瀧)迄は兩岸五〇米以上の絶壁をなし、水量が多ければとても澤の中は歩けぬが横川は源頭が一五〇〇米程であり丁度秋の減水期であつたので流れの中をジャブジャブと行ける位であつた。

F_4 は水際から岩壁が切り立ち如何にも矢ビツといった感じで水流は一度中段のスリパチ状にえぐれた中に奔落し更にそれが溢れ出て下段の瀧となり、二五米の高さを三段になつて流れ落ちる。兩岸ともへづることは不可能であるし、たとへ瀧壺を泳いで渡つてもオーバーハングではどうしようもない。

少し下つて、右岸の脆い岩壁を丸山に登り始めたが、七十度近い傾斜でホルドが頼りないので斷念した、たとへ右岸上に上り得たとしても左岸に比して急傾斜でありブッシュもひどく困難を豫想される、其處の對岸からはガレを登つて森林帯に出た(左岸)。上流を見下すと本流に下るにはザイルの長さが危ぶまれたのでブッシュをかきわけてC澤に出た。所々に一ヶ月前の三年パーティーのものと思はれる鋭目があつた。C澤の右岸に漏つぽいながらもほゞ平な草地を見つけて天幕を張る。此處はC澤が三つに岐れる點より約一丁下流である。飯を炊く間に一人が偵察に出かけた。C澤の本流落口まで二十分、B澤C澤は何れも懸瀑をなして

本流に注ぎ之を下ることは出来ない、それでA澤に入り又は更に尾根を越して本流に出ることにした。(その時はA澤が獨立して本流に注ぐのか或はB澤に合してゐるのか不明であつた。)夜丸山が鉈で兩足を怪我し翌日の行動にいさゝか不安を感じた。

十月六日 快晴

出發(前七・一〇)―C澤合流點(七・三〇)―本流に出る(八・〇〇)―大瀑下(八・四五)―大瀑上(九・一〇)―横川源頭(一〇・〇〇)―降る―B澤(一一・二五)―祕境―キャンプ地(後二・三〇)

丸山を残し佐々木と葛西はザイルとカメラとパンとバタ―を身につけて輕装で出發した。

C澤は出合までは石のゴロゴロとした明るい澤でまもなく瀧の上に出る。これは二五米で更に別な瀧となつて本流に注ぐ。本流には降りられさうもないので高さ數米の小尾根を越えてB澤に出た。B澤とC澤の本流への合流點は全く密接して居る。所がB澤の出合も凄いい所で二〇米の懸瀑が三つ續いてゐる。本流は完全な

函らしくその底は暗くて上からは見えない。

更に右岸の小尾根を登つて途中ガレを高くまき、しばらくブッシュをこぎわけると本流に出た。既に惡場は終つて明るい静かな流である、兩岸の岩壁はなくなつて紅葉した木の葉が水面に映つてゐる。

本流はこゝより下流はすさまじい瀧の連續である。

ホールド一つない滑かな岩壁の間の槌狀の處を上から二〇米、二〇米、一〇米と大きなのが三つ續きその先は左折してゐるがもつと瀧がある様だ。後に祕境に降りた時にこれはその下の第四の瀧(二五米)で終つてゐることがわかつた。四つが連續し、全體が大きなカーヴをなしてゐるので私達は之をマハリ瀧群と呼ぶことにした。

上流に向ひすぐ一五米の瀧を越す、鮮かな緑の葉に圍まれた眞黒な岩の間を輝くばかりな白いしぶきをあげて二段になつて奔落して居る、階段狀に重つた岩を傳つて登り中段を渡つて、之を越したので服はすつかり濡れてしまつた。此の瀧を形狀からH瀧と名づけた。

これより横川大瀑（地圖にあるもの）迄は長閑な澤で幅も二間位の小澤である。此の上流にあの様な大きなものがあるとは一寸思へぬ位である。大瀑は横川中でも壓倒的に大きなもので上段が四五米、下段が一五米豪壯そのものである。

左岸を高く巻いて、ほど瀧の落口と同じ高さの邊で高さ一〇米の岩壁にぶつかりこれを巻いて三〇米もブッシュをかきわけると本流がもう真下に見えて居た。落口で木につかまつて體をのぼすと上段の瀧の瀧壺が見える。下段の瀧は直角に方向を變へて落ちてゐるので岩壁にかくれて見えない。しばらくこの素晴らしい景觀を見下してゐたが我にかへつて源頭へと向ふ。小さな瀧と淵が所々にあるが何の妨げにもならぬ程小さなもので大瀑の上から五十分にして源頭に達した。すっかり葉の落ちた木の枝から遙に後白髪に到る道が細々と續いてゐるのを見た時は流石に嬉しかった。歸途は往路と全く同じコースでB澤迄來ると丸山が晝飯をもつて迎へに來て居た、そこで腹拵へしてまだ時間も早

いのですぐ下にある函の中に降らうと考へた。B澤と本流の間の尾根を下る。猛然急で殆んど土をふまずにぶら下る様にして本流に下りた。

其處の未だ一度も人の息吹に觸れたことのない空氣、四五十米の岩壁が蔽ひかぶさる様にそより立ち上を見上ると岩の残した僅かの間隙から僅に見える空がキラキラと眞背に輝いてゐる。それなのに函の中は薄闇に包まれしぶきに濕つた空氣が冷々とする程である。上流にはマハリ瀧群の最下段のものが二五米の高さから落ち込んで居る。そこから五〇米下流、五〇米の高さからB澤が三段をなし、凄い轟を立て奔落してゐる（此を楠美瀧と名づけた）。僅か一〇米の間隔を置いて、同じく左岸二〇米の高さからC澤が懸瀑をなして落ち込む。即ちC澤は先刻C澤を下つて來た時にぶつかった瀧とこの瀧の二段をなして本流に注ぐ。

三十分程もこの壯嚴な光景をほしきまゝにしてから下流を探らんとしたが一〇〇米程で又凄愴な懸瀑の上に出た。これは深い函の中に更に一段と掘り下げられ

た井戸の様な感じだった。高さは二〇米位だが、薄暗い瀧壺の青黒く澄んだ水面を見つめてゐると吸ひ込まれる様な無氣味さが感ぜられるのであつた。この傍の急な草付を上つて函の上に出た。此の祕境に入る個所は私達の降りた小尾根とこの草付き以外にはないであらう。この下流ヤビツ瀧迄は凡そ二〇〇米位函が續くが小瀧が二つ三つあるだけである。

十月七日 快晴

昨日で本流を探り盡したので三峯に出ようかとも思つたが却つてブッシュで辛いので澤を行くことにした。キャンプ地よりまづすぐにB澤までブッシュを漕いだ(所要時間三十分)。B澤もC澤と同じ様な澤である。A澤は略々私達が豫想して居た様に途中でB澤に合流して居るが、水量はB澤の半分位の極く小さなものである。B澤を下つて楠美瀧上に出、此處から前日と全く同コースで源頭に到つた。源頭は澤が段々岐れ遂に何時の間に水が涸れて、藪の下をくぐる溝とな

り、間もなく登山路にぶつかつた。此の路は地圖にはないが、船形山より蛇ヶ岳、後白髪を経て地圖にある定義^{ジウギ}から船形山に至る路に合するものである。後白髪山を四時頃に出て、大倉川畔に着いた頃は八時近くですつかり暗くなつて居た。屋敷平橋のたもとでキャンプの準備を始めた頃、丁度十七夜の月が美しい姿を現はして、私達の山行の最後の夜を祝福するかの如く照りわたつた。

十月八日 快晴

今日もまた快晴、如來を経て熊ヶ根迄三時間、十二時半に着いた。一時間ばかり前にやつと仙山線が開通した所で一時七分の汽車で仲間の待つ仙臺に向つた。

遠 笠 山

中 村 謙

達磨山だまろの山頂に立つて遙か東南に天城の主峰を望むとき、最高峰「萬三郎岳まんさんろう」・馬ノ背・萬二郎岳から左にかけ離れて、恰も菅笠をかぶせたやうなドーム狀の美しい丘陵を發見するであらう。これが天城の側火山中でも最も特色のある遠笠山とほがさやまである。

遠笠山は海拔一一九七・一米。古くは「洞笠山」若くは「東蓋山」「東笠峰」と書き、秋山富南・萩原正平の「増訂豆州志稿」には、「大嶽ノ東ノ高峰樹木ナシ、直立三千九百五十尺」と認めてある。因みに「大嶽」とは最高峰「萬三郎岳」の異名である。

この山は交通の不便と、今一つには陸測五萬圖幅「伊東（舊玖須美）」が、準要塞地帯に編入された關係上、

夙に絶版になつてゐる爲め、之を訪れる者少く、従つてその文獻も殆ど皆無に等しい。左にその主なるものを拾つて見ると、先づ次の二つを舉げることが出来る。

天城の東端（河田植）山と溪谷創刊號

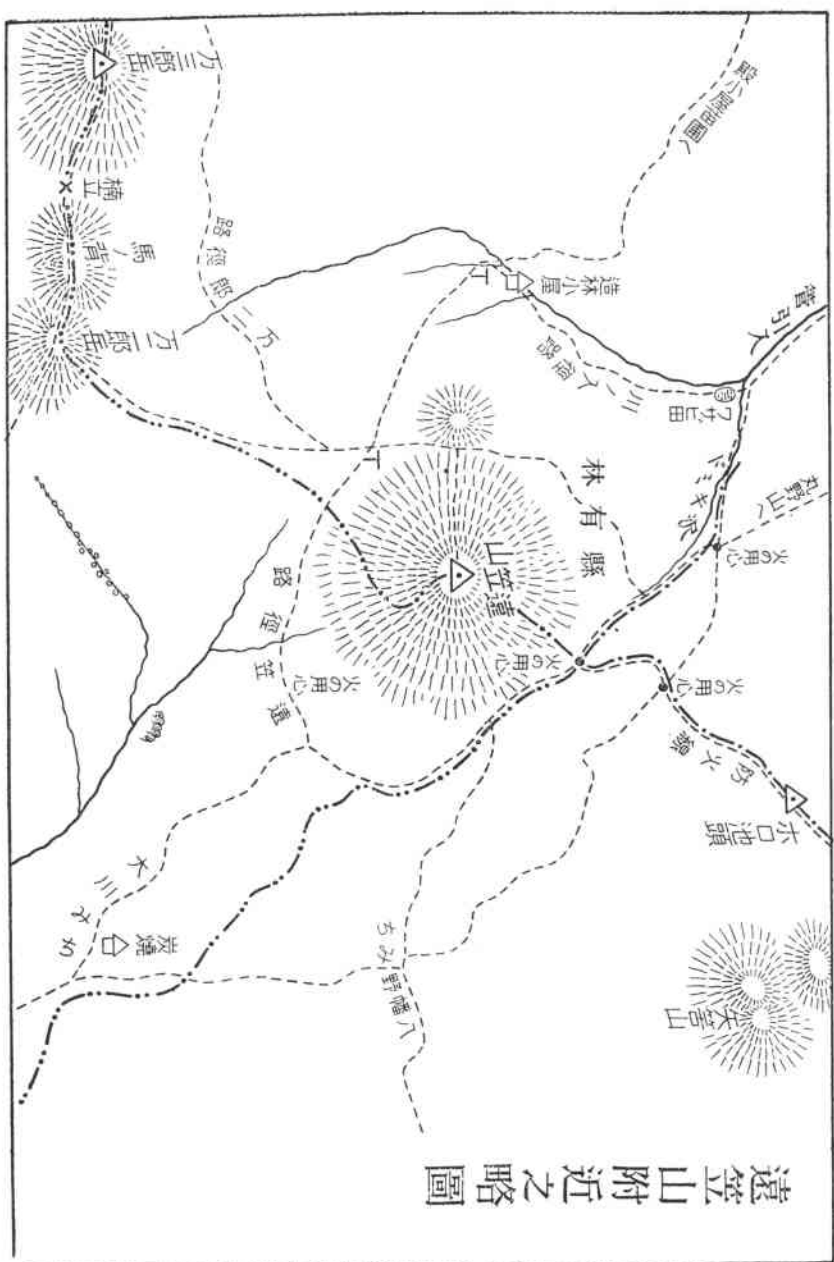
菅引川入奥天城の全貌（高柴武雄）ハイキング四九號

これ等の紀行文には所々に「遠笠山」なる文字を散見するが、所詮その目的は天城の主峰にあつて、遠笠山には無かつた爲め、いづれもその中腹を通過した記事に過ぎない。従つて遠笠山自體に關する記述は、何んと云つても、

菅引入・遠笠山（高柴武雄）ハイキング六八號

を以つて嚆矢とする。高柴氏は上大見村の姫ノ湯から菅引入を遡つて、遠笠山と萬二郎岳との鞍部に出で、それから十分ばかり遠笠徑路を傳つた上、左上へ密數を押し分けて登頂せ

遠望山附近之略圖



遠笠山（中村）

100

られた。次に、

伊豆半島の山と峠（岩根常太郎）ハイキング一〇三號中に「遠笠山」の記事がある。これは八幡野から伊尾山の麓を通つて西し、一旦遠笠徑路に出た上、小澤を廻つて登頂された紀行の略記である。最後に、

紅葉の天城山主脈難走（中村謙）山と溪谷七〇號

これは天城の主稜に山嶺道路が完成したのを幸ひに、夜を徹して興市坂から八町池に登り、白田峠・戸塚峠・片瀬峠・萬三郎岳・楠立・馬ノ背・萬二郎岳と縦走して遠笠山の鞍部に降り、それより遠笠山に登つて鸛嶋村の池から八幡野に抜けた記事である。

以上がこれまでに私の眼に留つた遠笠山に關する文献の凡てである。ではこれから私の數回に亙る貧弱な經驗を基礎として左に其のルートの概要を説明して見よう。

先づ登路の大體について述べるならば、

東南面

1. 鸛嶋村池から矢筈山の北を捲いて防火線に出で、天城山脈の脊稜傳ひに遠笠徑路に合するもの
2. 八幡野から伊尾山（△四五九米）の北麓を捲いて遠笠徑路に合するもの

3. 大川より西北に小曾根を傳ふもの

西北面

4. 萬三郎岳方面より主脈を傳つて達するもの
5. 地藏堂より殿小屋苗圃を経て遠笠徑路に入るもの
6. 上大見村菅引より菅引人を進行するもの
7. 菅引より丸野山（△六九六・三米）を経て防火線に入り、之より遠笠山に向ふもの

等數條を數へることが出来る。

八幡野口

伊東から下田行のバスに乗つて「先原三里」を過ぎると、驢やばなて八幡野に達する。

こゝでバスを捨てゝ右折し、池への道を行くこと大凡そ數分、道の右へ屈曲する處で、眞直に參宮橋を渡り、心持ち左寄りに前進すると間もなく大きな椎ノ木の亭々と聳える四ツ辻に達するから此處で右へ曲る。

暗隠な坂路で木馬道が通じてゐる。畑地や杉林を過ぎ、一しきり一喘一息の急坂を攀ち登つて杉林に入り、堀割を通り過ぎると比較的容易な上りとなる。

稍々あつてどうやら道が平らになり、右は赤松、左

下は杉林になると背後に海が隠見出来るやうになる。

それから數分にして左に橈道を岐ち、堀割の中を心持ち上り氣味に進めば、あたりは豁然と展けて、行手に矢筈山・遠笠山・伊尾山が現はれ、背後には洋々たる相模灘が望見され、大島の紫影も懐しく指點される。

三、四分で左へ岐路を岐つと、又も堀割裡に入り、之を出ると此度は右側が展けて、大室山が双眸の裡に入る。

道は直ぐ雜木林の繁みに入り、次第に軽く上つてゆく。かくして目下伐採中の松林に達するころ、今までの木馬道は終りを告げて、稍々複雑になるが、成るべく左寄りに眞直ぐ進めば安全だ。

その中に三叉路に會す。眞直ぐ下つてゆく道は恐らく谷間へ下りて池から來たものと合して、矢筈山と遠笠山の中間をゆく道であらう。左に折れて杉林の中を切り開いた坂路を峭ぎ登る。

心持ち降り、右に小徑を岐つたり、檜を植ゑ付けたばかりの茅戸の小曾根を左へぐるつと廻つて、之れに

取付き次第に軽く登つて進むと、幾何もなくして防火線を横切る。遠笠山の中腹を大きく捲いてゐる防火線の一つである。

再び林間に入り、進むこと大凡そ十分あまりで又も防火線に會するが、こん度はこれに従つて右折し、少し許り登つてから直ぐ左に折れる。兩側とも檜の植林帯。これを抜け出ると矮小な檜と杉の植林帯となり、景も展けて前方には遠笠山の頂上も仰がれるやうになる。こゝを心持ち右に捲いて、小澤を二つばかり涉つてから左上へ上る小徑に従ふ。

直きに磊々たる小澤を登るやうになり、聽て又小徑に出る。道はハッキリ踏んではあるが、茅が茂つてゐて聊か歩きにくい。あたりは一面の茅戸で矮小な檜が點々と植林してある。

岐路から三十分足らずで遠笠山の頂上直下二〇〇米附近、海拔にして一〇〇〇米附近を捲いてゐる遠笠徑路に達する。遠笠山の頂上へは、こゝから少し許り左へ行つたところで横切る潤澤をどこまでもつめるがよい。

水のない石のごろ／＼した川床を一步々登つてゆくと、二十分ほどで澤のツメらしい地點に達する。一息入れてから心持ち左寄りに藪を漕ぎ登ると、ホンの僅かで一縷の踏跡に出で、間もなく岳芝に蔽はれた山頂の一角に辿りつく。こゝから頂上へは十分足らずで容易に到達することが出来る。

遠笠山は海拔一一九七・一米を算する茅戸の、のんびりした山陵で、頂上は美しい岳芝と茅戸に蔽はれ、右下(東面)には矮小な灌木生育し、左下(西南面)は一部分大きくガレて赤褐色の地膚を露出してゐる。展望は廣潤雄大、殊に天城の主脈を望見するには全く打つてつくだ。

先づ西南に眼を放つと萬二郎岳から萬三郎岳に連る山々が、恰も堂々たる城壁の如く、ガッチリした其巨軀を間近に擡げて屹立してゐるのを發見するであらう。萬二郎の裾は一面に美しいサルタとアセビの樹海に蔽はれ、馬ノ背はその名の通り東西に長細く鞍状の山頂をのぞかせてゐる。楠立は馬ノ背にかくれてよく

は見えないが、萬三郎が二段になつてゐる姿もハッキリと看取出来る。

西から西北にかけては、猫越火山から達磨火山に屬する大小の丘陵が手に取るほどよく眺められる。あの邊が南無妙峠で、あの邊が土肥峠と指摘してゆくうちに伽藍山から達磨山が懐しく双眸の裡に入つて来る。

その右に端正な麗姿をのぞかせてゐるのは、隠れもない日本一の富士山だ。愛鷹山から殘雪豊かな南アルプスの山々さへ望見されてうれしい。

更に双眸を北に轉すれば、これも天城の側火山の一つなる矢筈山や大室山が脚下にこぢんまりと聳えてゐる。矢筈山は小規模乍ら峨々たる双峰を擡げ、大室山は優美なドーム型の圓頂を現はしてゐる。その對照の面白さ！大室山の左には一碧湖が光り、伊東の町が點々として波打ち際まで延びてゐるのが見える。熱海の沖合にボカツと浮んでゐるのは、まがふことなき初島だ。眞雲山から玄岳の彼方には眞鶴岬から箱根・丹澤方面の山々がよく見える。殊に相州の大山は獨りかけ

離れて均齊のとれたピラミッド型を覗かせてゐる丈に、誰れにも直ぐそれと領ける。

東北に薄ボンヤリと姿を現はしてゐるのは正しく三浦半島に違ひがない。相模灘には玩具に等しい汽船が眞黒い煙を吐いて走つてゐる。

大嶋も手に取るやうに近く見えて懐しい。

〔記録〕 八幡野(前八・五〇)―眺望の展けたところ(九・三〇―九・五五)―三叉路(一〇・二五―一〇・四〇)―防火線(一〇・五五―一〇・二五)―遠笠徑路(後一〇・一〇―一〇・二五)―小澤のツメ(一〇・四五―一〇・五五)―遠笠山(一・一〇)

池 口

山頂から西北に兎みちを辿つて降ると、間もなく灌木帯に入り一縷の踏跡が現はれて来る。私達はこの道を長い間氣付かずに居たが、最近に至り、ゆくりなくも之を発見してからは、遠笠山の登降に専ら之を利用してゐる。道は次第に下つて遠笠山の西方に聳える一〇八〇米峰との鞍部に達してゐる。多分縣有林の看視路であらう。鞍部から五分足らずで樂に遠笠徑路(十

字路)に出ることが出来て甚だ便利である。

十字路を眞直に進めば、萬二郎から馬ノ背を経て萬三郎へも行かれるし、直ぐ先きで右に岐れて萬二郎徑路を傳ひ、片瀬峠から北へ降つた小嶽の附近へも出ることが出来る。又右下へ降れば後述の通り御料林の小屋を経て菅引へ向ふことも出来れば、別途殿小屋苗圃を経て地藏堂に達することも出来る。池方面へは左へ折れて遠笠徑路に入る。

十字路から一寸行つたところが萬二郎岳と遠笠山の眞の鞍部だ。これより海拔一〇〇〇米附近を略々等高に遠笠山を捲いて進む。初めはアセビ・杉・檜などの樹蔭。それを抜け出ると景は次第に展け、瑞々しい杉林に縁どられた清々しい茅戸のところ(左側)に出る。樂なみちだ。

聽でごろ／＼した石が現はれて多少歩きにくくなる。「火の用心」の標杭のところに達する。この邊から心持ち軽い下りになる。八幡野口に合するところは、上から見るとボヤケてゐて明瞭ではない。更に二十分

ほどで第二の「火の用心」に到達する。こゝは對嶋村と中大見村との村界を成す天城山脈の背稜で、幅廣い防火線が右下（東北）に向つて、ぐつと下つてゐる。

奇怪な岩峰を擡げてゐる矢筈山を俯瞰し乍ら防火線傳ひに二、三十分ほど降ると、ホロ池頭の三角點（八一六米）に辿りつく。最近測量し直したと見え、割合に新らしい櫓が確り建つてゐる。

間もなく右に小徑が岐れてゐる。これを見送つて兩側に赤松の叢林の生ひ茂る防火線をぐんぐん降つてゆくと、道は次第に急峻を加へ、中にはヒヨドリ越えのやうなところも出て来る。大室山や一碧湖を正面に望見し乍ら、一目散に降るうちに、いつしか防火線がプツツと切れてしまふ。窪地の附近だ。右に小徑を降つて左に曲ると間もなく道は二分する。右は小矢筈山の中腹を捲いて直接池の部落に出るもので、左は一旦六郎婆峠に出た上、右に折れて池又は十足方面に下る道である。

【記録】遠笠山（前一〇・〇〇）—十字路（一〇・二〇）—火の

用心（一一・〇〇）—（一一・一〇）—ホロ池頭（一一・三五）—（一・五五）—防火線終點（後〇・二五）—（〇・三五）—六郎婆峠（一・〇〇）—（一・一〇）—池への岐れ（一・三〇）—（一・四〇）—十足（二・一〇）—一碧湖（二・四五）—（三・一〇）—古田（三・四〇）
尙ほ防火線の終點から直接池への道を降つたときの記録を示すと、

防火線終點（後二・五〇）—製板小屋跡（三・四〇）—池の部落（三・五五）—（四・〇五）—八幡野（四・五〇）

大川口

八幡野の西南大川からも遠笠山に登ることが出来る。これは遠笠山から東南に引いた小曾根を攀ち登るのであつて、その末端が海に没するところから直接登つてもよし、又大川の部落から登ることも出来る。

村を通り抜け、最奥の二軒家を右下にして暫くゆくと間もなく川を涉つて對岸の丘陵を登るやうになる。櫓みちを横切り、樹蔭を穿つ小徑を喘ぎ乍ら登つてゆくと、二十分ほどで道が平らになり、桑畑が現はれる。こゝは海岸から尾根通しに上つて來た道と合するところだ。

これより道幅は急に廣くなり、傾斜も頓に緩くなるが、惜しい哉！隧道のやうな堀割の中を登るので、あたりの眺めは全然得られない。纏て小澤のツメにあたる茅戸の坊主山に達すると、此處で小徑が右の方へ岐れてゐる。之れを見送ると幾何もなく杉の植林帯に入るが、道は相變らず緩く上つてゐる。行きかふ人もなく實に靜寂そのものだ。

こゝから大凡そ半時間位で道は二分する。右へゆく道は多分遠笠山の中腹を捲いて前記八幡野若くは池からの徑と合するものであらう。左上へ登つてゆくと直きに炭焼きの小屋にぶつかる。この附近は目下盛んに製炭中と見え、仕事の道が縦横無盡に踏まれてゐて、どの道がどの道やらサッパリ見當がつかない。私は炭焼小屋の上の三叉路を右へ折れ、直ぐ三つ四つに分岐する道を左へと進んだ。すると間もなく氣持のよい茅戸の平地に踊り出た。

これを突切つて再び杉林に入り、軽く登つてゆくと十分ほどで、又も道が二分する。こん度は右の徑に従

つた。さうして三分ほどで更に右上へ登り、直ぐ左上へ曲つた。どうやら本當の登路を踏みはづしたらしいが、もう此處まで来れば、あとは大したこともあるまいと、適當に見當をつけて、がむしやらの遠笠徑路まで頑張つて登りついた。そこは遠笠鞍部に近い「火の用心」の一寸手前のところであつた。

〔記錄〕 大川(前七・〇〇)―小澤のツメ(七・五五―八・〇五)―炭焼小屋(八・四五―八・五五)―遠笠徑路(九・二五―九・三五)―十字路(一〇・〇〇)

地藏堂口

地藏堂までは修善寺驛からバスが通じてゐる。こゝで一泊して翌朝は成るべく早く出發する。

村端れで地藏堂入を渡り、二間幅の立派な林道を南進すると、十分ほどで大瀧が現はれ、更に十五分ほどで整然とした山葵田を右下に見るやうになる。そうすると間もなく鬱蒼たる御料林に達する。伐材や植林などの際に小屋掛けをするので其の稱のある「小屋平」はそれから二、三分だ。

小屋平を過ぎると道は三尺幅の遠笠徑路となつて林の中に入り、小さな溪流を涉つて右に瀧ノ平徑路を岐ち、だら／＼と上つて間もなく殿小屋苗圃に到る。山の中に植林する檜や杉の苗木を育てるところで、こゝには番小屋と數軒の入夫の泊る茅屋が有る。

徑は暫く苗圃の縁を傳ひ、右に舟石徑路を岐つところから電光形の上りとなる。登ること數分にして再び樹林帯に入り、溪流に沿ふやうになると徑は二分する。右は楠立徑路、左檣橋を渡つて溪流を横切るのが遠笠徑路である。菅引入の源流へ出るには、そのいづれをとつてもよいが、寧ろ初め前者を辿つて途中から、左に檣道を登つた方が餘程近いやうである。この分岐點から檣道まで三十分位はかかる。

楠立徑路を見送つて檣道を登ると、十分ほどで殆ど傾斜のない平地になり、熊笹を下生えとした檜の植林帯に入る。間もなく路網と合する十字路に立つが、これには目を觸れずに直進すること約十分、背後から先程別れたばかりの遠笠徑路が合して薄暗いまでに茂つ

た檜林をくぐり、菅引入の枝澤を涉つて川ノ入徑路に出會ふ。脚下には菅引入が大きく曲折して東に向ひ、一町ほど下のところには御料林の川ノ入植林小屋が俯視される。

山の鼻をぐるつと廻つて菅引入の源流や、その枝澤をいくつか涉り、三、四分も歩くと臈て小廣い十字路に立つ。遠笠山鞍部の十字路だ。遠笠山へはこゝを左折して縣有林みちに入り、前述の一〇八〇米鞍部から右上に登れば、容易に登頂出来る。

〔記錄〕 地藏堂（前七・三五）―瀧川橋（七・四五）―殿小屋苗圃（八・二〇―八・三〇）―川ノ入徑路出合（九・四五）―十字路（一〇・一五）

菅 引 口

修善寺驛から地藏堂行のバスに乗り、原保わらぼの床屋の前で下車、左折して瀧隈戸橋たきざいどを渡ると直きに菅引すがひの部落に入る。

丸野山方面への道を見送つて眞直進み、部落をはづれると、菅引入を大瀧橋によつて渡る、道はこゝで二

分するが、左に菅引入沿ひの道を選ぶ。殆ど平らな歩き易いみちだ。かれこれ二、三十分もして小澤を渡ると間もなく道は菅引入の右岸に涉り、川沿ひに緩く上つてゆく。地藏堂苗圃に通ずる菅引徑路を右に岐つのは、それから大凡そ十分ほどの處だ。

右側にガッチリした小屋を見て、これも亦地藏堂苗圃に通ずる椈の木小屋徑路を右に見送れば、間もなく道は自から木馬みちとなり、鬱蒼たる杉林の中を穿行して上るやうになる。殆ど平地に近い緩傾斜の上りだ。

聽てその中に上りらしい上りが始まる。だがこれも電光形に道がついてゐるので大して骨の折れるほどではない。相變らず杉林の中。最近伐採が盛んに行はれてゐると見え、伐採した木が所々に倒れてゐて一寸煩はしい。兎や角するうちに左から小澤の合する地點に達する。こゝで道は二分する。どちらの道を選んでもよいが、右の方が本筋であらう。

先づ本流沿ひの右の道に従ふと、直ぐ小橋を渡つて山葵田を過ぎ、危しげな棧道を幾つか通つて帝室林野

局の天城出張所（俗稱川ノ入小屋）に達する。其の間木馬みちの終つたところから小屋までの間、左へ二條ばかり小徑が分岐してゐる。

川ノ又小屋は立派な小屋で宿泊も充分出来るが、普通は鍵がかゝつて固く鎖してある。こゝを一寸登つたところが前述の遠笠徑路との出合だから、もうこゝまで來れば、例の十字路までは幾何もない。

別途左に折れて枝澤沿ひに上るドミキ澤徑路は、十分ほどもして澤を渡ると間もなく二分する。遠笠山へはこゝで木馬徑を捨て、左上に通ずる道に入らなければならぬ。

美しい小瀧の連続するところで枝澤を涉り、左手に麗姿を現はす富士山を眺め乍ら、更に枝澤を涉り、更に數分にして石のごろ／＼した水のない涸澤を過ぎると、道は自からアセビを主とした潤葉樹の潤ひ深い樹蔭に入る。さうすると間もなく「火の用心」のある四ツ辻に出る。こゝは遠笠山から丸野山方面へ通ずる道との出合だ。

右折して檜林の中を穿行してゆくこと數分。澤のツメらしいところを過ぎると廳て三叉路に達する。顧る富士を初め南アルプスの展望は實に素晴らしい。

これより右折して縣有林の道に従ふ。略々平坦な歩き易いみちだ。十五分ばかりで前述の一〇八〇峰との鞍部に達するから、其處を左上に登りさへすれば容易に遠笠山の頂上に登りつくことが出来る。

〔記錄〕 修善寺驛(後一一・〇〇)―白岩(前〇・〇〇)―一〇)―八幡(〇・三五)―原保(一・一五)―大瀧橋(二・〇五)―菅引徑路入口(二・五〇)―三・〇五)―ドミキ澤徑路入口(四・〇〇)―四・三五)―四ツ辻(五・一〇)―三叉路(五・二〇)―五・五五)―遠笠山(六・二五)

尙ほ參考の爲め下山の時間記録を掲げて見ると、

遠笠鞍部十字路(前一一・〇〇)―川ノ入小屋(一一・二〇)―一・一五)―ドミキ澤徑路出合(後〇・二五)―菅引徑路出合(〇・五五)―一・二五)―原保(二・〇〇)―八幡(二・三五)―二・五〇)―年川橋(二・三五)―修善寺驛(四・〇五)

別途遠笠山から縣有林道を経て丸野山(△六九六・三米)方面に向ふ道に就いて一言して見よう。

頂上から一旦例の一〇八〇米峰との鞍部まで降り、それから右へ降つて平らに進み、十分ほどで縣有林の道と別れて左下へ降り、前述の四ツ辻に達したなら、ドミキ澤みちを見送つて眞直に進むと直きに防火線に出る。之を左に折れて防火線傳ひに進むと、今登つてきたばかりの遠笠山が背後に懐しい姿を現はす。

四ツ辻から十五分位で防火線が丁の字に曲つてゐるところに達するから、こゝを右へ行き、次で左に曲る。顧ると遠笠山から萬二郎・萬三郎方面が實によく眺められる。この附近一帯は、一面の茅戸で、のんびりした小丘相次ぎ、雪が降つたならスキーにはもつて來いところだ。

再び丁字形のところ到達する。こゝは左に折れて直ぐ右に曲る。さうして暫く降つてゆくと廳てヒョドリ越えにも似た急傾斜の坂路にかゝる。こゝを降り切つたところで防火線は急に右へ曲り、更に左に折れて丸野山の頂上に通じてゐる。だが我々は時間の關係上、左に丸野山を捲く小徑に従つてス、キの生ひ茂る原野

を管引へと急いだ。

丸野山を捲き了つたところ、一同はこれを顧みて、いい山だなあ！と感心して暫く足を留めた。邊鄙な山の中にある爲めに、あまり世間の注目も惹かないが、天城の優美な側火山としては、蓋し大室山と好一對であらう。

〔記録〕 遠笠山(後一・五〇)―下り口(二・〇五―二・二〇)―四ツ辻(二・三五―二・四五)―防火線が丁字形に曲折する地点(三・〇〇―三・三〇)―丸野山々麓(三・五五―四・〇〇)―龍爪山神社鳥居(四・四〇)―原保(四・五〇)

主脈縦走路

天城峠から八町池・白田峠・戸塚峠・片瀬峠を経て天城山脈の最高峰「萬三郎岳」に取付き、それから楠立・馬ノ背・萬二郎岳を縦走して遠笠徑路に降り、更に遠笠山に登る快適なルートを考えることが出来るが、これは本稿としては寧ろ本筋ではないから、いづれ稿を改めて認めることとし、参考の爲め左にその時間記録を留めて筆を擱くことにしよう。

〔記録〕 修善寺驛(後一・三〇)―青羽根(前〇・四五―一・〇〇)―湯ヶ島(二・三五)―奥市坂(三・一〇―三・三五)―本谷徑路出合(五・三〇―五・五〇)―八町池(六・一五―六・三〇)―白田峠(七・一五)―戸塚峠(七・四五―七・五五)―片瀬峠(八・三〇)―萬三郎岳(八・四五―九・三〇)―楠立(九・四五)―馬ノ背(一〇・〇〇)―萬二郎岳(一〇・一〇―一〇・三〇)―遠笠鞍部十字路(一一・〇〇―一一・一五)―瀧深(一一・二五)―遠笠山(一一・五〇)

このときは例の一〇八〇米峰との鞍部から登頂する道を知らなかつた爲め、其處を越して瀧澤のところまで降つた上、澤の左側についてアセビの喬木を主體とした灌木帯をガムシャラに攀ち登つて草莽帯に達し、それより一縷の明滅する踏跡を傳つて登頂した。尚ほ遠笠山からの逆コースを認めて見ると、

遠笠山(前七・一五)―四ツ辻(七・三五)―萬二郎岳(八・一五―九・二五)―馬ノ背(九・三〇)―楠立(九・三七)―萬三郎岳(一〇・〇〇)―一・二〇)―片瀬峠(一一・三〇)―戸塚峠(一一・五五―後〇・五〇)―白田峠(一・〇五)―八町池(一・三五―一・四〇)―本谷徑路出合(二・一〇)―山葵田(二・四〇―二・五〇)―奥市坂(三・一〇)―湯ヶ島(三・三〇)

奥利根の支流

寶川の源流を降る

——熊と初めて遇つた山旅の記録——

吉 澤 一 郎

參考地圖 陸測五萬「越後湯澤」「藤原」

參考文獻

- 1 「山 岳」 奥上州號 (第十六年第三號)
大正十二年五月發行
- 2 「上越國境」 角田吉夫著 (昭和六年發行)
大村書店
- 3 「上越の山」 日本登高會 (昭和十二年發行)
三省堂
- 4 「谷川岳・仙ノ倉・苗場山」 海野治真著 (昭和十五年發行)
三省堂
- 5 「山と溪谷」 (第十六十一號)
昭和十五年五月發行

(1)は武田久吉博士によつて大正九年七月はじめて寶川が遡られた記録であつて、博士は大石澤を詰めて朝

日の頂上に知られてゐる。

(2)の六二頁——(二三行)——にある寶川本谷に關する記事は説明稍々不十分である。

(3)は稍々正しいが未だ不十分。

(4)は本谷に關しては參考とならず。

(5)は中村謙氏の朝日岳東尾根の徑路による登山、本谷に關しては觸れてをらず、且つ頂上附近に於ける徑路の説明不十分と思はる。

耳二つ(谷川岳)から湯檜曾川を脚下にして對岸に望む所の笠ヶ岳の容姿は眞に端麗そのものである。土

合の「山の家」から白毛門經由の笠ヶ岳縦走路が出来たといふ話を聞いて豫ねて私は寶川とを組合せた二日乃至三日の山旅を計畫してゐたが仲々その機會はやつて來なかつた。

所が昨年（昭和十六年）の秋に私の岳友村尾・柿原の兩氏が寶川溫泉からの朝日岳登山を計畫し、同溫泉を出て一里も行かぬ裡に道傍の隈笹の中へ頭を突込んで何かガサ／＼やつてゐる二頭の熊の尻を發見し、周章でたが極めて靜かに後に引下り見えなくなつてから章駄天の如くに溫泉へ逃げ歸り登山はその儘中止して東京まで戻つてしまつた事件があつた。それ以來私の寶川への關心は一層煽り立てられる結果となつたのであるが、今度出掛ける前に角田氏に寶川の様子を訊ねると「大丈夫だよ、君なら何とかなるだらう」といふ。それではといふ譯で七月二十五日（昭和十七年）の正午上野發の汽車で土合に向ふ事になつた。

一行は日本團體生命の山岳部員たる今井、岡の二君と三室、小澤の二嬢に私と都合併せて五名であつた。

寶川の源流を降る（吉澤）

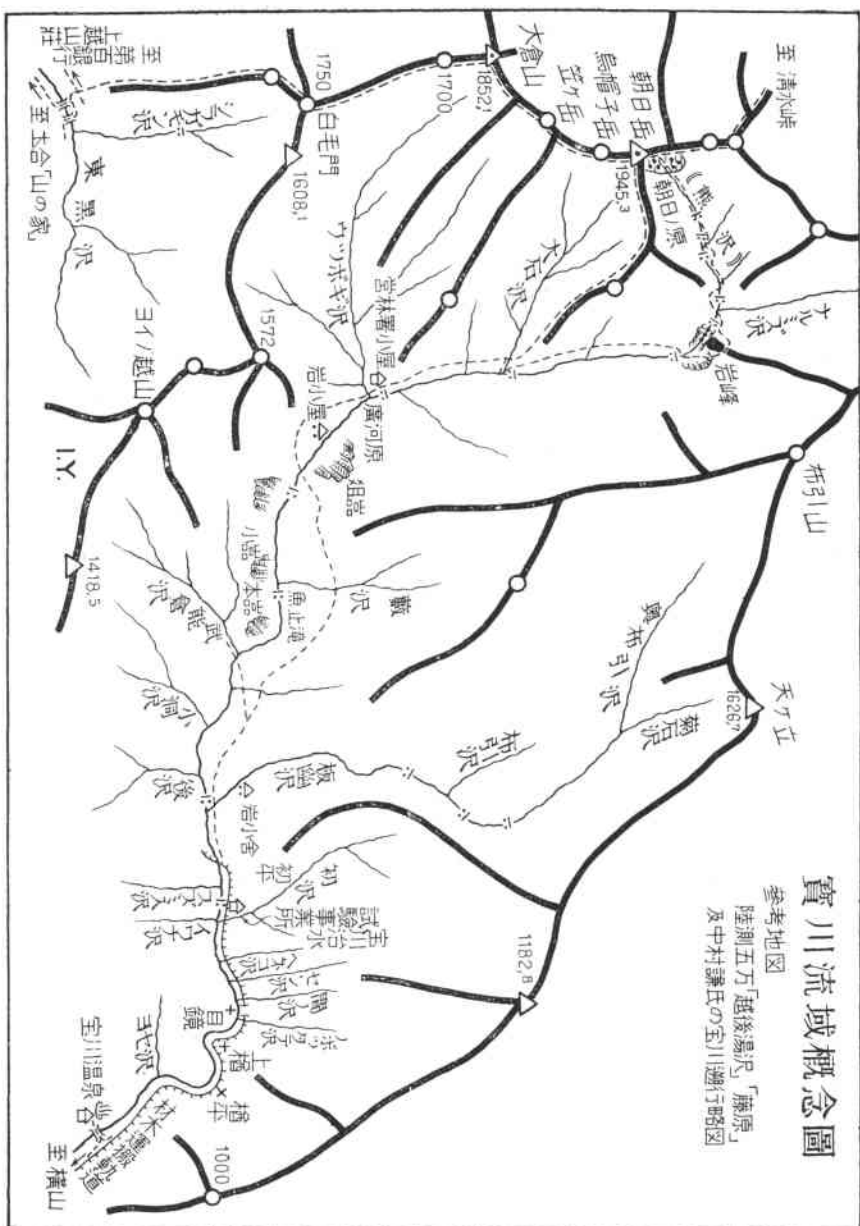
今年の暑さは又格別で東京でも蒸し暑さと風のない爲め落着いて寝られぬ夜が幾日か續いてゐた。それは物凄く大阪の夏の夕風を経験してゐる私にさへも些か閉口ものであつた。汽車の中でもひどい蒸し方、日射病のため各方面で毎日斃れる人が相當あると聞いたが之では無理もない。

五時二十分頃に土合へ着き直ぐ「山の家」に入つた。まだ餘りお客はついてゐない。喜代志君に一部屋提供して貰つて荷物を下ろした。風呂と夕飯を濟ませてから明日の行程の最初の部分を調べに行く。湯檜曾川に架る橋を渡らずに眞直ぐ奥へ入つて東黒澤の方へ向つて行くと聽て第百銀行の「上越山莊」への指導標が立つてゐた。尙木馬道を進むとお粗末な橋が東黒澤に架つてゐるのを見る。此の橋の手前で對岸の一寸下手（シモテ）を見ると藪の中に「白毛門を経て朝日岳へ」といふ意味の白ペンキの棒杭の立つてゐるのを發見する。此の邊から「上越山莊」の水場との交點までは藪になつてゐるがそれから先はよく切り開かれてゐる。之で偵察も

寶川流域概念圖

參考地図

陸測五万「越後湯沢」「藤原」
及中村謙氏の宝川「遊」略図



終つたので「山の家」に戻つた。小屋は時間の経過と共に次第に混雑して來、終ひには寢場所もなくなるまでになつてしまつた。蚤と蚊が少しづつと又蒸し暑さのために此處でも餘り熟睡は出来なかつた。

明くれば二十六日、日曜である。氣の早いお客は三時頃からもう騒いでゐる。吾々は五時に起きて六時十五分に「山の家」を出た。文字通りの殿部隊であつた。荷が重いのと近頃は原稿書きや自分の著書の校正などで可なりな無理をしてゐたためどうも調子が悪い。東黒澤を渡つて藪を抜け「上越山莊」への水場道を横切ると道はよくなるが同時に思ひきり急になる。之から正味一〇〇〇米、此の調子で登るのかと思ふと一寸がつかりする。立つてゐるとする／＼滑り出しさうな急斜面である。空は曇つてゐて谷川岳も雲の中。夏は一般に水蒸氣が多くて餘り眺望に期待は出来ないが之でははじめて谷川岳に登つた人などは落膽する事であらう。

一二〇〇米の臺地で八時、白毛門澤の細長い瀧が見えて來た。九時半一五〇〇米の臺地。上を見ると白毛門はまだ一段と高くその左の嶺までゞも米だに相當な登りが残つてゐる。やつとの事に白毛門の棒杭のある頂上に著いたのは十一時十分であつた。五時間とは普通の人の記録より三時間も遅い。一七五〇米の山頂ではあるが風が餘りないので照りつける日光の直射には全く閉口した。一ノ倉、マチガ澤等の雪溪を眺めてゐても一向に涼しくならない。正十二時に草いきれのひどい尾根道を大倉山へと向つた。之から一番えらい登りはあの二〇〇米だけである、などと慰め合ひ乍ら隈笹の中につけられた道を行つたのであるがムツとする隈笹道の登りは仲々に辛い事である。夏の武能澤廻行で上越の山へ夏來る人間は馬鹿だなどと考へてゐた自分がチャンと同じ所の隈笹に蒸し返されてゐるのであるから世話はない。

霧が上つてどうやら四邊の展望もよくなつて來た。笠ヶ岳の方から三人許りの登山者が元氣に下りて來

る。何處から來たのか随分早い人達であると考へ乍らやつとの思ひで嫌な二〇〇米を征服して一時五分に大倉山の頂に荷を下ろし仰向けになつて青空を見た。小澤さんの持つて來て呉れたトマトに胡瓜は正に殊動甲に値ひした。一人不心得にも水筒を忘れて來た者がゐたのもう誰の所にも水はない。困つた事になつたがと思つてゐると誰か「あの人達に貰へないかなあ」と云つた。聽てその人達が元氣に此の頂上へ登つて來た。「水はないでせうか」と恐る／＼聞くと「さあ御容みなさい、吾々はもう之から下る許りだから」とて水筒を二本とも氣前よく提供して呉れた。お返しは落花生を少し許り上げたが起死回生の水とはこんなのを云ふのであらう。

三人は文理大の學生諸君で自分達の小屋に滞在してゐて毎日附近の山や谷を歩き廻つてゐるとの事。文理大といふのでジョン・モリス少佐の話をする。「あの人を知つてゐるのですか、あの人は外務省の信任が厚く、ために敵性國人であり乍ら可なり自由な行動を許

されてゐるといふ話です」との事であつた。モリス氏にも暫らく會はない。一度會つて何か出来る事ならしてあげたいとも思つてゐるがいざとなると仲々その勇氣も出て來ない。

山頂からの展望は仲々によい。均齊のとれた笠、七ツ小屋山の右後に頭を出してゐる怪異な太源太山、湯檜曾川を距てゝの一ノ倉谷その他の立壁等々、おしなべて印象的な景觀である。

親切な學生諸君から朝日岳の向側の朝日ノ原に清冽な水の豊富にある事を聞いて元氣一倍、一時三十五分に頂上を後ろに笠へと向つた。緩やかな尾根を下ると日光黄菅の一杯咲いてゐる鞍部に達する。私はこゝからウツボギ澤下降に可なり魅力を感じたがどうやら思ひ止まつて笠への登りに移つた。笠、朝日を通つて置かないと又何時來られるかわからないと思つたからである。

登りにかゝると直ぐへたばつてしまふ。こんな筈ではないのであるが近頃少し許り無理をしてゐるので

れが祟つたのでもあらうか。暫らく休む。まだ元氣な今井・岡の兩君に先行を依頼、水を持つて途中まで迎へに來て貰ふ事にする。エヴェレストの前進速度もそんなに遅くはないであらう。二月の那須の三本槍への登りを思ひ出した。道は笠の頂上を左に見てつけられる。烏帽子と笠の鞍部に綺麗に青草の生えた風通しのいい場所がある。私は女の子二人と此處で青い静かな空を眺め乍ら暫らく午睡をとつた。洵にいい氣持ちである。然し斯くてはならじと再び重い腰を上げ、三つ許りの峯からなる烏帽子岳の頭を次々に通り朝日との鞍部に達した。見ると左手下の草地にも池が二つ許りある。その時水筒を持つた岡君が元氣に戻つて來た。三人してゴクリ／＼と忽ちの裡にその水を呑み乾してしまふ。朝日の頂上の棒杭の手前で今度は今井君の持つて來たのを空にしてしまつた。實に旨い水であつた。三時四十五分朝日岳（地圖の笠ヶ岳）の三角點に著く。

頂上から北を見ると脚下は一面に廣い丘陵性の草原

寶川の源流を降る（吉澤）

となり、その中に小さな池が水を湛えて四つ五つと置かれてゐ、越後朝日の方向に向つて一直線に道が緩やかに短い笹の斜面の中を登つてゐる。私は三角點から東に出てゐる廣い大きな尾根につけてある筈の道を探しに行つた。然しどうもそれらしいものにつづからない。岩の上に立つて尾根筋に眼をやつても何處にも道がたらしいものが發見出來ない。あの尾根まで行つてしまへばどうにかなると思つたが藪を潜らなければならぬらしいし、その上時間が遅いので少ない水での尾根上に於けるビーヴァックを嫌つて、遂にこの尾根道下降を放棄し、左手の澤を下る事に決めてしまつた。どうせ途中で一番野宿と腹を決めればもうあとは暢氣なものである。遙か下を瞰ると澤が二本殆ど平行して流れてゐる。右のは道の様にも見えたがあんな所にあんな大きな道がある譯がない。澤下りはいゝが何處から下らうかとそれを決めるために少し歩いて見た。皆が今食事の仕度をしてゐる一群の池の北方に又三つ許りの池が互ひに近く集つてゐる所がある。此の間にあ

る小流れが水源となつてゐるらしい。之について下ろす。下を蹴れば大した瀧もなさうである。藪もない。よし、と考へが纏つたので皆のゐる池の方へと引返して行つた。

味噌汁のお粥で腹をつくる。此の頃は食後に隠し持つたる羊羹といふ譯に行かないので些か淋しい。然し乍ら紅茶と落花生で元氣をつけ、生命の恩人たる池に御禮を述べて朝日ノ原を後にした。五時二十分である。——但し實際は池の水よりも池と池との間にある赤褐色の岩の下から湧き出てゐる水の方が冷たくもあり澄んでもゐるので此の方を御奨めする——

成るべく澤に沿つて歩きよい所を下つて行つたが草地では草鞋の人には少し許り滑るので氣の毒であつた。岩屑の出た所を選んで次第に下つて行く。礫で扇形のヒラが要の所で縮まる様に、谷筋以外は急で通れなくなつた。そして無ければいゝがと思つてゐた瀧がまづ足許に現はれた。だが之は五米許りのもので、而も階段状になつてゐたので少しヌル／＼してはゐた

が直接瀧の上を下つてしまふ。暫らく行くと又出て來た。七米位。垂直でどうにもならぬ。右の斜面は急でトラヴァースが出来ない。然し倅ひにも左手に瀧の下へ流れ込んでゐる小澤があつた。自分は之に下りてピッケルを足場に提供して皆を下ろす。そして大きなチヨーク・ストーンの間をすりをりて瀧の下に無事に出た。此の分ではまだ／＼あるわいと思ひ乍ら岩傳ひに下つて行くと又あつた。而も今度は少し手強い。高さは一〇米位。右手を見ると堂々たる残雪がある。然し瀧上を横切つてその雪の上に出るのは女の子には少し無理である。岩壁と残雪の間が一・五米許り離れてゐる。取付き損じて滑ると下の岩棚から尙二米許り下の流れに落ちて怪我をする恐れがある。此の右側の残雪はもう少し時季が早ければ充分利用出来ると思ふ。

今度は左手を見たが稍々オーヴァーハングで直接下る事はザイルなしには不可能である。仍て比較的取付き易い左上の藪を目がける事にした。然し之も可なり急なので用意の細引を二重にして自分が先に登り五人

寶川源流地附近概念圖

吾々のルート(昭和十七年七月二十六日)

--- 普通登山路

A.....朝日ノ原(5.15 p.m. 発)

B.....第一ノ滝(滝をちかに下る)

C.....第二ノ滝(左の沢さ下る) 壁雪あり左の

D.....第三ノ滝(高さ約10米突 数ヶ高推し)

E.....大熊にぶつかりし地点

F.....Biwakせし所(720毫, 翌朝5.40発)

(蟲取壺散見す)

G.....第四の滝

H.....第五の滝(6.10 a.m.)

I.....釜の連續(6.30) 岩峰の左を越さんと決す

J.....峽谷部分
(此の中に滝あるやも知れず)

K.....滑(ケメ)(6.50-7.00)

L.....第六の滝

K-M.....踏みし跡認めらる

N.....沢に朽ちし丸太横たへあり

O.....此の辺にて蛇目消失

P.....第七の滝

Q.....大石沢との合流点(7.25-8.10)

R.....徑路にぶつかる

S.....鷹河原の営林署小屋(8.35-10.15)

註.....《熊沢》とは私の假称である
本文参照の事

寶川源流地附近概念圖

吾々のルート(昭和十七年七月二十六日)

--- 普通登山路

A.....朝日ノ原(5.15 p.m. 発)

B.....第一ノ滝(滝をちかに下る)

C.....第二ノ滝(左の沢さ下る) 壁雪あり左の

D.....第三ノ滝(高さ約10米突 数ヶ高推し)

E.....大熊にぶつかりし地点

F.....Biwakせし所(720毫, 翌朝5.40発)

(蟲取壺散見す)

G.....第四の滝

H.....第五の滝(6.10 a.m.)

I.....釜の連續(6.30) 岩峰の左を越さんと決す

J.....峽谷部分
(此の中に滝あるやも知れず)

K.....滑(ケメ)(6.50-7.00)

L.....第六の滝

K-M.....踏みし跡認めらる

N.....沢に朽ちし丸太横たへあり

O.....此の辺にて蛇目消失

P.....第七の滝

Q.....大石沢との合流点(7.25-8.10)

R.....徑路にぶつかる

S.....鷹河原の営林署小屋(8.35-10.15)

註.....《熊沢》とは私の假称である
本文参照の事

昭和十七年七月二十七日
昭々のルート(昭和十七年七月二十七日)

普通登山路

A……朝日/原(5.15p.m. 発)

B……第一ノ滝(滝をぢかに下る)

第二ノ滝(左の沢を下る)

D……第三ノ滝(高約10米)

F.....Biwakせし所(7.20着,翌朝5.40発)

(蟲取莖散見す)

G... 第四の滝

H.....第五の滝(6.10 a.m.)

I……爸の連続(6.30) 岩峰の左を越さんと決す

峡谷部分

(此の中に淹あるかも知れず)

K...滑(+)(6.50-7.00)

第六の滝
……し

K-M: 踏みし跡認めらる

N..... 泥に朽ちしカ大横た

ON 此の江にて鮎目消生

○……此の辺に
築上り

……第七の滝

Q……大石沢との合流点(7.25-8.10)

R……徑路にふつかる

S..... 廣河原の堂林署小屋(8.35-10.15)

三 『能仁』は利の徳を以て

註……《熊沢》とは

本文参照の事

可原

100

7

11

の立てる小さな段に集まり、次に隈笹の急斜面を右に切れて藪に入つた。之を又少し登つて皆を待たせて置き、自分は鉈でひどい樹枝を切り拂ひ乍ら先行して下る。皆い具合に先刻瀧の上で見て置いた小さな薙の頭に出た。それから左の様子を窺ふと隈笹の斜面が大人しく谷まで下つてゐる。占めたと許りに之を滑り下つて無事第三の難關も突破出来た。下りた所の残雪を鉈でかいて皆で喰べる。

もうそろ／＼寢床を物色しなければならない。陽の光も漸く薄らいで來た。自分と今井君とは細かく曲折する狭い谷を少し先に下つて行つた。ある岩から流れの中の岩の上に飛びをりた二人は立つてボツ／＼何かの立話をしてゐた。と遂ひ目と鼻の先の左岸の藪の端に黒いものがゴソリと動いた。二、三間しか離れてをらぬ。ハテと思つてよく見ると何とそれは熊だつた。而も可なりの大ものであつた。藪の方を向いてゐた熊は顔をこちらに向けた。私もそいつの顔を注視した。もうどうにもならぬ。逃げる譯にも行かぬ。かと云つ

てビッケル一本では戦争にもならない。鉈はリュックの中である。私はビッケルを前についてちつと立つてゐた。そしてふと左側にゐる今井君の顔を見た。悲愴な青い顔。と思つた瞬間に熊はくるりと向き換へ（向側へだつた）三間許りの流れを一つ飛びに對岸に移り急な短い藪の斜面を斜め上に猛烈な勢ひで四つ足を使つて逃げて行つた。ビッケルの光りでも面白くなかつたのであらう。私はホッとした思ひで之を眺めてゐた。大きな真黒い塊りが緑の斜面をバサ／＼／＼と駆け上つて行くのは實に壯觀であつた。とまあこんな事を今では書いてゐるが、あれが一步方向を換へてこつちに向つてゐたのであつたら今頃はどうなつてゐる事やら解らない。思へばよくも御親切に逃げて呉れたものではあると、今更乍ら自分の惡運の強いのに呆れた次第である。尤も仔熊を連れたものであつたら到底助からなかつたであらう。

「今井君、もう此の邊で寝るとしようか」と相談に及ぶと「熊のゐた所にわざ／＼寝なくてもいいでせ

う、もう少し離れませうよ」といふのでさうかと思つて尙も先に進んだ。「今晚は熊に遇つた事など黙つてゐようぜ」と約束し、氣味が悪いので笛を吹き乍ら行く。も少し下に左から一本の澤が合流してゐるのを發見した。之は一八〇〇米の等高線數字のある國境方面から來てゐる澤である。此の時二尺位の長さのいたちらしいものが眼の前を横切つた。吾々は遂に此の出合の少し下手にある河原を今夜の寢床と決めたのである。時に午後七時二十分。

源流地に森林がないので河原には薪になるやうな枯れた流木が少しもない。倅ひ自分等にはコッヘルにアルコールとカンド・ヒートとがあつたので、飯をつくつたり紅茶を沸かしたり色々贅澤な眞似が出来た。満月が二十八日だつたので今日も月は殆ど丸い。濡れたものを脱ぎ乾いたものを着、ウインド・ヤッケをかぶつたら寒さも何處かへ行つてしまつた。時間つぶしに仕事を悠りやつてゐたので寢るより他に用がなくなつたのは十一時半頃であつた。獸除けにランターンをつ

けつ放しにして置いた所、當番のものがうとくしてゐた間に蠟燭が落ちてペラ／＼寢袋の端を燃やしてしまつた。午前二時頃は眞夏とは云へ寒かつた。此處は神河内の高さと同じ（一五〇〇米）である。三時そろそろ朝飯の仕度にかゝる。月は南から西へ弧を描き既に熊の逃げた尾根の向側に隠れてしまつた。北斗七星の柄も角度を變へた。途中で拾つて來た少し許りの流れ木が役に立つて香の高い番茶の旨いのが呑めたのは幸運であつた。用を足しに行つて氣がついたのであるが此の附近には例のネバ／＼した蟲取堇が所々に群をなして小蟲の來るのを待つてゐる。あれも随分暢氣な商賣である。吾々は道がわからなくなつてビーヴックしたのでないので氣分が極めて明るい。明るい云へば夜が明けてからはじめて夕べの熊の話をするに残りの三人の者は恐がりもしたが殘念がつてもゐた。斯くて五時の豫定だつた出發が五時四十分となつた。

暫らく暢んびり河原を傳はつて行くとやがて今日の最初の瀧（最初からでは四番目になる）にぶつかる。

七、八米。瀧の下で左から可なりの澤が合流してゐる。之が寶川の本流とも目さるべきナルミズ澤であらう。當時商大山岳部の現役だつた金田・宇佐美・横倉・中島の諸君が昭和三年六月大石澤廻行東尾根から朝日に出て上越國境より下つて此の合流點附近で夜營し、上流に遡つた事がある。此の瀧は右側の藪を潜つて簡単に片づいた。滑の様な所を歩いて行くと又瀧、然し之は四米許りで左側を簡単に下りた（六時十分）。又滑である。然し至極穩やかである。と思つてゐると突然谷は一間位に狭まつてその下は釜になつてしまつた（六時半）。少くとも三つの釜が一段々低くなつて渦を捲いてゐる。逆もへつる事は出来ない。先を見ると此の風景の真中に調子外れの岩峯が見える。それが而も谷から直ぐ上の所に高く直立してゐるのである。ハハーン、あれではこゝから先きずつと廊下になつてゐるわい。どちらかの高捲きをやらねばと思ひつゝ兩側を比べて見ると左手の方が捲き易さうである。少くともあの岩峯の左手を乗越すまでは谷へ下れぬと覺悟を決

めて高捲きの用意をする。

藪は大した事もない。朝露に濡れ乍ら左手に登つて溝を二つ許り越し目指す岩峯の左肩に直ぐ出る。下を瞰て驚いた。素晴らしい絶壁である。五、六十米は充分にある。脚下の谷は滑となりその先は又狭まつて又瀧である。ヤレ／＼此の大嵩も高捲きかなとガツカリしたが少し進むと此の壁の手前に草付が谷まで達してゐる部分がある。これ／＼、之なるかなと皆を呼んで流れの所へ下りてしまつた。六時五十分である。

右手を見ると今まで高廻りした部分は完全な廊下で兩方とも大して高くはないが壁である。下を見ると手に負へぬ瀧となつてゐる。此の瀧さへ何とかなれば大石澤までは大した事はない。時間も決して遅くはない。落着け／＼でまづ一服と腰を下ろす。

對岸の瀧の上に眼をやると變な所がある。林相が同じで而も横に一文字にすいた所が見える。人間の臭ひだ。行つて見やうと七時に此の滑を出發した。取付きは急であつたがそこに倒れてゐる枯木の端は確かに鋸

を入れたものである。人間臭ひと思つたが矢張りさうだつた。横一文字の部分にも鉈で切り落した枝が瞭り認められた。之から先は鉈目を頼りの藪漕りであるから大した苦勞もない。躑でそれも消え失せた頃やゝ下り傾斜になり大きな澤らしいものが見えて來たので目茶苦茶に藪を分ける。とパツタリと明るい澤に飛び出してしまつた(七時二十五分)。

本流との出合に下りるところで本流は低いが幅の廣い瀧となつてゐる。地圖を按ずるに此の澤はどうも大石澤らしい。澤の眞中の大岩の上に石が一つ置いてあるのも何かの意味があるものであらう。私は仍で岡君に道がクロスしてゐるかゝるのを少し廻つて見て來るやうにと頼んだ。戻つての同君の報告によると果して豫想通りであつた。さあ愈々銀座通りだ。皆元氣を出してといふ譯で瀧を背景に記念寫眞を撮つた。大石澤出發八時十分。

道はいゝが熊は厄介なので笛を吹く事だけは忘れない。斯くして八時三十五分、待望の廣河原の營林署小

屋に著いた。小屋の前に自記濕度計のやうなものが置いてある。小屋は二階建て仲々立派、但し右手の梯子(冬用のものらしい)は折れてゐた。中に入つて焚火を燃し裏の清水で色々準備をし中途半端な食事をやり、十時小屋を出た。

隈笹の間に切り開かれたいゝ道を辿ると直ぐ河原に出る。ウツボギ澤を渡つて(浅い流れである)、本流の河原を一寸さがると右へ入る道がある。河原から朝日の一角が綺麗に見えたので寫眞に收めた。堂々たる岨崕を左岸に見つゝ可なりの高捲きをやつて再び本流の岸邊に下つた(十時半)。此處の渡渉も大した事はない。平水ならば岩の頭をビョイ／＼飛んで對岸に渡れる。

さて道は之からひどく高い高捲きとなるのである。渡つてから十五分程にして本流に素晴らしい瀧の懸るのを瞰た。魚止の瀧といふのが之であらう。五〇米は充分にある。自分は立山の稱名の瀧を思ひ出した。危げな難に一寸緊張したり栗澤道といふ道標を見送りなどしてやつと高捲きを終つて板幽澤に辿りつく(十一時

五十分）。高度が低くなるに連れて次第に暑さも増して来る。

正十二時發、こゝからは木馬道となる。材木運びの櫓を造つてゐる假小屋を左に見て暫らく下つて行くと水力電氣の取入口の様なのが本流に出来てゐる。ここから軌道の上を傳はる。立派な寶川治水試験事業所を左上に見上げて（下許り見て歩いてゐると見のがしてしまふかも知れない）少し行つた所で事業所にゐる人らしい御婦人交りの一行に遇つた。寶川の温泉へでも行つての戻りであつたのであらう。もう三十分位ですよ」と云はれて皆はビッチをあげて道を急いだ。間ノ澤とノボツタテ澤の間にある隧道の右手下の所を眼鏡といふらしいが仲々棄て難い溪谷美を見せてゐる。

上檜や檜平を経て暫らく行くとブンと温泉の匂ひが鼻に感じやがて温泉宿の屋根が見えて來た。釣橋を渡つて寶川温泉の玄關に荷を下ろしたのは一時十五分。廣河原の小屋から丁度三時間であつた。

昔の寫眞に比べると左手にあるお宮の神樂殿の様な

のは新館らしい。吾々は舊館の暑苦しい二階へ通された。晝飯とお風呂だけのお客様（それも薄汚い）では文句も云へまい。稍々高過ぎると思はれる晝飯を濟ませ一睡りして三時二十分に温泉をあとにした。相變らず左岸沿ひの軌道の上を歩いて行く。十五分にして利根川本流に架る奥利根橋を渡つた。

之から先は嘗て一人で至佛を踏え狩小屋澤から湯ノ小屋温泉に寄り洞元の瀧を見て下つて來た時に通つた道であつたが、温泉から跟いて來たワン公が上の新道（？）の方へ上つてしきりに尾を振つてゐるので遠廻りとは思つたがその方を行く。案の上トロ道よりは遠廻りであつた。四時一寸前に横山のバスが出る所に著く。よろづ屋さんに何も賣品がないのは淋しい限りだつた。四時十分かに出るバスが仲々來ない。やつと來たのが四時半、運轉手君仲々腕利きと見えて大スピードで水上を目指す。湯檜曾へ寄つた時に吾々の乗るべき急行列車が走つてゐるのを見た。もう駄目かなと心配すると腕利きの運轉手君はどうにか間に合せませ

う、と許りに又一段とスピードを加へる。第一の踏切りはバスが先、第二は列車が先、まるで探偵劇そっくりの状態。バスは水上驛前に滑り込んだ。倅ひ列車は蒸氣汽關車と取換へるので手間取つてゐる内に吾々は大して混んでゐない三等車に飛び込む事が出来た。發車は五時六分。斯くして今回の山旅も本當に無事に終つたが、何處までも運の強い吾々をお互ひ喜び合つた事であつた。

(一七・七・三〇)



丸山晚霞氏の追憶

茨 木 猪 之 吉

本會々員（創期）明治四十年九月入會（會員番號一三〇）病氣加療中の處養生不相叶三月四日逝去せらる謹んで哀悼の意を表す。

以下聊か思ひ出を語らせて頂く、私が初めて丸山健策氏の名と作品に接したのは明治三十八九年頃上野公園竹の臺五號館陳列所にて太平洋畫會展覽會場にて信濃の自然を主として描寫し原始森林、高原の植物（後に知つたが淺間山脈の鹿澤附近及び郷里禰津村を中心とした風景が多かつた）中でも半切大に谷間の残雪を刻明に描いた水彩畫は今以て印象に残つてゐる。當時發行の美術新報（畫報社版）に歸朝當時の面影を知り同時頃だつたか島崎藤村作（水彩畫家）新小説（春陽

堂發行）に掲載され頗る評判の作だつた、題が新しいのと珍らしいので夢中で愛讀したものだつた、特に巻頭の口繪が名聲噴々たる渡邊審也筆で氣の利いた水彩畫で畫室内で畫架の前に立つて作畫中の主人公は、うたがひもなく丸山氏をモデルにしたものと想像した、美術新報の肖像を見てゐた爲め一層感じも強かつた、畫架の下で子供が本を見てゐるのが思ひ出される。

翌年太平洋畫會展覽會の事務所で私服の氏に面接したのが最初で當時私は一介の畫學生で巴里美術學生を氣取つてゐた頃だから仲々チャメが手厳しい、早速お得意のカルカチャアを描いて休憩室に張り出し惡童振り世にはばかりで先輩諸氏からニラまれた。

或る年の新年會を研究所内で催し餘興に劇があつて丸山氏作、筋は今忘れたが背景に乗鞍岳と白樺の木立があり背子の山民が登場して何やら旅人と語り突然「岳は今雪ヅラニ」の大聲が調子はづれで思はず笑つた事を覚えてゐる。

それ／＼感心のうちに終り、夜に入り瓶詰に折の辨當が出て大さはぎだつた。冷酒だから酔ふ程に誰となし指名で先輩後輩の隠し藝が始まり丸山氏は室内畫架を肩に引きづり兎の飛ぶ様なゼスチュアールで所謂山岳畫家の跋涉なりと註して降壇した、成る程熱情を傾け山岳畫家を發揮してゐた當時を思ふ、何んでも吉田博氏と飛驒高山から國境をめぐり乗鞍岳の森林に迷ひ大分困難された話を耳にしてゐた、先に物故した水彩畫家大下藤次郎氏と小石川に研究所を設立し水彩専門の氣焔を吐き重ねて信濃の春、櫻花の圖を旺んに發表し同時に博文館の諸雜誌を描かれ夏雲高く高山植物の線描は特に目だつた名聲頗る高かつた。

其の後よく本郷駒込神明町のお宅を訪ね二階の狭い

畫室で語られた、仲々情熱的で若い畫學生達の出入は多かつた。信濃人特有の純朴で何んでも正直に感情的で時には毒舌も加はり愉快だつた、感激しそして時々長い手紙も頂いた私は家庭上の變動で聊か悶々としてゐた頃だつた爲め多く此の二階を訪ねた、そして縁の高山植物に時々水をやり愛された庭の隅に白樺の細いのが淋しく育てられてゐた、（今はどうなつたか）最も珍らしく思つたのは二度目の外遊から歸朝されて玄關に新しいスキーが立てかけてあり得意で瑞西ではね……と語られた、私は別に大して興味もなく、それより氏の郷里淺間山麓の風光を知りたかつた。山岳會の講演も三會堂で氏の歐洲土産話を聞いた、また或る座談に仲々面白い赤毛布振りは眞面目で大笑したこともある。

それは先生失策だつたと申すのは外でもない、私は極めて眞面目だつたと云ふのは或る正月の夜二階で對座し信州産の御馳走が出て喜ばしかつた、一本つけて盃を口にする、重ねて一杯私はどうも變だと思つたの

で、ネエ君之れは支那から持参した酒ですかと問ふたら、いや別にと自ら盃について飲んでみたが急に徳利を持つて下に降り、やがて、ヤア失敬々と苦笑しながら實は日頃僕は飲まないものだからね……徳利が同じ爲め酢を間違つて入れたので今家の者にドナツて來た今度は良いよ、餘程恐縮したと見えて失敬々々を續けてゐた、私は又吾氣で同じ様なもので別に大して驚く事もなく、只だ咽喉の通りが少々つかへる位のことだつた、その時は支那滿洲の旅から歸つて來た當時なので私の頭も半分はその方面に向いて居たのでした、後で友人に聞いたのですが、茨木と云ふ男は餘程皮肉な男だよ酢を飲んで居乍ら眞面目な顔して之れは支那の上酒かいと云ふのだからね……。

先生は多く旅に私は家庭の雜用多く長い間遇ふ機會も尠なかつた。昭和十年日本山岳畫協會の結成運動で久々に訪問し應接室で暫らく語り若い人々に大にやつてくれ給へ萬事御まかせするよ、ついでだから吉田君

へも電話で知らせ之れからすぐ行くといふと申された、その時は他に時間の都合で行かれなかつたと思ふ。翌年一月丸の内マブルにて發會式を挙げ喜んで參會された。

第二回展後魚がしの會員晚餐會にも見え先生一流の氣短でもあり文句を言ふのも子供ぼく正直でいふと思つた。

最後にお訪ねしたのは四、五年前の矢張り正月だつた。信州式炬燵に入り年賀狀を頻りに眺め俳句を考へてもゐた、年々不精になつて何處へも失敬して殆んど郷里に引き籠つてゐるので御無沙汰勝だ、小島君はどうしてゐるね……。私は時々遇ひますが、健康に注意されてゐますと語つて懐かしい信州の凍豆腐の入つた雜煮を頂く、之れは僕の手製の菜で僕自ら漬けた香の物だよ、去年のは頗る味はよかつたが本年は鹽が不足だつたかと思ふ。郷里羽衣莊に落ち着いて悠々自適の生活を想像してお別れしたのが最後だつた。

一度羽衣莊を御訪ねする機會を失したのは残念、病

養餘り筆も握らぬとの消息だけは知つたが、つい御見舞もせず氣にかゝり乍ら過ぎた。突然新聞で訃報を知り驚いた。

告別式は本郷駒込吉祥寺で営まれ、舊友の人々にも會し中にも禮装の小島氏の御來場は意外だつた。

辭世 思ふことは皆やつて眠る桃の頃 晩霞



故 丸山 晚霞 氏



故 佐野和男氏

佐野和男君のこと

關 根 吉 郎

會員佐野和男君は昭和十七年六月十五日靜かにこの世を去つた。數へ年にしても、まだ二十四才の若さであり、早稻田山岳部の主將として、この春の計畫のリーダーであつたのだから、悲報を傳へられても、まるで嘘みたいな氣がした。君は私のやうに途中何度も停りはしなかつたが、私とは山の方も、學業の方も同じやうな途を辿つた。卒業した附屬中學には明治の御代に出來上つた、古い歴史を有つ山岳部があつて、まだ少年の域を脱しない頃より、深く自然美に接することを教へられた。木暮さんや田部さんの講演に傾聴し、自然の美を穢す者を憤り、山の俗化を排撃したりした。君は私より四年後であつたが、その時分にも同じやう

な雰圍氣は漂つてゐただらうと思ふ。何年かの後、ひよつこり新入生の一人として、早稻田山岳部の部室を訪れ部員になりたいと言つて來た。大井・鈴木等の同窓も部にゐたので、その心安きに引かれ、入部したのならば、その頃大變な變り方をし、中學時代等には想像も出來ないやうな部の生活は、なまじ中學時代に山を知つてゐた者には却つて辛くはないかと案じた。新人として、型の如く谷川と穂高でシゴかれ神の田圃の合宿となる時分には私の杞憂はとうに消え、部のリーダー達も、早く立派な部員にならうとする懸命な精進振りを、一樣に認めてゐた。君は五尺五寸、十五貫に少し缺ける位の體格であつたから登山者としても、瘦せ

た方であつたが、筋肉は相當強く、猛烈な氣力を有つてゐた。二年目の終りの、明神岳の計畫では早くも登攀隊に選ばれ、錚々たる上級部員に伍して無事大任を果した。上の方の天幕で、「おい、佐野雪をとれ」をやらせ、鍋を持つてこそこそと天幕を出て行つた有様や、合宿中に読み限るのだと云つて、カラマゾフだつたか悪霊だつたかの厚い岩波文庫を狭いところで僅かの時間を利用しては読み耽つてゐた貌等、亡き人の憶ひ出には、あまりに印象が強すぎるやうな氣もする。三年目の始めには山崎安治と共にリーダーに推薦された。これは若いリーダーの記録であつた。當時は八十名近くの部員を擁し、部の歴史の上でも最も質量共に充實してゐた時代であつたのだから、如何に君が部員の間で信頼されてゐたかを伺ふことが出来る。次の冠帽卒の計畫には勿論、中堅の部員として参加した。私にとつて忘れ得ない印象はその第一キャンプに於てであつた。私がぼんやりしてゐたため、目標の尾根が見付からず、二軒程延面水を溯つて了ひ、その上、澤の

反對側に天幕を張つたのである。次に偵察をしてみると、明らかに見當が違つてゐるので、私は早速そのキャンプを動かさうとした。その時である。隊員佐野は、キャンプは動かさずそのまゝにしてをいた方がよい、若し必要になれば途中何處にでも新しく設けたらよいといふ意見を陳べた。私は反對にこれはしまつたといふ氣がした程である。このやうな場合、周章でてキャンプを動かす等は定石でなく、素人考へであることは知つてゐても、實際の場面に遭遇すると仲々思ひ浮ばぬことであつた。計畫が進むにつれ、私は君の立ち直りの早いのと、判斷の正確なことに益々舌を捲いた。

學院を卒へると、應用化學科に進んだ。實驗に時間を縛られるところであつて、合宿前のトレーニングの期間になると三時迄に切上げるのに苦心した経験は私にもあつた。午前の講義の時間や晝休みに、圀塙を焼いたり、ビューレットの目盛を讀んだりしてゐる白い實驗着の君の姿をよく見かけた。山で疲れを知らぬと

いつた動き振りも成程と領かれる程、トレーニングも人一倍勵んでゐた。さうしてよく飯を食つた。その割りに肉の付かない體質だつた。

學部一年の十月、リーダー會は君を代表委員に選り主將に推した。外部の壓迫から兎角萎縮し勝ちな部員に鞭ち、自らは責任者として大世帯の陣頭に立つた。

さうして冠帽峯に次いで約束されてゐた、横尾から南岳、更に北穂を越して奥穂といふ大計畫を作製し、力を一つに集めてその完遂に心を碎いた。然しそれからの約半年といふものは、恐らく苦しみの連續だつたらうと思ふと、もう君を慰める機会もないのが怨めしい。その冬、新人を連れて神の田圃へ行つた。後に聞くところに依ると、その頃から相當體は悪かつた筈だといふのであるが、素人には想像もつかぬむつかしい病氣であつたのだから、唯少し體の調子が悪い位にしか思つてゐなかつたに違ひない。いつも、先頭に立つて指導に當つてゐた君であつたが、その時は後からとぼとぼと付いて廻つたさうである。其處で或日、數

人の部員を雪崩に埋めてしまつた。幸ひ、誰一人、體に故障なく掘り出された。これも君の立直りの早さにあつたと思はれるが、辯解の餘地なき失策であり、君が山の生活中受けた始めての黒星であることを、君はよく辨へてゐた。この汚名を取戻す途は三月の計畫を完璧に仕遂げることだつた。毎年々々計畫の規模は大きくなり、益々困難な問題を含めて來たので、一年毎に努力の上に努力を重ねていく必要があつた。衰へ行く體にどれ程無理が加はつたか、それから半年の中に君が世を去る人だとはまだ誰の胸にも映らなかつた。その第二キャンプで上へ行けなくなつた。隊員は歸京を薦めたが、一人先に歸れるものでもなく、德澤に下つて、上の方を氣にし乍ら待つた。無事に終り、全員松本に下つた時、病院を訪ね診斷を受けた。病名はわからず大したこともないと云はれた。

「もう明日からは病院生活だから食ひだめさ」例の調子で松本の街を食ひ歩いたさうだ。その前、第二キャンプを下る時、これが最後の山だからと隊員のカメラ

に向つた。これがその時の寫眞である。平素は眼鏡は掛けてなかつた。如何にも病人染みた佐野の姿であるが、聳り立つ雪の尾根を背景とし、住み馴らした二張りの天幕の中央に、嘗ての山登りを物語るそのまゝの姿が、偶然にも最後の寫眞となつたとは、何か傷ましいものを感じさせるが、よかつたとも思ふ。

君の山行きは、幼い小學生の頃に始まり、この横尾尾根で終つた。その間、月に一度か二度は必ず山に出掛けてゐたやうだ。君の靈を慰めやうと部で追悼の部報を出すことに話がきまり、君のノートや山日記の中から遺稿と名の付くものを探し、山の經歷を作らうとした。然し文章と云へるものは、昨年の春、小集會の席上で冠帽峯の食料に就いて少し喋つた、その原稿があつただけであり、合宿以外の数多い山行は、何處へ行つたのかも書いてなかつた。唯日記の前の方にある七曜表の日付けの數字の上に、山にゐた日には○印が記してあるだけだつた。君にとつては個人の山登りは部の合宿とは違ひ、どこ迄も自分自身だけのものであり、

それが楽しく忘れ得ぬ思ひ出として胸に深く刻まれてゐる限り、何も文章等に移す必要は無かつたのであらう。だから後に付け加へる山の經歷も部の合宿だけを書き留めることにする。

君は俗に云ふ人生の半ばにも達しない身であり、將來山の他に、化學技術者としても活躍が約束されてゐたのだから、この世に見切りをつけたとは考へられない。君の負つた病は、誰の罪でもなく天の命としか考へられないと醫者は言はれた。ありし日の山での活動振りを目の邊り想ひ浮べ、負つて生れた因果を考へると、慄然として胸のかきむしられる思ひがする。君は登山家が山で死ぬのを、最大の恥と心得てゐた人であつた。

故佐野和男君略歴

大正八年十二月十七日生
東京高師附屬中學出身

昭和十三年四月 第一早稻田高等學院入學

四月 體育會山岳部入部

五月 谷川岳合宿

七月 穂高潤澤合宿

七月 南アルプス大縦走

十月 穂高小舎合宿

十二月 白馬神ノ田圃スキー合宿

昭和十四年二月 富士山合宿

三月 白馬神ノ田圃スキー合宿

五月 谷川岳合宿

七月 後立山カクネ里合宿

七月 南アルプス縦走

九月 石神井體力合宿

十月 飯岳鶴ノ御前小舎合宿

十一月 第一線部員に推薦さる

十二月 穂高明神岳合宿

昭和十五年三月 穂高明神岳合宿

四月 リーダーに推薦さる

四月 谷川岳市ノ倉澤

五月 谷川岳合宿

七月 上高地合宿

九月 東伏見體力合宿

十月 穂高奥又白谷合宿

十二月 朝鮮冠帽峯遠征

佐野和男君のこと (關根)

昭和十六年三月 西穂高合宿

四月 理工學部應用化學科入學

五月 谷川岳合宿

十一月 代表委員主將に推薦さる

十二月 白馬神ノ田圃スキー合宿

昭和十七年三月 穂高横尾尾根登攀中病を得

四月 下落合聖母病院へ入院

六月十五日 右病院に於て永眠さる

六月十八日 新宿天龍寺に於て告別式營まる

飯眞秀嶽照心居士

(以上略歴は部報「リュックサック」十號より抜萃)

定款及細則

社團法人日本山岳會設立趣意書

本會ハ明治三十八年十月ノ創立ニ係リ、本邦最古ノ登山團體ナルノミナラス、會員中ニハ登山界ノ權威者ヲ網羅シ過去三十有五年間ニ互リ或ハ機關雜誌ノ發行、或ハ講演會ノ開催等ニヨリ廣ク社會ノ各層ニ登山氣風ヲ作興セシメント力ヲ致シ來リタル其成果ハ大正末期ニ於テ既ニ現ハレ、爾來年々逐ウテ登山者ノ數ヲ増シ全國各地ニ登山團體ノ設立セラル、アリ、帝國版圖内ノ山岳ニシテ踏破セラレサルモノ絶無ト言フ如キ情勢ヲ示現シ、登山ハ吾帝國ノ國民的戶外運動ト稱スルモ過言ニアラサルニ至レリ。カ、ル趨勢ノ達成ニ率先シテ瘡シ來レルノミナラス、同時ニ我國自然美ノ愛護ヲ高唱實踐シ又進ンテ世界各國同好會ト友誼ヲ厚ウシ以テ我邦風光ノ紹介ニ竭シ今ヤ會員九百ヲ擁シテ其歴史ト内容トニ於テ確乎不動ノ基礎ヲ有スルハ本會ノ聊カ以テ矜持トスルトコロナリ。今ヤ支那事變ノ第四年ヲ迎ヘ、銃後國民ノ體位向上一日モ忽セニスルヲ得サルハ言フヲ俟タス、コノ時ニ當リ本邦登山界今後ノ動向ノ指導宜シキヲ得サレハ登山ノ精神ヲ沒却シテ形式ニ流ル、ノ惧レアルノミナラス延イテ美シキ吾國ノ自然ヲ冒瀆スルナキヲ保セサルナリ。

下名發起人等惟フニ、今後登山界ノ指導ニ當リ健全ナル登山氣風ヲ振興セシメンカタメニハ本會ヲシテ名實共ニ本邦登山諸團體ノ代表機關タラシムルコト緊要ナルヲ以テ、コ、ニ從來單ナル私的團體組織ナリシヲ更改シ社團法人トシテ設立シ、本會ノ基礎ヲ一層鞏固ナラシメ將來ノ活動ニ資スルトロアラントスルモノナリ。

社團法人 日本山岳會定款

(昭和十六年一月認可)

第一章 總則

第一條 本會ハ日本山岳會ト稱ス

第二條 本會ノ事務所ハ東京府東京市芝區翠平町一不三屋ビル内ニ置ク

第三條 本會ハ山岳ニ關スル研究、知識ノ普及及並ニ健全ナル登山ノ指導獎勵ヲ爲シ、會員相互ノ聯絡親睦ヲ圖ルト共ニ、山岳及登山ヲ通シテ國民ノ心身鍛鍊並ニ自然愛護精神ノ昂揚ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ行フ

一、機關雜誌「山岳」其ノ他圖書ノ刊行

木暮理太郎
小島久太
田部重治
冠松次郎
横有恒

二、登山ノ指導獎勵ニ必要ナル研究會、講演會、講習會等ノ開催

三、登山施設ノ改善促進其ノ他登山者ノ爲適切ナル事業

四、目的ヲ同シクスル他ノ團體トノ聯絡

五、其ノ他本會ノ目的ヲ達スルニ必要ナル事業

第五條 本會ハ役員總會ノ必要ト認ムル地方ニ支部ヲ設クルコトヲ得

支部ニ關スル規定ハ役員總會ニ於テ之ヲ定ム

第二章 會員

第六條 本會ハ通常會員、終身會員及名譽會員ヲ以テ之ヲ組織ス

一、通常會員ハ本會ノ趣旨ニ賛シ會費年額六圓ヲ納ムル者トス

二、終身會員ハ前號ニ準シ一時金百圓以上ヲ納メタル者又ハ入會後滿十年以上ヲ經過シタル通常會員ニシテ一時金六十圓以上ヲ納メタル者トス

三、名譽會員ハ役員總會ニ於テ之ヲ推薦スルモノトス

第七條 本會ノ會員タラントスル者ハ會員二名ノ紹介ヲ以テ入會ヲ申込ミ當務役員會ノ決議ニ依リ承認ヲ受クルコトヲ要ス

團體ノ代表者タルノ資格ニ於テ入會セントスル者ハ入會申込ノ際其ノ旨ヲ明示スヘシ

入會承認ノ通知アリタルトキハ會費ニ入會金五圓ヲ添ヘ拂

定款及細則

込ムモノトス 但シ團體代表者タルノ資格ニ於テ前代表者ニ引續キ本會ノ會員タラントスル者ニ對シテハ入會金ヲ免除ス

入會承認ノ通知後一ヶ月以内ニ前項ノ手續ヲナササル者ハ承認ヲ取消スコトアルヘシ

第八條 會員退會セントスルトキハ其ノ旨書面ヲ以テ本會ニ届出ルコトヲ要ス

第九條 會員ハ死亡、退會、除名又ハ本會解散ニ依リ會員タルノ資格ヲ喪失ス

團體ノ代表者トシテ入會シタル者ハ其ノ代表者タルノ資格ヲ喪失シタルトキ本會々員タルノ資格ヲ喪失スルモノトス 會員タルノ資格ヲ喪失スルモ既納ノ金品ハ之ヲ返付セス

第十條 會員ニシテ本會ノ體面ヲ毀損シ又ハ二年以上會費納付ノ義務ヲ怠リタル者ハ當務役員會ノ決議ニ依リ除名ス 第十一條 會員ハ機關雜誌ノ配布ヲ受ケ、本會主催ノ諸會合又ハ諸事業ニ出席又ハ參加スルコトヲ得

第三章 役員

第十二條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

- | | |
|-------|-------|
| 一、會長 | 一名 |
| 二、副會長 | 三名以内 |
| 三、理事 | 十五名以内 |
| 四、評議員 | 十五名以内 |
| 五、監事 | 二名以内 |

定款及細則

1120

六、幹事 十五名以内

第十三條 會長及副會長ハ役員總會ニ於テ理事中ヨリ之ヲ推舉ス

理事、監事及幹事ハ會員總會ニ於テ入會後滿三年以上ヲ經過シタル會員中ヨリ之ヲ選舉ス

評議員ハ評議員會ニ於テ元役員タリシ會員中ヨリ之ヲ推舉ス

理事及評議員ハ夫々互選ヲ以テ常務理事及常任評議員若干名ヲ選任ス

第十四條 會長及副會長ノ任期ハ三年トス

理事、評議員及監事ノ任期ハ三年トス 但シ重任ヲ妨ケス幹事ノ任期ハ三年トシ其ノ定員ノ三分ノ一ヲ毎年改選スルモノトス

第十五條 役員ノ任期滿了後ト雖モ後任者ノ就任スル迄ハ其ノ任務ヲ行フモノトス

役員ニ缺員ヲ生シタルトキハ前各條ニ依リ夫々之ヲ補充ス補缺役員ノ任期ハ前任者ノ殘任期トス

前項ノ場合ニ於テ特ニ補缺ヲ必要トセサルトキハ次ノ改選期迄之ヲ行ハサルコトヲ得

第十六條 本會ニ顧問若干名ヲ置クコトヲ得 顧問ハ役員總會ノ議ヲ經テ會長之ヲ推舉ス

第十七條 會長ハ本會ヲ代表シ會員總會ノ議長トナル 但シ會長事故アルトキハ副會長之ニ代ル

理事ハ會務ヲ掌理ス

常務理事ハ理事會ヲ代表シ會ノ常務ヲ掌理ス

評議員ハ重要會務ニ參與ス

常任評議員ハ評議員會ヲ代表シ會ノ常務ニ參與ス

監事ハ會務ヲ監査ス

幹事ハ理事ヲ輔佐シ會務ヲ處理ス

第十八條 役員總會ハ理事、評議員、監事及幹事ヲ以テ組織ス

常務役員會ハ常務理事、常任評議員及幹事ヲ以テ組織ス

第十九條 役員總會、理事會、評議員會及常務役員會ハ夫々役員ノ二分ノ一以上出席スルニ非サレハ議決ヲ爲スコトヲ得ス

役員總會、理事會、評議員會又ハ常務役員會ノ議事ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ定メ可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル 但シ豫メ書面表決ニ依ルコトヲ得ヘキ旨ヲ定メテ通告シタルトキハ書面表決ヲナスコトヲ得

第四章 會員總會

第二十條 通常總會ハ毎年春季ニ之ヲ開ク

臨時總會ハ會長必要ト認メタルトキ之ヲ招集ス

第二十一條 總會ノ招集ハ五日以前ニ會議ノ目的タル事項、日時及場所ヲ示シ之ヲ爲スコトヲ要ス

總會ハ會員總數ノ二十分ノ一以上出席スルニ非サレハ成立セス

第二十二條 通常總會ニ於テハ會務ノ報告ヲナス外左ノ事項ヲ議ス

一、收支豫算及決算

二、理事、監事及幹事ノ選舉

三、法令及定款ニ依リ總會ノ權限ニ屬スル事項

四、其ノ他役員總會ニ於テ必要ト認メタル事項

第二十三條 總會ノ議事ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ決定シ可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

豫メ書面表決ニ依ルコトヲ得ヘキ旨ヲ定メテ通告シタルト

キハ書面表決ヲ爲スコトヲ得

本會ノ定款ノ變更ニハ總會ノ決議ニ於テ會員總數ノ三分ノ

二以上ノ同意及主務官廳ノ認可ヲ要ス

第五章 資產及會計

第二十四條 本會ノ資產ハ基本財産、會費、寄附金及其ノ他

ノ收入ヲ以テ組織ス

本會ノ經費ハ基本財産ヨリ生スル收入、會費、寄附金其ノ

他ノ收入ヲ以テ之ニ充ツ

本會ノ基本財産ハ役員總會ノ決議ヲ經ルニ非サレハ之ヲ處

分スルコトヲ得ス

第二十五條 本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始リ翌年三月

三十一日ニ終ル

附 則

第二十六條 本會ノ會務執行ニ關スル細則ハ常務役員會ノ議

定款及細則

ヲ經テ別ニ之ヲ定ム

第二十七條 本會成立ノ日ニ於テ現ニ從來ノ日本山岳會ノ通

常會員、終身會員及名譽會員タル者ハ本會ノ通常會員、終

身會員及名譽會員ト見做シ在會年數ヲ通算ス

本定款ニ定メタル理事ノ就任スルマテハ本會ノ設立者理事

トナルモノトス

本會設立ノ當初ニ於ケル評議員ノ選任ハ理事會ノ推薦ニ依

日本山岳會支部規定

第一條 定款第五條ニヨリ設クルコトヲ得ル支部ハ「日本

山岳會何々支部」ト稱シ本規定ニヨリ設立竝ニ運用ヲナス

モノトス

第二條 本會事務所々在地以外ノ地域ニ於テ左ノ各項ヲ滿

足スル場合ニハ支部設立ヲ發起スルコトヲ得

一、一定地域内ニ常住スル會員數二十名以上ナルトキ

一、本會ノ目的ヲ達スル爲特ニ地域の聯絡ヲ計リ事業ヲ發

展スル必要生シタルトキ

一、支部設立ノ事由其ノ他組織、事業、會計ノ内容一切ヲ

本會ニ明示シ得ルトキ

第三條 前項ニヨリ支部設立ヲ發起スル者ハ代表者三名以

上ノ連署ヲ以テ會長宛支部設立發起趣意書ヲ提出スヘシ

支部設立趣意書ニハ當該地域常住會員數過半ノ同意書、當

定款及細則

二四三

該年度當該支部事業計畫並ニ經費豫算案ヲ附スヘシ

第四條 會長前項ノ書類ヲ受理シタルトキハ役員總會ノ審議ニ附シ會務遂行上支障無シト認メタル場合ニハ會長名ヲ以テ支部設立承認ヲ通告スヘシ 但シ支部設立ノ内容ニシテ疑義アルトキハ支部設立發起者ニ照會注意シ又ハ訂正セシムルコトアルヘシ

支部設立承認ノ通告ハ文書並ニ本會機關誌上ノ發表ニヨル

第五條 支部設立承認通告アリタルトキハ通告ノ月ヨリ三箇月以内ニ當該支部規定並ニ支部委員ヲ定メ支部代表者ヨリ本會ニ報告スルヲ要ス 支部委員ハ既ニ本會役員タル者其ノ他ノ會員ヲ以テ之ニ充ツ 但シ支部委員又ハ代表者ハ變更ノ都度直チニ本會ニ報告スルモノトス

支部委員中會計責任者ハ本會ノ資金前渡委員トシテ特ニ豫メ承認ヲ受クルコトヲ要ス 資金前渡委員ニ關スル細則ハ別ニ之ヲ定ム

第六條 支部ノ事業計畫並ニ經費豫算ハ本會ノ會計年度當初迄ニ毎年豫告シテ承認ヲ經、支部費トシテ資金ノ前渡ヲ受クヘシ 年度ノ中途ニ於テ新タニ支部設立承認通告アリタル場合ノ手續ハ亦之ニ準ス

前項資金ノ精算ハ毎月々末之ヲ行フモノトス

但シ支部費ニシテ支部割當基準額ヲ越エサル範圍内ニ於テハ此ノ限リニ非ス

第七條 支部割當基準額ハ會費年額ニ支部ニ屬スル會員數

ヲ乘シタル額ノ百分ノ三十五以下トシ、會員數其ノ他ノ事情ニ應シ毎年役員總會ニ於テ之ヲ定ム

第八條 支部割當基準額ノ範圍内ニ於テ支辨シ得サル經費ニ關シテハ原則トシテ本會全般的ニ運スヘキモノト看做シ其ノ採否ハ本會役員總會ニ於テ之ヲ審議ス 但シ本會處理ノ事業會計タルコト決定セルトキト雖モ支部ハ之カ代行機關タルコトヲ得

第九條 支部ハ左ノ各項イツレカニ該當スルコトアル場合ニハ會長之ヲ役員總會ニ諮リ之ニ解散ヲ命シ又ハ代表責任者ヲシテ辨償セシム

一、支部ニ屬スル會員定數以下ニ減シ當分増加ノ見込ナキトキ

一、支部ノ事業ニシテ本會ノ目的ニ反シ又ハ必要ナル報告ヲ怠リ又ハ支部會計處理上不都合ノ行爲アリタルトキ

以上

日本山岳會關西支部規定

第一條 日本山岳會關西支部ハ日本山岳會定款並ニ支部規定ニヨリ左ノ區域内ニ居住スル會員ヲ以テ構成ス

大阪府、京都府、兵庫縣、滋賀縣、三重縣、奈良縣、和歌山縣

第二條 當支部ノ事務ヲ處理スル爲委員一七名以内ヲ置ク
第三條 委員ハ當支部區域在住會員中ヨリ會長之ヲ依囑シ

其ノ任期ハ貳ケ年トス 但シ重任ヲ妨ケス

第四條 當支部ノ經費ハ本會支部規定ニヨリ承認セラレタル支部費ヲ以テ之ニ充ツ 尙支部ハ必要ニ應シ有志ノ寄附ヲ仰クコトヲ得

第五條 當支部ハ毎年一回支部總會ヲ開キ隨時小集會ヲ催ス

關西支部委員(昭和十六年六月以降)

中原繁之助、今西錦司、榎谷徹藏、三木高岑、別宮貞俊、津田周二、松井久之助、前田光雄、湯淺巖、栗飯原健三、木藤精一郎、入江保太、直木重一郎、小川正十郎、富田健一、西岡一雄、山中正之助

支部代表者 湯 淺 巖

資金前渡委員 松井久之助

關西支部ニ屬スル會員數一八八名

(昭和十六年六月二十六日現在)

會員總會ニ關スル規定

第一條 通常總會開催ノ時季ハ定款第二十條、第二十二條及第二十五條ヲ綜合シ決算期直後ノ四月又ハ五月トス

第二條 會員總會ノ事務ハ準備及議事ノ二係ニ分チ、準備係ハ常務役員及主事之ヲ分擔シ、議事係ハ總會開催ニ當リ特ニ會長ノ指名シタル係員之ヲ分擔ス 議事係員ハ必スシモ本會役員及主事ニ限ルコトヲ要セス

定款及細則

第三條 前條議事係員中ニ書記二名ヲ選任シ總會議事ヲ記錄セシム 書記ハ又總會ノ議決ニ基キ法令ニ依リ規定セラルル書類ノ作製並ニ登記手續ヲ行ハシムルコトヲ得

第四條 定款第二十一條ニ於ケル總會招集五日以前トハ本會事務所ヨリ招集狀發信ノ日附ニ關スルモノト

第五條 總會成立ノ基礎タル會員總數ハ總會招集狀發信日ノ現在ヲ以テ之ヲ算出ス 但シ監事ノ査閲ヲ受クルニ非サレハ公表スルヲ得ス

總會ヲ成立セシムヘキ會員總數ノ二十分ノ一以上出席ノ數ハ出席會員數ト書面表決權數トノ和ヲ以テ之ヲ算定ス

第六條 定款第二十二條第二項ノ收支豫算及決算ハ監事ノ監査ヲ經タル後ニ非サレハ議事トシテ上程スルヲ得ス 臨時總會議案トシテ豫算變更編成ノ場合亦之ト同シ

第七條 定款第二十三條ニ規定セル議事決定ノ數ハ本規定第五條第二項ト同様ノ算定方法ニ依ル

第八條 書面表決ニ依ル會員權限ノ委任ハ特ニ指示セサル限り議長ニ附セラレタルモノトス

總會ノ前日迄ニ何等ノ申出ヲ爲サス缺席シタル會員ハ委任出席ト看做シ前項ノ規定ヲ準用ス

第九條 定款第二十三條第三項ニ規定セル會員總數ハ本規定第五條第一項ニ定ムル所ト同シ

定款變更ニ必要ナル同意數ノ算定ハ本規定第五條第二項又ハ第七條ト同様ノ方法ニ依ル

定款及細則

第十條 本會定款ノ變更ニ關シ主務官廳ノ認可ヲ受ケタル際ハ本會ハ直チニ文書又ハ本會ノ印刷物ヲ以テ全會員ニ報告スヘシ

以上

日本山岳會處務規定

第一條 本會ハ定款第五條第二項及第二十六條ニ依リ支部規定並ニ會務執行ニ關スル細則ヲ定メ本會發展ノ完遂ヲ期ス

支部規定ハ別ニ之ヲ定ム

第二條 會務執行ニ關スル細則ノ内左記各項ヲ除クノ他ハ悉ク本規定ニ依ル

一、會員及會費ニ關スル規定

一、役員及役員會ニ關スル規定

一、會員總會ニ關スル規定

一、資産及會計處理規定

一、圖書ニ關スル規定

一、編輯ニ關スル規定

第三條 本會ノ會務ハ本會事務所ヲ中心トシテ處理シ其ノ進行ヲ計ルヘシ

第四條 前條ノ趣旨ニ依リ本會ニ主事一名ヲ置キ役員ニ代

リテ會務執行ニ從事セシム

主事ハ有給トス 但シ其ノ給額ハ毎年役員總會ニ於テ之ヲ

三四

審議シ會長之ヲ定ム

第五條 主事ハ日曜日及祭日ヲ除ク外事務所ニ在望勤務スヘシ 但シ其ノ勤務日時ハ時宜ニ依リ常務役員會ノ承認ヲ經テ隨時變更シ得ルモノトス

第六條 主事ハ會員並ニ外部ノ質疑、照會ニ應答シ又ハ交渉ニ當ルコトヲ得 但シ重要ナル事項ニ就テハ豫メ役員總會ノ承認ヲ經ルヲ要ス

第七條 會計ニ關スル事務ハ特ニ會計擔當ノ役員ト主事トニ於テ當ニ密接ナル聯繫ヲ保チ萬遺漏ナキヲ期スヘシ

第八條 役員、主事又ハ特ニ會務ヲ委嘱セラレタル者ニ對シ旅費其ノ他會務遂行ノ爲要シタル實費ノ一部又ハ全額ヲ支給スルコトアルヘシ

第九條 本會ハ山岳ノ研究、研究的登山等登山界ニ寄與大ナリシモノニ對シ「日本山岳會賞」ヲ交付スルコトアルヘシ

之カ實施ニ關シテハ其ノ都度役員總會ニ於テ之ヲ定ム

第十條 會務執行ノ便宜上特別ノ事項及期日又ハ地域ヲ限リテ臨時委員會ヲ組織セシムルコトヲ得 委員會ノ成立ハ常務役員會ニ於テ之ヲ定メ會長之カ委員ヲ會員中ヨリ指名又ハ他ニ委嘱ス

夫々ノ委員會ニ關スル細則ハ其ノ都度之ヲ定ム

第十一條 會務執行ノ擔任者タル役員又ハ主事ハ本會ノ必要トスル所ニ應シ報告又ハ原稿又ハ資料ノ提出ヲ怠ル可カラ

ス

第十二條

役員ハ會員中ヨリ選舉又ハ推舉セラレタルモノナ
レハ恒ニ法人タル本會ノ立場ヲ自覺シ其ノ言動ヲ愼シムト
共ニ逆シテ會務ニ精勵スヘシ

以上

本號編輯擔當者

小	田	初	塚
原	邊	見	本
勝	主	一	繁
郎	計	雄	松

定款及細則

二四五

「山岳」投稿規定

- 一、投稿は何人も自由とす。日本山岳會員たると然らざるとを問はず。
- 一、原稿の採否は常務役員會に於て決定す。
- 一、原稿は返却せざるものとす。
- 一、原稿にはその梗概を附せられたし。
- 一、紀行には概念圖を添附せられたし。
- 一、寫眞は光澤印畫紙に燒附けられ度、裏面或は別紙に説明記入を乞ふ。
- 一、校正は編輯者に一任せられたし。
- 一、地名及び外國語は特に明確に書かれ度、地名には振假名を附せられ度し。

原稿蒐集所

東京都芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室

日本山岳會編輯所

發行承認番號あ 160087
(1500部)

有所權著作

昭和十八年九月五日印刷
昭和十八年九月十日發行

發行所

社団法人

日本山岳會

東京都芝區琴平町一、不二屋ビル内

電話芝一六四九番
振替口座東京四八二九番

特別行爲稅相當額貳拾錢
合計賣價參圓貳拾錢

編輯
行輯

者兼
者小原勝郎

印刷
者

静岡縣濱松市元城町一七三
高田壬午郎

印刷
所

静岡縣濱松市元城町一七三
株式會社開明堂

配給
元

東京都神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

日本出版會々員番號 222033

The Journal of the Japanese Alpine Club

S A N G A K U

Vol. XXXVII No. 1. 1943